
家庭教師ヒットマンリボーン - 宵の口 -

Pety

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンリポーン - 宵の口 -

【Nコード】

N1273X

【作者名】

P e t y

【あらすじ】

夜月満流は生まれる前より自我を得た。生まれる前の世界を愛し、産み落とした者達を憎み、この世から消した。やがて日本へと辿り着き、そこで出会ったのはもうボンゴレ十代目候補。あまりにひ弱で、泣き虫で、ダメダメで・・・そんな子供に、満流は手を差しのべる。

そんなある日、夢に神と名乗る痛い青年が現れて・・・破壊の礎に選ばれた少女、その力の行き着く先とは。

プロローグ（前書き）

どうも初めまして、P e t yと申します。

初めての小説制作で、文才皆無なうえに何となくで始めた作品なのでお目汚しになると思いますが、何卒ご容赦くださ〜い。

プロローグ

初めて目が覚めたのは暗闇の中……

欠片程の光すらも無い黒一色……

自分の体すら見えない闇の中で……

今にも途切れそうな薄い意識で……

ただ暗闇の先を見据えていた……

気が付けばどこからか声が聞こえていて……

それは独り言であつたり……

時には私に語りかけていた気もする……

一人だつた声が二人になつて……

時には三人だつたり、もっと沢山だつたり……

とにかく多くの声を、闇の中で聞いていた……

うるさいうるさいうるさいウルサイウルサイウルサイウルサイ……

……

喋らないで欲しい……

語りかけないでほしい……

私は静かでいたいから……

私を包む闇の中で……

ただ静かに包まれていたいから……

これ以上私の安らぎの世界を乱さないでほしい……

私は闇の先にいる者たちに訴えようとする……

しかし何も言えない……

言えないなら体を動かす……

見ることの出来ない腕が動いた……

闇の先に手を伸ばす……

何かに触れた・・・

すると何故かもっとウルサクなった・・・

静かにして欲しくてさらに動かす・・・

もっともっとウルサクナッタ・・・

・・・メンドウダ・・・

目を閉じる・・・

開けても閉じても真っ暗な場所で・・・

必死に動かした手で耳を塞ぎながら・・・

いったいどれ位そうしていただろう・・・

突然私を包んでいた闇が蠢いた・・・

さらには今までで一番ウルサイ声が響いた・・・

声というより悲鳴……

頭が痛くなる……

何かに引き寄せられる……

安らぎの世界が悲鳴を立てながら激しく蠢く……

段々と悲鳴が近くなる……

目を開けて先をみると……

……光？……

……ありえない……

恐い恐い怖いこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい

私はそっちに行きたくない……

この安らぎの世界から出たくない……

必死にもがいて抵抗する……

悲鳴がさらに大きくなった……

私を引き寄せる力も……

イヤだ……

やめる・・・

放してくれ・・・

光は大きくなり続けて・・・

私は・・・至高の安らぎから引きずり落とされた

プロローグ（後書き）

なんのこっちゃって感じですね W W W W W W W W W

プロローグなんで少し抽象的でもいいかなって思ったんでこんな
ふうになっちゃいました（＞＜）＞テヘッ

一話からは勿論こんな訳わからん文章にはなりませんのでご安心を

第一話（前書き）

さあ続いて一話目です。

プロローグの時点で「あっ、これダメだわつまんねえ〜」って感じ
でさよならされていそつで怖いです（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

ではさよなら。

第一話

安らぎから引きずり落とされてから五年が経った。

一年で歩くことを覚え、二年で話すことを覚え、三年で学ぶことを覚え・・・

そして四年で・・・狩ることと燃やすことを覚えた。

脈絡がないのは仕方がない。

だって親がおかしいのだから。

最初は嬉しそうにしていたのに、年が重なる程、笑顔が恐怖に変わっていったから。

『死ぬ！ この化け物！！』

しまいには私を殺そうとまでしてきた。

ただでさえ煩わしい奴らだったのに、この一言で殺意が沸いた。

殺す？ お前らごときが、私を？

私を安らぎの世界から引きずり出しておきなから？

その責任すら取らずに？

「ふざけるなつてえの」

生かしておいたのは誰だか教えてやろう

生かされていたのは誰だか教えてやろう
もつとつくにコイツらの価値は無いのだから。

イタリアのとある森の中

「うゝおゝおい！ この先の集落かあ？ 例の「首狩り魔」が出た
つてのはあ？」

「そうみただよ、張り込んでた隊員の連絡も五分前に途絶えたし。」

「まじ？ ししっ、たあんのしみっ」

やたらと声の大きい白髪の男に、空中に浮かぶ赤ん坊、前髪で目が
隠れていてティアラを頭に付けた少年。

ツッコミどころしかない一行が早足で進んでいる。

「やっと尻尾をつかんだんだあ、しくじって逃がすんじゃないぞお？！」

「もちろんさ。ボクらがいつまでも手間取っている訳にもいれないしね。これ以上金にならない仕事の延長は御免だよ。」

「俺らの追跡半年も逃れるとか半端じゃねえもんな。」

「ったく！！んな厄介なヤロウを生け捕れなんざ、うちのクソボスはまた面倒なことさせやがる！」

逃すなと言いつつ一番に気づかれそうな大声を張り上げ、歩く速度を上げる白髪男、その後ろについて行く赤ん坊と少年。その内森が開け、目的の集落が見えた。

「っ！！うゝおおい・・・こいつぁ・・・」

「ムムツ・・・これは・・・」

「ししっ・・・すんげえ・・・」

集落は既に廃墟となっていた。

家という家は全て燃え上がり、あちこちに死体が転がり、全体が血の海になっていた。

しかし、三人が息を呑んだのはそれが理由ではない。

彼らにとってはその程度は日常であり、立ち止まる理由にはならない。

なら何故とまったか？ それは

「現物を見るのは初めてだが、不気味だぜえ。」

「幻覚の類だと思ったけど、そうでもないね。」

「なんかテレビの早送りみてえくだなあ」

ただ燃えているならばいい、その色が灰色でなければ……
死体があるのはいい、目の前で恐ろしい速度で腐って骨が見えていなければ……

少年が言っていたように、まるでテレビの早送りのように溶けて腐っていく死体。

いくら血まみれの日常を送る彼らからしても異常な光景だった。

「ここで考えても埒があかね。え、さつさと「首狩り魔」んといくぞぉ！」

「そうだね、少し興味も出たし。」

「ししっ、早く殺りてえ〜」

「生け捕りだつつつてんだらうがあ！」

死体をよけて廃墟の中を進む一行、途中で自分らと似た服を着た骨があつたが無視。

二分程歩くと広場に出た。

ここまでの道で見たのとは比べ物にならない程のおびただしい数の死体が積み重ねられ、その上にボロい布を纏った人物が座っていた。顔は隠れていて見えず、長い濃紺色の髪が足元まで垂れ下がっている。

体全体が血まみれで、ボウッと空を見上げているようだ。

「ししっ、いたいた」

「こつちに気づいてない？ それとも……」

「んなもんどつちでもいい、うゝおゝおおおい！！ これやったのはテメエだなあ？！」

白髪の声に振り返る「首狩り魔」、心の中でだけ身構える一行。

「そうですねよ〜？ 貴方達は誰ですか〜？」

予想に反し、間延びした声。

というより力の抜けそうなテンションで答える首狩り。

（この声は女かあ？ しかも体格見る限りベル並にガキじゃねえか）
（殺気も何も感じないね、本気でボクらに気づいてなかったみたいだし）

（早く殺りてえなあ、まだかよ）

「俺たちやあヴァリアーの人間だア、テメエに用があつてきたあ」
「うわあお？ ヴァリアーって言えばボンゴレの最強部隊でしたっけえ？ すんごい大物さん達に会っちゃいましたねえ〜〜？」

可笑しそうにケラケラと笑う首狩り、死体の山を降りて三人の四メートル程前で止まった。

「それでご用はなんですかあ〜〜？」

「ウチのボスがテメエを生け捕りにしろって言ってんだあ、俺らと一緒に来い。」

「そうですね〜、ちなみに断るとどうなります？」

「力づくってことになるね。」

「最悪ここであの世行きだね、ししっ」

「そういうことだあ。」

案外すんなり事がはこびそうな雰囲気若干気が抜けそうになる三人

「へえ〜あの世行きですか〜？ 貴方達がですかあ〜？」

「「「「はあっ？」」」」

少女の一言で場に一瞬で緊張が、いや、殺気が充満した。

「う、お、おい、死にてえのかあ」

「いい度胸だね。」

「刻み決定」

各々が武器を構える、首狩りを除いて。

「いきますよお？ 頑張って生きてください？」

「武器はどおしたあ？」

「さっき壊れたんで、素手です。」

首狩りは手をヒラヒラと振って武器を持ってないことをアピールする。

「それなら。」

「さっそくバイビ〜」

赤ん坊と少年がそう言った直後、突然首狩りの足元から火柱が出現した。

間髪入れずに少年が火柱の中、首狩りがいた位置に向かって手に持った複数のナイフを一気に投擲した。

「ししっ、ハイ終了〜」

「拍子抜けだね。」

まったく反応せずにマトモに受けた首狩り、二人は勝利を確信したが……

「まだだあ！！」

「その通りです。」
「っ!？」

白髪が叫んだ瞬間、火柱の中から首狩りがとてつもない速さで飛び出し、一瞬で赤ん坊と少年の目の前に接近する。

「ムッ!？」
「やべっ!?!」

慌てて距離を取ろうとする二人だが、既に首狩りの手が二人の眼前に迫っていた。

「まずは二人で……」

グウウウウ~~~~~ギュゴゴゴオオオ~~~~~

突然の謎の音により、場が静止する。

「「「は?」「」」
「……あ……」

ドサッ

そして倒れる首狩り。

「うお おおい! どういうことだあ!？」
「知らないよ」
「死んだんかよ?」

全く動かない首狩りを見て、ゆっくり近づく三人。

「うっ……うっ……」
「おっ」
「は……」
「は？」
「ハングリ……ガクッ」
「……」

今度こそ気絶したらしい。

「……とりあえずアジトに運んだほうが良さそうだね。」
「そうだな　そんなじゃあスクアーロよろしく。」
「うっお　おおい！　何でおれだあ？！　テメエがやれえ！！」
「やらないよ、だって俺王子だもん。」

さっさと帰る二人を、首狩りを肩に担ぎながら追いかける白髪男だった。

第一話（後書き）

どうでしたでしょうか？ 解りにくかったらすいません。

次回は主人公の名前出せたらいいな〜？

第二話（前書き）

二話目です。いつになったらスクとベルとマーモンは名前で表記されるんだwwwwww

ではごっげ。

第二話

暗闇の中にとくとくと心が安らぐ……

これ以上ない程に穏やかな気持ちでいられる……

でも、今のこの闇は一時のものでしかない……

あの日奪われてから、ずっと仮りそめの代用品……

現に今も段々と薄れて行く……

光にかき消されていく……

私を置いて、消えて行く……

「うっ……うん……」

顔に差し込む光に私は目を覚ます。

「どこだよここ」

見回せば素人目にも金が掛かっていそうな広い部屋。
その窓際にある大きなベッドで私は寝ていたみたいだ。
めっちゃフカフカだ。

「とりあえず何があつたんだっけ？」

たしかお腹が空いたから近くの集落にいつて〜
道端でチンピラに絡まれて〜

あまりの空腹にイライラしてたからつい殺っちゃって〜

そしたら周りがうるさくなつて〜

警察とか呼ばれたら面倒だからとりあえず全殺して〜

その時上手く加減出来なくて食料も燃やしちゃって〜

途方にくれてたら変な三人組が来て〜

それで……

「バトったんだっけ？」

駄目だ、三人が来た辺りから視界が霞んでよく見えず、さらには半分意識が飛んでた状態だったから記憶がぼやけて思い出せない。

「まあいつか・・・それよりもお腹すいた~~~~」

空腹だったのを思い出したら腹の虫が再び叫び始めた。お腹と背中がくっつきそうとはまさにこの事だ。

「っ!!・・・クンクン・・・こっ、これは!？」

ベッドの上で唸っていた私に突如として漂ってきたこの魅惑的な香り。

これは間違いなく・・・!!

「^ゴ飯の臭い!!!」

シーツを跳ね飛ばし、入口まで全力疾走、しかしドアの前で止まり、慎重にドアを開けて周りを見回す。

「またあの三人に出くわすとも限らないしね~~~~。」

左良し、右良し、前良し、監視の気配も無し!

「それじゃあ、^ゴー?」

臭いを嗅いで発生源を探索、目標に向かって駆け出す。

慎重に、かつ迅速に、しかし足音は一切出さずに走る。

「しかし部屋もそうだったけど、随分立派な屋敷だね。」

どうやらかなりの金持ちに拾われたようだ。

三人との会話を思い出せればここがどこだか解るかもしれないけど、今はそんなのどうでもいい。

とにかく今は、美味しいご飯を頂戴するべし！！

「ここか・・・」

目的の場所に到着、臭いはますます強くなり、それに比例して腹の虫どもが悲鳴の大合唱を始める。

断末魔の叫びに変わるのはもはや時間の問題だ。

「いざー！」

先程と同じく慎重にドアを開ける。

どうやら厨房のようだ、当たり前だが。

奥の方に人の気配がある、一人だけのようだ。

何か作っている最中らしく、鼻歌が小さく聞こえてくる。

「よし、好都合。さして、お目当ての物はっつと？」

部屋中を見回すと、ドアのすぐ横にある料理を運ぶワゴンの上に目標を発見。

「おおおおお~~~~~!!!!!!」

それはまさにへブンだ。料理一つ一つが光り輝いて見える程の歓

喜が湧く。

スツツツゲエ!!! ヤベツ、我慢出来ないっ! 頂きま〜す!!

!!!!

「ガツガツつまつま・・・~~~~!?! 何コレ超つめえー!!」

マジヤバイ! 空腹は最大の調味料って本当だ!!

私の人生現在食欲の絶頂期や~~~~!!

「いやあこんな美味しいご飯食べられるなんて、ここに来てラッキ
ーだったな〜?」

「あらそう? そんなに褒めて貰えるとアタシも作った甲斐があっ
たわ? まだまだあるからどんどん食べてね?」

「え、そうですか? それじゃあお言葉に甘え……………
て……………」

私、誰と喋ってるんでしょうか?

頬を冷や汗を垂らしながら振り返るとそこには……………

顔先十センチにオカマの顔があった。

「以上で終わりだあ。」
「……………」

少女が寝かされていた場所とは違い、豪華な家具が並べられた一室に二人の男がいた。

一人は首狩りに出会った白髪、スクアアロと呼ばれていた男。

もう一人は、大きな机に、同じく大きな椅子に腰掛けながら足を投げ出して手元の報告書に目を通していた。

常に不機嫌そうに眉を寄せ、睨むような目付きをしている。

スクアアロの口頭での報告が終わっても、しばらく沈黙が続いた。

「マーモンの幻覚が効かなかった・・・か・・・」

「そうだあ、燃えるどころか焦げ跡一つ付いていやがらなかったあ。

ベルのナイフもかすりもしなかったみてえだしなあ。」

口を開いた男の呟きに、スクアアロが答える。

すると男は引き出しから一枚の紙を取り出し、スクアアロに差し出す。

「なんだあこれはあ？」

「入隊書だ、書いて自分で持って来させる。」

「はあっ！？ そりゃあどおいう事だあXANXUSう！！」

いきなりの話について行けないスクアアロが目の中の男、XANXUSに聞き返す。

「うるせえカス、さっさと行け。」

「んだとゴラアー！！」

「……」

「シカトしてんじゃねええ！！！」

スクアーロが騒ぎ立てるが、XANXUSは無視し続ける。

「ちっ！ あとで必ず聞かせてもらうからなあ！！！」

一旦退くことにしたスクアーロは、捨て台詞を吐いて部屋を後にした。

目に見えてイライラしているスクアーロが、ズンズンと音を立てながら大股で歩いている。

首狩りの少女の眠っている部屋に向かっている途中だ。

「終わったみたいだね。」

「ししっ どうだった？」

「お前らかあ。」

少女と戦った赤ん坊と少年、ベルとマーモンが向かいから歩いてきた。

「奴の見張りはどうしたあ？」

「ルツスーリアが見てる筈だよ。」

「見張りとかつまんねえし。」

.....

「お、おい、ルツスは奴の飯作るんじゃないかねえのかあ？」

「.....あっ」「」

.....

「う、お、おおおおおい!!! そんなじゃ誰も居ねえのかあ!!!」

「そういうことになるね。」

「しししっ、失っ敗」

「言ってる場合かあ！ さっさといくぞお!!!」

走り出す三人（マーモンは飛んでる）、もし逃がせば面倒なことになるのは火を見るより明らかだ（主にXANXUSとかXANXU

第二話（後書き）

展開が遅いな（汗

もうちょい早く進めるように、そしてもう少し長く書けるようにしたい。

頑張ります。

次回こそは、次回こそは！

主人公の名前をだしてみせるっ！！！！！！！！

第三話（前書き）

眠いよゝ、瞼が重いよゝ。

誤字脱字注意報の二話目です。

第三話

「んもうつ！ 失礼しちゃうわっ！！」

「本っ当に申し訳ありませんでした。」

厨房の床に土下座する私。

目の前にはいかにも怒ってますと言いたげに腕を組んで仁王立ちするオカム・・・ルツスーリアと名乗った人。

「百歩譲って叫んだのはいいわよ？ 私もちよっと驚かそうとしたわけだし。」

「はい・・・。」

「でもだからって顔面に裏拳かますのはやりすぎじゃない！？ 顔が陥没骨折するかと思っただわよ！？」

ルツス姐さんの（そう呼んでと言われた）顔に掛かっているサングラスは右半分が見事に砕け散っていた。

あまりの恐怖についコンクリを余裕でぶち抜ける位の力で殴ってしまった。

それをマトモに食らって気絶すらしらないこの人も大概すごいが・・・

「いやその・・・なんというか・・・条件反射で・・・」

「振り返りざまに人の顔面に裏拳叩き込む習慣でもあるの？ まあいいわ、いつまでも床に座ってないで立ったら？ それに、まだ食べるんでしょう？ さっきも言ったけどまだまだ沢山あるわよ？」

「え？ あ、はい。いただきます。」

どうやら許してくれる様子。

さすがルツス姐さん！ 心が広い！ まだよく知らないけどね？

美味しい料理の前では些末なことなど気にならないのだよ

「そう言えばまだ貴方の名前聞いてなかったわね。」

「あ、そうですね。私は・・・」

ガチャツ

「うゝお おおいルツス！！ 奴はどこだあ！」

「あら？ スクアーロじゃない、どうしたのそんなに慌てて。」

「（邪魔された・・・）・・・むしゃむしゃ・・・。」

「ししっ、発っ見っ」

「逃げたわけじゃなかったみたいだね。」

見覚えのある三人が入ってきて名乗り損ねた私は、とりあえず食べながら様子を見る。

「部屋に居ねえからこっちに来たんだあ！ それよりさっきの悲鳴はなんだあ。」

「私の顔を見た瞬間にいきなり叫んだのよ。」

「なるほどね、ところでその顔はどうしたんだい？ サングラスが割れてるけど。」

「裏拳かまされたのよ。」

「マジ？ ししっ、ナイス」

頭にティアラをのつけた少年が、ドヤ顔で私に親指をグッと向けた（髪で隠れて目は見えてないけど）。

「ナイスじゃないわよ！ 死ぬ程痛かったんだからっ！！」

「うゝお おい！ そんなことはどうでもいい、起きたんならテメエのことを話してもらおうかあ。」

「はい。」

やっと話が進んだ、とっくに食べ終わってたし、美味しく頂きました？

「ええと、まず私の名前は夜月満流やつきみちると申します。先月で六才になりました。」

「俺はスクアーロだあ。」

「さっきも言ったけどルツスーリアよ、宜しくね？」

「僕はマーモンだよ。」

「オレはベルフェゴール、ベルでいいぜ。」

なんかこの人達と話してたら気絶する前のこと段々思い出してきた。

「その名前からして、君は日本人かい？」

「そうですね。」

「何でイタリアに来たあ。」

「一人旅です？」

「よく親が許可したわね。」

「許可されてませんよ？ 殺しましたから。」

「しっつ、まじ？ 俺も殺したぜ。」

「うっとおしいだけですもんね。あんな奴ら。」

「同感。」

このベルとは気が合いそうだね？

「それで、たしか皆さんはヴァリアーの人なんですよね？ そのボスさんが私なんかは何の用ですか？」

「そのことだが、今すぐこれ書いてボスんとこ持って行けえ。」

紙を一枚手渡される。

「何ですかコレ？・・・入隊書？」

「どうやらウチのクソボスは teme をここに入れるつもりみてえだあ。」

「・・・何故に？」

「んなもん俺が知るかあ。」

「どうせボスに教えてもらえなかったんでしょ？」

「ありえるね。」

「ハブられてやんの。」

「う、お、おお、い！！ぶつ殺されてかあ！！！」

四人が騒いでいる間に私は必要事項を記入していく。

特技などの一般的なプロフィールから始まり、暗殺経験、戦闘スタイル、武器、etc・・・

「出来ました〜？」

「随分早いね。」

「と言つかいいのかしら？そんなに即決しちゃって。」

「どうせ行くアテもないですしね〜、むしろ食い扶持が出来てラッキーみたいなの？」

「暗殺部隊を食い扶持扱いとか。」

「まあいい、とにかくボスんところに行けえ。」

「了解です。」

道順を教えて貰い、ボスさんの部屋へと出発する私。

後ろの方から「殴られないように気を付けてね〜ん」とか聞こえてくる。

そんなに凶暴な人なんだろうか。

「ここか。」

ボスさんの部屋であろうドアの前で止まる。

「ヴァリアーのボスかあ、どんな人だろう？」

思えば入隊書を書いている間、四人が「またウイスキーを頭に投げつけられた」とか「机の角に顔面叩きつけられた」とか言っていたような気がする。

「入った瞬間頭ちょん切られるとかないよね？」

もしくは眉間に鉛玉ぶち込まれるかもしれない。

何故だろう、さっきから死のイメージしか湧いてこないんだけど。

「やっぱりここは秘策を使うしかないですね。」

秘策とはここに来るまでに思いついたちよっとしたイタズラみたいなものである。

普通に入れば何があるか分からない。

なら少しユーモアのある入り方をすれば多少は打ち解けられるのではないか、と考えた末に思いついた。

「よし、いざ行かん！」

目の前のドアをノックもせず勢い良く開ける。

「うっおおおおおい！！ 邪魔するぞお！」

ガツシャアアン

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙の中、上を見ると。

私の頭上約60センチ程上にコップが激突の衝撃で砕け散っていた。中に入っていた酒や氷が四散している。

もし入ったのがスクアーロだったら顔面に直撃していただろう。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あゝ・・・・・・・・えと・・・・・・・・その・・・・・・・・」

痛いほどの沈黙に逃げ出したくなってきた。

しかしここで挫けるわけにはいかない、石のように固まっていた足

を気合で動かしてゆつくりとボスさんがいる机に近づいていく。

「すみません・・・えっと・・・スクアーロって人に言われて入隊書を持ってきたんですが・・・」

思わず低姿勢になってしまつのは仕方がない。

さつきからそれだけで人を殺せそうな目で一瞬たりとも目を逸らさずにガン見してくるのだから。

なんとか机の前にたどり着き、そつと書類を差し出す。

「・・・」

無言で受け取るボスさん。

こわいよ～～～～。

「おい。」

「はっ・・・はい?!」

やべっ、声が裏返った。

「この「灰色の炎」ってのはなんだ。現場でも何度か使ってたな。」

「あゝそれは・・・」

絶対聞かれるだろうと思っていたので、ありのままを話す。

「詳しい事は私にも解らないです。四才の頃に使えるようになって、普通の火なんかよりも遥かに良く燃えるので頻繁に使うようになりまして。銃弾を防げた時にはさすがにビックリしました。しかも何でか私自信や私が身に付けてるものは一切燃えないんです

よね、なんとという親切設計。」

話してる内に段々口調が砕けていってしまったのは仕方ない。目上の人に対する態度なんて本当なら一分と持たないんだから。今回は三分もった、素晴らしい程の新記録。

「そんな感じですよ、あつ、もしかしてそれで入れなくなったりとかは・・・」

「いや、むしろ好都合だ。夜月満流、テメエは今日からココの隊員だ。」

「ほつ、有難うございます、よろしくお願いします。」

よかった、やっぱり有名な暗殺部隊は懐が深いな

「それと、テメエの存在はここ以外では非公開だ。だが隊の中では幹部扱いにする。」

「非公開？ それにはどう言った意味があるのか聞いてもいいですか？」

「テメエの使い道はもう決まってる。そのために素性を隠してもらう。その時がきたら詳しく話す。」

「そうですね、了解です。」

「明後日から任務だ、あとはカス鯨に聞け。」

「わかりました、失礼します。」

カス鯨と聞いて何でスクアーロのことだと思ったのかは私にもわかりませせん。

ボスさんの部屋を出て、とりあえず厨房へと向かう。すると向かいからルツスが歩いてきた。

「あら、満流じゃない。無事でよかったですわ。」

「はい、なんとか生還出来ました。」

「なら行きましょ、その部屋が広間なの、皆そこで待ってるわ。」

並んで歩き、広間のドアを開ける。

「皆〜、満流が生きて帰ってきたわよ〜」

「ただいま帰還しました〜?」

「おっ、お疲れ〜」

「無傷とはやるじゃないか。」

「天変地異の前触れかあ?」

「又ツ・新入りか。」

ベルにマーモンにスクアール、それにどっかの戦闘民族の劣化版みたいな髪をした男がいた。

「皆改めて今日から宜しく〜、ところでそっちの人は? あっ、私は夜月満流だよ〜。」

ボスさんの威圧から開放された反動で一気に口調が砕けていたが気にしない。

「オレはレヴィ・ア・タンだ。レヴィでいい。」

「レヴィね、よろしく〜」

「それでお前はと言う扱いになったあ。」

「隊では幹部扱いらしいですけど、素性は非公開らしいです〜。」

「どうということだい?」

「なんか私にやらせたい事があるみたいで、それまで秘密にしたいそうです。」

「随分変わってんな」

「そうですねよ〜。それで明後日から任務で、詳しいことはス

クアーロに聞けつて。」

「とりあえずクソボスに聞かなきゃなんねえ事が増えたなあ。任務については明日伝える、まずは隊員服をルッスに作ってもらええ。」

「じゃあサイズ計らないとですね。」

「それは大丈夫よ、見ればわかるから？ 明日には出来るから楽しみにしててね。」

ルッスの発言にちょっと引いたのはどうやら私だけではないみたい。

「でもその前にあなたはお風呂に入ったほうがいいわね、忘れてるかもしれないけど返り血とかで結構見た目ボロボロよ。」

「あつ、そう言えば。」

「忘れてたのかあ。」

「その姿でやけに堂々としてると思ってたけど。」

たしかに羽織ってる布とかも血が乾いて黒くなってると、ほんの微かに臭う気もする。

「それじゃあ入らせてもらっね、場所はどこ？」

「案内するわ、こっちよ。」

「はい」

広間を出て風呂場に向かう。

「そう言えば着替えはあるの？」

「持つてるように見える？」

「ないわね、じゃあ服もいくつか見繕わなきゃね。明日になる

から今日はとりあえずアタシの代えのシャツと短パンでいい？」

「いいよ。」

ルツスがドアの前で止まる、着いたみたい。

「ここよ、着替えは置いておくから。 あっ、それに髪を縛るものもいるわね。 その長い髪邪魔になるわよ？」

「慣れてるから大丈夫だけど、濡れると確かに邪魔かな。 じゃあ適当にお願い。」

「了解よ、じゃあゆっくりするといいわ。 また後でね〜ん」

手を振りながら去っていくルツス。

やけに足取りが軽いのはなぜだろうか。

「それじゃあゆっくりさせてもらいますか、ついさっきまで寝てた筈なのにもう疲れたよ〜。」

第三話（後書き）

XANXUSの説明丁寧すぎじゃね？WWW

書いたあとに気づいた、ウチのボスがこんなに親切なわけがない！

第四話（前書き）

ついに主人公の戦闘シーン！！

第四話

「いや〜さっぱりした〜?」

え? 入浴シーンはどこだった?

素人作者にサービスシーンなんて表現出来るんでも?

「えつと着替えは・・・お、あった。」

脱いだ服が無くなって、代わりに着替えが置いてあった。

短パンと、おそらく新品のYシャツだ。

服を来て、ゴムで髪を頭の後ろで一つに纏めて、前髪を分けて二つあったヘアピンでとめる。

ボサボサだった髪も、風呂で洗ってサラサラになり、纏めやすかった。

「おお・・・視界が広い。」

今迄バーコードみたいだった視界が開け、若干明るくなった。

「さてと、とりあえず広間に戻るかな〜。ソファふかふかだし、

何か飲みたいし。」

部屋を出て広間に直行、すると途中でルツスの背中が見えた。

「あつ、おお〜イルツス〜、今上がったよ〜、ゴムとヘアピンありがとうね〜。」

「あら満流? どういたしま・・・し・・・て・・・」

「?」

私を見た瞬間に何故か固まったルツス。
顔が驚愕の色に染まっている、何か変なところでもあったのだろうか？

「どうしたの？ 私どこか変？」

「い．．．いえ．．．変じゃあないわ．．．．満流．．．なのよね？」

「???. 間違いなく満流だけど．．．ほんとにどうし」

「か．．．」

「か？」

突然俯いて肩を震わせ始めたルツス、さっきから不気味で仕方ない。

「可愛いわ~~~~~!!!!!!」

「うわきゃあっ!?!」

そんでいきなり抱きついてきた、この場合殴り飛ばしていいんだろ
うか。

「満流!」

「は．．．はいつ!?!」

「あなたこんなに可愛い顔してるのに隠してたの!?! もったいな
いじゃない!?!」

「え? いや、単純に髪を放置したら自然に隠れただけで．．」

「こない素材してて手入れをしないなんて罪よ!?!」

「え~~~~~」

「あつ、そうだわ! 皆にも見せましょ、きつと驚くわよ。」

「なんかそう言われると見せたくなくなってくるんだけど．．．」

「問答無用よ!?! さっさといくわよ」

腕をがっしりと掴んで私を連れて・・・もとい引きずって行くルツス。抵抗虚しく広間へと到着し、ドアを開け放つ。

「ちよつと皆集まってる！　すごい見えるわよ」

「うっせえぞカマがあ！」

「また男の死体かい？」

「マジキメエ、つかここに持ってくんなよ。」

「違うわよ！　あら、レヴィはどうしたの？」

「あいつは任務だあ。」

「そうなの、残念ね。　それじゃあご対面〜？」

そう言つて私をズイっと前に出すルツス。

三人の視線が集中する。

最初はどこかウンザリしたような感じだったが、私を捉えた瞬間に驚愕したものになった。

「どう？　可愛いでしょ。」

「しっつ、確かに、かなり可愛いじゃん」

「それは認めるけど、急にどうしたんだい？　もしかして女色に目覚めたのかい？」

「オカマでロリコンたあ救いようがねえなあ。」

三者三様の言葉を言った後、ルツスに非難の視線が突き刺さる。しかし本人はそれをもともせず得意げに笑っている。

「うふふつ？　やっぱり皆わからないみたいね。　まあ仕方ないわ

よね、こんなに違うんだもの。」

「うう、お、おおい！！　なにニヤニヤしてんだあ！　かつさばくぞあ！！！！」

「妙にイラつくね。」

「切り刻みたくなってきた」

ルツスの笑みが癪にさわったようで、ベルはナイフ、スクアーロが剣を構える。

マーモンは宙に浮いている。

私も参加しようかなあ。

ちなみに何でさっきから私が発言しないかと言うと、入る前にルツスに言われたから。

「やあね、そんなに怒らないですよ。そしてね、この子は満流よ？」

「……はっ？」

再び視線が集まる。

先程の数倍の驚愕と、若干疑惑も混じってる気がする。

しかしこの三人は一日で何回「は？」って言ってるんだろう、まあ私のせいなんだけど。

「なんの冗談だあ。」

「冗談じゃないわよ、ねえ満流？」

「やっと発言出来たよ、ばらすの遅い。」

「しっつ、マジで満流の声だし」

「驚いたね。」

半ば見世物みたいになってきた私。

そろそろ眠くなってきたな

「つつか何で姫は裸Yシャツなん？ マジエロいぜ」

「考えないようにしてたのに蒸し返さないでよ、ちゃんと短パン履いてるし。というか姫ってなに？」

「超可愛いから姫、王子の俺にピツタリだろ？」

「自分で王子って・・・」

「ベルは本当に王族の血を引いてるんだよ。」

「マジか・・・」

その後も小一時間くらい弄られていたが、夕飯の支度をしにルツスは厨房、スクアーロはボスさんと話があるとかで出ていき、その場はお開きとなった。

夕飯の時は、皆の三倍以上食らった私が、どこにそんなに入るんだと呆れられ、満腹になって眠くなった私は、先に休ませてもらった。明日は初任務かあ、何するんだろう？

記念(?)すべき初任務の日、朝食を食べ終えた私に

「はい満流、貴方の隊員服よ〜ん？」

と言つて渡してくるルツス。

裾は足の膝小僧がギリギリ隠れるくらいの長さで、大きなフードが付いている。

試しに被つてみると顔の大半が隠れ、外からは口元くらいしか見えないだろう(マーモンみたいな感じ)。

「随分フードがデカイね。」

「ボスからの命令よ、あとこれも任務の時は付けてね。」

「これは・・・仮面？」

ルツスに渡されたのは顔全体を覆うタイプの仮面。

銀色に輝いていて、口の部分に三日月を九十度回転させたような模様が描かれ、ニツコリと笑っているように見える。

これで後ろから追いかけられたら相当な恐怖に駆られそう。

「満流は素性を隠さなきゃだめでしょう？ だから大きなフードと仮面で顔を見られないようにしなきゃ。ちなみにその仮面、かなり頑丈な素材使ってるから銃弾食らってもへっっちゃらよ？」

「なるほど、まあ無駄に便利な装備貰えたと思えばいいか。」

「しっつ、やったじゃん姫。」

「それはそうと早く着替えて来たらどうだい？ もうすぐスクアー口が任務言い渡しに来ると思うよ。」

「わっ、もうそんな時間？ じゃあ早速着替えてくるね〜。」

自室に戻って着替える。

昨日と同じような短パンに無地のTシャツ、黒のニーソに隊員支給のブーツ。

昨日のように髪はゴムで纏め、隊員服を着てフードを被り、仮面を付け、鏡の前に立ってみる。

超不気味だった。

全身黒づくめに顔だけ銀色でニッコリスマイル、怖っ！

しかしこれなら素性なんてバレないだろう、声も若干エコーが掛かって聞こえるし。

という訳で急いで広間に戻る、すると既にスクアーロが来ていた。

「お待ちせよ、どうこれ？」

「バッチリよ！ とんでもなく不気味ね」

「確かにこれなら素性を隠すにはもってこいだなあ」

「狙われる奴も相当怖いだろうね。」

「姫いかしてるじゃん」

概ね予想道理の答えが帰ってきた。

レヴィはまだ任務から戻ってきてないみたい。

「じゃあ早速任務の話すんぞお、今回の任務はあるファミリーの殲滅と要人の救出だあ。」

「暗殺部隊なのに救出？」

「その要人はボンゴレの傘下ファミリーの幹部でなあ、だが戦闘専門じゃねえから捕まっちゃったらしい。」

厄介なのはその誘拐した側のファミリーの方が勢力がデカイせいで手出しが出来ねえらしい、だから速やかに確実に救出するために俺たちにお鉢が廻ってきたってことだあ。」

なるほどね、傘下ファミリーの人達にとって余程失いたくない人材ってことか。

でもそうになると・・・

「あのく、それって結構重要な任務じゃない？ 新人の私にやらせていいの？ あっ、勿論ビビッたとか自信がないとそう言う意味じゃないよ？」

「心配すんなあ、テメエなら問題ねえって俺が言つといたあ。」

「ちよっ、なにハードル上げるようなことしちゃってんの！？ いや確かにできるけどね？」

「それに保険としてベルとマーモンを同行させる、もし一人で対処出来ねえようなら加勢してもらえ。」

「そういう事、よろしく姫」

「お手並み拝見させてもらつよ。」

「ああうん、よろしくね。」

「分かったらさっさと行けえ、表に隊員が車で待ってるからなあ。」

「了解く、いつてきまゝす？」

「気を付けてねくん」

ベルとマーモンと一緒に屋敷出て、すぐ目の前に止まっていた車に乗り込む、入る際に隊員の人に礼をされた時はちよつとビックリした。そっぴい私幹部になつたんだな

「どこ？」

「そうだよ。」

「ししっ、結構沢山いんじゃない」

車で二時間程揺られ、敵アジトの十キロ手前で降りて、そこから歩いてきた。

アジトが山の中にあるため、山道が地味にキツかった。

「それじゃあ早速行きますか。」

「そっさいや姫の武器ってなに？」

「たしかにまだ見てなかったね。」

「ああそうだったけ？ これだよ。」

ゴソゴソと服の内側に仕舞っておいたそれを取り出し、二人に見せる。

「……それかい？」

「うん、これだよ。」

「マジで?」

「マジ、ていうか書類にも鎌だつて書いた筈だけど?」

そう、私の武器は鎌だ、別段驚く程珍しい物じゃない?

「確かに鎌だけど……」

「なあ姫。」

「うん?」

「それって……農家の鎌だよな?」

「そうだけど?」

「……」

完全にフリーズする二人。

そんなに農家の鎌が珍しいのかな?

「それはどこで手に入れたんだい?」

「旅の途中で農家の家に停めてもらつて、その時に使わなくなった道具を幾つか譲つて貰つた。」

「今迄それで殺つてたん?」

「そうだよ? でももうこれ一つしか残つてないけどね、後は全部壊れちゃつた。」

まああんな錆だらけの状態で四ヶ月以上もつたんだから上々だよね。

「それで大丈夫なのかい?」

「人の首切り飛ばすくらいなら余裕だよ?」

「まあ姫ならやりそうだな」

「帰つたら満流の武器も用意しなきゃね。」

「じゃあ行くよ、要人が殺されないように一気に走っていくから

ね。」

「了々解」

「気にせず好きにやるといいよ。」

走り出す私達、マーモンはベルの横を飛んで付いてきている。

向かうは正門、つまりは正面突破？

「むっ、なんだお前……」

「そこでとm……」

声を掛けようとする門番達の首が飛び、言葉が不自然に途切れる。数瞬後に切断面から血が吹き出し、体が倒れる音と首が落ちる音が後ろから聞こえてくる。

私達はそれに目も向けず、一瞬も止まることなく走る。

門から屋敷の入口に着く迄に八人に遭遇したが、銃を構える者、中に連絡を入れようとする者、例外なく行動を果たす前に首が飛んで即死する。

「ヒュウッ やるじゃん姫。」

「スピードはかなりのものだね、少なくともスクアール口と争えるレベルだよ。」

二人から賞賛が送られるが私は返事はしなかった。

集中していると言うのもあるが、なにより首を狩る感触に高揚しているからだ。

皮を、肉を、骨を、一瞬で断ち切るあの瞬間。

今殺した彼らとて、ただの弱者ではなかっただろう。

人の命がちり紙のように消えていくマフィアの世界で今日まで生き抜き、沢山の戦いを経験した猛者だっていただろう。

それがこの瞬間、私の手によってあっさりと刈り取られた。

彼らが積み重ねてきたであろう努力も経験も知識も練習も、全ての時間の集大成である彼らの人生が終わったのだ。たった六才の自分の手で、ああもあっさりと。

つまり彼らの数十年の人生は、私のような子供の人生六年分にも及ばない物だったということにほかならない。そう思う度に感じる。

ああ、弱者に生まれなくてよかった……と

自然と頬が緩む、口の端が釣りあがる。

今の自分は、顔に付けている仮面と大差ない笑みを浮かべているだろう。

屋敷の玄関で一旦止まり、中の気配を探る。

ホールに七人、奥に続く廊下に四人ほど、要人のことを考えるとまだ騒ぎにはしたくない。

どうしたものかと思案していると、近くに倒れている死体の内ポケットから便利な道具が見えたので拝借、ついでにナイフ二本と拳銃一丁も貰つとく。

「これ使うから二人は少し後で入ってきて。」

「ししっ、おっけ〜」

「ムッ、わかった。」

二人が頷いたのを見て、私はあえてドアを勢い良く開け、拝借したものを天井高く投げる。

全員が反射的にそれを目で追い、なんなのかを認識した瞬間、小さな破裂音と共に強烈な光が広間にいた全員の目を焼いた。

そう、いわゆる閃光弾、スタングレネードである。

せっかく近くにあったからには使わないと、無くても殺ることは出来たけど、個人的に無抵抗の人を狩るのが楽しいの？

「な、なんだこれh・・・」

「一体何g・・・」

「侵入者d・・・」

次々に発せられる怒号は途中でと切れ続け、光が収まった時には誰も喋らない。

ついさっきまで豪華に飾られていた広間は血の海になっていた。ドアが再び開いてベルとマーモンが入ってくる。

「そう言えばさ、要人って何処にいるの？」

「さあ？ しらね」

「いや、さあって・・・」

「どの道敵は皆殺しだからさして関係ないんだよ、ここのボスにでも聞けばいいんじゃないかい？」

「そうするか」

方針が決まったところで（方針と呼べる程のものでもない気がするけど）、再び全力疾走。

目に捉えた敵をザックザックと鼻歌を口ずさみながら狩り進み、およそ八割を殺したところでようやく騒ぎになり始めた。

ちなみに途中で敵の一人に聞いたところ、要人は敵のボスの部屋にいるそうなの。

手足をきり落としたら簡単に話してくれたよ？

「気づくの遅すぎだよね」。

「姫の手際が良すぎんのが理由じゃね？」

「そうなの？」

「僕らは暗殺部隊と名乗ってはいるけど殆どは派手な虐殺ショーみたいなモノだからね、人目を避けて殺す機会は実はそれほどないん

だよ。」

「へえ〜。」

「ところで姫、さつきから何で鼻歌歌いながら殺ってんの？」

「あれ？ 私気分が乗ると自然に出ちゃうんでだよね。」

「根っからの殺人鬼気質だね。」

話ながらも狩り続け、残すは要人がいる筈のボスの部屋だけになった。

中に二十人くらいの気配がある。

「じゃあ相手のボスに出会いと別れの挨拶に行こっか？」

「姫ガンバ。」

「さっさと終わらせよう。」

ドアを開き、中に入る。

部屋の中では豪華な家具が全て端に寄せられ、十八人が銃を此方に向けていた。

一番奥にボスらしき人間が立っており、その下には写真で見た要人がロープでぐるぐる巻きにされた状態で倒れ、敵のボスに足蹴にされている。

「く、来るんじゃないやねえ！ それ以上近づいたらこいつをぶっ殺すぞ
！！」

なんとも典型的な小物だ。

なんでこんな奴がマフィアのボスになれるんだろう？ ある意味神

秘の領域だよ。

余計な話をする気はないので、残っていたナイフをボスの銃を持つ右手に投擲。

手の甲に見事に刺さり、悲鳴を上げながら銃を落とす。

全員の意識がそつちに向いた一瞬で私は要人のもとに走り、縛っているロープをひっ掴んで下の場所に移動する。

着いたら要人を開いていたドアの外に放り込んで敵に向き直る。

「さあ、これで人質はなくなったぞ？ どうするのかな？」

素性秘匿のために声を低くして口調も変える。

どうせバレはしないだろうけど、まあ念には念をとてね。

「ひいっ！ こ、殺せ！ 撃ち殺せー！ー！！！」

ボスの指令の下、一斉に銃弾の雨が放たれる。

しかし、その時すでに私は身を低くして横に跳び、一番近くにいた敵の側面に迫る。

鎌を右手に持ち、横薙に振って首を狩る。

そのまま前進して二人、三人と殺していき、残った敵が私の方に銃を向け、発泡するが、私は死体を盾にするように移動し、照準を定まらせないように複雑に動いて背後に回り込む。

単純な作業の繰り返し。

狩って、走って、近づいて、また狩る。

いつしか私はまた鼻歌を歌いながら笑っていた。

「~~~~ ~~~~~? ~~~~~? ~~~~~、ふふっ、あはははははははっ！！！」

私が歌えば歌う程、笑えば笑うほど、相手の顔が恐怖に歪む。

まるで反比例するように、可笑しくて仕方がない。

いつしか部屋の中で立っているのは私だけになっていた。

小物のボスも、醜く涙や鼻水を垂らしながら首が転がっていた。

「おつかれ〜姫」

「中々見ものだったよ。」

「ありがと〜、私も結構楽しかった？ それじゃあ帰ろっか。」

部屋を出て、助けた幹部の様子を見る。

気絶してるけど特に深い傷は無いので大丈夫みたい。

「で、どうするの？ これ持って行くの？」

「さっき連絡しておいたから屋敷の前に迎えが来るよ。」

「そっか〜、またあの道歩くかと嫌だな〜って思ってたし。」

その時突然パキンツと言う音、そして何かが床に落ちた音が響く。

「？ 何今の音？」

「姫、それじゃね？」

「それ？」

「キミの手元と足元だよ。」

言われたとおりに見てみると。

「あっ。」

そこには見事に刃が根元部分から折れた鎌、そして床に落ちている折れた刃があった。

「ついに折れちゃったか〜。」

「むしろよくそんなので今回もったね。」

「そこからしてスゲエよ姫は」

「まあいつか、新しいの貰えるんでしょ？」

「ヴァリアーの幹部だからね、言えば相当の物が与えられる筈だよ。」

「そっか、楽しみだな？」

それから十分程して迎えが到着し、私たちはアジトに帰った。

第四話（後書き）

今までより長くかけたー！

主人公まさかの農家の鎌で無双 W W W W

ヴァリアーの歴史に新しいページが刻まれた W W W W W W W

ではまた次回

第五話（前書き）

緊急事態が発生しました。それは……

お気に入り登録された!!（;。°。）!

見た瞬間にきっかり十秒フリーズしましたwww

まさか登録してもらえとは夢にも思わず、ビックリです。

多少なりとも楽しんでくれてる人がいたようで何よりです

これからも頑張っ行ってこうと思うので、何卒宜しくお願いしますm

（——）m

ではごっげいぞ。

第五話

美しい三日月が浮かぶ夜。

月明かりだけが光源である暗い山の中、一人の男が走っていた。

「はあ、はっ・・・はあっ、はっはっはあ！！　クソっ！！」

悪態をつきながらも必死の形相で走る三十代半ば程の男、質の良さそうなスーツを着てはいるが、長く走っていたせいで乱れ、表面の半分以上が血で赤く染まっている。
しかしこれは男のものではない。

つい数時間前まで男と共に酒を飲み、笑って騒いでいた部下達の血だ。

その全員が今はもういない。　生きているのはほぼ間違いなく男で最後だろう。

「はあ、はあっ、ちくしょう！　何で・・・なんでアイツがこんなところに！！」

首狩りが居るんだ！！

男は恐怖のあまり思わず叫んだ。

自分と、自分の部下たちを襲った犯人が、次々と部下の首を切り飛ばした光景が、鮮明に頭に浮かび上がる。　鼻歌を歌いながら、本当に楽しそうな雰囲気を出しながら首を刈り取る小さな悪魔。

「首狩り」

今より半年程前から爆発的に有名になりつつある殺人鬼だ。最初はただの一般人をひと目のつかない所でちまちまと殺すだけだったのだが、三ヶ月前から徐々に規模がデカくなっていき、一ヶ月前には小さな集落を皆殺しにした。

そしてそれから何故かマフィア関係の人間に狙いを絞り、そしてかなり頻繁に殺しを行なっている。

この一ヶ月だけで七つの弱小マフィアと、違法研究をしている四つの日陰マフィアが潰されている。

他のマフィアの幹部や要人といった個人レベルでさえ三桁を超えている。

「なんで俺たちがあんな化け物に狙われるんだ！ 覚えがねえぞ！」

確かに自分たちはマフィアだが、この世界では本当に平々凡々な部類だ。

潰された弱小ファミリーみたいに危険な思想や一般人への過激な暴力なんてしてないし、違法な研究なんて勿論やっていない。

勢力だつて並みだし、どこかのファミリーと特別争ってもいない。

何か大きな事を企てているなんて事は以ての外だ。

俺らが狙われる理由なんて……

『本当にそうかなあ……？』

「っ……！！」

突然聞こえた声に思わず立ち止まり、懐から銃を取り出して周りを見回す。

しかし何処にも姿はなく、声だけが不気味に響いてくる。

「あ、当たり前だ！ 俺達やあ何も・・・」

『そこまで自分のファミリーを信じてるんだね？ でも過信しすぎたのが不運だったね、自分の部下が何をしているかちゃんと把握しておかないから死ぬ羽目になったんだよ？』

エコーがかかった、しかしこの状況ですら聴き惚れてしまいそうな綺麗な声色から、この悪魔が少女である事がわかる。

先程よりも声が近くから聞こえ、恐怖が一層増す。

「ど、どう言う意味だ!？」

『そのままんまの意味だつて、貴方は何もしていなくても貴方の部下の人が色々やってたつてこと？』

「そんな馬鹿な！ 俺の部下が・・・」

『悪いけど今となつてはそれはどうでもいいの、貴方達を潰せつて言われた以上、私は殺すだけだから？』

「くっ！ この悪魔め!!」

『そうだよ？ だ〜か〜ら〜・・・』

額から落ちた汗が目に入りそうになる。

それを袖で拭い、再び前に視線を向けて・・・

『バ〜イバ〜イ?』

目の前でニツコリと笑う銀色の笑顔を見たのを最後に、闇に墮ちた。

目の前の扉を開け私は広間に入る。

「ただいま〜．．．。」

「ししつ、おかえり〜姫」

「随分お疲れね。」

「眠いよ〜．．．」

私はベルの向かいのソファにダイブする、フカフカ気持ちいい〜。

「だけどホント、満流は忙しいわよね〜、アタシの倍近いんじゃないの？」

「ルツスは飯作ったりとかしてっから俺らに比べて少ねえけど、それでも姫のは異常だよな〜。」

ホントだよ！！　いくら私が素性バレてないから使いがっつてがいいからって扱き使いすぎ！！
入隊して一箇月で殺した人の数軽く千人超えたよ！？　個人の暗殺でさえ二百は殺ってるよ！！？
ちなみに私の姿を見た人は基本皆殺しにしているんだけど、初任務の時に助けた人が、途中で少しだけ意識を取り戻して私の戦いを見たらしく、女であることは知られた。

ボスさんとスクアーロはその程度は全然許容範囲であるらしく、特に何も言わない。

だがその人を起点として私の噂は瞬く間に広まった。

曰く、「美しき歌声と共に命を冥府に送る魔女」だの、

曰く、「首を狩ることに至上の快楽を覚え、悦ぶ悪魔」だの色々。

そんな感じの噂が尾ひれはヒレついて行き、いつしか「首狩り魔」から「首狩り王女」にジョブチェンジしていた。

なんだよ「首狩り王女」って、ベルの「切り裂き王子」の二番煎じみたいじゃん。

ちなみにベルはこの通り名を聞いたとき、とっつてもご機嫌だった。

「ルツス〜ご飯〜・・・」

「はいはい、今持ってきてあげるからねん」

広間を出ていくルツス、入れ違いにマーモンが入ってきた。
マーモンも任務帰りみたい。

「マーモンお帰り〜。」

「ムッ、満流も帰ってきてたのかい。」

「今さつきね、それよりちゅっとコッチに来て。」

「・・・またかい？」

「いいじゃ、減るもんじゃないし。」

「減るんだよ、色々。」

「お、ね、が、い。」

「・・・はあ。」

溜息をついて渋々ソファに横になっている私に近づくマーモン。
私はそれをムギューっと抱きしめる。

「ん、プニプニスベスベ、癒される？」

「僕は疲れるんだけど。」

「しっ、そう言いながら毎回やらせてるよな まんざらでもな
いんじゃない？」

「まさか、これはツケにしてやってるだけだよ。 いつか纏めて返
してもらおうよ。」

「照れない照れない？ ほっぺモチモチだよ。」

それからルツスが料理つを運んでくるまでマーモンをたっぷり堪能し、いつもよりさらに倍の量のご飯を食らい、食後の紅茶を飲む。

「そう言えば満流、武器の調子はどうかしら？」

「バッチリだよ、もう面白いくらいにサクサク殺れちゃう？」

初任務の後、帰って早速スクアアロに報告し、武器を作ってもらえる事になった。

報告したときに

『んな武器使ってんじゃねえ！！』

と怒られた。

それから約一週間後に無事に完成し、ガンガン狩っている。作ってる期間中は、ベルのナイフとかスクアーロの予備の剣とかを借りて殺してた。

基本的に何でも使えるし、ただ鎌での戦いに一番慣れているだけで。ちなみに新しい武器は勿論鎌、全身が深い紺色で塗りつぶされ、棒の部分は私の一・三倍くらいの長さ。

sonで刃と棒の繋がっている部分には刃の角度を変える機構が付いており、九十度上に回せば簡易的な槍に、下に回せば斧みたいにもなる。

さらに棒の部分も、真ん中の所で二つに分割する事ができ、中に収納されている細く、しかしとても頑丈な鎖で繋がっている。

刃を下に回して棒を二つに折ればコンパクトになって持ち運びも楽だ、専用の小さなバックも貰えた。

しまいには刃の部分が着脱可能であり、根元に柄にあたる部分があるって、剣としても使える。

まあなんとも便利なモノを貰っちゃいました。

私でこれこんないい武器作ってもらって本当にいいんだらうか？

「そう、よかったわ？ なにか不具合があったらすぐに言ってねん？」

「了解、それじゃあお風呂入ってくるね。」

「はい。」

「そうだ、マーモンも一緒に入る？」

「断固拒否するよ。」

「ちえ〜。」

「しっつ、じゃあ俺と入る？」

「いいよ〜。」

「それはダメよ！」

「「なんで？」」

「問答無用！ 満流、明日のご飯を抜きにされなくなかったら・・・」
「じゃあねベル！！ あたし一人で入るからっ！！！！！！」

速攻で広間を出て風呂場に行く、「ご飯に勝るものはない！！」

風呂に入った後、そのまま寝ようと部屋に向かう。

「うおおい満流！」

「あ、スクアーロ。どうしたの？」

振り返ると、スクアーロが早足で近づいてくる。

「お前に話すことがある、前にボスが言ってたお前の”使い道”のことだあ。」

「ああ、あの話かあ。ってことは近いうち何かあるってこと？」
「詳しいことはボスの部屋で話す、ついてこおい。」

そう言っつて踵をかえし、ズンズン歩いていくスクアーロ。
体格差的な問題で私は小走りになる。

とっとう来たかあ、一体なにやらされるんだろう？

「う、お、おい！ 連れてきたぞお。」
「お邪魔します。」

ボスさんの部屋に入り、机の前で立ち止まる。
ボスさんは相も変わらず不機嫌そうだ、いきなり死刑宣告されても全くおかしくない位に睨んでくる。

「来たか・・・。」
「なんか私の使い道の件で話があるとか。」
「そうだ、二日後に俺たちは大規模な作戦を行う。 テメエには敵戦力の攪乱をやってもらおう。」
「この一ヶ月でテメエの人気はうなぎ登りだからなあ、攪乱にはもってこいってことだあ。」

なるほど、それでこの一ヶ月あんな労働基準法ガン無視のシフトを

消化させた訳なんだね。

しかし話を聞く限り総力戦っぽいな、ヴァリアーの総力を上げるような相手ってどんなんだろ？

「話はわかりました。それで明後日の私たちの敵ってどこの組織なんですか？」

「ボンゴレだあ。」

「……………はい？」

おかしいな私の耳がおかしくなっただらうか。

もう一回、今度は耳をよくかっぽじって聞いてみよう。

「すみません、もい一度言ってもらえますか？」

「何度も言わせんじゃねえ！ いいか、俺たちは！」

ふむふむ

「二日後に！」

ほおほお

「ボンゴレを襲撃して制圧するんだあ！！」

……………な~~~~せ~~~~

第五話（後書き）

前回は比べてすくないwwwwww

ついに次回、ゆりかごに突入！！

主人公の武器も説明だけ出ましたね。

ゆりかごで存分に振り回してもらいましょう。

では（・・・）／

第六話（前書き）

ゆりかご戦だ！

日本までもうすぐだぜ！！

ではごっせー。

第六話

「ボンゴレの制圧、ですか。」

「そうだあ。」

まさかのクーデターとは、さすがのわたしもビックリだよ。まあ戦力的に作戦さえしつかり練れば問題ないだろうけどさ。

「それでさつきも言ったが、テメエの役目は陽動と攪乱だあ。」

「具体的には？」

「当日、テメエにはボンゴレ本部を後方から襲撃してもらおう。噂

の「首狩り王女」が襲ってくればそうとうの戦力がまわされる筈だ

あ。」

「なるほど、たしかに。」

つまりはボンゴレの本部戦力を一人で相手しると、信用してくれるのは嬉しいんだけど……

「そして俺らは正面からアジトに入る、首狩り討伐の援軍としてなあ。」

「おお。」

「そつからは各自で散って敵を殲滅、その間にボスと俺が九代目を殺す。」

「二人掛かりならなんの心配もないですね、了解です。」

しかしそうなると私の予想はあたりかな？

やっぱりここは本人に直接聞いたほうがいいか。

「話は以上だあ、明日は任務はねえから体力を温存しとけえ。」

「わかりました。ところでボスと二人で話したい事があるんですがいいですか？」
「好きにしるお。」

そう言っ出ていくスクアーロ。

私とボスの二人だけ、そう言えばさっきからボス一言も話してくない？

わざわざここで話した意味は・・・

「なんの用だ。」

「ちよつと質問があるだけですよ。先に言っておきたいんですが、返答によつて何か変化したりはしませんので、その上でお聞きします。」

「なんだ。」

「ボス・・・いえ。」

一呼吸置いて、真剣な目でボスを見る。

この質問はきつと、彼の奥深くに触れる事になるだろうから。

「XANANUS・・・あなたは九代目の息子じゃありませんよね？」
「？」

「っ!!！」

初めて見るボスさんの驚愕の顔、だけど物珍しさに見ている事は出来ない。

「厳密に言えば。あなたは九代目と血は繋がってないですよね？」

「・・・何故そう思う。」

「最初に疑問に思ったのは貴方が九代目の息子だと聞いた時からです。ボンゴレの最強部隊を率い、尚且つ次期ボス候補達の中でも

圧倒的な支持を得ているにも関わらず、未だに貴方が十代目を継ぐと言う話が全くと言っていいほど出てこないのはどうしてだろう？
と思ったのが始まりでした。」

私は淡々と話続ける。

ボスも今回ばかりは静かに聞き続けている。

「その時はそこで大して考えずに終わっただんですが、クーデターをおこすと聞いて合点がいました。

このまま行けば普通に考えて貴方がボスで決まりな筈なのに、何故クーデターなんてする必要があるのか？

それはつまり何らかの理由で貴方が十代目を継げない場合しかない。ならばそれは何か？ 他の候補者などの外的要因ならば秘密裏に処分すれば事足りる筈、なのにリスクを犯してまで反旗を翻すということとは、十代目を継げない理由は貴方自信にある。」

「……」

無言ではあるが、若干顔が歪んでいくように見える。

それは怒りでもあり、憎しみでもあり………悔しさや悲しみにも見えた。

「ボンゴレを継ぐのに必要な絶対的なもの、そして後天的には絶対に手に入らないもの、それはすなわち

……ボンゴレの血。」

「……そうだ。」

無言だったボスさんが口を開く。

雰囲気がいっつもより控えめになっているのは気のせいではないだろう、あくまでいっつもよりだが。

「テメエの言うとおり、オレは老いばれとは血が繋がってねえ、十代目をあいつから継ぐ事はない。」

「そうですか。何故九代目の養子に？」

「オレは下町で生まれただけのガキだったが、生まれながらに死ぬ気の炎を宿していた。それを見て変な妄想浮かべやがった糞女が俺を老いばれと会わせたんだけだ。」

「そえで九代目は貴方を引き取ったと。」

「そうだが少し違う。」

「というと？」

「あいつは俺を自分の本当の息子だと言って引き取った、ファミリにも俺にも嘘をついてた。」

「なるほど、つまり貴方は自分をボンゴレの直系だと思っていたのに、偶然それが違うと知ったんですね。」

「そうだ、だから俺はあの老いばれを引きずり落とし、ボンゴレを手に入れる。血統なんぞ知ったことか！」

思い出してたら再び怒りが湧いたらしく、声が荒々しくなっていく。そしたら私を視殺せんばかりの目で睨んできた。

「それでテメエはどうすんだ？俺にボンゴレの血がないから抜けるか？」

「いえいえ、先程も言いましたけど何にも変わりませんよ？というか私にとってはボスにボンゴレの血が入っていいようがいまいが全く関係ないですよ。何となく疑問に思ってたことを解消したかっただけですから、御陰様でスッキリしました？」

話が終わったので真剣な雰囲気を吹っ飛ばす。

シリアスシーンはいつまでも続きません？

「とういかむしろ余計に協力しなくなってきましたよ？ 伝統のルールを踏み倒してまで十代目の座を狙うなんてカツコイイじゃないですか、そんな伝統俺がぶっ壊す！！ みたいなあ？ ボスならきつとできますよ。」

「……………」

「それじゃあもう寝ますね。 あ、それとですね・・・」

ドアを開け、部屋を出る直前に振り返る。

「他の皆に知られても問題ないと思いますよ？ 私達はボスの部下で、ファミリーですから？」

部屋を出て廊下を歩く。

後ろの部屋、ドアが閉まる直前に

「うつせえ・・・ドカスが。」

と小さく聞こえたような気がした。

あっ！ という間に二日後。
私は現在、ボンゴレ本部後方の森の中に隠れている。 勿論フル装
備で。

これから世界最大のマフィアの本隊と殺り合うかと思うと・・・
「ワクワクが止まらない!!?」

作戦聞いた時はどんな無茶振りだよって思ったけど、やっぱり本番
になると楽しみだと言う感情の方が勝ってくる。
そう思うと九代目とも戦ってみたいなあ、ボンゴレのボスなんだか
ら強いんだろうなあ。

写真で見たときはそこに居そうな優しいお爺ちゃんみたいだった
けど、見た目と強さは全く関係ないしね。
ウチのボスに限っては見た目通りだけでも。
などと思っていると耳に付けた通信器から連絡が入る。

うゝおゝ おおい!! 配置についたかあ!!

『着きましたよお、あとうるさいので少し静かに喋ってください』
そろそろ時間だあ！ いつでも始めるお、何度も言うが思いつき
り暴れるお!!

『こつちの要望ナチュラルに無視ですかあ、わかりました、これよ
り作戦を開始します。』

通信を終了し、背中のバッグから武器を取り出す。
棒を連結して刃を垂直の位置に回して鎌の形にする。
ゆっくりとアジトの扉の所まで歩き、手前で止まる。

『今回は陽動が目的だから派手に騒がしく殺さないかねえ、てい

「やあつ？」

掛け声と共に塀を切り刻む、派手な音と共に崩れていく塀。土煙が晴れた向こうは当然アジトである建物が見え、恐らく巡回警備をしていたであろう二人の男が「何事だ！！」と騒いでいる。私の姿を見た瞬間、銃を構えた。

「貴様何者だ！　ここが何処だか分かっているのか！？」

『勿論わかってますよ？　マフィアの世界じゃ知らぬ者のないボンゴレの本部ですよ？』

「分かっててやっているのか！？　何が目的だ！！」

『九代目を殺しに来ました？』

「なっ！？　う、撃てえ！」

二人が撃ってくるが鎌の刃で防ぐ、体が小さい分とつても楽だ。やがて弾が尽き、マガジンを交換しようとするが、その際に接近して両手足を一気に切断する。

銃の音と叫び声がこれだけ響けばイヤでも集まってくるだろう。

「ぐああああああつ！！」

『ゴメンね、普段ならさっさと首を狩っているんだけど今回は事情があるから？』

「ぐうつつ、首・・・を？　ま、まさか・・・お前は！？」

『そうだよ、だからその通信器貸してもらっね？』

一人が持っていた通信器を見て、いいことを思いつき、回線を開いて倒れている人の口元まで近づける。

「な、なに・・・を・・・」

『ほらあ、早く緊急事態を報告しないと。　さっきの音で数人くら

い来るだろうけど、それじゃあ君たちの二の舞だよ？ 事態を正確に伝えるのが見回りの仕事じゃないかなあ？」

「くっ……こちら西側……堀内第三巡回地点、「首狩り王女」が現れた！！ 繰り返す……「首狩り王女」が……ぎゃああああああつ！！！！！」

役目を終えた男を、なるべく痛みを伴うように殺す。

これで演出はバツチリだね？

『お役目ご苦労様、さつてと、たっくさん来てる来てる？』

目で確認出来るだけでも五十人は来てる、あとからまだまだ来るだろう。

一人一人が今迄の敵とは比較にならない猛者だと言ったことが一目でわかる。

まだ戦ってもいないのに早速興奮してきた。

『こっからは好きに暴れ放題？ 久々に本気出しちゃうよ……？』

鎌を構え、真正面から飛び込んだ。

第六話（後書き）

ウチのXANXUSってホントよく喋るよな（。！）（。！。！）（。！。！）

次回、無双と敗北、そして物語は日本へ！！

第七話（前書き）

更新するの忘れてました、スイマセン（汗

誤字の指摘がありましたので、より一層注意して書いていくよう頑張ります。

皆さんも誤字脱字を見つけ、読みづらいつと感じましたら遠慮なく言ってください。

そしてご迷惑でなければ場所も教えてくれると幸いです。

ではどしどし。

第七話

マフィア界における最大勢力、その総本山であるボンゴレ本部。多くのマフィアから畏敬の念を向けられるその場所は、今や地獄と化していた。

各所で響く銃声や爆音、歴戦の猛者達の断末魔の悲鳴。

「な、何だ！？ いきなり体に傷が・・・ぐわあああ！！」

「しっつ、バイビー」

ある場所では己の体に起こった事も理解出来ずに引き裂かれ・

「ば、化け物だあ！ 銃が効かな・・・うがああ！！」

「それは君自身の想像力の産物だよ。」

ある場所では異形の怪物に成す術もなく捻り潰され・

「レヴィ・ポルタ！！」

「ぎゃあああああああ！！」

「ボスの邪魔は何者にもさせん。」

またある場所では晴天の空で起こるはずのない雷光に身を焼かれ・

「あら、中々いい体してるじゃない？ でも残念、私のお気に入りにするにはもう少し遅くなるか、満流みたいに可愛くならなきゃダメよ？」

「がああああああ！！」

ある場所では一方的に髑り殺しにされた。

たった数人の侵攻によってその戦力を削り落とされるボンゴレ。ボンゴレの戦力をよく知る者ならば誰もが思うだろう、これは何の悪夢だ、と。

激化していく戦場、その中心たる場所で・

「うゝお おおい！！ さつさと死ねえ！！」

「かつ消える老いぼれがあ！！」

「くつ！！」

両陣営の大将が対峙していた。

三人とも既に全身傷だらけの満身創痍、しかし溢れんばかりの闘志と殺気は衰えることなくその場に渦巻いている。

しかし九代目は顔に迷いを浮かべており、防戦一方だ。

スクアアロが側面から斬りかかり、それを手に持つロッド状の武器で防ぎ、即座に押し返して後方に飛ばす、すると右側から凄まじい威力の炎が放たれ、九代目を焼き殺そうと迫ってくる。

しかし素早く身を低くし、前方に防御の炎を集中してやり過ごす。

炎が晴れると目の前にXANNXUSが迫っており、至近距離で先ほど以上の炎を放とうとするが、九代目がロッドでXANNXUSの腕を払って射線を横にズラす。

直後に撃たれた炎はあらぬ方に飛んで行き、部屋の壁を跡形もなく吹き飛ばす。

両者が一旦距離を置いて対峙する、スクアアロは先程、飛ばされて柱に身を強く打ちつけてしまい、ダメージで動けずにいた。

「まさか貴様がここまで出来るとは思わなかったぞ、老いぼれが・

「！」

鼓膜が破れるかと思う程の音量で叫ぶXANXUS、それは九代目への憎悪の叫びか、それとも・・・

らしくもない事を考えた自分への怒りの叫びか・・・。

血飛沫が上がる音が辺りに響く。
周りは既に土の色を見つけるのが困難な程に血の海に染まっており、その中心には不気味に笑う銀色の仮面を付けた小柄な、というよりも小さな子供。

『あゝ、たゝのしゝ・・・？』

エコーの掛かった少女の声。

しかしそれはおぞましい程の恍惚とした声音であり、この少女が今
どれだけ悦楽を感じているかがハッキリと感じ取れる。

手にした鎌は血でベツトリと汚れ、周りには死体の山、さらに少女
は小さく鼻歌を口ずさみ、とても楽しげだ。

『もう完全にキャラぶつ壊れ状態だなゝゝ、もうそろそろアジトの
中入ろうかな？ 下っ端掃除も満足したし、いい加減強い個人と殺
りたいなゝゝ？』

そう言いつつゆっくりと歩く少女だが、彼女の歩みを邪魔する者は
ここにはもういない。

少女はアジトの建物の周りを一週し、外にいる者たちを皆殺しにし
たからだ。

正面の大きな玄関を開き、堂々と建物の中に入る、外と同じくあち
こちから血の臭いがする。

そらはつまり仲間が上手くやっている証。

『さして、いつそ九代目を殺すの混ぜてもらおうかな？』

「残念ながらそれはさせん。」

『おや？』

「オメエはここまでだガキ。」

少女の前に立ち塞がったのは二人の男。

一人は三十代半ば位で、メツシユの男。

もう一人は見た目は初老でありながらも、今迄の下っ端達とは次元の違う威厳を放つ人物だった。

立ち振る舞いからして高い技量を持つことが伺える二人。

しかし少女はその二人の顔を見た瞬間、仮面の内で珍しく驚きの顔を、そしてその次にはとてつもない歓喜の表情を浮かべた。

『へ〜、驚きました。 事前の情報では貴方達は今日ここには居ない筈なんです。』

「そうそう自分たちの行動をさらけ出すような事はしないさ、それが役目でもある。」

「俺たちを甘く見てんじゃねえ。」

『いえいえ、甘く見てなんてませんよお？ むしろ嬉しいです、ここにいてもサプライズなのに二人共独占出来るんですから〜』

「「首狩り王女」にそこまで言ってもらえるなんて光栄だな。」

「くだらねえ事言っただんじゃねえ、さっさと潰して他の援護行くぞ。」

それぞれが構え、張り詰めた空気が一瞬ではを満たす。

『それじゃあ遠慮なく行きますよ〜〜？』

駆け出す「首狩り王女」。

『ボンゴレ？世の雷と嵐の守護者さん？』

第七話（後書き）

おい、ゆりかご終わってねえじゃん！ と思っただ方、ごめんなさい
m () m

一話で書こうと思っていたんですが、予想以上に長くなりそうだったんで分割しました。

九代目の守護者出しちゃった！

満流の見せ場作りたかったばかりにWWW

次回こそ日本に行ってみせます！！

第八話（前書き）

ゆりかご終了。

第八話

突然だが、今私は凄く興奮している、それはもうもの凄く。何故か？ それは、やっつっつっつと！ 大物と殺り合う事が出来るから！！

守護者だよ守護者、ボンゴレの中でも別格中の別格。

唯一ヴァリアーと渡り合えるかもしれない個人戦力と言っても過言じゃないよ。

しかもそれが一度に二人も！！

こらはもう日頃の行いの賜物としか思えないね！

特にここ一ヶ月の働きっぷりは尋常じゃなかったからね、きっと神様のご褒美をくれたに違いないよ？

何でここに居るのか気にはなるけど些末なことだ。

今は目の前の極上品を味わい尽くす、それしかない。

『それじゃあ行きますよ、ボンゴレ？世の嵐と雷の守護者さん？』

「ああ、来な！」

「身の程を教えてやるぜ！」

『開始早々の死亡フラグご苦労さまです。』

私は鎌を振りかぶって駆ける。

嵐と雷、たしかココヨーテさんとガナツシユさんだっけ？

それぞれ銃を構えたり素手のまま構えたり、ガナツシユさんは銃を取り出すなり二発発射、銃口の向きと視線からして、弾は正確に私の心臓と右足首を狙っており、普通ならここでそのまま撃たれるか、または心臓守って利き足をやられるかしかないが、私は左に跳ぶ、しかしそうすれば空中にいる所を撃たれる、それでも跳ぶ。

案の定、ガナツシユさんは空中の私を撃とうとするが、私は跳ぶときに体が宙で一回転するように跳び、その途中で先程私の心臓を狙

って撃たれた弾を、刃の腹の部分で、遠心力追加で打ち返した。

弾はガナツシユさんの鳩尾に向かって飛び、彼はギリギリ避けたが、脇腹に少し深く掠ったらしく、一瞬だけ顔を歪める。この間約1・3秒。

その隙に床に着地、接近して懐に入ろうと

「こつちだガキ。」

『おお！？』

した時に視界の右横にコヨーテさんが出現、次の瞬間には殴り飛ばされていた。

右手で防いだけど、折れるかと思った。

地面に鎌を突き立てて勢いを殺す。

ガナツシユさんもとつくに立て直していて、位置的にも振り出しに戻った。

「銃弾を打ち返すとは、噂通りの化け物だな。」

「まったくだ、その細腕でどうやって受けきったんだか。」

『お褒めに預かり光栄です？』

始まってから一分も経っていない、なのにこの高揚感、体のそこから笑いが込み上げて来るようだ。

だから少し力を使おう、出来ることなら何時間でも殺り合っていたけれど、それはさすがに自重。

ならせめてある程度全力で潰したい。

『そろそろボスの所に行きたいので死んでくださいね。』

言いながら仕込みを済ます、特に体を動かす事がないのでバレにく

いのがこの力の長所だね。

「まだまだ始まったばかりだろう。」

「死ぬのはテメエだガキ。」

何を言っているんだって感じに言葉を返してくる二人、余裕な顔した人を絶望の底に叩き落とした時の顔ってスッゴイそそるよね〜？想像しただけでゾクゾクしてきた。

仕込みが済んだ直後に疾走、真正面から突っ込んだ私に、二人は一瞬だけ目を見開いた。

しかしすぐにコヨーテさんは迎え撃つための構えをとり、ガナツシユさんは体の要所を正確に狙って撃ってくる。

銃弾を防ぎながらコヨーテさんの方に突撃、間合いに入る直前に仕込みを発動させる。

「ヤケになったか？ この距離で俺と闘ろうってのか。」

コヨーテさんは拳を私の顔面目掛けてとんでくる、しかし私は避けようともせずに突っ込む。

拳が私の顔面に

「なっ!？」

当たる事はなかった。

しかし私は避けていない、単純に届かなかっただけ。

私はそのまま懐に入り、鎌を思いつきり右斜めに切り上げる、肉が斬り裂かれる音が静かに響いた。

「ぐうっ!!！」

「コヨーテ!!！」

左腕を切り飛ばされ、さすがに呻くコヨーテさん。
ガナツシュさんが驚いてるうちに私は鎌の刃を外してブーメランの
要領で彼に投げる。

投げた刃はガナツシュさんの右足を深く切り裂き、彼が痛みで硬直
している間にUターンし、持っていた銃を真つ二つにして私の手に
戻った。

ちなみに刃が戻ってくる間にコヨーテさんの右足を棒で思いっきり
殴って折っておいた。

崩れ落ちる二人、しかし目はずっと私から離さずにいる。

『いや〜大成功？ ぶつつけ本番だったから成功するか分かんなか
ったけど結果オーライだね。』

「テメエ、何しやがった。」

「何故、コヨーテの拳が・・・。」

『ああ、あれですか？ 簡単な話ですよ、雇気楼と似たような
トリックですよ。』

私が出したのは単純な錯覚の誘発だ、私と二人の間の床に火種を設
置し、それを一気に発火、つまりは光の屈折をちょびつとだけ変え
て二人の距離感を狂わせるだけ。

コヨーテさんはタイミングよく拳を出したつもりでも、実際には早
すぎて私の顔に届かなかった。

『とまあ蓋を開ければなんてことのない手品みたいなモンですよ？』

「火種だと？ そんなもん一体どうやって・・・。」

『それは残念ながら企業機密ですよ、というかそろそろゲームオー
バーにしますよ〜。』

「くっ！」

刃を付け直し、振りかぶる私を見て、顔を歪める二人、まずは嵐からご退場願いますようか？

『それではさような・・・っ！?』

突如感じた力に、手を止める。

『これは・・・』

感じる場所は方向からしてボスとスクアーロのいる所、何やら嫌な予感がしてきた。

相手はたとえ老人でもボンゴレの長なのだ、今更だが何が起こるか解らない。

それに、聞き間違いかもしれないが・・・

ボスの叫びが聞こえたような・・・。

『急用が来ました、さよならです?』

「「な!?!」」

驚く二人に目もくれずに走る、嫌な予感はずばかり。

というよりもそれは、ほぼ確信に変わっていた。

たどり着いた扉を蹴破り、中に入る。

『!』

「はあ、はあ、満流かあ。わ・・りい・・。」

私を見て謝る傷だらけのスクアーロ、そして、全身氷漬けにされたボスの姿。

『負けたん・・ですねえ。』

こうして、ヴァリアーのクーデターは失敗に終わった。

クーデターの失敗から二週間が経った。

ボスは氷漬けのまま幽閉され、ヴァリアーは無期限の謹慎処分。あまりの過剰な温情措置に周りから猛反発が起こったらしいが、九代目が全く譲らなかつたらしい。

私の事については、あくまでヴァリアーとして任務をこなしていただけと言う事で、特に素性などについては言及されなかった。

これにも九代目が関与しているみたい、なんのつもりなのやら。

そんなもって今私が何をしているかと言えば……

「日本人よ！ 私は帰ってきた！！」

日本にいます？

話が飛びすぎ？ なら簡潔に話すと……

一週間で謹慎生活に飽きた。

そうだ、海外に行こう。

そう言えば何だかんだで顔とかバレてないし、抜け出せんじゃん！
皆に話す。

そう言えば飛行機とかどうやって乗るの？ と聞かれる。

え？ 普通に貨物室に忍び込むだけだよ？ と答える。

一日で準備する。

外ではヒッチハイクなどで空港へ。

適当に止まっていた荷物を運ぶ車に乗る。

着いた飛行機の貨物室に侵入する。 ちなみにこの飛行機がどこ行きかは知らない？

それからスヤスヤ眠ることウン時間。

「まさか日本に戻ってくるとは……。」

まあとにかく行き先を決めよう。

ネットで検索、自作パソだぜ！

ヴァリアーのアジトで、無駄に高い部品を無駄にふんだんに使って無駄に高性能に仕上げた。

日本中の市町村の名前が画面上にズラツと並び、目を瞑って適当な所でクリック。

目を開けるとそこに映った街の名は

「並盛町ね、どんな所かな？」

早速道なりを調べ、意気揚々と歩き出す。

私たちの冒険は、まだまだ続けぜ！！

第八話（後書き）

ガナツシユとコヨーテの戦い方知らないんで、とりあえず勝手に決めちゃいましたwwww

コヨーテの左義手のフラグ回収してしまった……まあ原作じゃ死んでるからいいよねwwww

錯覚の件ですが、作者自信あんまり原理をよく覚えてませんwwww
こんなの出来なくね？ と思った方もいるかと思いますが、ご容赦ください。

最後の方がちょっと手抜きだったかも（汗

さて、とりあえず一段落ついたので、今更ではありますが、ここまでの感想・アドバイス等お待ちしております。

罵詈雑言になつてしまいそうな時は、極力オブラートに包んでくださいwwww

ではまた

第九話（前書き）

ついに日常編（？）に突入！！

第九話

「夜月満流です。趣味はネットサーフィンです。好きな食べ物はラムの香草焼きです。特技は手刀で人を気絶させられることです。宜しくお願いしまーす？」

並盛に来て早一ヶ月半。

なんと今、私は小学校に入学しています！

いや大変でしたよ。なんせ親がくたばってるもんだから家とか入学手続きとかどないせえつちゆうんじゃい、って感じだったけど、パソでちよつと不動産やら学校やらの記録をいじって、ちゃんとお金は支払って無事解決。

家具とか教科書類とか揃えるのに二週間もかかるし、子供って不便だなあとしみじみ思った。

そんで今はクラスで自己紹介の時間。

皆が無邪気に精一杯のアピールをしている所。

いいよねえ、見ていると微笑ましい。幼さとか元気とか無垢な笑顔とか。

このクラスで、というよりこの学校で唯一私だけがドロドロのグチヨグチヨのニチヨニチヨな人生送ってるんだらうなあ？

この子たちも二十年後には意地汚い大人たちのネチヨネチヨの世界に触れて穢れていくんだね。

ああ、時間の流れとはなんと悲しきかな。

こんなにも純粹無垢な天使達をウンコ臭いクソ野郎共に変えてしまっうなんて（笑

「とっても元気があってよく出来ました、じゃあ次の子ね。」

私の自己紹介を背伸びしたがりな子供の冗談と受け取った担任は普通に進行を続ける。

まあ予想してたから言ったんだけどね。

やがて自己紹介が終わり、担任が簡単な説明や注意をした後、初日なので今日は解散となった。

しかし子供達は一人でも多く友達を作るべく、周りの人に声を掛けていて、一向に帰る気配はない。

担任がその光景を微笑ましく見て、静かに教室を出ていった。

さて、私も誰かに声をかけようかな？　　と思ひ、周りをざっと見る。

しかし殆どの子は話相手を見つげ、改めて名前を教え合い、雑談に入り始めていた。

どうやら出遅れたらしい、そう思った矢先、教室の真ん中の列、前から三番目に座っている男の子（因みに私

は窓際の列、後ろから二番目だ）が、誰とも話さずに俯いているの発見。

時々近くの会話に混ざろうと声をかけようとするが、踏み出せ入れずにいるみたい。

なるほど、クラスに一人はいる根暗っ子だね、と言いつつ私は学校生活初めてなんだけど、そんな事は気にしない。

何となくあの子と友達になりたいな、なんて思い、席を立て近づいていく。

その途中で何故か何人かの男の子に声をかけられたが、やんわりと受け流してその子の所へ辿り着く。

「ねえ、君？」

「えっ!? ……あの……ボク?」

声をかけた瞬間すごいビクッ! っとなって、見てるこっちが罪悪感に駆られそうな程に怯えた様子で言葉を返してくるツンツン頭の子。

「そうそう、私は夜月満流だよ。君は?」

「えと……さ……沢田……綱吉……」

今にも泣きそうな顔でこちらを見てくる。

というか既に目が若干潤んでるんですけど。

「うん、綱吉君ね? 私の事は満流でいいよ?」

「う……うん、み……満流……ちゃん。」

「そんなに怖がらなくても、別に虐めたりしないよ?」

「ご……ゴメンね! 一人ぼっちで……怖くて……」

ヤツヴァイ、ダム決壊寸前だよ。

これじゃあ入学早々いじめっ子の称号が付いちゃうじゃないか!

「そ、そうなんだあ〜! じゃあもう怖くないよ? 私が友達第一号だもんね!」

「いいの?」

「もっちろん! じゃああれだ! 友達の証として、今からツナ君と呼ぼう! 友達にあだ名は付き物だよ?」

「友……だち、じ……じゃあ!」

「うん?」

「僕はえつと……みーちゃんって……よんでいい?」

「おお! みーちゃん!! 全然オツケエだよ?」

私が笑つて了承すると、ツナ君も笑顔になった。
こうして私は、始めて友達と言つのを手に入れた。

ツナ君と友達になつて四日が経ち、今日はツナ君の家に遊びに来た。
何でも親に友達が出来たと言つたら、早速遊びに来させなさいと言
われたようで。

「ただいまー!。」

「お邪魔します?。」

二人で元気よく挨拶、すぐさま奥から若くて綺麗な女性が出てきた。

「お帰りなさいツツ君。 あらいらっしゃい、あなたがツツ君のお
友達?。」

「はい、夜月満流です? 初めまして。」

「礼儀正しいわね、この子の母の奈々です。 ツツ君と仲良くし
てあげてね?。」

「もちろんです。」

お母さんだったのか、ちょっと年の離れたお姉さんだと思った。

「おつ、その子がツナの友達か。これまた将来有望なカワイ子ちゃん連れて来たな。」

今度は無精髭を生やした男の人、恐らくツナ君の父親っぽい人が現れる。

「満流ちゃんって言うんですって。ホントに可愛いわよね、ウチのツツ君も隅に置けないわね。」

「まったくだ。まさかこんなに早く未来のお嫁さんを連れて来るとは、我が息子ながら恐れ入ったな。」

「お、お母さんお父さんやめてよ!!」

ツナ君が顔を真っ赤にして叫ぶ。

細かくは分からなくとも、お嫁さんの単語でなんとなく理解出来たのだろう。

ツナ君の様子を見て二人が笑い、ツナ君がそれを見てまた怒鳴る。

果てしなく微笑ましい光景に、私も声を出して笑う。

「み、みーちゃんまで〜!」

「ふふっ・・・ご、ごめんツナく・・・ふふっ、あははは!」

その場が笑いで包まれ、その中で一人涙目で怒鳴るツナ君。

「おお、なにやら楽しそうだな。」

「あ! お爺ちゃん!」

突然現れたもう一人の人物、ツナ君がその人に気づいた途端、嬉しそうに駆け寄り、その人も近づくとツナ君を抱き上げ、優しそうな笑顔を作る。

しかし、私はその老人の顔を見て、体が凍りついた。幸いにも、老人は意識をツナ君に向けており、両親も同じくだった為、私の異変には気付かれていない。

その間に何とか外面だけは落ち着きを取り戻し、しかし頭の奥では困惑が残っている。

仕方ないだろう、だって

「お爺ちゃん、ボクの友達連れてきたよ！」

「おおそうか、どれどれ。」

私の目の前に

「初めまして、満流ちゃんだったね？ 私はツナ君のお爺ちゃんだね、昨日からこのお家にしばらく住んでいるんだよ。」

ボンゴレ？世がいるんだから。

第九話（後書き）

感想お待ちしてます（＾
―
）
／

第十話（前書き）

十話まで来ちゃったよ。

どうせ二・三話程度で飽きて終わると思ってたのにWWWWWW

ここまで来たからには突っ走るぜ！！（終了フラグWWW）

ではどうも。

第十話

衝撃の再開（？）からさらに四日。
今日もツナ君の家に遊びに来た。

「お邪魔しまーす？」

「おお、満流ちゃんか、いらっしやい。」

笑顔で迎えてくれたのはボンゴレ？世。

あの後何とか平常心で話をして、その間に頭の中で何故九代目がここに居るのかと言う事について考えたが、結構すんなりと答えがでた。

そう言えば、前にボス以外の後継者候補の話聞いた時に、日本人が一人だけいたのを思い出したのだ。

他の人達と違ってまだまだ子供、しかも一般家庭で過ごしていると聞いて、その時は興味が無くてすぐに忘れていたが、今思い返せばその子の名前が沢田綱吉だった。

だけど、最初こそ驚いたものの、しかしだからと言って別にどうこう変わりはない。

もう友達になった訳だし、そもそもツナ君がマフィアとか無いでしょ。

出会ってからまだ一週間だけど、ツナ君の能力の低さはもう常軌を逸したものだっただけ。

体育の時間では毎週二回は転び、バトンは受け取るどころか弾いてどっかに飛んでいったり。

勉強では1 + 2 + 3を3 2 1と答えたり、カタカナの練習の時間ではリンゴをウンコと書いたり。

給食の時間では自分の分を貰って席に戻るとき、何も無いのにまるでバナナでもあったのかと言う位に見事にすっ転んで、中身がピンポイントで頭に降り注いだり、。

そんなこんなで一日五回以上は大泣きして、意地の悪い奴らから付けられた呼び名がダメツナ。
いくらまだ小学生だからと言ってもこれは酷いよ。

これがボンゴレのボスになるとか、サマージャンボ五回連続一等賞当てるくらいの偉業だと思う。

という訳で悶々とした疑問は晴れ、いつもどおりに過ごそうと結論した。

九代目には何だかんだで素性知られてないし、問題なし。

むしろ今ではすっかり気に入られ、私もツナ君みたいにお爺ちゃんと読んでいる。

「みーちゃん、いらっしやい！」

「ツナ君、遊ぼう。」

「ほっほっほ、二人は本当に仲がいいのう。」

二人で奥に走る、それを笑顔で見送る九代目。

いや、正直子供に混じって生活するのもどうなんだろうって思ってたけど、やってみると案外楽しいもんだね。

え？ 人を殺しておいて云々？

んなもん知ったこっちゃないね？

たかが六才の小娘に殺られる程度の弱者の癖に、マフィアなんかになるからいけないだよ、自業自得ってやつだね。

そんな奴らの事で何で一々私が行動に制限付ける必要があるの？
そっちの方がイミフだよ。

「お！ ツナよ、今日も嫁さん連れ込んで愛を育んでるのか？

さすが俺の息子！！」

「お父さん！！」

ツナ君がお父さんにからかわれ、真っ赤になって怒鳴る、これももはや通例になってる。

私と奈々さんがその様子を傍で眺めるのもいつも通り。

学校の方も、男女共に友達が多く出来て、勉強については言うに及ばず。

まさに順風満帆な学校生活と言える。

ツナ君も頑張つてはいるが、ダメツナが定着し、イジメとまでは行かないけど、からかわれキャラになっている。

ああそう言えば、あんまり関係ないけど現在私はヴァリアーにいた頃と違い、髪は首の後ろで二箇所に纏め、前髪は顔がちゃんと見えるぐらいまで切った。

さすがに貞子みたいに顔見えなかったら怖がられるしね。

「みーちゃん！ かくれんぼしよー。」

「お〜〜！！」

声をかけられ、ツナ君の元に駆けていく私。

平和だね〜〜〜〜。

なぐんて思っていた時期が私にもありました。

「初めまして、宮城静菜みやしろしずなです！ みんなよろしくね！」

入学してから既に半年、季節は秋。

飛びすぎ？ 仕方ないよ、書くこと無かったんだもん。

「宮城さんは親の事情で皆より遅れて来ちゃったけど、仲良くしてあげてね？」

【は~~~~い！】

そう、突然ウチのクラスに転校生がやってきた。

まあそこはいい、世の中色んな事情をもった人がいるのだから、時期外れだからと言ってそこまで特別意識しなくてもいいだろう。だが問題なのは

「それじゃあ宮城さんは一番後ろの席に座ってね。」

「はい。」

窓際から二列目の最後列、つまり私の右斜め後ろ、ということ。
そこまで歩いていく宮城さん、しかし彼女の視線は、この教室に入
った時から一人に固定されているのだ。

「……（ニコツ）」

「!」

笑いかける宮代さん、そして半分怯え、半分羞恥の割合で僅かに赤
くなって目を逸らす……。ツナ君。

そう、宮城さんは、ずっとツナ君だけを見ているのだ。

あ、別にフラグじゃないよ？

ツナ君に友達が出来るのいいことだし、もし宮城さんがツナ君にそ
う言う感情を持っていたとしても、ツナ君にも春が来たなあと応援
したいくらいだ。

私が問題視、というか疑問視？ しているのは 宮城さんの雰囲気
だ。

一目見た瞬間に一般人じゃないのがわかった。

少なくとも何かしらの力を持っている事は明白、しかもツナ君に送
る視線が、何というか、妙なんだよね。

好意的な部類ではあるんだけど、初対面とは思えないような親し
みが込められているような、そんな気がする。

知り合いかな？ とも思ったけど、ツナ君の反応を見てみると少な
くともツナ君自身は見覚え無さそう。

後で聞いてみようかな〜とか思っている内にチャイムがなり、担任
が出ていくと、宮城さんの元にクラスの皆が殺到する。

まあ恒例の質問タイムって奴だね、私は集団を迂回してツナ君の元へ

「ねえツナ君、宮城さんって知り合い？」

「え？ ううん、知らない。」

「でもなんか笑いかけてたけど。」

「め、目がたまたま合ったからじゃない!？」

思い出したのか、また赤くなるツナ君。

しばらくこのネタで遊ぼうかな？

「ねえ、沢田綱吉君だよな？ 初めまして。」

「へ？」

突如話しかけられて、振り向くと、そこにはいつの間にか宮城さんがいた。

その後ろを見ると、質問していた集団を抜けて態々こっちに来たらしい、何故に？

「う、うん……よろしく。」

「うん、よろしく。私のことは静菜って読んでね。」

ニッコリと、先程と同じく笑いかける宮城さん。

花のような笑顔ってこういうのを指すんだろぅなぁ〜とか思った。

「う……うん。」

色々限界に達したようで、ツナ君が私の後ろに逃げるように引っ込んでしまった。

むしろツナ君にしては良く頑張った方だ、ツナ君の成長が嬉しくて、つい頭を撫でてしまった。

そのせいか、林檎のように真っ赤になるツナ君、その時、宮城さんが私を見る。

「そう言えばあなたは？」

「あ、私は夜月満流だよ。よろしくね宮城さん？」

まるでいま気づいたかのように聞く彼女に、ちょいカチンとしたが、表に出さずに名乗る。

「ふうん、まあよろしく。」

随分おざなりな態度、ツナ君の時とは大違いだ。

顔は笑顔なんだけど、視線が物凄い上から目線なのだ。

値踏みするような、比較するような、そして勝ち誇った視線へと変わり、最終的に見下すような視線に落ち着いた。

明らかに七歳児がするような目じゃないんですけど

「それよりもさ、綱吉君、私とお話しよ？」

「え……えっ……と。」

話かけられて困惑し、私に縋るように目を向けるツナ君。

いや、私嫌われてるっばいんですけど、今も視界の端で私にお邪魔虫に向けるような目を向けてるんですけど。

しかし見捨てるわけにも行かず、三人でお話する事に……その間、邪魔そうな視線をチラチラと向けられる羽目になりましたとわ。

第十話（後書き）

現れた転校生、果たして彼女の正体は！？

まあキーワード見りゃ一発なんですけどwwwwwwww

それでは次回。

感想お待ちしております (^ ^ | ^) /

第十一話

ふふっ、来たわ。

とうとう来たのよ、何がって？ それは

「初めまして、宮城静菜です！ よろしくね！」

私の時代が！！！！

そう、わたしは転生者よ！

死んだ後の世界で神に会い、力を授かってこの世界にやって来た。

神が言うには、ここはリボーンの世界に限りなく酷似した世界。

多少の差異はあるけど、人物や辿る運命は私の知る世界と同じだそうなので、全く問題ないわ。

能力は、最初はチートな能力を貰おうとしたけど、世界の根本を覆すような力は無理、つまりは他作品の能力は与えられないそうで、ならばと雲雀並みの身体能力、あと私の属性を大空にして欲しいと頼んだ。

まあ子供が雲雀レベルはさすがに変だから徐々に上げるようにした。それでも常人なんて遥かに及ばないけど。

この二つで能力に関する特典は限界を迎えたそうで、案外大した神じゃないなあと内心想いつつも、転生させてもらった。

ここまで言えば分かるでしょうけど、私は生前リボーンが大好きだった。

特に主人公のツナは、最初は頼りないダメ男だったけど、戦いを経

ていく内に段々と遅しくなっていく所が大好き。
ハイパーモードの時のツナはもう堪らない程カッコイイ！ 白蘭戦
の時なんかもう興奮しっぱなしだった。

だから転生の話をされて、まっ先にリボーンの世界にして欲しいと
頼んだ。

生前の私は、地味の一言に尽きるような見た目だったので、勿論と
びっきり可愛くしてもらった。

転生する時期はツナが小学校の頃、中学だと京子に惚れちゃってる
しね。

まあそれでも今の私なら乗り換えさせる事も余裕だろうけどね！
念には念をとてやつよ。

さて、今は転校初日、名前の関係でツナと席は離れちゃったけど、
今のツナに仲のいい友達なんていないしね。

きっと寂しと思ってるだろうから、そこに可愛い女の子に優しくさ
れたらイチコロの筈、完璧！！

チャイムと同時に沢山の子供たちが群がってくる、特に男子が積極
的だ。

早速容姿の効果が効いてるみたい、まあこんな子供なんかには無
いんだけど、これからの事を考慮してある程度の友人関係は作って
おかなきゃね。

浴びせられる質問の数々に適当に答えながら、なんとなくしにツナの
方を見る。

さっき笑いかけた時は顔を赤くして目を逸らした姿が可愛かったな
、あれで私を意識して見ているかもしれない、と、ツナを視界に
捉えた時、衝撃が走った。

女の子が一人、ツナと話していて、ツナの顔が赤くなっているではないか。

なによあの女！！ 私のツナに馴れ馴れしいのよ！！

思わず立ち上げり、邪魔な子供たちを押しつけてツナと女の所に行く。

「ねえ、沢田綱吉君だよな？ 初めまして。」

「「え？」」

驚いた様子で振り返る二人、キョトンとしたツナの顔が可愛い。女はやけに意外そうな顔をしていて、マヌケヅラになっていた。

「う、うん……よろしく。」

「うん、よろしく。私の事は静菜って呼んでね。」

ここで飛びつきりの笑顔を見せる。

女のことは最初から見ていない、私のこれからの人生においては只のモブキャラでしかないんだから。

案の定赤くなるツナ、やっぱり可愛いなあ〜と思っていたのも束の間。

なんとツナは横にいたあの女の後ろに隠れ、縋り付いている！？

しかもツナの頭を女が撫で、ツナの顔が真っ赤になってる。

なんなのよこの女は！

とりあえずコイツが私とツナが仲良くなる上で障害になるのは確定ね。

「そう言えばあなたは？」

「あ、私は夜月満流だよ、よろしくね宮城さん？」

そう言っつて笑顔を向ける夜月とかいう女。

「ふうん、まあよろしく。」

適当に返事をして、観察する。

そこらの子供と同じでヒョロい体、隙だらけだし、容姿なんて私と比べるのも可哀想だ。

見れば見るほどクラスメイトことかの凡人じゃない。

あんとツナは住む世界が違うのよ！ ただの一般ピーポーが調子に乗んなってのよ。

「それよりさ、綱吉君、私とお話しよ？」

「え……えっ……と。」

またもや夜月に縋るような視線を送るツナ、私は邪魔そうな視線を向けるが、夜月は空気も読まずに参加してきた。

やっぱりこんなガキに空気を読めつてのが無理な話ね。

結局その後も、邪魔女がいるせいで、ツナと余り会話が出来なかった。

ただの凡人の癖に！ その内思い知らせてやるわ！！

「はあああああ~~~~~」。

学校からの帰り道、私は人生最大の溜息をついた。

宮城さんが来て二日………なんか最近このフレーズ使いすぎじゃない？

彼女は暇さえあればツナ君に話かけ、しかしその度にツナ君は私の背中に隠れると言う悪循環に陥っている。

二人の時ならまだしも、今日なんか一人の時に話かけられたツナ君が、丁度トイレから帰ってきた私を見て、あからさまにホツとした顔で駆け寄ってきたのだ。

目に見えて彼女を避けるツナ君、何故か理不尽に睨まれる私。

なんで私が悪いみたいなの視線を向けるかね、懐いてもらえないのはそっちの落ち度でしょって話ですよ。

だがしかし、もしツナ君が私に依存している、とかいうのだったら話は別だ。

彼女の事はどうでもいいが、ツナ君が他人との交流を疎かにするのはいかんよ。

「ねえツナ君？ どうして宮城さんの事避けてるの？」

「うん、よくわからない。」

「他の人と話すのがイヤとか？ 私以外の子とも話したほうが・・・」

「うん、そうじゃなくて。上手く言えないけど、嫌なんだ。」

「そっか。」

「どうやら彼女限定らしい、じゃあ問題ない。」

「いや、あるっちゃあるけど、彼女一人と上手くいかなくてもツナ君の人間関係に大きな影響は無い。」

「幸いあと半年もすればクラス替えて別々になる可能性は大だし、他の子と友達になればいい。」

「じゃあツナ君、また明日ね？」

「うん！ バイバイみーちゃん。」

「てを振ってツナ君と別れる。」

「明日はもう少しマシな日常でありますよ。」

「あれ？ フラゲ？」

「夜月さん、ちょっといい？」

見事に回収してしまった・・・。

翌日、昼休みに給食を食べ、皆が校庭に遊びに行く時間。

珍しく宮城さんが私に、それも自主的に話かけて来た。

これがフラグの力か！

「うん、いいけど。どうしたの？」

「話があるから、付いてきてもらえる？」

「わかった。ツナ君、後でね。」

「う、うん。」

不安そうなツナ君を残し、教室を出る。

そのまま校庭に出て、さらに歩き、その方向にはなんと体育館。

まさか、小学一年生にして初呼び出し！？

テメエ調子乗ってマジム力つくんですけどお！とか、いいから飛べよ！とか言われて、あり金全部絞り取られるという、幻の学校イベント！

最近の子供は進んでるとは言われているけども、七歳にしてもう金銭に対する欲が芽生えるなんて・・・。

きつとこれから体育館裏まで行き、大人数に囲まれ、将来性の欠片もない不良連中に身の程を弁えないデカイ態度でガン飛ばされながら金を要求されるに違いない！！

私の予想通り、ついたのは体育館裏。

校庭で遊ぶ子供たちの声が遠くに聞こえる。

しかし予想していたようなヤンキーな子達はいない、茂みにも隠れてるのかな？ と思ったが、人の気配は私達以外には無し。まさかとは思うが・・・ワンマンアーミーなのか。

「ここならだれもいないわ、さて、単刀直入に言うけど。」

振り向いて私を見る宮城さん。

いつも以上に見下すような目を、しかも今日は隠そうともせず露骨に向けてくる。

まあ全然隠せてなかったけどね。

「あなた、もうツナと関わるのやめなさい。」

「・・・・・・・・はい？」

第十一話（後書き）

転生者のうざったさを上手く表現出来ていたでしょうか？

早くも死亡フラグwwwwww

キーワードでも言いましたが、この作品に置いて、転生者は脇役の雑魚です。

なので一人の出番はそんなに長くありません。

例外はいつか出るかもしれませんがwwww

ではまた

第十二話（前書き）

転生者の運命やいかに！

第十二話

「えっと、ごめんね。 もう一回言ってくれませんか？」

「はあ？ 耳でも腐ってるの？ まあいいわ、ツナともう関わるな
って言ってるのよ。」

言葉の意味が理解できず、聞き間違いかと思い、聞き返したが。

帰ってきたのは先程と同じ、むしろオマケまで付けて打ち返された。
なんかもう隠す気はこれっぽっちも無いみたい。

「とりあえず、何でそんな事言われるのかな？」

「あなたに説明したって理解できないわよ、ツナとあんたじゃ住む
世界が違うんだから。」

ツナって呼び捨てしてるし。

もう完全に化けの皮が剥がれてるんですけど。

というかツナ君の住む世界？ もしかしてこの子マフィア関係者？

「住む世界ってどう言う事？」

「だから言っても分かんないつつたでしょ！ いいからあんたは
私の言うこと聞けばいいのよー！！」

カッシーン。

さすがに今は来ましたよ、何コイツ？ 何様？

完全に下に見られてるのは知ってたけど、こっちにも限度ってもの
があるよねえ〜。

死にたいの？

「嫌だよそんなの、あんたに言われる筋合い無いもの。」

「はあ！？ 調子乗ってんじゃないわよ！ 痛い目にあいたい訳！？」

「そつちこそ調子に乗んな、ツナ君に避けられるような残念女がグチグチいつてんじゃないぞ？」

「このっ！！」

安い挑発に乗ったアホが突っ込んでくる、やっぱり一般人とは思えないような速さだった。

「おつとお。」

「なっ！？」

でも私には当たらないけどね？

一般人よりつてだけで、今迄殺つて来たマフィアの下っ端に毛が生えた程度でしかない。

掠りもしないよ〜。

右に避けて、すかさずアホの足の前に自分の足を置く、あとは勝手に引っ掛かって転んでいくだけ。

しかしアホは辛うじて受身を取り、体勢を立て直した。

「お、やるねえ。 ともただの七歳児とは思えないよ？」

「くっ、このお！！」

馬鹿の一つ覚えみたいに突っ込んでくる。

それを避けては転ばせ、避けては転ばせを繰り返し、五回くらいやった所でアホが距離を取った。

降参・・・なわけないよね〜。

「ふふっ、なるほどね。 そうか、そういつことか！！」

「はい？」

分からないね。

「もういいわ、あんたはここで殺して、欠片も残らずに燃やし尽くしてあげる。」

「随分物騒な話になってきたね、その年で犯罪者になりたいの？」

「死体が見つからなければ行方不明で迷宮入りよ、問題ないわ。」

「死体を隠し通すのつてそんなに簡単じゃないよ？」

「はあ？ 何言ってるの？ そんなのこれで一発解決じゃない。」

そう言つてアホは手の平に、死ぬ気の炎を灯した。

「!?!? それは!」

「驚いた？ そうよ、私の炎は大空の属性、凡人とは違う選ばれた人種にのみ宿る炎よ!」

アホが何か言っていたが、私は聞いてなかった、いや、聞けなかったのだ。

それほどの衝撃だったのだから。

目の前の光景が信じられない。

嘘だ、有り得ない。

だって……だって……。

「ちつつつつつつさ!!!!!!!!!!!!!!」

思わず大声が出てしまった。

何あれ、小さー!!

服の袖にライター三本くらい仕込んでんじゃね？　ってレベルの小ささなんですけど!?!?

というか何？　あの勝ち誇った顔？

これで勝負は決まったと言わんばかりの笑みを浮かべているあのアホは何？

スツゴイ痛々しいんですけど!

最初は驚いたけど、あまりの小ささに一瞬で吹き飛んだよ。

「えーっと、勝ち誇ってるってこ悪いんだけど、そのピンポン玉サイズの炎で何する気？」

「あなたの死体を燃やすのよ、これなら燃えカス一つ残らないわ。」

「まあ、それぐらいなら出来そうだけでも……。」

なんか段々可哀想になってきた。

これじゃあこっちが弱いものイジメしてるみたいじゃない？

そんなの……

「死になさい!!!」

そんなの……

「ツナは私の物よ!」

楽しすぎるじゃん？

「……え……?」

アホが叫びながら私に突っ込んで来た瞬間、静かに響く四つの風切

り音。

宙に浮く感触に、アホは惚けたような声を上げ、とっさに地面に足を着けようとする。

しかし、足は体を支える事は無く、アホはそのまま地面に落ちる。途中で手で支えようとしても、何故か全然前にこない。

地面に落ちて数瞬後、何かが地面に落ちる音が四つ分、自分の周りで聞こえ、アホはそれを見る。

「え……え？ う……そ……」

それは自分の右腕、その隣に左腕。

すぐ横を見ると、そこには左足、反対側には右足が転がっていた。それを見た後、自分の体が濡れている事に気づき、地面を見ると、自分を中心に広がる血溜まりがあった。

「あ、ああ……あああ……ぐぶう!？」

「だあめだよお？ こんな所で叫んじゃあ、流石に人が来ちゃうよ」

叫びを上げかけたアホの口に、ハンカチをねじ込む、ついだから切り落とした足の靴下とかを脱がして詰め込む。

アホのポケットに入ってたハンカチでナイフを拭き、服の内にしまう。

「これで喋れないよね、さあてどうしようかなあ？」

「ムグッ、ムグウイウ〜!」

涙と鼻水と血で顔をぐちゃぐちゃにしながら喚くアホ。

これじゃ話が出来ないので、仰向けにして腹に一発？

「グブウッ!!」

「うるさいから喚かないでくれる？ 次喚いたら一回につき三発殴るよ？ 分かったら首を縦に振れ。」

「・・・っ!!」

必死の形相で首を縦に振るアホ、ヤバッ、楽しっ？

「よろしい、それじゃあこれから口の中の物取るけど、勝手に喋ったら殺すよ？ ああその前に。」

「？」

「ほいつ？」

パチンツと私が指を弾くと、アホの手足の切れ口が灰色の炎で焼かれる。

話を聞く前に出血死されたらやだしね。

「ムーーーーーっ!!!!!!!!!!??」

「だから喚くなって言ってるのに」

身を焼かれる激痛に、もがいて転げ回るアホ。

しかしそんな事で消える筈はなく、炎はアホを焼き続ける。

「これぐらいでいいかな？ ほい、止血終了」。

再度指を弾いて炎を消す。

解放されたアホの顔は酷いもので、初日に感じた綺麗さとかはもう微塵も感じられない。

アホの呼吸がある程度落ち着くのを待ち、話を進める。

「じゃあ今から取るね？」

「ぶはっ！ はあ・・・はあ・・・はあっ・・・はあ・・・けほっ！・・・げほげほっ・・・かはっ・・・。」

取った瞬間に咳き込むアホ。

叫び出した時のために、残った足から靴下を脱がして手に持つておく。

「じゃあ質問するからね？ 嘘ついちゃだめだよ？」

「ひっ、・・・は・・・はいっ・・・。」

すっかり怯えちゃってるねえ？

まな板の上の魚みたいにビクビク震えちゃって、S心をくすぐられるよ。

「まずあなたの言ってた神とか転生者とかって話だけど、あれってマジで言ってたの？」

「は、はい・・・本気・・・です。」

「ふうん、じゃあそれについて詳しく話せる？」

「はい・・・。」

そっからアホは語りだす。

自分が生きてたのはことは別の世界であり、アホはそこで一度死んで身で、死後に神と名乗る人物と遭遇し、力を与えられてこの世界に来た。

この世界が、元の世界でアニメや漫画として知られる物語と殆ど同じ世界であり、アホはその物語が大好きだったからこの世界に来たと言っ事。

だから、多少の差異はあれ、これから起こる事の大筋は知っている

らしい。

まさにDQNとしか言えないような話が披露された。

「こんな・・・感じ・・・です。」

「ふうう~~~~ん、別の世界、ねえ〜。それで、あんたの知る物語には私と言う存在が居なかったから、私の事を自分と同じ転生者だと思った、と。」

「は、はい。」

たしかに辻褄は合うね〜。

アホがツナ君のことを一方的に知っていたのも、私に敵意を向けるのも、必要以上にツナ君に関わろうとするのも、それなら一応筋が通る。

まあこんなもんか、これ以上は聞く必要ないし。

「そっか、それじゃあ質問は終わりね。」

「ほっ・・・。」

「じゃあお別れね?」

「っ!?!」

即座に手に持っていた靴下をアホの口にねじ込み、封じる。

「そんな面倒な存在はさっさと殺っちゃうに限るしね? 排除させてもらいま〜す。」

「ム、ムググツ! ムウウー!!!」

「ああ、言っとくけど未来の情報で取引しようってつもりなら意味ないよ?」

「っ!?!」

「だってあなたが言ったんだよ? ここはあくまで酷似した世界だつて。変化が起こるかもしれないのにそんな不確かな情報は変な

先入観植え付けちゃうからね、万が一あなたの言う通りになるとしても、未来の事知っちゃったら楽しくないじゃん？ 人生は何が起ころるか解らないから面白いって習わなかったあ〜？」

言いながら私は、手に炎を灯す。

アホが出した物とは比べ物にならないサイズで、しかし騒ぎにならないように二十倍程度に抑えて。

それを見て、再び震えながらボロボロと泣き出すアホ。
いい加減視界から消えてほしいなあ〜？

「ば〜い？」

「……………っ！！！」

一気に燃えるアホ、叫ぶことすら出来ず、無力に灰になっていく。
灰すら燃え尽きて、残るのは僅かな黒い染みのような跡。

「うわっ！ チャイム鳴るまであと一分切ってんじゃん！ 急げ〜？」

クラスに走ってたどり着き、担任にアホは気分が悪くて早退したと伝えた。

数日もすれば行方不明で騒ぎになるだろうが、アホが言ってたように死体が見つからなければ迷宮入りだ。

私は最後に会っていたとして事情聴取はされるだろうが、まさか七歳児が犯人だとは思わないだろう。

疑われたとしても、証拠が無ければ無意味だし、まさに完全犯罪だね？

久しぶりにスッキリした気持ちで授業を受けましたとき。

第十二話（後書き）

と、言うわけで転生者第一号は無様に退場です W W W W W W W W W W

コイツうぜえええええええ！ って思っていた方々にスッキリしてもらえたでしょうか？

感想まってまゝす (^ | ^) /

第十三話（前書き）

今回は会話が多いです。

説明大半ですので、退屈させてしまつかも!？

第十三話

「あれ？」

目が覚めるとそこは広い草原だった。

見渡す限りの緑に、咲き誇る綺麗な花々、美しい青空に、大小様々な雲が浮かんでいる。

そんな世界を、気持ちのいい風が時より吹き抜けていく。

「いや、どこやねん。」

思わず関西弁になってしまった。

夢の中だとしてもおかしいよ、何で私がこんな爽やかな夢見んの？私を見る夢って言ったら血なまぐさい死体の山の頂点で片手に生首持ちながら延々と高笑いしてるのがデフォなのに。

180度どころか540度くらい違う夢やん？

《起きたか・・・》

「？」

突如として世界に響く声。

周りを見渡すと、少し遠くの地面に半分埋まった岩の上に、一人の青年？ が座って、空を見上げていた。

その人に近づき、岩の傍まで来ると、青年がこちらを向く。

「誰ですか？」

《私か、私はそつだな、君らの言葉で言つと、神だな》
「・・・・・・・・」

これ以上ないほどにキャラが粉々に砕け散ってるけど。

《何でいきなりグープン!? しかも顔面!? 俺お前に何かしたか!?!?》

「とぼけてんじゃねえよこのクソ神野郎? あんな面倒なビッチ女こつちに送り込んでおいて何もしてねえとは言わせんぞ〜?」

《な、なる程そう言うことか。ならまず最初に言っておくが、アレを送ったのは俺じゃない。》

「へ〜、神様のくせに僕は悪くありませんですかあ? 随分無責任な駄神もいるもんですね。」

《いや、ホント、マジで俺じゃないんだって。やったの下の連中なんだって。》

「うわっ、出たよ・・責任部下に押し付ける気だよこの人、こんな大人にだけは成りたくない典型的なタイプだよ。」

《ぐふっ!》

胸を抑えてくの字になる神、大分堪えた様子で。

「まあ、弄るのはこれくらいにしてあげるから、早く本題に入ろうよ。」

《始めからそうしてくれよ、まあいいか、ここにお前を呼んだのは他でもない、お前に頼みたい事がある、夜月満流。》

「ほお〜神直々の頼み事ですか〜、結構凄いんじゃないですか?」

《その通りだ、だから心して聞いてくれ。》

なんかやる気無くなったな。

人にモノを頼む立場の分際で何? この上から目線。

頼んでやるから有り難く思えな。

「とにかく概要だけでも聞きますか。」

《ああ、まず先程も言ったが、あの転生者を送ったのは俺の下に就く下級神の一人だ。ちなみに俺は神達の中でもトップの座にしている存在ね、つまり最高神とか創造神とそんな感じの奴。何故お前に会いに来たかと言うと、簡単に言えば、お前に転生者を狩って欲しいからだ。》

「何故に？」

《最初から説明する。まずお前も転生者から話を聞いただろうが、この世には幾つもの世界が存在し、ファンタジーやSFの世界、それらのパラレルワールド等、人間の数の概念では計り切れない程のおびただしい数の世界がな。

それらを区分けして、それぞれの神が管理するのがこの世のシステムだ。

しかし、神といえどもミスはある、それによって手違いで死んでしまった者を、上級神以上の神がその者のために好きな世界に、時には新しい世界を作って第二の人生を与えるのが本来の転生だ。》

「ふむふむ。」

段々シリアスな空気になってきたんだけど。

《しかしある時期から、下級神や一部の中級神が暇潰しの為に、死んだ人間を既存の世界に転生させるケースが爆発的に増えている。

酷い時には、本来死ぬ筈のない者をワザと殺してまで転生を行う奴もいる。》

「うわ〜。」

《当然そんな事をすれば、生命の循環に乱れが起き、やがて転生者で溢れた世界は崩壊する。》

「じゃあそもそも転生のシステムそのものが危険なんじゃ？」

《いや、さっきも言ったように、その人物用に新しい世界を構築すれば、たとえその者が強大な力を要求しても害はない。だが、中

級神以下の神には世界を想像する程の力は無い、だから既存の世界に無作為に放り込むアホ共が多い。》

「なんで上級神とかあんたが何とかしないの？」

《転生者とは言え、一度世界に組み込まれた存在を無理やり取り除くのは危険だ。簡単に言くと、ジェンガのラストスパートで傾いている側のパーツを抜き取るうとする位に危険だ。》

「なんと・・・。」

《そして、そう言う感じで転生した奴らとついでのは、大概が自分は物語の主人公になった気分になる事が多い、というかほぼ九割がそうだ。お前が殺した奴なんかはその典型だ。》

「面倒な奴らだね。」

《そうだ。上級神以上の神々は、この事態を重く見て、議論した結果。現地の者に協力して貰うことにしたんだ。取り除けないなら殺して強制的に生命の循環に戻すしかないからな。》

「なる程、つまりはこの世界で選ばれたのが私だと。でも聞く限りそいつらってかなりの力を持つてるって事だよな？あのバカ女は雑魚だったけど。」

特典とか思い通りの力貰うとか、チートでしょ。

《いや、実はそれについてはさほど問題じゃない。》

「なんで？」

《さっきも言ったが、中級神以下の神々には世界をどうこうする程の力は無い。よってその世界の根本を揺るがすような強大な力は与えられないんだ。》

「なる。」

《それにお前はこの世界の中ではトップクラスのチートだからな、元々の人生がただのオタクや中二病末期患者が大半の奴らに負ける事はよっぽどの事がない限り無いさ。》

失礼な、人を化け物みたいに。

「最後に、何で私？」

《お前がチートで、先に転生者に遭遇したってのもあるんだが、最大の理由は、最後に転生者に言った言葉だな。》

「なんだっけ？」

《「人生は何が起こるか解らないから面白い」だよ、中々言えるもんじゃないさ。》

「言うだけなら誰でも言えるでしょ。」

《かも知れない、でもお前は転生者が未来の知識を持っているのに欲しがらなかった、これだけで口先だけじゃないって分かる。この依頼をする人間には、転生者に接触することで手に入るメリットが目がくらまない人物である事が最も重要だからな。》

「確かにそう言う意味じゃ適任かもね、まあ納得。」

《勿論、出来る限りのサポートはするつもりだ。例えば、お前を転生者を見たら一目で判別出来るようにしたり、近くにいたらある程度感じられるようにしたりとかだな。》

それは確かに便利だ。

近づく奴を一つ疑うのなんて面倒だし。

「いいよ、引き受けてあげる？」

《助かるよ。改めて、よろしくな、満流。》

差し出された手を握り返す。

「任せて！ グダグダ長つたらしい説明だったけど、要はあんたら上級神共の管理不行き届きと言う名の職務怠慢の尻拭いをしてくださいって事だもんね！ バッチリやってあげるよ？」

《グツハアツ！！》

弾丸に撃たれたかのように仰け反って倒れる神でした。

第十三話（後書き）

誤解が生まれぬよう、詳しく説明したかったので、こうなりました。

第十四話

「おはよう、みーちゃん！」

「おはよう、ツナ君。」

駄神共の尻拭いの依頼を受けた翌日、いつもの場所でツナ君と合流し、一緒に登校する。

昨日お父さんにまたからかわれた、とか、お爺ちゃんから手紙が来た、とか、たわいのない話をしながら歩く。

因みに九代目は夏休みの半ば頃にイタリアに帰った。

これから仕事が忙しくなるらしく、しばらくは来れないそうで、ツナ君が大泣きしたなあ。

やっぱクーデターが原因なんだろうなあ、後悔はしないけどね？

やがて学校に到着し、教室に入ると、何人かの男子が私達を見て、ニヤリと笑う。

「おい、アイツらまた二人っきりで来てるぞー！」

「カップルだカップル！」

「いや、きつともう夫婦だぜー！」

最近これも恒例となっている。

こう言うのって三・四年生くらいから流行るもんじゃないの？
一年で男女が一緒でもさして弄られる事ってあんまり無くない？
まあそれだけ私達がいつも一緒にいすぎって事かもだけど。

「ち、違うよ！ みーちゃんとは夫婦じゃないよー！」

「うわあ、ダメツナの奴赤くなってやんの、照れ隠しだ！」

「リンゴみて〜だ〜。」

真っ赤になつて必死に反論するツナ君、しかし見事に受け流されてさらなる追い打ちを受ける。
ここまでパターン化すると逆に面白いな、なのでここは一つ、さらなる刺激を与えよう。

「そう？ 私はツナ君なら夫婦でもいいよ??」

「み、みーちゃん!!」

【おおお~~~~!!!!】

爆弾を投下した瞬間、これ以上ない程にツナ君が真っ赤っかになり、同時にクラス重から驚きの声、黄色い声、一部で断末魔のような叫び声が聞こえた。

「ああ、あう・・・あ・・・な」

言葉が出ない様子、そろそろ限界かなあ、と思った所で、タイミン
グよくチャイムが鳴る。

担任が入ると同時に全員が席につき、授業が始まる。

しかし、私の右斜め後ろの席、つまりアホ女の席は当然空っぽ。

だが、それを気にする者は居ない。

担任が名前を呼んで出席を確認するが、アホの名前は呼ばれず、素
通りしていく。

アイツどんだけ嫌われてたんだよ、と、普通なら思うがそうじゃな
い。

あのアホは外面はよかつたので、それなりに人気はあつた、見た目
だけはマシだったしね。

これには昨日の神が関わっている。

依頼を受けたあとの話だ、では回想~~~~~

《ああ、そう言えば。 お前が狩った女の事なんだが。》
「なに〜?」

《あいつに関する記憶を皆から消しておいたから騒ぎになることは無いからな。》

「は？ それってダメなんじゃないの？」

干涉出来ないから私に頼んだ筈じゃ・・

《干渉出来ないのは存在そのものだよ、記憶や記録を少し弄っただけだから問題ない。 幸い、あの女が関わった人間は百人に満たない少数だったからな。》

「なるほど、あくまで私が殺した訳で、皆が覚えて無ければ居なかったも同然か。」

つまり社会的な消去の神様バージョンみたいなもんだね。

つとまあそんな感じで、誰もアホの事を覚えていないのです。生まれ変わる前も後も残念な人生でしたね、ドンマイ？
うっとおしい存在が消え、清々しい日常が戻ってきたのさ。

そんなでもって放課後、ツナ君と別れ、少し寄り道をしながら、普段行かないような場所を散策中。

ただの気まぐれなんだけどね、たまにはこう言う無意味な時間も乙なもんかなと。

こうしていると偶に面白い発見があったりするんだよね。

路地裏の先に懐かしの（まだ七歳だけでも）駄菓子屋さん見つけたり、窓際にスーツを来た猫を飾ったオシャレな店があったり。

他にはいきなり目の前に緑色の穴が出来て吸い込まれそうになったり、黒い和服着た女の人が電柱の上を飛び回ったりなど。

いやはや、中々どうして世の中は面白いね。ちよつと足を伸ばすだけでこんなに楽しい物が見れるんだから。

次は何が出るかなと、ウキウキしながら角を曲がると。

「うがぁー!!」

「へへっ、おいおいどうした？いつもの威勢はよぉ！」

「調子に乗るからこうなんだよ!!」

「おにいちゃん!!」

満流はランチ現場に遭遇した!

なんと小学生一人相手に中学生が六人ですよ、プライドもクソもあ

ったもんじゃありませんね。

少数ボコって自分が強いと錯覚するのが精一杯の哀れな脇役人生のモブ共だね？

しかも子供のほうは見る限り全身打撲、頭も一箇所が割れてるんじゃない？

さらには妹っぽい子が人質にされてるみたい、なんとまあ。

加減も分かんないバカのか、それとも牢屋にぶち込まれたいドM集団なのか。

どっちでもいいけどね、え〜と、とりあえず携帯で現場全体と犯人共の顔を撮影つと。

ハイ、チ〜ズ？ パシヤ

「あん！？ 何だデメエは！！」

「つか何撮ってんだコラア！！」

「え？ 証拠写真の撮影だけど？」

なにを当たり前の事を言ってるんだこのバカ共は、そんなことも分からないのか。

兄妹と思われる二人もコツチに気づき、困惑している様子。ちやつちやとすませるか〜。

「撮り終えたんで、さっさとくたばれ？」

「何ふざけたこせ・グベッ！」

「何しやがつ・ゴハッ！」

「てめっ・ブハアッ！」

「このy・ギヤアアアアアア！！！」

一人はボディブロー、二人はアッパーカット、最後は玉蹴りで沈める。

あんまり痣とかが残らないダメージにしとかないと後で面倒だしね、あくまで向こうが全面的に悪いようにしなきゃ。

「ひいつ！ た、たすk・・・ぎゃああ！」

「わ、わるかつt・・・がああああ！！！」

玉蹴りで怯えた残り二名を、お望み通り玉蹴りで沈める。

終わったその場には、気絶してる奴三名、白目を剥いて泡を吹いてる奴三名、啞然とする子供二名、それらの中心に君臨する子供の姿の悪魔一名。

これにて一件落着？

「おにいちゃん！！！」

「きよ、京子・・・。」

つてわけでも無いみたい。

妹の方が正気に戻り、泣きながら兄の元へ駆け寄る。

私も行きますか、一応。

「やあやあ大丈夫？」

「あ、ああ・・・助かったぞ。」

「ありがとう！」

「いいってことよ？ それより君は病院行った方がいいよ？ 頭割れてるし。」

「ああ・・・そう・・・だな・・・ぐうっ！」

「おにいちゃん！？」

立ち上がるうとするが、バランスが取れずに崩れる。妹さんがとっさに支えようとするが、力が足りない。

二人が倒れる寸前に、私が支える。

「おっと。」

「す、すまんな。」

「これじゃあ自力で行くのは無理っばいね、私が運んであげるよ。」

「

「こ、これしきの事はなんでもないぞ！」

「問答無用？」

さつさと背負って病院へ向かう、この距離なら直接行った方が早い。妹さんも後ろから付いてきて、何度も繰り返し私に礼を言ってきた。病院の受付に要件を言い、背負った子を見せると、看護師は慌てて医師を呼び、あの子は担架に乗せられて緊急治療室に入っていた。残された私と妹さんは、傍のイスに座り、終わるのを待った。

その途中で、私が妹さんに、親に連絡したほうがいいんじゃないかと言うと、すぐに親御さんに連絡。

しばらくして親御さんが来て、妹さんと二人で事のいきさつを説明。今度は家族三人に深々と頭を下げてお礼を言われた。

通りかかったただけなので気にしないで欲しいと伝え、時間も時間なのでそろそろ帰ることにした。

「ねえ、お姉ちゃん名前はなんていうの？」

「私？ 夜月満流だよ？」

「私、笹川京子！ 七才だよ！」

「京子ちゃんか、ちなみに私も七才だから、お姉ちゃんじゃないよ。」

「え、そうなの！？ じゃあ満流ちゃんって呼んでいい？」

「いいよ？ 私も京子ちゃんって呼ぶね！」

「うん！」

「じゃあ京子ちゃん、バイバイ！」

「バイバイ！」

帰り際に、親御さんに証拠写真のデータを渡し、犯人のいる学校の名前を教えて家に帰った。

数日後、とある学校の生徒が児童への過剰な暴行で少年院行きになったと新聞に載ってた。

第十四話（後書き）

まさかの笹川兄妹とのエンカウント！

これがこの先どう関わっていくんでしょうねえ……

感想まっています。

ではまた次回。

第十五話（前書き）

更新が若干遅くなる恐れあります。

ですがけっしてネタが無いとかではありませんので。

単に作業時間が少なくなるだけです。

第十五話

京子ちゃん達と出会ってからというもの、私はちよくちよく同じよなアホ共はいないかなあ〜と歩き回る事が多くなった。

あ、別に人助けに目覚めたとかじゃないよ？

普通の日常ばつかに慣れると体が鈍る可能性があるからね、最低限人をボコボコにする感触は偶に味わっとく方がいいかな〜って？

京子ちゃんと、兄の了平さんとは時々会うことが多い。

驚異的な速さで退院した了平さんは、強くなるうと必死になり、会うたびに「極限に試合だー！」とか言っただけ追いかけてくるようになった。

中々にしつこく、だけでもランニングにはちょうどいいかな〜と思っただけ黙認してる。

まあそんなこんなで二人とは仲良くなり、近いうちにツナ君にも紹介しようかなあと思ってる。

すでに日も落ち、七歳の子供が出歩くには遅すぎる時間。

こう言う時、一人暮らしのフリーダムが存分に発揮されるといってものだね。

前に大通りを歩いてたら警官に迷子かと言われて、家の場所を聞かれた事があるので、人通りが少ない道を選んで歩くようにした。

「おじょうちゃん、迷子かい？」

まあたまにこう言う酔っ払いとかに絡まれるんだけどね。

万年係長止まりみたいなオッサンが、頭にネクタイ巻きと言うなんともベタな酔っ払いスタイルで、フラフラしながら近づいて来る。

その後ろには部下であろう同じく酔っ払いの会社員AとBがいる。

「ご心配なく、迷子じゃないので。」

「遠慮しないでいいんだよ？ 一緒に親を探してあげるよ。」

「そうそう、なんなら家まで付いて行ってあげるぜ？」

変態ロリコンオヤジ認定ですね。

この対峙してるだけで湧き上がるうざったさは間違いなく変態オヤジの能力と言っても過言じゃない。

今も目の前でゲラゲラと笑っている変態トリオ、物凄くぶん殴りたい。

「ひっひっひ、そんじゃ俺たちと。」

「おいおい見ろよ、酔っ払いどもが幼女襲ってんぞ？」

「！！？」

「おや？」

突然声がしたので、そちらを見ると、不良っぽい中学生がニヤニヤしながら此方を見ている。

偶然通りかかって見つけた光景を楽しんでる、と言うような感じだね。

「あん？ なんだよ中坊かよ驚かせやがって、ガキはさっさとお家に帰んな！」

「今は大人の時間だっつもの。」

「そうそう、はっはっは！」

中学生だと知ってまた調子に乗るアホトリオ、なんか展開が透けて見えるようだな。

つ。」

「うっわ、こいつまじで幼女趣味に走ってやんの。」

「そういうお前もこの前小学生に声かけてただろっがよ。」

「ちよっ！ 言うなっていったらっが。」

「おいおい人の事言えねえな。」

ますますゲラゲラと笑う、なんかトリオと同レベルになってる気が

・

「じゃあもう用済みなので、さっさと逝ってください。」

【は？】

突然の言葉に全員がキョトンとした顔をする。

その隙に足元にあつた石を一気に蹴り上げ、飛んでいった小石五個は、正確に中坊の玉に命中。

五人が退場。

その光景にいち早く正気に戻った四人程が、鉄パイプやらナイフやらを手に襲い掛かってくる。

紙一重で避け、地面に落ちていた鉄パイプを拾って、すれ違い様に一撃（どこにかは最早言うまい）。

これであと三人、あとトリオ。

その時、髪が前に垂れてきて、確かめると髪紐が解けてしまったみたい、しかも両方。

そろそろ古いから買い換えようと思ってたからちよっどいつか。

髪も長くなってきたなあ、前髪も以前みたいになってきたし。

とりあえず今はゴミ掃除しないと。

しかしトリオは既に気を失っている、よく見るとちびってるし。

ださっ！！

じゃああとは中坊三人か。

「な、なんだよこのガキ！ バケモンかよ!？」

「言いて妙ですね、と言うか前はよく言われました。」

「ひい！ く、来るなあ!!」

「だが断る。」

石ころを蹴って三人とも瞬殺。

またこの前のような死屍累々の光景が広がっている。

なんかパターン化してきたな、もうちょい強いのではないのかな？

「ねえ。」

「？」

またもや後ろから声、振り向くと了平さんと同じくらいの男の子が惨状を見ながらコツチに歩いてきた。

「これ、君がやったの？」

「そうですね。か弱い少女を襲う変態共に制裁を加えたところ
です。」

「ふうん、か弱い、ねえ。」

そついう子供の目は、面白い物を見つけたように嫌々な光が灯っていた。

「じゃあ今度は僕の暇潰しに付き合ってよ。」

「え？ いや、そろそろ帰ろっかなあとか思っ……」

「いいよ別に、帰ればねっ。」

「うわっ!?!？」

いきなり襲い掛かってきた子供。

いつぞやの痛者いたしゃ一号を思い出す速さだった。(ちなみに痛者とは、痛い転生者の略)

もしかして痛者二号か!? と思ったけどこの子は違うね、駄神のおかげで痛者と遭遇したら分かるようになったし、まだ実際にどんな感じた事はないけど、何となくこの子は違うと思う。

しかし痛者一号と違うのは、速さに見合った複雑な動き。

ただ早いだけの雑魚だったアホとは違い、戦いに対する経験のある程度積んでみたいだね。

なんで七歳で戦いの経験積んでんの? というのはツッコんだら負けだろうね、やっぱり。

両手に持った木製のトンファーで交互に連撃を繰り返す男の子、後ろに下がりながら全てを避けて・・・って

「あの〜一つ聞きたいんだけど。」

「なに?」

「何故にそんな物持つてるんでしょうか?」

「一番使いやすいからさ、当然だろう?」

「・・・そう・・・つか・・・。」

そう言う事を聞いたんじゃ無いんだけども、なんかもういいや。

因みにこの間もずっと攻防は続いている。

ずっと避けてるだけだけどね?

なんというか、終わらせるタイミングを逃した感じ。

いや、やろうと思えば終わらせられるけどね?

「あの〜、そろそろ終わらせても?」

「へえ、やってみなよ。」

「え、マジ? いいの?」

なんという唯我独尊っ子だ。

困惑している内に再び歩きだす男の子。

このまま逃がしてなるものか！

「待て〜い！ 是が非でも名前を教えて貰う〜！」

「やだよ。」

「教えて！」

「やだ。」

「教えなさい！」

「やだ。」

「教えろー！」

「ヤダ。」

「あ、もしかして太郎とかイモい名前だったりとか？」

「・・・」

ピタツと止まる太郎君。

「あれ？ もしかしてずぼs・・・。」

「そんなわけ無いでしょ。」

「え〜？ じゃあ教えてよ太郎君。」

「咬み殺すよ？」

「咬みつて・・・物理的に無理でしょ。」

猛獣じゃあるまいし。

「・・・君、変だね。」

「はい？」

いきなり変人扱い？ よりにもよってこの太郎君に？

「普通ボクと出会うと全員が怖がって近寄らないんだけど。」

「そりゃ出会い頭にトンファーで襲撃されて友達になろうとか思わないよ。」

「じゃあ何で君は関わってくるの。」

「私の方が強いから?」

「……」

「嘘、嘘だから殺気全開で睨むのやめて? ちゃんと話すから。」

「次ふざけたら咬み殺す。」

「はい、まあ簡単に言えば君が面白いからだね?」

「は?」

キョトンとする太郎君、おお、こいつはレアっぽい表情いただきました。

「面白い? どこが。」

「さっきも言ったけど、いきなり襲ってくる子供なんてそうそういないでしょ? しかも太郎君の場合、かなり強い部類だしね、少なくとも同年代ではほぼ無敵なんじゃない? そう言う子と仲良くなくておくと、必ず面白くなる。と思うのですよ。」

「……変なの。」

「バッドで打ち返してあげるよその言葉。」

私も人の事は言えないけどね?

「はぁ……雲雀恭弥。」

「うん?」

「ボクの名前だよ、次太郎って呼んだら咬み殺すから。」

「うん、わかったよ太……恭弥君?」

「……まあいいよ、じゃあボクは帰るから。」

「うん、じゃあね。」

お互いに背を向け、帰路につく。

いやあ、本当に退屈しないよね、人生って？

第十五話（後書き）

連続で原作キャラと遭遇 W W

転生者達を簡単に表すために、適当に略語作ってしまいました（汗
いや、これは無いだろう。とか思ったら言うてください、やめま
すんで W W W W W

それではまた次回。

第十六話（前書き）

四日ぶりですwwwwww

遅れて誠に申し訳ありませんm()m

ではどうも

第十六話

クリスマス・イヴ

ある場所では順風満帆な家族が笑顔に満ちた暖かい家庭で過ごし。

ある場所ではリア充達が愛する異性と共に聖なる日を迎える。

ある場所では独り身のサラリーマン達が肩身の狭い思いをしながら道の端っこを歩き。

ある場所ではリア充死ネなオタク達が薄暗い部屋の中でネットゲのイベントに全力を注ぎ。

ある場所では彼女に振られた青年達がお互いの傷を舐め合うように酒盛りに明け暮れる。

それぞれの者達が、それぞれの場所で、自分の人生の現状を叩きつけられる日である。

そんな中、私、夜月満流は言いますと。

「く、クソ！ さてはお前も転s・・・。」

「はいはい、出落ちオツ。」

「ぎゃあああああああああ！！！！！！」

絶賛痛者狩り中でした。

人の気配のしない廃倉庫、物言わぬ肉塊となった痛者18号を炎で綺麗さっぱり消し去る。

飛びすぎじゃい、とは思うだろうが仕方がない。

何故なら、今はもう1号を狩ったあの日から三年の月日が流れているからです!!!

仕方ないいよ、だってどいつもこいつも同じなんだもん。簡単に纏めるなら。

ある日突然転校、あるいは元からいたらしく、ツナ君に接触してくる。

偶に京子ちゃんと良平さん、恭弥君に関わってくることもしばしば。

何でか全員、痛者共には好感が持てない、恭弥君に至っては咬み殺す。

全員に親しく接する私に、痛者共が妬みを抱く。

イラつく視線を向けてくる。

一週間くらいすると呼び出し、または待ち伏せされ、関わるなどかお前とアイツじゃ住む世界が云々、e t c . . .

お前ら打ち合わせでもしてるの？ ってくらいに同じ事を何度も何度も繰り返す。

結局は実力行使になり、軽く捻ってやると お前も転生者かー！ って騒ぎだし、それを黙らせて終了。

これが痛者共の基本的な末路。

例外としては、二・三人の男が私を手籠にしようとしてきた事がある。

女子達に絶大な人気を得るような容姿を与えられた奴は、全員がクラスの女子でハーレムを作ろうと尽力している。

その中で唯一ちっともなびかない私を、興味本位からか、積極的にアプロ-チを繰り返す。

薄っぺらい笑顔を向け、しょっちゅう手を握ろうとしたり、頭を撫でようとしてくる。気色悪いことこの上ない気分を味わい、思わずぶん殴ってしまう事も多かった。

しかしどれだけ邪険に扱おうとも、そのたびに「ははっ、満流は本当に照れ屋だな!」とか「このツンデレさんめ。」とかほざいて周りをうるついでくる。

うぜえ、見事な程にうぜえ。

本当はこのウザったさこそが神から与えられた能力なんじゃね?と思う程にだ。

しかし、だからこそ、そいつらが死に際に見せる恐怖と絶望に染まった顔つたらもう~~~~? たまんない!!

もう癖になっちゃうくらいに快感だよっ、あの顔見ると体がゾクゾクしちゃうっ?

偶にそこそこ戦えるやつも居るから適度な運動にも持ってこいだしね!

「さつてと、ツナ君待たせちゃ悪いし、早く行かなきゃ?」

今日はツナ君の家の食事に招待してもらっている。

ツナ君の両親には、私に親がない事は既に話した。

いつかバレルだろうし、知られても不都合はないしね。

今は親戚の一人に世話になっていて、しかしその人も滅多に帰って来る事は無い、と言う事にしておいた。

完全に一人つきりつてことにすると、奈々さんとかが「ウチで暮らせば?」とか言い出しかねないからね。

「お邪魔しました〜?」

「本当にいいの? 今日くらい泊まっていてもいいのに。」

「いえいえ、用事もあるんで、今日は帰らせてもらいます。 ありがとうございました。」

「そう、じゃあね満流ちゃん。」

「バイバイ、みーちゃん。」

「バイバイ。」

沢田家との夕食を終え、二時間程してから出た。

何というか、今日は夜通し出歩いていた気分だったから。

ツナ君を連れて行く訳にもいかないしね。

商店街を当てもなくぶらつく。

やはりというか、周りはカップルが大半を締め、仕事帰りの会社員さん達が居心地悪そうに歩いている。

たまに見る男だけの若者集団は、カップルの、しかも男の方だけを、まるで親の仇でも見るような目で睨んでいる。

しかし、見られている方は
それに全く気付かず、彼女とイチヤイチャするのに夢中だ。

なんか見てて面白いな。

勝ち組と負け組、まるで一つの世界の縮図のようじゃないか？

なぐんて事を考えながら歩いていると、不意にどこから鈍い音が
聞こえてきた。

普通なら気付かないような微かな音、しかしそれは紛れも無く

「人を鈍器で殴ったような音だね。」

進路を変えて、音が聞こえた方向に向かう。

店と店の間の路地に入り、段々と人の喧騒が遠ざかっていく。

音も次第に大きくなっていき、さらには被害者のものであるう悲鳴も聞
こえてきた。

最後の角を曲がると、少しだけ開けた場所に出る、そしてその先に
は。

「おゝ、やっぱり恭弥君じゃ〜ん？」

「満流かい？ 何でこんな場所にいるのさ。」

「いやいや、恭弥君にだけは言われたくないからね？ その人たち
は？」

恭弥君の周りには二十人くらいの青年達が転がっており、さらには
現在進行形で五人の青年が咬み殺されている最中であった。

「こう言つ日には並盛の風紀を乱す群れが繁殖してくるのさ、それ
を駆除してるところ。」

「へ〜、まあ確かに羽目を外し過ぎちゃう人は多いよね〜、私も昨

日とか五・六人の人に声かけられたし。」
「だろ？ だからこうして数を減らさなきゃいけないんだよ。」
「相変わらず並盛ラヴだね、何でそこまで好きなのか激しく気になるんだけど。」
「言わないって前にも言わなかったかい？」
「いつかきつと聞き出してみせる！ って、両親の墓に誓った？」
「あっそう。」

この間二十秒も経ってないが、既に立っているのは二人だけ。
やっぱり恭弥君は別格だね？

「さて、群れも咬み殺したし、この前の続きやるよ。」
「やっぱり？ まあいいけど。」

出会ってから、私達は会う度にはほぼ毎回戦う。
と言っても、二ヶ月に一回会うかどうかくらいのペースなんだよね、
何故か。

大体は、私が勝ったり、私が用事を思い出して途中で逃げたり、恭
弥君の体力が尽きるまで長期戦に持ち込んだり、そんな感じでのら
りくらりと勝ち逃げしている。
最近では私の動きを徐々に追うようになり、お蔭様で腕が鈍る心配
は無い。

「じゃ、行くよっ。」
「ばっちこーい？」

そばに落ちてた鉄パイプを拾って構える。

恭弥君はいつもの鉄製のトンファーを両手に構え、疾走する。

因みに、初めて会ってから次の時にはトンファーが木製から鉄製に
変わっており。

どうやって手に入れたの？ と聞いたら「ボクが欲しかったからさ、当然だろ？」と言われた。

なにが当然なのかは分からないが、もう恭弥君の持ちネタってことで強制的に自己完結した。

「今日こそ咬み殺す。」

「その妄想をぶっ壊す？」

互いの武器がぶつかり、暗い路地裏に火花が散る。

間を開けずに連撃を繰り返す恭弥君、最小限の動きで左右に避ける。むこうが大振りの一撃を仕掛けて来た瞬間に懐に入り、下から左上に振り上げる。

バックステップでそれを避けて、すかさず踏み込んで空いてる胴を狙って右のトンファーを叩き込まれる。

同じくバックステップで衝撃を殺すが、少しだけダメージが入り六メートル程後ろに飛ぶ。

「おゝいつつ、ちよいと危なかったね〜。」

「あのタイミングで避けておいてよく言うよ。」

「ふふん、経験の差ってやつだね〜？」

「・・・咬み殺す。」

「おっつ。」

どうやら仕出かしちゃったみたい。

表情変わらず、殺気爆発。

今までの倍近い速度で突っ込んでくる恭弥君。マトモに食らったら結構やばそう。

「回避〜？」

《おい、満流。》

「はい！？ ぎゃつふあああつ！！」

「っ？」

余りにも突然に聞こえてきた声に、つい止まってしまった瞬間、思いつきり一撃を食らってしまった。

ゆうに十メートル以上吹っ飛んで、その先に偶然あったゴミ置き場に頭から突っ込んだ。

「いつつああ、何故に今・・・」

《いや、すまん。取り込み中とは・・・お前に転生者の事で頼みたい件が出来てな》

つまりこの痛みは痛者共のせいってことだね、よし、ぶつ殺す。

(今から家に帰るから後でね。)

《わかった、なるべく急いでくれ。》

「ねえ、なにしてるの？」

「え？ あゝいや、実は大事な用事があった事をたった今思い出してね？」

「またそれ？ まあいいさ、逃がさないけどねっ。」

「やっぱりか！」

案の定、見逃しては貰えない。

素早くゴミから抜け出し、視界がグラつくのを必死に堪えて攻撃を防ぐ。

何とか逃げようとしても、周り込まれてしまって上手く行かない。ちくしょう、帰ったらまずあの駄神をぶつ飛ばす！

「いやホント、かな〜り大事な用事だから見逃してくれない？」

「いやだよ、今日こそ咬み殺すって言っただろ？」

「あれだよ、また今度にしよう。人生焦る必要ないって、私達まだまだ若いんだから。」

「やだ。」

「出たよ！ 駄々っ子モード！」

「絶対に咬み殺す。」

「うおおわわわ！？」

ますますヒートアップする連撃。

ヤバイな〜とか思っていた私の視界の隅に、さっきのゴミ置き場が映る。

そしてその瞬間、私の頭にある策が浮かぶ。

我、天啓を得たり！！

「てい！」

「くっ。」

力いっぱい恭弥君を遠くに飛ばし、その隙にゴミ置き場に駆け寄る。先程の激突の時に口が空いてしまった袋を引っ掴み、思いつきり後ろに放り投げる。

ゴミが辺りにばらまかれ、空の袋が宙を舞う。

「なにしてんの？」

「ふっふっふ、恭弥君。勝負はもう決したよ、だから、あえて言おう。」

右の人差し指を向け、言い放つ。

「お前はもう、死んでいる。」

「……………」

沈黙する恭弥君。

しかし私は気にしない、理由は分からないが、今私はかつてない程の達成感を感じているのだから！

「意味が解らないけど、何故だか無性にムカツクよ。」

「え、まじ？」

「だからさっさと這いつくばって貰うよっ。」

先程の様に全力で突っ込んでくる恭弥君。

しかし私は動じず、むしろ笑みさえ浮かべて立っている。

もう勝敗は揺るぎはしない、私の策はすでに、彼の足元まで迫っている。

そう、お笑い界の、絶滅危惧種にして頂点、その名も！

「なっ！！？」

バナナ滑りネタ！！！！

足元にあったバナナの皮を思いつきり踏みつけ、見事に足を滑らせる。

見たか！ これぞ頂点の力なり！！

しかし、ここで誤算が出た。

恭弥君は全力疾走中であり、体の重心も思いつきり前にした状態。そんな時に一気に足を滑らせればどうなるか。

脱出を第一に考えていた私は失念していた。

「あり？」

「っ！！？」

全力疾走の勢いが止まらず、私の方に飛んでくる恭弥君。宙に浮いてる為に、恭弥君にはどうする事も出来ず、私は何故か思考が停止し、啞然と突っ立っていた。当然そうなれば結果は明白で

「グヘッ!!」

「ぐっ!!」

見事に正面衝突した私達。

重なり合って後ろに倒れ、下敷きになった私には恭弥君の体重分のダメージが加算される。

「ウツ・・・ウグウ・・・ウグツ？」

呻き声を発するが、予想以上にぐもって聞こえる自分の声に、疑問を覚える。

目を開けて前を見ると。

「
・・・
」

目の前には恭弥君の顔、それはいい。

私たちは重なり合って倒れたのだから不思議はない。問題なのは・・・

私たちの顔の距離が・・・

ゼロである事だ。

第十六話（後書き）

あと一話くらいで一気に日常編まで持って行くつもりです。

なるべく早く投稿出来るよう頑張ります。

《みちr・・・グバツ！・・・ゆるしt・・・ウゴオツ！！・・・
たすk・・・ブウツハアツ！！！》

顔色一つ変えず、機械の様にひたすら振り下ろす。

グチャツ、グチャツ、と、振り下ろす度に肉が飛び跳ね、一般人なら聞くに耐えない音が響く。

顔に血が飛び散るうとも全く気にせず、ただ威力だけが増していくばかり。

《おねg・・・グウヘツ！・・・はなs・・・ギャブツ！！・・・
聞いと・・・ゴハアツ！！！》

「さつさとシネ。」

《いや、俺神だから死なん・・・ギユハツ！！・・・だからマジで止めておねg・・・グツフウツ！！！》

「・・・ハアアア・・・」

溜息を吐き、とうとう釘バットを下ろす満流。

神にとって、まさに四時間に及ぶ地獄が終幕した瞬間だった。

「で、私に頼みたい事って何・・・？」

《やつと・・・本題に・・・入れ・・・る・・・な・・・》

「さつさと言えよハゲ。」

《ごめんなさい。》

今だ能面の表情が抜けきらない満流。

あの事故の後、完全に石化した二人であったが、満流が何とか先に正気に戻り、恭弥を押しつけてそのまま脇目も振らずに全力疾走。家まで逃げ帰って来たのである。

「ああ、気が重い・・・。」

《何というか、ホントにスイマセン。》
「はあ~~~~~」

あの後、彼がどうしたかは知らないが、次に会ったときにどんな目にあうかと思うと気が重い満流。

ぶち切れて襲いかかって来るか、案外平然と接してくるか、それとも全く予想外の反応が来るか。

流星にキスしたとなると、どう転がるか検討もつかない。

満流自信、あれが初めてであった為、判断材料が無いのだから。

「キスしちゃったんですけど〜。。」

《ごめんなさい。。。》

「何気に初めてだったんですけど〜。。」

《申し訳ございませんでした。。。》

ひたすらに謝る神。

表面上は普通に会話している様に感じるが、未だに神は血溜まりの中に沈んでおり、モザイク判定必須の状態で会話をこなしているのだから、余りにもシニールな光景だ。

「まあそれはいいや、早く続けて。」

《いいけど、やっぱり反応違うよな、もうちよい恥ずかしがるもんじゃね?》

「きゃあああー!! 恭弥君と、キ・キ・キ・キ・キス・しちゃったよおおおー!!!.....と
か?」

《いや、まあ。。。うん、はい。。。》

「これでも結構パニックってるんだよ? 現に今も心臓バクバクだしね〜。」

《え、マジで?》

「マジ、まさかあんな事になるとは予想もしてなかったし、いきなりアレは流石にビックリだよ。」

《ですよね〜。》

「ただどいつまでも話が進まないのはアレだから、話を聞いていてやるうつて事だよ。」

《どうもです。 それでは・・・》

一度咳払いをして、真剣な表情になる神。

《まず結論から言う、海外に出張してくれ!》

「・・・・・・期間はどれくらい?」

《大体七年くらい!!》

「・・・・・・」

再び能面の顔に戻り、無言で釘バットを再装備する満流。

美しき世界に悲鳴が響き渡り、草原に二つ目の真紅の巨大な花が咲くのだった。

「み、みーちゃん、大丈夫？」

「うん？ ああ、大丈夫。」

「そ、そう……。」「

駄神との話の翌日、私は全身から哀愁を漂わせていた。

ツナ君が心配して声をかけてくれるも、いつものような返事が出来ない。

「ほ、ホラみーちゃん！ サンタさんが風船配ってるよ、行こうよ
！」

「うん。」「

商店街の一角にある店の前で、サンタの格好をした男性が子供達に風船を渡している。

ツナ君は嬉しそうに風船を受け取り、私の元へ走ってくる。
が、途中で足を滑らせ、思いっきり転倒した。

「うわあっ！」「

「ツナ君！？」

慌てて駆け寄り、ツナ君を抱き起こす。
鼻を軽く打つたらしく、赤くなっていた。

「大丈夫！？」

「う、うん・・・平気……。」「

涙目になりながらも笑顔を作ろうとするツナ君。

「でも・・・風船が……。」「

「え？・・・あっ……。」「

ツナ君が見上げた先には、既に空高く浮いている赤い風船。流石にあれはもう取れない。

「じゃあちよつとまってる。」

「え？」

先程のサンタの所に行き、一つだけ残っていた紫の風船を貰い、ツナ君の元に戻って渡す。

「はいこれ。」

「いいの？」

「うん、いいよ。」

少し躊躇っていたが、誘惑に抗いきれずに手にとった。

「ありがとう！ みーちゃん。」

「どづいたしまして。」

満面の笑顔を浮かべるツナ君。

それを見ていると、少しだけここを離れるのが名残惜しくなってくる。

昨日の駄神との話が、頭の中で何度も反復される。

「で、何でいきなり出張なわけ？」

《じ・・実は、海外のマフィア各所の関係者達の子供として、大量の転生者達がやってきたんだよ》

「何でそんな所に？」

《前にも言ったが、転生者にも色んな奴らがいる。大半は物語の中心に関わろうとするのが殆どだが、全く関係ないところから自分のオリジナルな展開で関わろうとする奴も沢山居るんだ。》

「例えば？」

《俺がボンゴレ以上の大ファミリー作って最強になってやるぜ！！とか、全てのマフィアに恐れられるような最強の殺し屋になって、クールな一匹狼を貫くぜ！！とかだな。》

「うわぁ・・・。」

《まあそんな感じで、今海外にとんでもない数の転生者達が溢れているんだ。それを片付けて欲しい。》

「それを全部こなすのに七年かかるってこと？」

《いや、七年ってのはあくまでかなり多く見積もって計算した年数で、実際二年から四年くらいだと思っ。》

「紛らわしいなオイ。」

《悪かった。年明けくらいから始めて欲しいんだが、その前にあるマフィアのマジトに出向いて手に入れておいておきたい物がある、三日後くらいには出発してくれないか？》

「随分急だね、手に入れておきたい物って？」

《これからいろんな場所に行くのに、まだ九才のお前には色々と不便な事が多いだろ？ それを補う為に必要な物だ、詳しい説明は現地に行つてから話すから、とりあえず今日はここまでだな。》

「了解。」

二日後には日本を離れる、その話をするために、ツナ君と一緒にいる。

既に荷造りは済ませた、元々物を多く持たない質だから。

今日一日はツナ君と一緒にいて、明日は京子ちゃんや平さん、可能なら恭弥君にもお別れを告げる予定。

「ねえツナ君。」

「なに？ みーちゃん。」

「ちょっと話があるんだけど、聞いてくれる？」

「う、うん。」

雰囲気が変わったのを感じ取ったのか、若干困惑気味に頷く。

二人で手を繋いで歩き、商店街の道を進んでいく。

「突然なんだけどね、私、明後日には外国に行く事になったんだ。」

「え・・・？ な、なんで？」

立ち止まり、信じられないと言った様子で聞いてくるツナ君。

私も立ち止まり、ツナ君の方に振り返る。

なんかドラマのワンシーンみたいだなあ、と、心の中で苦笑する。

「えっとね、世話になってる親戚の人の仕事の都合でね、私も付いていくことになったから。」

「なんで行っちゃうの？ みーちゃんだけこっちに居られないの？」

早くも涙目になりながら必死な様子で訴えるツナ君。

実に子供らしい考えに、またもや心の中で苦笑してしまう。

「だめだよ、迷惑かけちゃうし。」

「で、でも・・・でも！」

泣き出すツナ君。

声を出そうとしても、言葉になっていない嗚咽が聞こえてくるだけ。

「大丈夫だって、今はさよならだけど、必ず帰ってくるからさ！」

「グスツ・・・ほんとに？」

「ホントホント!」

「いつ帰ってくるの?」

「えっと〜、二年半くらい?」

早くて、だけど。

「ヒック・うん、わかった! みーちゃんが帰ってくるの待ってるから!」

「うん、なるべく早く帰ってくるからね。」

なんとか笑顔に戻ったツナ君と、もう一度手を繋ぎ、人混みの中へと歩いて行った。

また会おうと約束して。

「ちってと〜、行きますか。」

あっという間に出發出口。

昨日は予定通りに挨拶を済ませ、京子ちゃんには泣かれたが、最後には笑顔で送り出してもらった。
了平さんは、「次会うまでにお前よりも極限に強くなるぞー!!」
と言っていた。

残念ながら恭弥君に会う事はできなかった。

相変わらず何処にいるのか分からない。

今頃どこかで不良をボコボコにしているだろう。

《もういいか?》

「うん、まずは手に入れる物だけ?」

《そうだ、一つあれば充分だが、念のために二つ手に入れておくぞ、最初はイタリアだ。》

「戻るだけじゃん。」

《イタリアと言っても端っこのほうだ、ヴァリアーに寄る時間は無いぞ。》

「ええ〜、まあ仕方ないか、むこうで電話するか。」

バッグを背負い、タクシーで空港まで行き、端っこの方のフェンスから侵入。

イタリア行きの便を探す。

「で、どれよ?」

《ちよいまち。たしか〜・・・、お、あれだ!》

神が指差す先に、いかにも海外行きのジャンボ機が見える。

荷物運搬用の車を乗り継ぎ、目的の便まで辿り着き、えつと・・・
タイヤ? の所から中によじ登る。

「ふう、侵入成功〜!」

《いつもこんな感じなんだよな?》

「そう、まあ前は一度空港の中でどの便が何処行きなのか調べたりしてたから、今日はかなり楽だったね。」

《そうか、でも、目的の物を手に入ればさらに楽になるだろう。》

「まじ? ってかいつになったら教えてくれるのさ。」

《それは手に入れてからの楽しみだ!》

やがて機体が揺れ始め、ゆっくりと移動しているのを感じる。

「時間だね、寝るから何かあったら起こして。」

《了解。》

横になると、すぐに睡魔がやって来た。

眠気に身を任せて目を閉じる、痛者共をいかに苦しませてからブチ殺すかを考えながら。

第十七話（後書き）

一気に日常編までぶっ飛びます！

早く原作と絡ませたくて仕方がないので、しゅしゅ承ぐだぞい m (_ _)
m

第十八話（前書き）

ついに日常編！

テンション上がってきた（。・。・）！

執筆も進みそうなので、早く更新出来る！ かも！

ではどっぞー！！

第十八話

『大丈夫だつて、今はさよならだけど、必ず帰って来るからさ!』
いつも通りに笑う彼女。

小学校の時に出会い、一人ぼっちだったオレに話しかけてくれて、友達になった同い年の女の子。

いつもニコニコ笑い、楽しそうな事に出くわせば片っ端から突っ込んで行き、とにかく楽しく生きる事を優先していた。

その反面、誰かと敵対すると容赦なく叩きのめしたりする事もあり、彼女に絡んで病院送りになった不良は数知れず。

本来なら苦手だつたり怖かつたりする筈なのに、自然と一緒にいたくて彼女とばかりいた気がする。

クラスの奴らからカップルだの夫婦だのと言われて何回恥ずかしい思いをしたことか。

しかも彼女はそれすら楽しみ、火に油を注ぐような事をして、さらにエスカレートしていくばかりだった。

『グスツ・・・ほんとに?』

『ホントホント!』

オレの泣きながらの問いに、より一層明るく答える彼女。

今思い出すと死ぬ程恥ずかしいよな、めちゃくちゃ泣いてたし。

『いつ帰ってくるの?』

『えつと〜、二年半くらい?』

また泣きたくなつた。

小学生の子供にとって、二年なんて気の遠くなる程長い時間だ。それ以上かかるなんて、一生会えないと言われるくらいに悲しい。だけど当時のオレは、なけなしの努力をして何とかこらえた。これ以上大好きな子に迷惑を掛けたくない、なんて思ったから。

『ヒック・うん、わかった！ みーちゃんが帰ってくるの待ってるから！』

『うん、なるべく早く帰ってくるからね。』

笑って言う。

彼女は少しだけ驚いた顔を見ると、嬉しそうに笑い、静かに約束してくれた。

『だから・・・・・・・・・・・・・・・・』

「さつさと起きやがね。」

「うぎゃあぁっー!!」

そこでオレは腹に激痛を感じ、叫びと共に夢から覚めた。

「ったく、もうちょっと穏便に起こしてくれよ。」

「寝坊したツナが悪いぞ。」

「だからってボディブローはないだろ！ 死ぬわ！！」

「いつまでもグチグチうつせえな。」

塀の上を歩く赤ん坊らしきもの、リボンが眉間に銃を突きつけてくる。

「ひいいいっ！ ちょっと、タンマ！！」

「マフィアなら過ぎたことを気にすんな。」

「だからマフィアにはならないって！」

これが最近のオレの日常。

彼女が外国に行ってからオレの生活は、まさにダメライフの一言に尽きた。

少しは頑張ってみようかなと思い、勉強も運動も努力してみたけど、結果として自分のダメっぷりを再確認するだけに終わった。

それからずっとダラダラと毎日を過ごし、気が付けば中学生になっていた。

学校が変わったって何も変わらず。

そんな中、ある日突然リボンがやってきて、オレの毎日は確実に変わった、いや、終わった？

いきなりマフィアのボスになれとか言われ、転校生の獄寺君に狙われ、今はオレの右腕になるとか言ってるし。クラスメイトの山本と仲良くなり、最近じゃ京子ちゃんやそのお兄さんとも話す事が多くなった。

京子ちゃんやお兄さんとは、彼女を通して知り合ったけど、彼女が居なくなつてからは疎遠になつていた。

だけどリボーンのせい？ おかげ？ で、お兄さんにボクシング部に勧誘されたことをきっかけに、また話すようになった。

「・・・ナ・・・おいツナ、聞いてんのか？」

「へ？ あ、ゴメン。なに？」

「何突然ボーっとしてんだ、熱でもあんのか。」

「いや違つよ、昔の事思い出してた。」

「昔？」

「うん、始めて出来た友達のことを・・・な。」

「なに？ ツナに友達なんていたのか・・・。」

「ひどっ！？」

そんなやり取りをしながら学校に着き、教室に向かう。

扉を開けると、既に獄寺君や山本は来ていた、京子ちゃんもいつも一緒にいる花つて女子と話している。

獄寺君と目が合つと、まっ先に此方に来た。

「十代目、お早うございますー！」

「うん、お早う獄寺君。」

「おつ、ツナじゃんか、今日は遅刻じゃないんだな。」

「山本、お早う。リボーンに叩き起されたよ。」

「ハハッ、小僧は相変わらずみてえだな。」

笑う山本。

悔しいけど、今こうやって友達と話せるのは結果的にリボーンのおかげかな。

チャームが鳴り、皆が席につく。

担任が教室に入り、出席を取り始める。

（今、あの子はどうしてるだろう・・・。）

自然と窓の外に目が向く。

彼女が外国に行つて、もう三年半以上。

向こうで何かがあったのか、それとももう、オレの事なんて忘れているのかもしれない。

そう思うと、暗い気分になる。

向こうで仲のいい友達が出来たり、好きな男が出来ていたりするの
かも知れない。

でも、せめて覚えててくれるといいな。

「よし、全員いるな。 あゝ、突然だが、今日は転校生を紹介する。」

【おおお〜！！】

担任の言葉に、クラスが活気づく。

男は美少女を、女は美少年を強く望んでいるだろう。

だけどオレは・・・

（転校生があゝ、嫌な予感しかしねえ〜）

何故か、昔から転校生と言う言葉を聞くと嫌な気持ちになる。

理由はよく解らないが、こう、何というか、生理的に受け付けない

とでも言うのか。
とにかく嫌なのだ。

事実、彼女が居なくなつてから、転校生が四人程、しかも全員オレのクラスにやってきて。

しかも何でか全員オレに話かけて来るのだ。

皆そこそこの顔が整っているの、クラスの子から沢山話を振られて
いるのに、まるで眼中に無いみたいにオレに関わってくる。

男ならまだしも、女の子だった時はかなり辛かった。

クラスの男子だけじゃなく、上級生からのイジメ。

いつもオレに関わるのに、困っている時は不思議な程に現れない転校生。

まさにオレにとっては疫病神といつても過言じゃないくらいだ。

獄寺君はそんな事は全く無く、例外的な人だったけど、今回もそう
だとは限らない。

朝からブルーになりつつも、なるべく前の席の人の背中に隠れるよ
うに、マトモな人でありますようにと祈りながら目を瞑った。

「またしても帰国子女だそうだ。では、入ってきなさい。」
「は〜い？」

扉の向こうから聞こえた女子の声に、クラスの男子のテンションが
上がる。

きっと何人かはガッツポーズでもしているだろう。

オレは机の上で顔を俯かせ必死に祈り続ける。

扉が開き、軽快な足音が響く。

全然緊張してないようだ。

第十八話（後書き）

三年ぶつ飛んで再会！！WWW

勿論ですが、ツナの嫌悪感は満流が居なくなる前の転生者達に対する嫌悪感を、体が何となく覚えてるって感じですね。

それが満流が居なくなってからもどんどん増していたと。

もはや転校生がトラウマになっているツナでした。WWWWWW

因みに時期としては、少なくとも雲雀との初戦闘は終わった頃かな？

九月の後半くらいだろうか？

ではまた次回。

第十九話

いや、予想以上に驚いてるね。

私の顔を見た瞬間、まさに鳩が豆鉄砲くらった様な顔をするツナ君

流石に三年も経つと成長してるね。

常時ポカンとしているような雰囲気は変わってないけど。

それにしても、いるねえ。痛者共が。

このクラスだけで三人、学校全体だ十五人かな？

一人は訝しげながらも、周りの人達と大差ない反応の女子だ、多分この世界の誤差程度に思っているんだろう。

二人目も女子で、こっちはあからさまな敵意を向けて来る。

私の事を自分と同じ転生者だと思っ込んでるなああれ。

一番スタンダードなタイプだ。

三人目は男子で、もう完全に下心丸出しの気色悪い視線を向けてくる。

よし、とりあえずコイツを最優先にぶっ殺すのは確定だね。

上から順に、痛者325号、326号、327号としよう。

いやあ、改めて見ると番号増えたなあ。

あまりにも多すぎて漢数字表記が英数字表記に変わってしまう程に。

そんでもって、コイツらとは別に、さっきから物凄いガン飛ばしまくってくるのが居るんですけど。

前から二列目の席に座る灰色の髪の子生徒。

そこだ。」
「はあい。」

この状況で授業を優先出来る辺り、この担任はかなりのやり手みたい。

席に着き、周りの生徒と挨拶を交わす。

案の定、授業が終わった瞬間クラスの九割の生徒に囲まれ、質問攻めに会う。

「何処に住んでるの?」

「趣味は?」

「好きな男子のタイプは?」

「スリーサイズは?」

「さっきの話って本当なの!」

「マジであのダメツナと付き合ってたの!」

「嘘だと言ってくれー!!」

などなど、人混みの隙間からツナ君を見てみると、二人の男子と話しをしているようだった。

その内の一人が、先程の不良っ子だったのは意外だったけど。ちゃんと友達が出来たんだね、よかった。

それからも、何故か他のクラスの男子までもが押し寄せ、結局休み時間にツナ君と話す機会は無かった。

なので、昼休みのチャイムが鳴った瞬間、私は自分の弁当を引っこみ、ツナ君の横まで移動。

「ツナ君、一生にお昼食べよう!」

「え? あ、みーちゃ・・・うわあ!!」

問答無用で首根っこを掴み、猛ダツシユで離脱。

なんか後ろから「十代目—————!!!」とか聞こえたけど無視。階段を駆け上がり、屋上に続くドアを蹴破り、そのままの勢いで着地。

ズザザーっと、上履きが地面に擦れる音が鳴り、若干焦げ臭い臭いが漂う。

「よっし、到着？」

「到着？ じゃないよ！ 窒息死するかとおもったよ!？」

「ドンマイ。」

「・・・はあ、何というか。 みーちゃんは相変わらずだね・・・」

悟った顔で溜息を吐くツナ君、だけどその顔には、隠しきれない笑みがあった。

「改めて、久しぶり、ツナ君。」

「うん、久しぶり、・・・それと・・・」

「ん？」

「・・・おかえり・・・。」

「・・・ただいま？」

優しく笑い合う。

痛者共のゴキブリ並のしぶとさと繁殖率のせいで、一年以上遅れちゃったけど。

それでも、約束通りに帰ってこれた。

「十代目ー！ ご無事ですかー!？」

「おや？」

「げえっ！ 獄寺君！？」

「おいおい獄寺、落ち着けて。」

「うっせえ山本！ 野球バカは引っ込んでろ！！」

そう言つて、慌ただしく屋上にやって来たのは先程ツナ君と話した二人。

「みーちゃん！ 逃げて！！」

「？ なんで？」

「いいから早く・・・」

「果てろっ！！」

不良っ子が、懐から何やら筒状の物体を取り出し、そこから生えている短いヒモにタバコの火を点けている。

そんでそれを私の方に一斉に放り投げてきた。

「なんか見た目ダイナマイトっぽいものが・・・」

「みたいじゃなくて本物だから！！」

「マジか・・・。」

「とにかく逃げて・・・って！ うわー！！！！」

面白いくらいに慌てふためくツナ君と共に、私は爆炎に飲まれた。

「十代目っ!!」

「おい、いくらなんでもやり過ぎだぜ獄寺!」

山本の馬鹿が言ってくるが、俺の耳には届いてなかった。

突然やって来た妙な女、事もあるうちに十代目の許嫁とか抜かしやがった!

休み時間はクラスの連中に囲まれてやがったから、さして警戒せずに済み。

十代目も、奴とは昔の友達だとおっしゃっていた。

だが、なんとアイツは昼休みになるなり十代目を拉致りやがった!!
油断していたのが間違이었다。

昔の知り合いが敵に寝返り、命を狙ってくるなんぞ、俺らの世界じゃ日常茶飯事。

いくら十代目のかつての友人だからって、今もそうである保証は何

処にもねえ！

もし十代目の身に何かあったら、右腕として、そしてオレに十代目の安全を任せて下さってるリボンさんに合わせる顔がねえ！！
急いで追いかけて、辿り着いたのは屋上。

そこでは、なんと十代目が勇敢にもあの女と向き合い、立ち向かっているお姿だった。

命を狙われてるにも関わらず、余裕の笑みさえ浮かべておられる。

その姿は、まさに次期ボンゴレに相応しい勇姿だった。

こうしちゃいらねえ、俺も右腕として、加勢して差し上げねえと！

そう思い、ダイナマイトを投げた。

女は安心して反応出来てねえ、楽勝だと思った。

しかし、何と十代目はアイツを庇って爆発に巻き込まれちゃった。
自分の命を狙った奴を、知己だからって庇うなんて、何て器の
けえお人だ！！

「十代目ー！ー！！ 大丈夫ですかー！？」

「ツナーー！ 返事しろー！！」

山本と共に何度も呼びかけるが、十代目からの返事はない。

あの人がこれしきの事でくたばる訳はねえが、重症を負っちゃってたら大事だ。

「いったく、危ないって、何でそんな物騒なモン持ってるかな
？」

「っ！ テメエっ！？」

「おつ、無事みてえだな。」

煙の中からひょっこりと現れたのは、十代目を抱えたあの女だった。

危ない危ない。

咄嗟に炎で相殺しなかったら危険だったよ。

前に漫画の主人公がやってたのを適当に真似てみたけど。

こんなん本当に出来んの？　って思ってたけど、人間やれば出来ちやうもんだね？

煙のなか、ツナ君を抱えて歩き、さっきからツナ君を読んでる声の方へ行く。

私の姿を見て、爆弾少年は再び警戒し、もう一人はホツとした顔を見せる。

「十代目に何かしてねえだろうな!？」
「いやいや、君にだけは言われたくないよ。ただ気を失ってるだけだつて。」

ツナ君をゆつくり床に寝かすと、二人が駆け寄って来た。
一応一歩下がって警戒されないようにしておく、またダイナマイトは勘弁して欲しいから。

「十代目!」

「うっ……うう……ん……。」

「傷も全くねえみたいだし、全然無事みたいだな。」

傷が無い事を確認し、安堵する二人。

確か山本? とか呼ばれてた方がニカツと笑って私を見る。

「あんがとな、俺のダチ助けてくれてよ。」

「いいってことよ、ツナ君は私の大事な友達だからね。」

「ハハツ、そうか! じゃあダチのダチって事で、俺らもダチって事だな!」

「おおっ、いいね、そう言うの。嫌いじゃないよ!」

「そっか、俺は山本武ってんだ、よろしくな!」

「夜月満流だよ、よろしくね、武君?」

お互いに握手を交わす私達、どうやらツナ君はいい友達を見つけたみたいだね。

「おいコラ! 何仲良くなつてんだ野球バカ!」

「いいじゃねえか、夜月はツナを守ってくれたんだぜ?」

「ぐっ!?! だ、だからって……。」

「と言うか、何で君は私を襲ってきたの？」

なんやかんやで不明のままなんですけど。

「テメエが十代目のお命を狙ったからだろうが！！」

「はい？」

「おいおい獄寺、ここでもマフィアごっこやってるのか？」

「ごっこ？」

「うっせえ！ ごっこじゃねえって言ってんだろっが！！」

ぎゃあぎゃああと騒ぎ出す獄寺なる不良、それを呑気な笑顔で受け流す武君。

その会話を聞いていると、どうも私が殺し屋か何かと思われていたらしい。

なる程、ツナ君を拉致ったのがそう言うふうに解釈されてしまったか。

というかこの発想と今の言動からして、この爆弾不良っ子はコッチの世界の人間だよな。

「ちょっと待たれい爆弾っ子よ、私は殺し屋なんかじゃないですよ？」

「じゃあ何で十代目を拉致りやがった！」

「それはホラ、積もる話もあるのにクラスの質問攻めのせいで時間が取れなかったから、実力行使に移っただけだよ。」

「そ、そうか・・・なら、あの爆発からどうやって逃れた！ 一般人に出来る芸当じゃねえぞ！！」

「さあ？」

「はあ！？」

「いや、逃れるも何も。ただツナ君庇ってうずくまってただけだ

し。」

平然と嘘をつく、ホントの事言う訳にもいかないしね。

「まあ運が良かったんじゃない？」

「そ、そんな訳！」

「おい、もうやめろよ獄寺。いくら何でもネタ引き伸ばし過ぎだぜ？ それに夜月はツナを守ってくれただろうが。」

「・・・ちっ！ 今回はこれくらいにしといてやる・・・。」

「ううん・・・あれ、ここは・・・。」

タイミング良く目を覚ますツナ君。

「十代目！ 大丈夫ですか！？ 何処か具合が悪かったりとかはっ

！？」

「うわぁ！ ご、獄寺君！？ う、うん、別に大したことないよ・・・

。」

「そうですか、よかった・・・。」

ホッとした顔をする爆弾っ子、本当にツナ君の事大事にしてるんだねえ。

「よかったなツナ、夜月が助けてくれたんだぜ？」

「え、みーちゃんか？」

「ブイ？」

「そっか・・・ありがとう。」

「まあ助けたって言うてもうずくまってただけだけどね。」

「それでも・・・。」

「君たち、何してんの？」

「……っ!?」「」
「ん?」

屋上の入口から聞こえて来た声に、全員がそちらを向く。そこには、学ランを肩に掛け、腕を組んで佇む男子。

細く、つり上がった目に、腕には風紀の字をあしらった腕章。触れただけで傷が出来そうな空気が体から滲み出ている。

って言うかアレって……。

「校内での破壊活動と、それによる屋上の損壊、咬み殺すには充分過ぎるね。まあボクのお気に入り場所の場で群れてる時点で終わりなんだけど。」

「ひいいいっ! ひ、雲雀さん!？」

「くっ! テメエ!!！」

「やっべえな……。」

思わず吹いちゃいそうなくらいに怯え出すツナ君に、再び爆弾を取り出して威嚇する爆弾っ子。

武君も、顔に冷や汗が浮かんでいる。

この四人、何かあったのかな？

「はっ! みーちゃん、今度こそ逃げて!!！」

「これまたどうして?」

「雲雀さんは本当にヤバいんだって!! 女の子でも容赦ないんだから!!！」

「ワオ、今日は女連れかい? まあ同罪だから君の言うとおり……」

に……」

私と目が合った瞬間、固まった。
その様子に、ツナ君達が困惑してる。

「え？ アレ？ 何で雲雀さん、固まってるの？ 何でみーちゃんをじっと見てんの？」

「わかりませんが、何があるか分かりません。 十代目は下がっててください！」

ツナ君を庇う様に移動し、様子を伺う爆弾っ子。
私？ とりあえず第一声は向こうに任せようと思って？

ツナ君達からすれば痛いくらいの沈黙が続く。
時間に見れば数十秒程度だが、まるで何時間にも感じているかもしれない。

「君・もしかして、満流かい？」

「そうだよ、久しぶりだね、恭弥君？」

ようやく放たれた私達の言葉に、周りの時が止まった。
数瞬後、屋上に驚愕の叫び声が響き渡った。

第十九話（後書き）

あれ？ 何で雲雀が転校生の事を把握してないの？

って思った人、次回説明されるのでご安心を。

ちよつとずつ主要キャラ視点も取り入れて行くつもりです。

とりあえず今日は獄寺視点、不自然ではなかったでしょうか？

獄寺の、日常における基本バカっぷりを少し入れてみましたWWW
WW

ではまた（〇・・・〇）／

第二十話（前書き）

ちよい短いです。

ネタを文章にするのが難しくなってきたWWWWW

ただでさえ書く時間が少ないのに、書くスピードも落ち気味WWW

ではどうぞ。

第二十話

屋上に鳴り響く金属音。

普段なら並盛の町を一望出来て、昼にご飯を食べたり昼寝をするにはもってこいの、一部の人には人気な場所であり、しかしある人物が好んで昼寝の場所に使っていることもあり、あまり使われていない所でもある。

そこは今や獄寺君のダイナマイトの嵐によつて、悲惨な光景となつており、あちこちにクレーターが出来ている為、デコボコ状態である。

下の階に被害が及んでないのが唯一無二の奇跡と言えるくらいだ。

そんな屋上のだ真ん中で、さっきのある人物こと雲雀さんと、オレの大切な幼馴染のみーちゃんが闘っていた。

雲雀さんとみーちゃんが知り合いだつた事も驚きだつたけど、それ以上にみーちゃんの強さには唖然とするしかない。

オレの隣で、獄寺君も口をあぐりと開けて固まつてるし。

山本ですら驚きを隠せない様子でした。

「おいおい、夜月つてすんげえな、雲雀と互角にやり合ってるぜ？」

「マジ・・・かよ・・・」

みーちゃんが普通の人よりも強いのは知ってたけど、まさかこんなに凄いなんて。

雲雀さんは並盛最強で、獄寺君と山本、それに死ぬ気弾でそれなりに戦えるオレの三人で手も足も出なかつたのに。

それと互角、むしろまだまだ余裕って顔してるようにも見える。

そもそも雲雀さんも妙だ。

さっきだって、みーちゃんが雲雀さんの呼びかけに答えると、突然ニヤリと笑って、次の瞬間には一気に襲いかかってたんだから。みーちゃんはみーちゃん、最初から分かってたみたいに警棒みたいな取り出して普通に対応してたし。

それを見て、雲雀さんが嬉しそうに笑った様に見えたんだ。

「ほれほれどした恭弥君？ この程度なのかな〜？」

「何言ってるの？ これからだよ。」

みーちゃんの挑発に対し、今までの倍近い速さと手数で攻める雲雀さん、案外乗りやすいんだな。

しかしみーちゃんも余裕の態度を崩さずに避ける、というかもうオレには見えなくなってきた。

いや、最初からよく見えないんだけど、何というかもう二人の体がブレてきて見にくい。

ただでさえクレーターのせいで足場が悪いのに、二人はそんなの構いなしに動き回る。

というか、今更だけど何でこんな騒ぎが起こってるのに誰も来ないんだ？

教師が確認に来たりするんじゃないの普通？

そんな事を考えていると、校内に昼休み終了のチャイムが鳴った。

「あ、チャイムだ。」

「じゃあそろそろ教室に戻るか。」

「そうだな、ここにおいても面倒なだけだ。」

二人が、どこか悟ったような様子で言葉を交わす。

「で、でもみーちゃんが・・・。」

「ああ、私はいいよ〜？ もう少し恭弥君と遊んでいくから〜
〜？」

「よそ見してる暇があるのかい？」

「実はあるっ！」

「咬み殺すっ。」

雲雀さんの猛攻を避けながらヒラヒラと手を振っているみーちゃん。
なんか全然大丈夫っぽい・・・。

気にしつつも、三人で屋上を後にし、教室へと戻っていった。

ツナ君達が教室に戻ってから、既に三回チャイムがなっている。
そう、つまりは現在放課後である。

「えつとくく、まだやるの?」
「当たり前だよ、今日こそ咬み殺してあげるから。」
「いや、謹んでお断りします。ていうか、お腹が空いて力がでない。」

会話をしながらも、勿論攻撃は続いている。
昼飯すら結局食べていない、それどころか朝だって実は遅刻しかけていたから食べてないのだ。
流石にお腹の虫の叫びが尋常じゃない。

「あれだよ、ちょっと休憩しよ? ちょこつとコンビニ行つてのり弁でも買つてさ。」

「却下、そう言つて逃げる気だろう?」

「いやいや、絶対逃げないから、神に誓つよ! これが嘘をつく人の目に見える?」

「見える。」

「即答ですか……。」

軽くショックを受けながらも、恭弥君の攻撃を受け続ける。
やっぱり力は男の子には勝てず、ちよつと腕が痺れてきた。
まあ律儀に受けずに避ければいいんだけど、あんまり避けすぎると不機嫌になつてさらに勢いが増すからね。

「委員長!」

「っ!」

「ん?」

突然聞こえてきた声に、お互いに止まる。
声のしてきた方を見ると、リーゼントがいた。

なにあれ？ 今の時代にリーゼント？ もはや希少種だよ、幻獣種だよ。

日本の幻の遺産に遭遇した私は、しばらく硬直してしまった。恭弥君がその人と何やら会話している。

「なに？」

「お楽しみ在所申し訳ありませんが、風紀委員の仕事が溜まっておりまして、委員長でないと処理出来ない物も多数あります。それに先程、複数の場所でチンピラ共と役員達が交戦状態になりまして、応援要請が来たのですが、人手が全く足りていません。」

「ふうん、そう……。」

何やら重い雰囲気になってきたような、思案顔になってる恭弥君。とりあえず、これでやっとご飯にありつけそうなので、あのリーゼントにはお礼がしたいくらいだ。

その時、ふと恭弥君が私を見て、ニヤツと笑った。

笑った、と言っても場を明るくするようなモノでは決してなく、嫌な予感しかしないような邪悪な笑みだ。

何か言われる前に逃げる！ 私の第六感的な物が警報を鳴らす。

「そ、それじゃあ私はこれd……。」

「ちよつと待って、一緒に来て貰うよ。」

遅かった……。

「いや、実はちよつと急用が……。」

「却下。」

「持病の尺が……。」

「君が持病なんて持ったまかい？」

おいちょっと待て、どう言う意味だそれ。
どんだけ人外扱いされてるんだ私は。

「実はお父さんが現在進行系でデッドオアアライブをさ迷っている
状態で……。」

「君、両親とつくに死んでるって言ったよね。」

「あ……。」

そついや恭弥君には家庭事情は言ったんだった、因みに沢田家に言
ったのと一緒。

「もういいかい？ 暇じゃないんだから時間を無駄にしないでよ。」

「ついさっきまでもつくそ無駄に過ごしてた人間のセリフじゃな
いよね。」

「何か言った？」

「いえなにも。」

仕方なくついて行く。

恭弥君にの後ろを歩き、隣でリーゼントさんのリーゼントがゆっさ
ゆっさと揺れていた。

名前を聞いたら草壁さんと言つらしい、風紀委員の副委員長だそつ
だ。

「そう言えば、君が転校してくるって話聞いてなかったんだけど？」

「ああ、そりゃあ今朝早く手続きしたから知らなくても無理ないよ
。」

「どつやったのさ……。」

「ピ・ミ・ッ？」

「……」
「無視しないで……」

やがて着いたのは、何と応接室。

誰かお客さんにでも会うのかな？ と思つたら、なんとここが風紀委員の部屋だそうな。

「恭弥君、応接室の使い方って知ってる？ 学校の客人をもてなす為に使うんだよ？」

「学校の部屋の使い方方はボクが決めるんだよ、当然だろ？」

「さいですか……」

外国に行った時とかに、文化の違いによる価値観の差異で、会話が噛み合わなくてお互いに？ な状態になる時って偶にあるじゃない？

その時と非常に似てる気がするんだ。

一番奥にある立派な椅子に腰を降ろし、草壁さんがお茶を置く。椅子に座るよう促され、客用のソファに座る、結構座り心地が良く、寝たら気持ちいいだろうなあ〜と思った。

私にも草壁さんがお茶を入れてくれたので、お礼を言いつつ一口飲む。

は〜、何というか、和む。

「さて、話だけど、まあ簡単な事だよ、満流には風紀委員に入ってもらつから。」

「いや、予想はしていたけども……」

既に決定事項、と言わんばかりの口調。

いや、彼の中では実際にそうなんだろうね。

「嫌だよ面倒くさい。」

「これは決定事項だよ。」

「だが断る。」

「却下。」

「嫌だ。」

「却下。」

「嫌。」

「駄目。」

「イヤ。」

「ダメ。」

「あ、あの委員長……とりあえずウチの風紀委員会について説明してからの方が良いのでは？」

小学生レベルの言い合いになった所に助け舟を出したのは、やはりと言っか草壁さん。

どっかの委員長（笑）と違って大人だね？

「……まあいや、じゃあ草壁、宜しく。」

「はい。では夜月さん、ご説明させていただきますね。」

「ほい。」

そこから草壁さんによる並盛風紀委員の説明が行われた。

正直、話の間に逃げる策でも考えようかとか考え、しかしせつかく説明してるんだからちゃんと聞かなきゃなとか思いながら聞いていた。

しかし、話を聞いていく内に、私の考えは傾き始め、聞き終える頃には逆転していた。

「何て楽しそうなんだ!!」

つまり、うざったいクズ共を好き放題にボコれると言っわけだ。

法律？ そんな常識、俺の風紀には通用しねえ！ な存在になれるわけだ!!

さっきまで感じてた倦怠感なんて吹っ飛んだよ、参加しない理由がない!

しかも遅刻欠席やり放題？ まさに楽園フロントニアっ!!

さらには武器の携帯、バイクなどの乗り物も自由!

書類仕事なんぞ、ヴァリアーに居た頃の地獄勤務に比べれば紙切れ同然、入らない手は無い!!

「是非やらせて頂きますっ!!」

「そ、そうですね。では、この書類に記入を。」

「はい？」

渡された書類に必要な事項を書き込んでいく。

所々に、ヴァリアー入隊時と似たような部分がある辺り、やっぱり普通じゃない。

「出来ました!」

「はい、確かに。」

「終わったかい？ なら早速他の委員の応援に行つて来て。」

「了解です、委員長殿?」

恭弥君が投げ渡してきた腕章を付け、早速現場に急行する。

いや。初日からこんな事になるとはね!

これから楽しくなりそうでワクワクするよ、やっぱり人生楽しんだ者

勝ちだよな？

第二十話（後書き）

リポーンのSSで風紀委員加入って多いですよ〜。

雲雀との絡みはやっぱり風紀員っしょ。

いや、単に私に独創性が無いだけかwwwwww

次はもっと早く投稿出来るよう頑張ります。

ではまた

第二十一話（前書き）

一度でいいからネタ回やってみたいなあって思いかきました。

一話構成でお送りします。

第二十一話

「はあ、みーちゃん怪我とかしなかったかなあ？」

あの後、授業中もずっと屋上から金属音が微かに聞こえていた。クラスの皆が何事かと思い、さらには目撃者が一人居たらしく、その人が「転校生が雲雀さんに絡まれた。」と発言し、それからクラスの雰囲気がお通夜状態だった。

最早完全にみーちゃんは地獄行き決定になっており、中にはマジですすり泣きしている人すらいた程に。

あれは短時間でみーちゃんが好かれていたのか、それとも雲雀さんの恐ろしさを改めて実感して恐怖していたのか。

どちらにせよ、次の時間も、そのまた次の時間も、クラスの状態に疑問を持った教員に生徒が事情を説明し、雰囲気が重くなるという負のスパイラルが続いたのだった。

しかし、皆の予想を大きく外し、金属音は放課後まで鳴り続けた。いつまでやってるんだと言う思いと、何故こうまで続いているんだと言う疑問を、クラスどころか全校生徒が抱き、勇気ある生徒が偵察に行った。

その結果、並盛中の全体に、「転校生が雲雀さんと五角に殺りあっている！」との情報が回った。

当然、全校生徒が驚愕し、証拠が見たいと多くの生徒が口々に言い出した。

しかし、大勢で押しかけるのは大きな危険を伴うため、陸上部の主将と剣道部の主将（代理）、空手部の主将の三人を筆頭に、カメラ等の機材に詳しい生徒が二人選抜された。

かくして、雲雀さんの戦いを隠し撮りしよう大作戦 と言う名の、並盛中学歴史史上、永遠に語り継がれるだろう究極のミッションが開始されたのだ。

「こちらヒーロー、現在三階と屋上の中間地点、階段の踊り場にいる、オーバー。」

『こちら司令部、了解した、アイボ1からの報告では、現在も特撮バトル展開中との事、充分に用心されたし、オーバー。』

一体どこから持ってきたんだ、とツツコミとなる程本格的なトランシーバーを持った怪しげな男。

緊急避難用のヘルメットを被り、陸上競技用のユニフォームを着たこの男は、陸上部主将である。

今回の究極ミッションが立ち上がった時、まっ先に志願した英雄である。

因みにヒーローとは彼のコールサインであり、言うまでもなく英雄・

ヒーローから来ている。

アイボとはサポート部隊、相棒からもじっている。

サポート部隊は、現在人外バトルの現場の屋上の隣、もう一つの屋上から、双眼鏡で現場の状況を把握し、司令部を通して伝える役割を担っている。

「よし、引き続き任務を続行する。俺たちが、並盛の新たな歴史の記録者になるんだ！」

「ヒーロ2、了解！」

「ヒーロ3、了解！」

「ヒーロ4、了解！」

「ヒーロ5、了解！」

リーダーの声に鼓舞される様に、他の実戦部隊四名から意気のいい声がかかる。

ヒーロ2は剣道部主将代理（諸事情により）、ヒーロ3は空手部主将。

ヒーロ4・5は撮影用カメラを扱う為のカメラマンと、何かあった時のサポートである。

これが、今回のミッションに名乗りをあげ、その中から全校生徒の厳選により選ばれた精鋭の勇者だ。

何でこんな短時間で全校生徒の厳選が終わるんだよ、とか、準備するの早すぎだろ、等の疑問は残るが、それは今回の出来事が、並中心にとってどれだけ重要度が高いかを示していると言えるだろう。

心一つにした者たちの作業スピードは、まさに団体と言う枠において、境地とも言える物だったに違いない。

「よし、それではこれより、屋上への侵入を試みる。」

「了解っ！」「
「了解っ！」「
「了解……」
「ん？」

三名が返答する中、残り一名、カメラマン役の生徒が暗い顔であつた。

「どうした、怖いか？」

「い、いえっ！ そんなことは……」

「無理をするな、震えているぞ。」

「あ、こ、これ……は……」

凶星を突かれ、黙る生徒。

「少年、お前は一年生だな？」

「はい、そうです。」

「何故、この作戦に志願した。危険なのは承知だろうか？」

「勿論です。」

ヒーローの問いに、即答するヒーロー4。

「ではなぜだ。」

「俺は、ずっと機械弄りしか能がない落ちこぼれでした。勉強も、運動もダメで、これしか取り柄がないんです。」

何やら突然身の上話を始め、これまた何故か全員が静かに聞き入っていた。

「親や友人には、取り柄があるだけいいじゃないかって言われました。俺も、何も無いよりはマシかなって思っていました。」

「ほう。」

「でも最近、小さいころから何の取り柄もなく苛められてた、一年の沢田って奴がいるんですけど。そいつがやけに凄い事をやるようになったんです。」

「沢田と言えば、剣道部主将の持田を素手で倒したっていう奴じゃないか？」

「はいそうです。」

代理で主将をやっているヒーロ2が答える。

「それ以外にも、バレーの試合で活躍したり、噂じゃボクシング部の主将に誘われたり、色んな事がこの短期間で起こってるんです。」

「ふむ、確かにそれは凄いな。苛められていたと言うのが信じられん。」

「だから思ってたんです。安心なんかしてちゃ駄目なんだって、あれだけ駄目な奴って言われてたアイツが、あんなスゲー事やってるんだから俺だって何かやりたいって。そんな時、今回の作戦で、カメラを扱える人が必要だって聞いて、これしかないって。」

「ふむ、成程な、よくわかった。」

モブキャラの長話が終わり、やっと進展である。

「皆も聞いてのとおりだ。ここには、この少年のように、己を変えたいと言う高い志を持ってこの任務に当たっている者もいる。」

そして、それは俺にも、いや、お前達にも言える事だ！」

「……？」

分かっていない様で、三人が不思議そうな顔をする。

「いいか、今回我々は、雲雀恭弥の戦いを隠し撮りすると言う偉業

を成す。しかしそれは当然、本人には無許可だ。従ってこの任務は、風紀委員に刃向かう行為でもある。」

「……っ!!」「……」

「無論、バレればタダでは済むまい。いや、間違いなくバレるだろう。私達の任務達成条件は、撮影し、皆に届けられるかどうかだ。撮影する前に取り上げられれば、制裁だけでなく、この作戦に臨んだ多くの者たちの思いが無に帰すのだ!!」

無駄にシリアスな空気に染まりつつある現場。

因みに連絡用の回線も開いており、司令部やアイボチームも聞き入っている。

もはや彼らの顔は、これから戦場に赴く兵士のそれである。

「しかし、それでも我らはやり遂げねばならない! これまで、あの雲雀恭弥がこの並中に入學してきたあの日から、我らは風紀委員の驚異に怯え、従ってきた。しかし今日、この日、我らは自らの意思を持って風紀委員に反抗するのだ!!」

周りから、おおおつと声上がる。

「我らは、変わらなければならない! 学校生活を、いや、未来を切り開く為に!!」

「そうだっ!!」

「俺たちがやるんだ!!」

「目にもみせてやるぜ!!」

「やってやる、やってやるさ!!」

部隊の士気は無駄にMAXである。

「よし行くぞ。だが、これから死地に赴く諸君には無理強いであ

ろっが、敢えて言わせ貰おう！ 死ぬなっ！！」

【了解！】

一致団結となったチームが、いよいよ戦場へと踏み出す。

これは、並盛中学校に永遠に語り継がれる、モブ勇者達の物語……。

第二十一話（後書き）

本編が早く読みたかった人、ごめんなさいm(|) m

もう一話続きます。

第二十二話（前書き）

続いてGO!!

第二十二話

最強の風紀委員長こと、雲雀恭弥。
謎の美少女転校生こと、夜月満。

二人の人外が、これまた人外バトルを繰り広げている屋上を見た瞬間、彼らの脳は停止した。

しかし、それを責められる者は何処にも居ないだろう。

何故ならそれ程までに、彼らはとんでもない光景を目の当たりにしたのだから。

「さつさと咬み殺されなよ。」

「やなこつたい？」

平然と殺すとか言っている雲雀恭弥に、平然と応戦している転校生。これはいい、いや、本来ならこれらも尋常じゃない状態ではある。不良達を束ね、並盛最強と呼ばれる男と、見た目はか弱そうな少女が平気な顔をして五角に戦っているのだから。

さらには二人の動きが早すぎて、こころなしか残像すら見えている気がする。

これだけで既に人外魔境である。

しかし、それ以上に勇者チームの思考を停止させるものがあつた。

「おい、これ、夢だよな？」

「いや、夢以外ありえないだろ。」

ヒール2・3が現実逃避を始めた。

「お、落ち着け。 気持ちは解るが、これは現実だ。」
「だ、だって隊長。 これはあんまりでしょう。」
「そうですね、だって・・・地面が。」

そう、彼らの見た屋上は、もはや彼らがのんびりと過ごしたかつての姿を残していなかった。

そこらかしこにクレーターのような物が出来ていて、一面がデコボコになっているのである。

とてもじゃないが、人が歩ける場所ではない。

「ありえねえ、こんなことが人間に出来んのかよ!？」

「マジで化け物だ、アイツら!」

「こんな状況だなんて聞いてねえぞ。」

恐らく、アイボチームの視点からでは、こここの地面の状態までは見れなかったのだろう。

しかし、この惨状は二人の仕業ではないが、彼らにそれを知るよしもなく、彼らからすればこの惨状は二人によってもたらされた地獄以外の何者でもない。

「くっ、怯むな! 私達が吉報を示す時を、多くの者達が待っているのだぞ!!!」

「くっくっ!! 了解!」「」「」

「よし、所定の位置に移動する。」

何とか使命を思い出し、前進する一行。

自分たちが入ってきた入口のさらに上、貯水タンクの所まで移動し、少し上の場所から撮影する作戦である。

ここで最も重要なのが、二人に極力気づかれずに撮ると言うこと。

色んな意味でとばっちりを食らわぬ様にして、被害を最小限に止め、撤退時の戦力を確保すること。

万が一の場合、記録テープをカメラマンが持ち帰り、他の者が全力で足止めする為だ。

いわば緊急時の死兵である。（実際には階段の時点で気づかれていますのは知らぬが仏）

しかし、彼らに降りかかる驚異は、それだけでは無かった。

「ぐはあっ！」

「!?!? どうした、ヒーロ2!」

突如倒れたヒーロ2の元に行くと、足元に拳大のコンクリの塊が転がっていた。

「! こ、これは、まさか!?!」

そう、雲雀と満流。

二人が戦う余派として、例えば雲雀の攻撃を満流が避けた結果、地面に当たり、衝撃でコンクリの破片などが周りに飛ぶなどの二次被害が発生しているのだ。

「くっ、まさかこんな伏兵が!」

「た、隊長、行って…ください。」

「ヒーロ2!?!」

「自分は、ここまでです。どうか自分の…分ま…で…。」

息絶えるヒーロ2。

「あえて言った筈だぞっ！……くそっ！行くぞ、犠牲を無駄にするな。」

【了解！】

悲しみをバネに、進んでいくヒーロ達。

貯水タンクの元に辿り着き、遂に撮影を開始する。

「よし、これより出来る限り長く撮影を続ける。継続が困難と判断した場合、ヒーロ4は記録を持って撤退、他はそれを全力で援護だ。」

【了解！】

「よし、では撮影開始！」

号令と共に、ヒーロ4がカメラをまわし、他のヒーロは、飛来するコンクリの塊を排除している。

「くっ、数が多い！」

「三人で対処してるってのに！」

「怯むな、散っていったヒーロ2の為にも！」

何とか己を奮起させ、応戦していく。

しかしコンクリの塊は、減るところが増える一方。

『こちら司令部、アイボ1より、戦闘の激化が報告されている！
そちらはだいじょうぶか！？ オーバー。』

「こちらヒーロ1！ 戦闘の激化に伴い、コンクリの破片の被害あり！ 既にヒーロ2がやられた！」

トランシーバーの奥から、息を呑む気配が伝わってくる。

このやり取りの間にも、破片の勢いは増すばかり。

「くっ！ カバーしきれない！」

「はっ！？ しまっ！！」

「えっ？」

ヒーロー3が対処しきれず破片を取り逃がす。

それは、まっすぐにヒーロー4の顔面へと向かい、放心した彼には避けられない。

誰もが目を逸らしそうになった瞬間、背後から一つのかげが飛び出す。

「お前は！？」

「「「ヒーロー2！！？」」「」」

誰もが息絶えたと思っていたヒーロー2が、捨て身で破片に向かっていった。

「俺はユニオン・並盛のお、フラッグファイター……剣道部主将（代理）だあああああああああ！！！！！！！」

雄叫びを上げながら破片と激突し、後方に吹っ飛んでいくヒーロー2。彼が最初に何を言おうとして修正したのは、永遠の謎である。

「ヒーロー2ううううう！！！！！」

自身を庇って散ったヒーロー2の死に様に、ヒーロー4は悲しみの叫びをあげる。

しかし、被害はそれだけでは無かった。

それをヒーロ4はなんと紙一重で避けた。

流石の二人も驚愕する、避けられるなんて思いもしなかったからだ。その間も、ヒーロ4は二人の間や周りを駆け巡り、二人の姿をカメラに収めている。

そう、ただ収め続けている。

「えっと、どういう事？」

「僕にきかないですよ。」

ただひたすらにカメラで撮り続けるその様に、次第にうつとおしい気分になってくる二人。

しかし、偶に攻撃してみるも、見事な迄に避けるヒーロ4。まさに奇跡である。

「う、うざい……。」

「目障りだよ……。」

いい加減キレそうな二人、そろそろ本気で殺ろうかと思った瞬間。

「あっ!!！」

「あ……。」

足元のデコボコに足を引っ掛け、ズザザッと、転ぶヒーロ4。

その際、カメラを落とし、かなりの勢いがあったせいか派手に飛んで、とつくに壊れた柵を超えて落ちていった。

「……………」

「……………」

「……………」

流れる沈黙。

「え、えーと。 あのですね。」

一番に口を開くヒーロ4。

「じ、実はこれは・・・。」

「ねえ。」

「は、はいいい!?!?」

言い訳をしようとした矢先、雲雀に声をかけられて悲鳴混じりに答えるヒーロ4。

もはや先程までの気迫は無く、いつの間にかBGMも止まっていた。

「校内における無許可の撮影行為、及び放送施設の無断使用、覚悟出来てるよね。」

「い、いやそれは・・・。」

「問答無用。」

「ギアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「ドンマイ?」

その日、最後に生き残った勇者の悲鳴が並中に木霊した。

因みに、落ちたカメラは全損したが、奇跡的に記録は無事であり、全生徒に配信された。

これにより夜月満流の伝説が幕を開けるのであった。

第二十二話（後書き）

やりきった・・・もう悔いはないぜwwwwwwww

さて、いかがだったでしょうか？

突然ですが、わたしはガンダムOOが大好きです。

この話を思いついたのは、書き始める十分前でした。

最初はそんな事がありましたあみみたいな感じで流す話だったんですが、どうせならネタ回として書いてみよっかなあと思い、書いた所存です。

なので、ガンダムOOネタを一期と二期目、劇場版のも含めて入れちゃいましたwww

OO見たことないって人は、茶番を見せてしまっって申し訳ありませんでした。

いや、もしかしたら知ってる人でも茶番かも（汗

つまらなかつたら御免なさいm（|（|）m

只の自己満足回だったので、次回から本編書きます。

もし、万が一、面白いと思ってくれた方がいた場合、感想などくれると嬉しいです。

それではまた(〇・〇〇)
/

第二十三話（前書き）

活動報告にも書きましたが、書き溜めしてたデータが吹っ飛び、やる気も一緒に吹っ飛びました。

大分遅れてしまい、申し訳ありません m (|) m

一度書いた文を一から書き直すというのがこんにも苦痛だとは思わなかった・・・。

しかし、ようやく一話書き上げたぜ b

ではどつど

第二十三話

「うわぁっ!」

飛び起きて、荒い息を整える。

少し回復してから周りを見渡すと、先程と変わらない、いつもの自分の部屋。

いつの間にか眠ってたみたいだ、時計が四十分程進んでいた。

「な、なんだあ、夢か。」

溜息を吐き、再びベッドに横になる。

「変な夢見た、なんだよアレ。」

「どんな夢見てたんだ？」

「あつ、リボンお帰り。」

「おっ。」

気づいたらリボンがドアの所に立っていた。

下校するとき、用事があるとか言って何処かに行ってしまったんだ。

「それで、どんな夢見たんだ？ 京子のエロいシーンでも見れたのか？」

「ばっっ!! 違うって! そんないいもん・いやいや、変態な夢じゃなくて!」

「じゃあどんなのだ？」

「だから……。」

リボンに夢の内容を説明する。

不思議なくらいに鮮明に覚えていたから、話終えるのに十分掛かった。

「って夢なんだ・・・」

「・・・ツナ。」

「へ？」

ゆっくりとオレに歩み寄って来たリポーン。

何かと思えば、俺の肩にポンツと手を置いて。

「疲れてんだな、今日は早めに寝て、ゆっくり休むといいぞ・・・」

「なあ！？」

なんて事を言ってきた。

いや、自分でも変な事言ってるって分かってるよ？ わかってるけども。

表情は全くと行っていい程変わってない筈なのに、リポーンの目が本気で気遣わしげなのが無性にムカついた。

「べ、別に疲れてなんか！！」

「遠慮すんなツナ。確かに最近、お前には色々大変な思いをさせてたからな・・・お前じゃなくても、疲れちまうのは仕方ねえさ。」

普段なら天地が引っ繰り返しても言わないような言葉のオンパレードだ。

あまりにも複雑と言うか、対応に困る。

「そ、そう言えば！ 結局用事ってなんだっただの！？」

「ああそれか。」

無理やり話題を変える。

用事の事が気になってたのは本当だし、これ以上夢について話していたら痛い奴認定されるかもしれない。

「転校生の事を観察しに行ってたんだ。」

「ふーん転校生を……て……はああっ!!??」

「いちいちうるせえぞ。」

「グヘツ！」

左頬を思いつき蹴り飛ばされ、ベッドの横に倒れる。

相変わらず、一体そのサイズの体のどこから絞り出してるのか聞きたくなるような威力だ。

リボンと出会ってほんの数ヶ月だけど、既に俺の中の常識はとっくに粉々になっている。

「イッテエ。それよりも、何でみーちゃんを観察なんてするんだよ！」

「決まってるだろ、ファミリーにするためだ。」

「やっぱりかー!?!」

予想はしていたけども。

万が一と思つて縋り付いた希望は一瞬で消し飛んだ。

「あの女の強さは相当だぞ。少なくとも、今日見た限りでは雲雀と同等以上なのは間違いないねえしな。」

「ま、まあみーちゃんは昔から強いけどさ。」

「そういや、アイツお前の知り合いか？」

「うん、今朝言っただろ？ 昔いた俺の友達。」

「そうか、アイツが……。」

俺が説明した途端、口元だけをニヤリと曲げて笑うリポーン。
あまりの変化に、思わずビクツとなった。

「そいつは都合がいいな。ツナ、お前がアイツを誘え。」

「ええ！？ 嫌だよ！ 絶対にお断りだ！！」

「別に言葉巧みに引き入れろって訳じゃねえ。お前が夜月の奴に声をかけて、俺の所に連れて来るだけでもいいんだぞ。」

「どれでも嫌だよ！ だってそんな事したら・・・！！」

「なんだ？」

「あつ！？ いや・・・何でも・・・ない・・・」

「？」

口ごもる俺の様子を見て、首を傾げるリポーン。
危なかった、もう少しで言ってしまう所だった。

もしリポーンがみーちゃんの性格を知れば、絶対に見逃しはしないだろう。

だって・・・だってみーちゃんは・・・。

そんな面白そうな事は絶対に断りはしないのだから・・・。

そうだ、昔っからみーちゃんは面白い事には何が何でも関わろうとする。

マフィアとかボスとかファミリーとか。

俺には全く理解出来ないけど、少なくとも今回の事がみーちゃんにとって、もの凄く面白そうな事に入るのは明確だ。

リポーンに勧誘されれば、まず間違いなく二つ返事で入ってしまうだろう。

それどころか、「ボスの右腕は私だ〜！」とか言って獄寺君と一騎打ちとかやり出しかねない。

「と、とにかく！ 俺はみーちゃんを巻き込むのは絶対に反対だからな〜！」

「どの道無関係じゃいらねえと思うぞ。 アイツ、今日風紀委員に入ってたからな。」

「……え？」

「帰りが遅れたのもその為だぞ。 並盛のあちこちに飛んで行ってゴロツキ共を百人近く半殺しにしてたからな。」

「……ええええ〜〜〜。」

最早それしか言えなかった……。

「ふんふんふ〜ん？ きょーおーはなーにーがおっきるーかなー？」

風紀委員に入った翌日の朝。
スケボーで登校しながら、今日の学校生活に胸を馳せる。
昨日大量に不良共をボコッ……もとい指導した為、気分は最好調である。

あれだね、やっぱり世の為人の為になる事したから気分がいいね？
早朝で、まだ人もまばらな商店街の中。
スケボーで自転車レベルのスピードを出しながら、その上でくるくる回りながら鼻歌を口ずさむ。

周りから珍妙な物を見る目を向けられても気にしない！
だって私、風紀委員だもん？

「おや？　くんくん……これは……。」

どこから漂ってきた臭いに釣られ、とある店の前で止まる。
ヘッドの文字がDなアニメもかくやと言わんばかりのスライドター
ンによる緊急停止。
ギャギャツと地面を削る様な音が響き、店の前にいた店員さんや周
りの人がビクツツとしていた。

「どうも〜こんにちは〜？」

「え？　あ、はい……こんにちは。」

啞然としていた店員……この人は店長かな？　は、声をかけた瞬間
に復活。

「ここってコロッケ売ってるんですよね？　三年前にはこの場所
には無かった筈だから……最近出来た店ですか〜？」

「えっと・・・はい。ちょうど一年前に開店しましたけど、引越して来た方ですか？」

「そうなんですよ、つい一昨日帰って来たばかりで、何か変わったかなあつて見て回ってたんですか？」

「へえ、そうなんで・・・あつ!？」

困惑が取れ始めていた店長さんが、突然驚愕した表情で固まる。

どうしたのかと思いきや、視線を辿ってみれば簡単解決。

そこには私の左腕に付けられた風紀の腕章。

「え・・・っと、もしかして並中の風紀委員の方・・・ですか？」

あからさまに低姿勢になる店長。

顔色が真っ青である、どんだけ恭弥君は恐怖の象徴なのかと・・・。

「まあ昨日入ったばかりの新人ですけどね。あと、出来れば他の風紀委員に対するような畏まった対応はしないでいいですよ？」

「え？　で、ですけど。」

「いやいや、年上の人にそんなビクビクされたら結構傷つくんです

けど。それに、私の仕事は風紀を乱すあんちきしょう共の制裁で

あつて、町民さん達を問答無用でボコす訳じゃないですよ？」

「は、はあ・・・。」

未だに挙動不審さが抜けきらないものの、大分落ち着いてきた店長。気が付けば周りにいた人達もホッとしている様な空気が漂っている。いくらなんでも怖がり過ぎでしょう。

これって風紀委員の存在が一番町民の安寧を損なっているのではないかい？

「あ、風紀委員と言えば！　そう言えば貴方は昨日不良達を薙ぎ倒していた人ではないですか？」

ふと店長さんが漏らした言葉に、まわりから「そう言えば……。」
「言われてみればあの子だ。」と言った声が囁かれ始めた。

「ええまあ、確かに昨日アホ共を殺ってましたけど……。」

「やっぱりそうですか！　昨日はありがとうございました……！」
「はい？」

「俺らも言わしてください、ありがとうございました……！」

「なん……だと……。」

気づけば他の店の店長さん達と思われる人達が口々にお礼を言ってくる。

あれ？　あんなのいつも風紀委員がやってんじゃないの？

「他の風紀委員の人達は、なんていうか、不良達を制裁する為に店とか周りの物を使って暴れますから。被害がこつちに来る事が多いんですよ、酷い時は店の中で乱闘するくらいで……。その後はその日の営業を断念する時もある程に……。」

「何やってんだよ風紀委員……。」

「だけど、貴方は昨日、周りに被害が出ないように戦ってくれました。御陰であるのあと無事に営業が続けられて、沢山の店が助かりました！」

「いやいや、別にそこまでお礼を言われることでも……。」

「そう言う訳には行きません……！」

「うわお……！」

譲れないとばかりに詰め寄って力説するコロッケ店長さん。
周りの店長、sもしきりに頷いている。

どんだけ被害に会ってきたんだ……。

風紀を守る人達が店内で乱闘とか、本末転倒もいいところじゃない。これは恭弥君に言っておいた方がいいのかな？

「分かりました、私の方から委員長にそれとなく言っておきますね。」

「な、なんと!? 雲雀さんにですか!! 大丈夫なんですか!?!」
「大丈夫です? なにせ私は……恭弥君のパートナーですか
ら~~~~!!」

【おおおおおお~~~~!!!!】

歓声に包まれる商店街。

時間も迫り、段々と人も多くなっていく。

道行く人が騒ぎを聞きつけ、近くの人に話を聞いてといった具合に騒ぎが広がっていく。

「おっと、もうこんな時間。 それでは、私は学校があるので、さよ~なら~~~~?」

「あつ、はい! お気を付けてー!!」

商店街を抜けるまで、数々のお店から様々な差し入れを貰い、ホカホカの焼きたてコロッケを食べながらスケボーを走らせるのだった。

「このコロッケは……至高のコロッケかもしれない!!」

「おっはよ〜〜〜?」

「あっ、みーちゃん!」

「おう、お早うツナ君!」

「うん、お早う。」

いつも通りに登校してきたみーちゃん。

どうやら雲雀さんとの戦いで傷とかは出来てないみたいだ。

ホッと息をつく、雲雀さんを相手にして無傷なんて、やっぱりすごいなあ。

「お、夜月じゃねえか。お早うな。」

「うん、お早う武君?」

山本とはもうすっかり仲良さげに挨拶してる・・・獄寺君は自分の席に座っていてこっちに来ないけど。

それよりも気になるのは・・・。

「ねえみーちゃん?」

「ん?」

「そ、その腕章ってやっぱり・・・。」

「ああこれ？」

そう言つて左腕を前にして見せてくる。

そこにあるのは、中学校のとは思えない程の立派な意匠で形作られた風紀の二文字。

言つまでもなく並中風紀委員の腕章だ。

「実は私、昨日恭弥君に言われて風紀委員になつたんだあ？」

「や、やつぱり……。」

出来れば嘘であつて欲しかった。

みーちゃん言葉を聞き、クラス中の生徒が一斉に此方を向いてい
る。

それは驚愕であつたり、畏怖であつたり、恐怖であつたりと様々。

しかしそんな中、一人の女子生徒がみーちゃんに近寄ってくる。

「どうかその子は……。」

「あの、満流ちゃん。」

「うん？ おお！！ 京子ちゃん！？」

「うん！ 久しぶり、元気だった？」

「うんうんそりゃあもう！ 京子ちゃんも、三年ですっかり美少女
になつちやつてー！！」

とても嬉しそうに話す二人。

そう言えば、昨日はみーちゃんに群がる人、特に男子生徒達の勢い
が凄くて話せなかつたんだよな。

午後は雲雀さんとバトルしっぱなしだったから、結局再会を喜ぶ時
間がなかつたんだ。

京子ちゃんは特に、やっと話せて凄く嬉しそうだ。

花が咲くみたいな笑顔が、凄く可愛い。

そんな京子ちゃんとみーちゃんが笑い合って話しているせいか、教室中の男子が二人を見て鼻の下を伸ばしていた。

殆どが顔を赤くし、二ヘラと笑っている奴も一人や二人じゃない。つてかよく見ると廊下にもいるし！

そんな光景がしばらく続き、チャイムが鳴ると同時に担任が入ってきた。

廊下にいた生徒が慌てて自分の教室に帰っていく。

しかし、やはり多くの生徒が風紀委員となったみーちゃんの方をチラチラと見ている。

やっぱり気になる、いや、怖いのかも知れない。

そりゃあ雲雀さんと同じになった訳だし、みーちゃんの事をよく知らない人ばかりだから仕方ないか。

そんな風に思いながら担任の話を聞き流していると、不意に教室の前の扉が勢い良く開いた。

皆がビツクリしてそちらを見ると。

「夜月満流は来てる？」

心無しかいつもより不機嫌そうな雲雀さんがいた。

第二十三話（後書き）

今回はあまり目立った展開のない話でしたね。ww

消えていった次からの話も、順次復活させていきます。

テンション的な要因で遅れる可能性は大ですが、二・三日に一話は頑張って投稿しようと思うので。

それでは・・・。

第二十四話

「はいコレ。」
「……………」

現在、応接室の机の上にピサの斜塔が立っている。

いったい何処から取り出したのかと聞きたくなる程に高くそびえ立ち。

今にも雪崩に変わってしまいそうな程にグラグラと揺れている。

「これ？」

「これ。」

「なにこれ？」

「書類仕事だよ、君の分の。」

「……………なんと……………」

啞然と見上げる私。

ヴァリアーもそうだったが、労働基準法なんて幻想であったかの様な鬼畜っぷりだ。

「なんで入会二日目にして罰則レベルの仕事受けさせられるの？
新卒の新人いびり？」

「違うよ、昨日君が活動後の報告を怠って帰宅したからだよ。」

「罰ゲームってわけっすか……………」

「そう。」

そう言われると反論出来ない。

昨日はあまりの気分爽快さに、報告なんて脳みそから抹消されてたし。

まあ、授業出ないでいいんならすぐに終わるか。

さっそく他の机に移動（いつの間にか私用の机が用意されていた）。中から一枚ずつ引き抜いて処理する。高すぎて上から取れないのだ。

「しかし、まさか授業中にやらされるとはね〜。」

「どうせ君なら授業なんて受ける意味ないだろう?」

「何を基準に?」

「勘だよ。」

「勘って……まあ確かにそうだけどもさあ。」

中学の範囲なんて親を殺す前に済ませからね。

元々学校にだって通う意味は無いんだけど、面白いからね。

一時間、二時間と時間が過ぎていく。

私と恭弥君は無言で作業をこなしていく。

途中で草壁さんが来て、事務連絡をしたり、紅茶を入れてくれたりした。

「そう言えば、今朝商店街の人達と話したんですけど。」

「そうですね、どうかしたのですか?」

「いやですね? 風紀委員の人がチンピラをボコす時の被害が店にまで及んで営業出来なくなるって言って困ってて、私が昨日被害を出さずにボコツたのを感謝されたんですよ。」

「そうでしたか。」

そう言って、草壁さんがバツの悪そうな顔をした。

「そう言った事は前々から確認していたのですが、何分うちの委員

達は血の気が多い者達ばかりで・・・」

「ああやつぱり？　じゃあ恭弥君が直接言えばすぐに改善されそうじゃないですか？」

「いや・・・それがその・・・」

横目で恭弥君を伺う草壁さん。

私もつい目を向け、恭弥君が視線に気付いてコチラを見る。

「なに？」

「風紀委員が商店街の店に被害出してるから、恭弥君が注意してく
んない？」

「いやだ。」

「何故に・・・」

「面倒。」

並盛全体の情勢にまで関与する癖に、なんでこの程度が面倒なの？

「じゃあ私が言うから皆集めてくれない？」

「別にいいよ、放課後に体育館に集めるから。」

「それはいいんだ・・・」

集めるついでに一言って発想は無いのか。

これがヴァリアークオリティならぬ雲雀クオリティなのか。

「ありがとね。よし！　終わりっとな？」

「えっ！　もう終わったんですか！？　一週間分の仕事だった筈なの
ですが・・・」

おい、罰則じゃなかったのかい？

「満流はこうでもしないと必要最低限の仕事しかしなさそうだからね。」

「なぜそれを・・・。」

「バレていたなんて。」

書類仕事はそこそこに、チンピラ教育を最優先するつもりだったのが見抜かれていたとは。

「でもまあそう言う事なら暫く書類仕事な無いつてこせ・・・。」

「何言ってるの？ 仕事はいくらでもあるんだから明日もちゃんがあるよ。」

「・・・草壁さん、日本はいつから労働基準法を廃止したんですか？」

「今もちゃんとご存命ですよ。 すいません。」

入れたての紅茶が入ったカップを私の机に置きながら謝ってくる。

なんて出来た副委員長さんなんだ。

置かれたカップを手に取り、紅茶を一口飲む。

落ち着くねえ。

「さあてとく、仕事も終わったしい、どうしよっかな？」

「授業は受けないのですか？」

「いや、何かもう受ける気分では無くなってしまってますね？」

「そ、そうですね。」

「はい。 ん～～～～、とりあえず屋上にも行ってみますか。」

室内よりはあそこに居る方が気分も晴れるだろうし。

紅茶を飲み干し、応接室を出て階段に向かう。

勿論だが廊下に人気はなく、校庭から体育の授業を受ける生徒達の

声が聞こえてくる。

階段を昇り屋上への扉を開く。

心地いい風が肌を撫で、なびく髪を無意識に抑える。

「ふう〜、仕事で疲れた心が癒される様だ〜？」

棒読み混じりに呟き、屋上の真ん中辺りまで歩を進め、目を閉じる
先程よりも校庭の声がよく聞き取れ、風が少し強くなる。
強めになびく髪を、今度は抑えずに身を委ねる。

「さつてと・・・そろそろいいよね？」

少しの間沈黙が続いた後、私は目を開けて、大きめの声を出して呼びかける。

「話したいから、気付きやすい視線を送ってたんでしょ？ こころなら二人つきりでお話できるよ？」

「そいつはありがてえな。」

「でしょ？」

振り向いて、屋上の出入口の上、給水タンクの方に目を向ける。

そこには懐かしのマーモンを思い出させる様な、黒いスーツ姿の赤ん坊がいた。

「それで私に何か用かな？ 赤ん坊君？」

夜月満流。

ツナの昔の友達で、小学校三年の時にイタリアへ渡る。

そこから妙にあちこちの国を転々として、時々消息が解らない時期が多々あった。

この時点で一般人じゃねえ可能性は大きかったが、昨日コイツを見てそれは確定した。

雲雀と互角に戦える中学生なんざ、そもそも凡人じゃねえ。俺が今こうして見ていても、隙なんて全くねえんだからな。

「ちやおつす。初めましてだな夜月満流。俺はツナの家庭教師のリポーンだ。」

「ツナ君の？ 家庭教師なんて雇ったんだあゝ。リポーン君は赤ん坊なのに家庭教師やってるの？」

「見た目は赤ん坊だが、俺は超一流の家庭教師だぞ。」

「ハハッ、そうなんだあゝ？ ツナ君もこれで安心かな？」

秀囲気こそ子供に対する態度だが、コイツの目には子供の話に付き合ってる様な感じはねえ。

つまりは俺の言ってる事を真実だと思ってる。
大概は子供のお遊びと思う話をだ。

つまりコイツは、俺が只の赤ん坊だとは思ってねえって事だ。
そうでなけりやただの馬鹿だが。

「それで、超一流の家庭教師さんが私に何のご用でしょう？」
「単刀直入に言うぞ。 夜月、お前ツナのファミリーに入らないか
？」

瞬間、夜月の眉がピクツと動いた。

「ファミリーってなに？」

「マフィアの事だぞ。 ツナはボンゴレファミリーの次期ボスにな
る、だから今仲間を探してるんだ。」

「ふう〜ん、次期ボス・・・ねえ・・・」

考えている様子の夜月、しかし口元は先程からつり上がっている。
どっちかつつと好感触みてえだな。

「だから昨日から私を観察して見定めてたのかな？」

「やっぱり気付いてたか・・・」

「気配だっってそんなに消してなかったじゃない？」

そう言っって笑う夜月。

それだけ見れば普通の女子中学生だが、目だけは俺から逸らさずに
観察してやがる。

「で、どうだ？」

「う〜ん、面白そうだから入ってもいいけど。 条件があるかな〜」

「？」

「言ってみる。」

「面白そうなバトルがある時は必ず呼んでくれればそれでいいよ？
めっちゃ強い人がいるなら文句なし！」

親指をグッと突き出してくる、思ったよりマトモな条件だったな。

「それくらいなら問題ないぞ、他にはないな？」

「う〜んと・・・あつ、それとこれは言っておきたいんだけどお・
。。。」

「なんだ？」

次の瞬間、場の空気がガラリと変わった。

変わらず笑みを浮かべる夜月。

だがそれは先程までの無邪気な笑顔とはまるで違う。

獲物を狙う獣のような、森の中で息を潜める狩人のような。

犠牲者を嘲笑う殺人鬼のような、敗者を踏みつける勝者のような。

他者を下し、上へ先へと歩みを止めない。

民を見下す王女のような、どこか冷たく鋭く、そして妖艶な笑みを
浮かべている。

「私はいつも、味方とは限らないからね？」

自然と、口元がニヤけるのを感じる。

俺はどうやら、想像以上の奴を見つけたみたいだ。

「ああ、それでいいぞ。よろしくな、満流。」

「うん、よろしくねりボン君？」

昼休みのチャイムが鳴った後、獄寺君や山本と昼を何処で食べるか迷っていた時に、みーちゃんはようやく帰ってきた。しかも、肩にリボーンを乗せて。

リボーンに話があると言われ、五人で屋上に来た。

この時点でもう嫌な予感しかなかったけど、希望は捨てたく無かった。

たまたま意気投合したとか、風紀委員と取引したとか？

とにかく何でもいいからみーちゃんがマフィアに関係する事以外の何かであって欲しいと。

だけど、無情にもそれは打ち砕かれた。

信じたくない事実を突きつけられ、思わず大声を出しちゃった。

獄寺君も驚いていて。

山本は驚いてはいるけど仲間が増えてラッキーみたいな空気だ。

「という訳で、じゃないよりボーン！！ あれだけ駄目だって言ったのに！」

「それは聞いたが、諦めるなんて言った覚えは微塵もねえぞ。」

「なあっ!？」

た、確かに言っていないけど！

じゃあ昨日の苦労は最初から・・・無駄。

薄々分かっていたけれど、切ない・・・。

「待つてくださりボーンさん！ 俺は反対です、雲雀んとこの奴をファミリーに入れるなんて!!！」

そ、そっだ！

まだ獄寺君が居た。

みーちゃんとの不仲はどうにかしたいと思っていただけ、今回だけは助かった。

どうにかリボーンを説得してくれれば！！

「風紀委員のスパイかも知れません！ 十代目の身に何かあったらどうするんですか！？」

その調子、頑張ってる！

「まあまあ、落ち着いてよ獄寺君とやら。 そう邪険にしないでよ。」

「うるせえ！ お前はすっこんでろ！！」

笑って話し掛けたみーちゃんに、獄寺君が吠える。

こ、怖ええ。

でもみーちゃんは涼しい顔で話を続ける。

「聞きなつて。 私もね、ツナ君にボンゴレのボスになって欲しいんだよ。」

「な、なんだと？」

あれ？

「マフィアの世界で誰もが恐れ、敬意を表するボンゴレファミリー。 そんな強大なボンゴレを継ぐ資格を持つのはこの世でツナ君だけだよ。」

「わ、わかってんじゃないかねえか・・・。」

え？ みーちゃん？

「それにね？ リポーン君から聞いたよ、そんなツナ君をいつも傍で支える獄寺君の事。まさにボスの右腕の理想の姿だって思ったよ！」

「ま、まあな！ 十代目の右腕は俺にしか務まんねえからなあ！」

ご、獄寺君？

「今はまだまだ未熟な私だけどね？ そんな獄寺君の下で勉強させて貰って、少しでもツナ君の為に何か出来たらなあって思ったんだよ？」

「し、仕方ねえなあ！ そこまで覚悟があんならちつとは教えてやらねえ事もねえけどなっ！」

そ………んな………

「さっすが獄寺君！ いやっ、右腕の鏡！ ツナ君の最も頼りにする男……！」

「へへっ、当たり前だぜ……！」

完全に懐柔させられた獄寺君。

山本はそんな光景を面白そうに見ているだけ。

リポーンは俺と目が合った瞬間、ニヤツと口元だけを歪ませた。

「嘘だあああああああ……！！！！！！」

俺の叫びが、屋上に虚しく響いた。

第二十四話（後書き）

少しづつテンションが回復してきました！

速く投稿するためにがんばります。

話は変わりますが、トウリニセツテの三乗の部分を数字で表すには
どうすればいいんでしょうか？

どうしても分かりません（汗

まあまだ気にする段階じゃないんですけどねWWW

誰か教えてくださいませ〜。

第二十五話（前書き）

あれ？　そう言えばスクアアー口の髪って昔は短髪じゃん！！

と、今更気付いて修正しましたwwwwww

第二十五話

ツナ君のファミリーになってからしばらく。

体育祭季節となり、今はその準備期間。

ああ、風紀委員の件なら、ちゃんと話したら皆了承してくれたよ？

少し不満を垂れる人もいたけど、めげずにお話して想いを叩きつけたら快く受け入れてくれた。

それはもうガタガタ震えて涙まで流していた程に？

並中では、A・B・Cの三つの組みに縦割りで別れて争うらしい。

それぞれ組では総大将が一人選ばれ、最後の棒倒しでは壮絶な戦いが繰り広げられるそう。

そして現在。

「極限必勝！！　これが明日の体育祭での我々A組のスローガンだ！　勝たなければ意味はない！」

了平さんが燃えています。

どうもA組の総大将として担ぎ上げられた様子。

まあ彼なら問題ないだろうけどねえ。

周りを見ると、兄を心配そうに見つめる京子ちゃん。

そしてそれを見て鼻の下を伸ばすツナ君。

相変わらず京子ちゃんLOVEだねえ？

はたから見ればムツツリに見えちゃうけど。。。

「さて、今年も組の勝敗を握るのはやはり棒倒しだ。」

「ボウタオシ？」

「どうせ一年は腕力のある二・三年の引き立て役だよ。」

棒倒しを知らないらしく、首を傾げる獄寺君にネガティブ思考のツナ君。

最初っからそんな調子じゃ楽しめないよ？

「例年、組の代表を棒倒しの”総大将”にする習わしだ。つまり俺がやるべきだ。。。」

了平さんがこんな含みのある言い回しをするなんて、天変地異の前触れ？

「だが俺は極限に辞退する！！！」

【っ！！！！！！】

了平さんの一言に、騒然となる一同。

突然、しかも本番前日になって辞退宣言なんて驚くのは当然だけど。

「俺は大将であるより、戦士として闘いたいんだ！！！」

「ぶっ！」

あまりにも了平さんらしい言葉に思わず吹いてしまった。

室内は啞然とした、と言うよりも呆れたような空気で満たされている。

京子ちゃんは顔が真っ赤になっていた。

「だが心配はいらん、オレより総大将に相応しい男を用意してある。」

「え？」

「笹川以上に相応しい男だつて？」

まさかの代行の存在に、一様に驚く生徒達。
他に務まる人なんていたっけ？

「1のA、沢田ツナだ！！」

【なっ！】

「へ？」

なんと・・・。

その手があつたか！！
なんて面白そうな人選！

グッジョブ了平さん！でも他人の名前とあだ名の区別くらいつけよう！

「おおおっ！！」

「十代目の凄さ分かってんじゃねえかボクシング野郎！！」

「は？え、なんで!？」

「賛成の者は手を上げてくれ！過半数の拳手で決定する！」

自身も高く手を上げ、拳手を促す了平さん。
しかし

「一年にや無理だろ。」

「オレ反対！」

「負けたくないもんね。」

「つか冗談だろ。」

やはりと言っか。

大半の者が不満そうだ、むしろほぼ全員？

「手を上げんか!!」

【（命令だー!?!）】

「ウチのクラスに反対する奴なんて居ねえよなあ!?!」

それぞれのやり方で強制的に手を上げさせる二人。かなりの数になったが、しかしまだ足りない。その様子を見て、ホツとするツナ君。

だが、私がいるかぎりそうは行かないぜ？

「はいは〜い! 私も賛成で〜す?」

「な!?! みーちゃんまで!」

「なに!?! 夜月さんも賛成なのか?」

「夜月さんがお望みなら俺もだ!!!」

「俺も!」

「僕もだ!!!」

「ええええええ〜!!!!?」

次々と男子の手が上がっていく。

風紀委員になってから、ある程度どころか滅茶苦茶融通が聞くようになつたので、存分に有効活用させてもらつてる。

「なっ! 夜月って・・・あの?」

「そうだよ雲雀さんと互角に渡り合つたつて言う伝説の・・・。」

「ヤベエ、手を上げなかつたらどうなるか分かんねえぞ!」

「お、俺もやつぱ賛成だ!」

「俺もだ!」

二・三年の人達からもどんどん手が上がる。

まあそんなこんなで・・・

「うむ！ それでは満場一致で沢田をA組総大将とする！！」

「は！！？ うそ！！ 何それー！！！！！！」

「スゲエなツナ！」

「さすがつす。」

「ビビッたつす。」

「ガンバ？」

武君と獄寺君、そしていつの間にか居たりポーン君と私でツナ君を賞賛する。

「超不自然！！ と言うかみーちゃんは何であんなことを！？」

「ちゃおつす。」

「ちゃおつす？」

「マネしなくていいから！！」

「総大将つつつたらボスだな。 勝たねえと殺すぞ。」

「これは負けられないねえ。」

「いいからリポーンは隠れてろよ！ 皆の前で！！」

リポーン君を抑えようとするツナ君だが、それは風船の人形だった。風船が室内を飛び回り、騒がしくなる。

「ダミー！？ って、あれ？ みーちゃんまで居なくなってる！？」

ツナ君が風船に意識を向けている内に外に出て、私は応接室に向かう。

「ふっふっふ、面白くなってきたあ〜？ 私も棒倒しに出れるようにして貰わなくっちゃ！」

ワクワク気分が抑え切れず、スキップしながら向かった。

さあやって来ました体育祭当日。
現在ツナ君の家にやって来ています。
お弁当作りに加わる代わりに皆で食べようかと思い、こうして来た
ってわけ。

「お久しぶりです、奈々さん？」

「ホント久しぶりねえ満流ちゃん。ますます可愛くなっちゃって

〜。」

お互いに挨拶を交わしながら、キッチンに向かうと。そこには同じ年の女の子と年上の女生徒と、リボン君くらいの子供が二人いた。

「皆、紹介するわね、この子は夜月満流ちゃん。ツナの幼馴染みよ。」

「よろしくお願ひしま〜す?」

「ツナさんの幼馴染みですか! 私は三浦ハルと申します!」

「ビアンキよ、よろしくね。」

「ランボさんはランボさんだもんね!」

「我的名字是イーピン。」

最後の子は中国人かな?

中国語はまだあんまり覚えてないんだけど、最後のイーピンが名前だよね?

皆で楽しくお喋りしながらお弁当を作り始まる。

偶にランボちゃんが摘まみ食いをして、イーピンちゃんがそれを必死に食い止めようとする。

可愛いなあ、抱き締めてモフモフしたくなるよ〜。

カバンの中に常備していたチュッパチャプスをランボさんが発見したので、大人しくしてる代わりに袋ごとあげた。

「ランボさん満流が気に入ったもんね! 今度遊んであげてもいいよ!」

「マジ? じゃあそんな時はモフモフしていい?」

「いいよ!」

「よっしや〜!?!?!?」

やがて二階から階段を降りる音が聞こえてきて、ツナ君がキッチンに顔を出した。

「母さん？」

「おはよ、総大将さん。」

「おはよーございます。」

「おはよ、ツナ君？」

「んなー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」

キッチンの光景を見た瞬間に叫ぶ。

リアクション大きすぎない？ 疲れないの？

「なんで皆いるのー！？」

「今日は特別な日でしょ？ 皆で応援に行くわ！」

「ツナさんの好物たくさん作りました！」

「いやっ・・・あの・・・ねっ・・・。」

「ほら早く着替えなさい！」

「え！？？」

「総大将が遅刻じゃカッコ悪いわよ！」

「そうですよ、みんな待ってますよ！」

「満流ちゃんも一緒に行つてあげてくれる？ ツナが遅れないように。」

「了解です。」

「じゃ、二人とも後でね。」

閉められる玄関。

有無を言わせぬマシンガントークに、啞然と扉の前で立つツナ君。

「そんじゃあレッツゴー！」

「ちよっ！？ まってー！ー！ー！ー！」

腕を引つ掴んで全力疾走。
後ろから聞こえる悲鳴なんて無視無視？
ものの三分で学校に到着した。

「はい到着。」

「し．．．死ぬ．．．。」

「大袈裟なあゝ。」

「ほ、保健室．．．に．．．。」

「あいよゝ。」

万が一にも欠席させる訳にもいかないしね。
グロッキー状態のツナ君を背負い、保健室に向かう。
そう言えば何だか体が熱い？

「ツナ君、もしかして風邪ひいてる？」

「う、うん．．．実は少しだけ．．．。」

「それならそう言ってくればいいのに。まあ今朝の状況じゃ言えないか．．．。」

言う暇も無かっただろうしね。

保健室に着く頃には、自力で歩けるくらいには回復した。
ドアを開けて、二人で保健室に入る。

「すみません．．．風邪ひいて、あの．．．熱があるみたいで．．．。」

「風邪くらいで休ませねーよ。」

「はあ!?!」

「え?」

随分厳しい保健医だね。

「つーか男に貸すベッドはねーんだ。女性はいつでも歓迎だがな。」

「ド、ドクターシヤマル!？」

振り返った男は、なんか無理矢理ダンディー気取ってそんな奴だった。

私と彼の目が、不意に合う。

「っ!!! どうしましたかお嬢さん? どこかお怪我でもしましたか?」

「へ?」

「なあっ!!!???」

突如として立ち上がり、私の左手をそつと握りながら優しく語りかける保健医。

態度の差があんまりにもあんまりじゃない?

「ええと・・・私は特にありませんけど・・・。」

「そうですね、それは良かった。貴方の様な美しい姫君に、傷でも付いたら世界の損失だ。」

「は・・・はあ・・・。」

「みーちゃんにまでナンパしてる!? 予想はしてたけど!! 少しでも何か何時もの時と違う?」

ツナ君は何やら相当困惑している様だ。

まあ私もだけど、さつきから顔が熱いし・・・。

だってあんな真正面から美しい姫君なんて言われたら流石に恥ずかしいって・・・。

「宜しければ、お名前をお聞かせ願いませんか？」

「あ、夜月満流……です。」

「おお、満流さんですか。貴方に相応しい上品な響きの名ですね。私はシャマルと申す者です、医者の方なので、お怪我をした際には何時でもお呼びください。たとえ世界の裏側からでも駆けつけましょう！」

「ど、どうも……。」

「やっぱりおかしいよ！！ シャマルどうしちゃったの!？」

ツナ君がシャマルさんとやたらに喋りかけるが、完全に眼中にないみたいで、反応しない。

「ところで満流さん、出会ってばかりで不躰だとは思つのですが……。」

「はい？」

「お近づきの印に、私にチューさせてくれませんか!!！」

うん、無理。

「嫌です？」

「へブウツ!!!!！」

ボディーブローをかまして吹っ飛ばす。

シャマルさんは机に激突し、痙攣しながら気絶した。

「やっぱり変わってなかったー!!!!？」

「もう、いきなりビックリしたよ。そろそろ時間だし、行くところだ。」

「え、いや。オレ熱が……。」

「さつきから元気じゃん。どうしても酷かったらまた連れて来てあげるから。」
「う、うん。」

壊れた机をそのままに、二人で校庭に行く。

丁度開会式が始まる五分前だったので、急いで列に並ぶ。

それではこれより、並盛中学校体育祭を開会します！

波乱の体育祭が、始まる。

第二十五話（後書き）

ちょっとシャマルのキャラを壊してみましたWWW

第二十六話

体育祭は順調に進み、A・B・C組の点数は越したり越されたりの繰り返し。

武君や獄寺君、了平さんの三人が目覚しい活躍を見せ、私達A組が現在トップである。

私自身も当然全力で取り組んでいて、出場種目では尽く一位を獲得している。

そんな訳でA組の士気は上々であり、私も気合を入れて競技に望んでいたのですが・・・

「・・・・・・・・」

借り物競争の課題が記された紙を持ち、私は立ち尽くしていた。ついさっきまでの自分を殴り倒したくなる様な後悔を感じながら。

雲雀恭弥。

手に持った紙には短くそう書かれていた。
なにこれ？ イジメ？

実は先程、私の前にこの紙を取った選手が突然泣きながらリタイアを宣言したのだ。

その余りの必死さに他の選手達も誰一人としてその紙には近づかなかった程に。

そんな光景を見て、一体何が書かれているのかが気になってしまったのが過ちだった。

手にとった私を、他の選手達だけでなく観客の人達までが見守っている。

その際にゴール出来そうなくらいに時間が経っても、誰も動こうとしなかった。

それ程までに気になっていたのだろう、私が動き出すのを固唾を飲んで見守っている。

「・・・・・・・・」

もはや、やり直しが許される空気じゃない。

ってどうかこれって、遠まわしに死ねって言ってる様なものだよね？

私はともかく、一般生徒に達成出来る物じゃないよ？

何でよりによって本人？ 雲雀恭弥の学ラン。とか 雲雀恭弥の腕章 とかじゃない普通？

いや、たとえそうでも言った瞬間殺られそうだけでも。

それでも生存率が0.001%くらいなら上がるかも知れないじゃん。

周囲からじれったそうな空気が伝わってきたので、仕方なく私は周囲を見て恭弥君を探す。

校舎側にある木の根元で寝転がっているのを見つけ、そこに向かって歩き出す。

周りから私の課題を議論する声が次々と聞こえ、一気に騒がしくなる。

少しして、誰かが

「もしかして彼女、雲雀さんの所に向かってない？」

と言った瞬間……音が消えた。

手に持っていた物を思わず落とす者。

注いでいるお茶が、コップから漏れていても固まったままの者。

何やら数珠の様な物を両手に巻き、ブツブツと何かを唱える者。
涙を流しながら、目の前で十字をきって必死に祈り出す者。

驚愕、絶望、恐怖、尊敬、畏怖。

あらゆる感情が360度全周囲から注がれている。

「恭弥君、ちよつといい？」

「……なに？」

声をかけると、瞑っていた目を眠そうに片目だけ開けて聞いてくる。

「いや、実はね？ 借り物競争の課題がなんと恭弥君なんだよ、ま
いったね？」

「ふん、それで？」

「ぶつちやけ恭弥君を私に貸してくんない？」

そう言つてを差し出す。

何故か後ろから黄色い声が多数聞こえるのは何故だろうか？

それに恭弥君が目を見開き、次ぎの瞬間にはムスツとした表情に変わった。

「よくそんな言い方出来るね、君は・・・。」
「へ？ 何かおかしい事言った？」
「はあ、別に・・・。」

そう言っただけで溜め息をつき、ゆっくりと身を起こす。
自分で起きるかな？ と思って手を降ろそうとしたら、その前に握られた。

「おや？」

「何してんの？ 早く起こしてよ。」

「あゝはいはい、了解。」

少し慌てながら手を引いて起こす。

そのまま恭弥君はゴールに向かって歩き出す。

手を繋いだまま。

「借り物が人の場合は一緒にゴールしなきゃ駄目なんだよ、知らないの？」

「うゝん、そんなルールがあつた様な？」

「早く行くよ、僕を連れて一位以外になったら咬み殺すから。」

「おっとそれは勘弁。じゃあ走ろう！」

「ちよつ・・・。」

体育祭中にけしかけられるのは遠慮したい。

繋いだ手を腕に抱え、一気に走り出す。

突然走り出したけど、流石に恭弥君は問題なく付いてくる。

気のせいかな黄色い声は何倍にも増えた気がするけど気にしない。

他にも何名か課題を無事に獲得し、ゴールに向かっていた。
しかし私達が接近してきたの見るなり「ひいっ！」と悲鳴を上げ、
横にずれて進路を明け渡してくれる。

なんて便利な人避け道具だ、初詣とかに持っていったら人混みに苦
勞せずに済みそう。

「なんか失礼なこと考えてない？」
「滅相もない？」

ラストスパートに入り、一気にスピードを上げる。
ゴールテープを二人で突っ切った瞬間、A組の歓声と、当社比百倍
の黄色い声が響いた。

「はあ……。」

「まああれだ、ドンマイ？」

先程、ぴよんぴよんでビリッ欠になってブルーなツナ君。

運動神経が無いのは知ってたけど、三年経っても壊滅的なままでに変わってない。

そこに獄寺君がやって来て

「なる程、そーゆーことスか。さすが十代目。」

「へ？」

「棒倒しに向けて体力温存っすね！」

「……え？……。」

なんて言った。

あれをそう解釈するんだ、何気に大物？

「バカモノ！！ 真面目にたらんか沢田！ A組の勝利がかかって
いるんだぞ！！」

いつの間に来たんだ了平さん？

「またテメーか！ うるせえぞ芝生メツト！！」

「なに？」

あ、キレた。

今ブチッていったし。

次の瞬間、お互いの顔にぶち込む二人。
ゴキヤツって鳴ったよ？ 大丈夫？

「効かねーなあ。」

「蝦が止まったかー？」

お互いに平然を装う。

変な所で似てるねこの二人。

「ヒヨホホホホ！」

突如聞こえる笑い声？ みたいな奇声。

全員が振り返ると、そこにはメタバ・・・・相撲やってそうな人がいた。

と言うかこの人確かC組の大将だっけ？

なんかさっきから妙に視線を感じると思ったら正体はコイツか。

今もチラチラと私を見てくる、キモイ、ウザイ、デブ。

「仲間割れかい？ ヒヨホホ！ 棒倒しはチームワークモノを言うんだよ〜こりゃA組恐るるに足りないね〜。」

「あ！」

「余計なお世話だ！」

「何だデメーは？」

「タダ見してんじゃねえよ？」

「『『すつこんでろ！！』』」

「ぶっ！！」

三人の攻撃で吹っ飛び、無様に倒れ伏すデブ。

気分爽快？

「この人C組の総大将だよー！」

「誰だろぅが殴る。」

「弱えー奴。」

「豚はブヒブヒ鳴いてりゃいいんだよ。」

C組の生徒達が騒ぎを聞きつけ、集まって文句を垂れてくる。了平さんと獄寺君が啖呵を切って突撃しようとした時、一人の生徒が血相を変えて走ってきた。

どうやらB組の総大将がトイレで襲われたらしい。

さらには目撃者によれば犯人はツナ君に命じられたそう。

いつの間にかやるようになったんだねツナ君、お姉さんは嬉しいよ！

303

「思ったより勝利に貪欲だな沢田、見直したぞ！」

「ナイス策略！」

「いよっ！ さすが我らの総大将？！！」

「違っつて！！！」

B・C両軍による批判。

それに挑発を重ねる了平さん。

アナウンスにより、昼休み中に協議が行われるそう。

私は了平さんに付いて行く。

「いや〜面白くなってきましたね〜？」

「ああ全くだ！ 沢田があそこまでお膳立てしてくれた以上、取るべき手段は一つ！」

「やっぱそうですね！ 私もそう思ってたー！」

「流石が夜月だ！ では行くぞー！」

「そうですね、勿論目指すは……。」

「B・C纏めてぶっ倒すー！！！」

それでは棒倒しを開始します。位置についてください！

「ひー！ こんなに数が違うの！？」

昼休みの協議の結果、お兄さんとみーちゃんのコンビにより、強制的に二対一の形になった。

お兄さんが提示し、みーちゃんが風紀委員の立場でゴリ押ししたらしい。

しかも相手の大将雲雀さんだし！ 勝てっこないじゃん！！

しかも何故か女子のみーちゃんが最前列でワクワクしてそんな顔で構えてるし。

それを見て、相手の陣営は最初は驚いたものの、段々とニヤニヤしてる奴まで出てきた。
ま、まさかアイツら、どさくさに紛れてみーちゃんの体を触ろうとか考えてる？

いや絶対そうに違いない！

みーちゃんはそんなの気にしないだろうし、ルールだからって割り切るだろう。

だけど、無性にムカついてくる。

大切な幼馴染みが、あんな奴らに・・・なんかよく分かんないけどとにかく嫌だ。

開始！

考えてるうちに棒倒しが始まった。

両生徒達がぶつかり合い、遠慮なしの殴り合いが始まっている。

そんな中、みーちゃんのいる所に大勢の敵軍の生徒が集まっていた。全員が一樣に先程の様な醜い笑みを浮かべている。

「みーちゃん！！」

「ふっはっはー！ 大漁大漁！ 死にたい奴からかかって来いや
くっく？」

「ふげぶうっ！！」

「ぎゃああああ！！！！」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

しかし、一人残らず瞬殺され、誰もみーちゃんの服にすら触れる事

は出来ていなかった。

中には加減無しに男の象徴を蹴り飛ばされたりする者も続出して。

今や全員の顔が恐怖一色に染まっている。

それは味方も例外じゃなかった。

地面に倒れている者の一部に、若干幸せそうな顔をした生徒がいた様な気がしたけど無視。

気が付けば自分の棒が揺れ始め、下を見ると組の生徒が・

「ひい！ もう来た〜！！」

足を掴まれ、落とされそうになる。

けど獄寺君がその生徒を蹴り飛ばして落としてくれた。

でけど、山本やお兄さんも余りの多さに攻められないでいるみたいだ。

その内に次々と多くの敵が登ってきて、顔や背中を蹴られる。

やがて棒がグラグラと揺れ始め、ついには倒れだした。

「ひいい！ 倒れる〜！！」

「しょうがねえな。」

どこからかリボーンの声が聞こえた。

その瞬間、鳴り響く銃声。

眉間を撃たれ、いつもの力が湧く感覚が襲ってくる。

「空中復リ・ボン・活！！ 死ぬ気で棒倒しに勝あーっ！！」

足元の敵生徒の顔を踏み台にし、生徒達の頭を次々と飛び移る。俺の意図を察してくれたお兄さん、獄寺君、山本が騎馬になり、それに乗って敵を蹴散らしていく。

「うわああ！」

「ありゃあ重戦車だ！」

「あんなの止められない！！」

順調に敵総大将に近づき、あともう少しと言うところで

「おい芝生メット！ てめー今足引つ掛けたろ！？」

「ふざけるなタコ！ 人の足を蹴っておきなから！！」

「んだとコノヤロー！！！」

「ちょ、お前ら！！」

互いに殴り合う二人。

バランスが崩れて落ちていく。

負ける！

そう思った瞬間、体が浮いた気がした。

「危機一髪ってねえ？」

「満流！？」

目を開けると、俺はみーちゃんに肩車をされている状態だった。

「おーツナ君にそう呼ばれるのは何だか新鮮だねえ？ 確かに普段

とは雰囲気が違うね。」

そう言いながら、再び走り出すみーちゃん。
俺の今の状態には何も聞かないみたいだ。

「ようし！ もうちょい、ツナ君！！ 後は恭弥君の所に一直線だ
よー！！」

「おうー！！」

相手の生徒達を吹き飛ばし、突っ込んでいくみーちゃん。
とうとう相手の棒の所までたどり着いた。

「行っけえツナ君！！」

「うおおおおお！！！！！！！！」

みーちゃん力も足され、勢い良く敵大将に向かって跳ぶ。

「待ちくたびれたよ、存分に咬み殺してあげる。」

「うおりゃあああ！！！！！！あつ！？」

攻撃しようとした瞬間、なんと死ぬ気の時間切れが訪れる。

「うそ〜〜！！？ ぶぎゃつ！！！！？」

トンファーで思いっきり殴られ、落ちていく俺。

「ツナ君！？」

「ぎゃあああ！？ 落ちるうううー！！！！」

情けなく叫びながら、視界の端でみーちゃんが走ってくるのが見え

た。

俺はそのまま真っ逆さまに落ちるが、直前にみーちゃんが俺の下に滑り込んで来た。

「きゃっ!!」

「グヘッ!!」

そのまま激突し、折り重なって転がっていく。

当然負けになるが、それよりもあんな勢いでぶつかった彼女の方が心配だった。

「いっつゝ。み、みーちゃん! だいじょうぶ?」

「うん、いたあ。なんとか平気かな?」

「っそ、そうっよっかつたっ。」

「? どうしたの? 何処かケガした?」

心配そうに聞いてくるみーちゃん。

しかし、俺はそんな場合ではなかった。

俺たちを心配し、駆け寄ってきた人達も全員が凍りついている。

何故なら、俺たちは今折り重なって倒れており、俺が上でみーちゃんが下だ。

ここまではいい、みーちゃんが庇って一緒に倒れたのだから、こうなるのも仕方ない。

俺の両手が、みーちゃんの胸を掴んで居なければ……。

こんな……どつかの漫画みたいなベタな展開になるなんて。

いや、最近の俺はそんな展開がしょっちゅうなんだけど。

それでもこんなラッキ・・・じゃなくてとんでもない展開はなかった。
周りからすれば、俺がみーちゃんを押し倒して胸を揉んでる様にか見えない。

事実、注がれる視線が段々と身も凍る様な物へと変わっていく。
体がビクツツと震える。

その際、思わず手にも力を入れてしまい

「ひゃあんっ!?!」

などと、途轍もなく可愛らしい声が響いた。

今頃になって今の体制になったみーちゃんの顔が、段々と赤くなっ
ていく。

うわあ、シャマルの時もだったけど、赤くなったみーちゃんって物
凄く可愛いなあ。

「あ、あの・・・ツナ君? 確かにツナ君はもう中学生だし、そう言
う欲求が出てくる年頃だっていうのは解るよ? でもその・・・
こう言うのはお互いの気持ちが大それたし、それにいきなりこんなシ
チュでなんて、余りにもハードルが高いって言うか・・・流石にア
ブノーマル過ぎるっていうか。べ、別にツナ君の趣味に文句を言
うつもりはないよ? でも、あの・・・私も一応・・・初めて・・・
だから・・・。」

何を言っちゃってんの!!!!!!??????

周りからの視線一気に氷河期に達した。

視界の端では、ハルが「ツナさんがそんなケダモノだったなんてー
ー！！！！」と号泣してるし。

母さんは「ツナ・・・いつの間にか大人になっちゃって・・・。」と
涙を流していた。

京子ちゃんはそのような母さんやハルにハンカチを渡している。

もはや俺は、女の子と公衆の面前で変態な行為に及ぶのが大好きな
ド変態になってしまった。

しかも聞き様によつては、そんなに拒んでない風な発言をされ。

しかもとんでもないカミングアウトまで披露した。

当の本人は、右手を口元に当て、その手首を左手で軽く握りながら
僅かに目元に涙を浮かべ、極めつけには体をもじもじと動かしてい
る。

そんな、文章ではかなり表現しづらいが、何とも可愛らしい仕草を
している。

いや、これは最早俗に言う萌える仕草と言える。

現に周りの男子達が、顔を真っ赤にして必死に鼻を抑えていたり。
何故か前屈みになって両腕を膝の間に挟んで悶えている。

それに比例するように、俺への憎悪と怒りと嫉妬の視線は爆増して
いった。

「おいおい、敗軍の大将が生きて帰れると思うなよ？」

「しかも・・・何て羨ま・・・羨ましいトラブル起こしてんだこ
の野郎！！！！」

言い直してやっぱり言い切った!!!?

「夜月さん・・なんて可愛いんだ！ 普段の快活で自由奔放な態度からは想像も出来ない弱々しさ!!」

「そして、拒絶はしなくともやはり拭いきれない羞恥心を必死に我慢しようとする健気さ!!」

「これぞ、まさにギャップ萌え!!!!」

「奪われた！ そう、奪われてしまった!!」

「まさに天使だ！ 並中に降臨した至高の女神だ!!!!」

もはや収集しきれない程に狂喜乱舞する男達。
女性達が若干引いている。

その隙に俺はみーちゃんの上から退いて、そっと起こす。

「ご、ごめんねみーちゃん!? 大丈夫?」

「う、うん平気。 私もごめんね? へんな事・・言っちゃって・・。」

「え? ああ、うんいいよ。 元々俺が悪いんだし・・。」

お互いが真っ赤になり、目を逸らす。

少しして見ると、丁度目線がぶつかり、また逸らす。

それが可笑しくて、二人で笑った。

【死ぬこの糞リア充野郎——————!!!!】

「ぎゃあああああああああああ!!????」

一瞬で取り囲まれ、リンチにされる俺。
みーちゃんは母さん達が非難させていた。

ほっ、よかった。

「自分の心配をしたらどうだい？」

「……え?」

聞き覚えのある声に、ギギギツと軋むような音を立てながら後ろを向く。

そこには、何故かどす黒いオーラを纏った究極の風紀委員長がいた。

「公衆の面前でウチの風紀委員に手を出すなんていい度胸だね。

それ免じて、徹底的に咬み殺してあげるよ。」

「それは……免じてないと思うんです……けど……。」

その日から、俺は全治数週間の怪我で入院。

さらには並盛全体で変態のレットルを貼られる事になった。

第二十六話（後書き）

黒曜篇までにどの話書こうかなーって迷ってます。

とりあえず今の所は

- ・入院の話
- ・正月の話
- ・雪合戦の話
- ・花見の話
- ・マフィアランドの話
- ・ビアンキの結婚の話
- ・夏祭りの話
- ・獄寺昇進の話

などを考えてます。

いや全部書くかは分かりませんがねwwwwwwww

万が一何か見てみたい話があったり、これはいらねえから早く黒曜行けやと思う方がいましたら、是非言ってください。

入院は既に書き始めているので、それ以降でお願いします。

それではm() () m

第二十七話

体育祭が終わり、ツナ君も退院して幾らか経った頃。草壁さんから、恭弥君が入院したと言われた。

思わず飲んでた紅茶を吹き出してしまい、掃除するのが大変だった。あの恭弥君が、と思ったものの、まあ人間誰でもそんな事は一度くらいあるよね。

しかし容態を聞いたところ、ただの風邪らしい。

・・・風邪くらいで入院するなよ紛らわしい。

そして、何故かお見舞いに行くようにお願いされ、現在こうして病院の受付にいる。

看護師に病室を聞いた瞬間、思いつきりビクツと驚かれた。

次に私の腕に風紀の腕章を見つけ

「貴方はまさか夜月満流さんですか！？ これは大変失礼しました
！！！」

と、何故か全力で謝られた。

さらにはその声を聞いた他の職員、果ては他のお客さんまで私を見てくる。

何故こんなに有名になったのかと聞いたところ、この間の商店街の一件が原因らしい。

風紀委員長に唯一異議を申し立て、それを通せる女の風紀委員がいると並盛中の噂になっていいるんだそう。

そして体育祭の借り物競争が決定的になり、私の名は恭弥君に次いで有名になってしまったらしい。

「おお、貴方が夜月さんですね？ 私はこの院長を務める者です。以後お見知りおきを。」

「は、はぁ・・・どうも。」

「雲雀君の病室に御案内します、どうぞ此方へ。」

そう言って歩いていく院長の後を追う。
もはや一人の客に対する対応じゃない。

苦情が来ないのが不思議なほどだと思う。

やがて一室の前で止まり、二・三回深呼吸してから慎重にノックする院長。

ビビりすぎにも程がある。

中から「誰？」、と恭弥君の声が聞こえてくる。

「失礼します。 夜月満流さんがお出でになっております。」

「ハ口々恭弥君？ お見舞いに来てやったよ～～！」

ドアを開け、中に入る。

そこには、パジャマ姿でベッドに腰掛ける恭弥君と、その足元に積まれた死体の山・・・もとい患者さん達の姿。

「やっと来たね。 遅かったじゃないか。」

「いやいや、聞かされたのが今朝だったし。 ていうか何したの？ それ・・・。」

「入院生活が退屈だったからね、ゲームに付き合ってもらってたの

さ。」

「ゲーム？」

「そう、ルールは簡単だ。ボクの寝ている間に音を立てたら、咬み殺す。」

それってする意味あるの？

結局寝てるだけじゃん、起こされたくないなら参加させなきゃいいじゃん？

適当に理由付けて咬み殺したいだけじゃないの？

「そ、そう……。今のところ勝者はいないみたいだね。」

「そう、皆弱くってね。」

「すみません。すぐに次の生贄を用意しますので。」

うおい院長、貴方今何て言いました？

完全に生贄って言ったよね？ 患者を助ける立場の人間が患者を冥府に送ってるよね！？

種を返して退室する院長。

入れ違いに看護師の人達が表れ、死体を運んでいく。

ちゃんと担架で運んでやろうよ、何でワゴンに乗せて行くの。

いや、乗せると言うより積んでるの方が正しい。

「えっと……。とりあえずリングゴでも剥こうか？」

「任せるよ。」

「ほーい。」

恭弥君がベッドに横になり、その脇にイスを持ってきて座る。

異様に積まれたフルーツ群の中からリンゴを取り、引き出しの中にあつたナイフで剥いていく。

シャリシャリと皮を剥く音が響く室内。

恭弥君は目を瞑つてはいるけど、寝てはいないみたいだ。

「いきなり入院したなんて聞いたからビックリしちゃったよ、只の風邪つて聞いた時は紅茶吹いちゃったし・・・。」

「へえ？ 心配したの？」

「そおりゃあするよ〜。逆にしない理由が無いし。」

「・・・そう。」

再び沈黙が訪れる。

だけど別に息苦しい類のものじゃない。

リンゴが剥き終わる頃、ノックの音が鳴ったので私がどうぞーと答える。

扉が開き、外から三名の患者が担架で運ばれて来た。

どうやら新しい患者・・・ではなく生贄が到着した模様。

運ばれてきた人達は、状況がよく解つてない様な表情をしていて、しかし恭弥君を見た瞬間に絶望に染まった。

それぞれが「助けてくれー！」とか「まだ死にたくない！」とか「もう騒ぎませんかー！！」とか言つて看護師達に助けを求め、だが、まるで何も聞こえていないかの様にテキパキと作業をこなし、終わった人から素早く退室していく。

この病院の職員には人命を救う精神を無くしてしまった人達しか居ないらしい。

生贄さん達は一樣にガタガタと震え、涙まで流して必死に目を合わせないようにしている。

「剥けたかい？」

「え？ ああうん、出来たよ。」

「そう、じゃあ食べるから頂戴。」

「了解？」

切り分けた林檎の一つにフォークを刺し、恭弥君の口元に持っていてく。

「はい、アーン？」

「……なにしてるの？」

「ん？ 食べさせてるんだけど？」

「皿に分けて頂戴って意味だよ。」

「理解はしてたけど、あえてこうした。 つかぶっちやけ一度や

つてみたかったり？」

「……はあ……。」

呆れたように溜め息をつく、失礼な。

女の子にアーンなんてしてもらえるのはリア充だけなんだよ？

現に今だって周りの患者さん達が驚愕の視線を送ってきてるじゃない。

「あつれ〜〜？ もしかして恥ずかしいのかなあ？」

「そんな訳ないでしょ。」

「じゃあはい、アーン？」

「……。」

ムツスとした表情のまま、口を開く恭弥君。
それにゆっくりとリンゴを入れて、口が閉じたら引き抜く。

食べ終わる頃にもう一度林檎を差し出すと、黙って口を開く。
その様子が可笑しくて、思わずクスツと笑ってしまった。

恭弥君がそれを見て、何故か驚いたように目を見開き、しかしすぐにムスツとした顔でそっぽを向く。
怒らせちゃったみたい。

ふと周りを見ると、患者さん達全員と目が合った。
例外なく顔が真っ赤に染まっており、だけど慌てたように布団に潜り込んでいった。

熱でもあるのだろうか？ 随分赤かったけど。
まあ辛くなったら自分でナースコールするよね。

「ねえ、君たち。」

「……は、はい！！？ なんででしょうか！！」「」

突然恭弥君が起き上がって患者さん達を呼ぶ。
即座に応じ、布団から飛び出す一同。

「ちょっとゲームしようか、退屈だからさ……。」

「ゲーム……ですか？」

「は、はい……喜んで。」

「ちなみに……どのようなの？」

流石に唐突だったようで、困惑する三人の患者さん。

「なに、至って簡単だよ。　ボクが今から眠るから、その間に音を立てたら・・咬み殺す。」
「「「ひいつ!!」「」」

トンファーを構えて脅す恭弥君。

既に三人は今にもチビリそうな位に怯えている。

「じゃ、始めるよ。　因みにボクは葉っぱが落ちる音でも目が覚めるから。」

それって普段どうやって睡眠取ってるの？
理論上人の住む世界では休めないんじゃない？

「それじゃ、お休み。」
「お休み、恭弥君。」

そう言った直後に、寝入ってしまった。
何気に疲れてたのかな？

何だかんだで一中学校の風紀委員長なんて次元じゃないくらいの仕事を毎日こなしてるんだよね。

風紀委員になってよく解るんだけど、学校にいる時の大半は仕事してるし。

むしろ授業はどうしたと思った時もあったけど、そもそも風紀委員は授業免除だし、学力そのものは学年上位らしいので何も問題はないらしい。

まあ授業免除って言っても全部免除なのは恭弥君と私と草壁さんの三人だけなんだけどね。

風紀委員の全員が成績優秀って訳じゃないし、例えそうでも授業に出なければ自然に落ちる。

だから、シフトに合わせてほんの一部だけだそうだ。

要は優秀な人程免除が出来るってこと。

それでも、草壁さんの様に律儀に授業に出る人もいるけど。

そして、少なくとも私は恭弥君が授業に出ているなんて聞いたことが無い。

つかそもそも恭弥君ってクラスは？ いや、それ以前に何年？

ともかく、恭弥君は生徒達が勉強している時間以上に仕事をしている訳だ。

とても中学生がこなす量じゃないだろう。

本人は大丈夫でも、知らない内に体に疲れが貯まっていたのかもね。

「お疲れ様・・・。」

そう言いながら、なんとなしに恭弥君の頭をそつと撫でる。

男の子なのに、まるで女の子みたいにサラサラだ。

撫で心地が良くて、何度も撫で続ける。

そこまでして、ようやく気づいた。

これ、もしかしくなくても起こしてしまうのでは？

よく見ると、周りの患者さん達がこの世の終わりみたいな顔をしている。

不味い、と思って恭弥君を見る。

「・・・・・・・・・・。」

「あれ？」

しかし無言。

特に何事も無く眠っているみたいだ。

全く起きる気配がない。

葉っぱの落ちる音で目覚めるのに、直に触れて起きないって……。

他の三人も、困惑しながらもホツとした表情を浮かべている。

「あ、あの……。」

「はい？」

起きない恭弥君を見て、大丈夫だと判断したのか、一人がおずおずと話かけてくる。

「最近噂になつてる夜月さん、ですよね？」

「あ……、まあ……はい。そうです。」

「や、やっぱり！」

私が肯定した瞬間、三人共がやけに明るい表情になった。

「噂に聞いてはいましたが、想像以上に美しい……。」

「ああ、女神が降臨したつてのは本当だった……。」

「ありがたやありがたや……。」

それぞれにガッツポーズしたり拝み出したりしてくる三人。流石に恥ずかしくなってきた。

何でこの町の人はこんな過剰な世辞をおくびもなく言えるのだろうか。。。

「と、ところで一つ質問なのですが。。。」

「な、なんででしょう?」

「その・・夜月さんは、雲雀さんの・・コレですか?」

「これ?」

手を小指だけ立てて見せてくる。

意味が分からなかったが、段々と理解してきて・・

「そ、そんなw。。。」

「・・ねえ、君達。。。」

「。。っ!!?!?」「」

答えようとした時、突如として聞こえた声。

聞いただけで不機嫌さがありありと感じ取れるその声に、三人は体を硬直させる。

「葉っぱが落ちる音だけでって言うておいたよね?」

「あ・・ああああ。。。」

「ひっ・・ひいひいひい。。。」

「あがつ・・ああががが。。。」

「なのに、呑気にお喋りするなんて・・随分余裕じゃないか。。。」

「

ユラリと起き上がり、静かにトンファーを構える恭弥君。

三人の震えは頂点に達し、鼻水やら涙で顔はグチャグチャだ。

した。

ツナ君がまた入院していたと知るのは、その翌日の事だった。
ああ後、草壁さんが必死の形相で何かから逃げるように走っていた
のを見かけた。

第二十七話（後書き）

ちよつとだけ雲雀とイチャつかせてみたWWW

そついやまだディーノや十年後ランボと会ってない（汗

その内にまゝぼちぼち絡ませます。

では（・・・）／

第二十八話

「う~~~~、眠いよ~~~~。」

「口より手を動かして。」

「う~~~~。」

応接室の中で、恭弥君と二人で仕事中。

二つの机に積まれた二つのチョモランマ。

毎度のことながら学生にやらせるような仕事じゃない物のオンパレード。

それだけなら、まだ良かったんだけどね。。。

「何で正月にこんな事せにやなんのか~~~~。」

「風紀委員だから。」

「答えになつとらんよ〜。」

そう、今はお正月の真っ最中。

おせち料理の季節、お雑煮の襲来する季節なのだ。

だと言うのに、何が楽しくて休日に学校来るばかりか仕事やらされなきゃならんのよ？

しかも早朝の四時に。。。

「何故によりによって早朝？ もっと日が高くなってからでも良いじゃん。」

「たまたまボクが早起きしたから。」

「。。。。え~~~~。」

なんか久しぶりにこのやり取りした気がするよ。
きつと恭弥君なら社会に出ても無双し続けるんだらうなあ。

草壁さんがまだ来ていない為、自分で紅茶を入れる。
ああ、やっぱり入れる人が違つと変わるね。

草壁さんの入れてくれた方が倍は美味しいや。
椅子の背もたれに寄りかかり、書類の山を見上げる。

チヨモランマから富士山までランクダウンはしたものの、まだ四時
間は掛かりそうだ。
そして、現在五時半。

本来なら間違いなく自宅で爆睡している頃だ。
因みに、現在私が住んでいるのは、並盛の唯一の高級アパート。

その名も ザ・ナミモリ〜ニヨ だ。

その最上階の部屋に住んでいる。
高級ホテルのスイートルームと見間違える程の広さと内装をほこる。
基本風紀委員以外は何の変哲もないこの町に何で建てたのかと問い
たい程の高家賃である。
ヴァリアー時代の収入と、旅の時にカジノで荒稼ぎした金があるか
らこそ住めるのだ。

しかも、オーナーに私が風紀委員である事を知られ、家賃が六割力
ツトされた。
いや、嬉しいけども・・・。

考えに耽っていると、電話が震え出したのでポケットから取り出す。

「おや電話……リボーン君？」

随分珍しい相手からだ。

連絡先を教えて欲しいと頼まれたのは結構前だけど、精々二・三度くらいしか来ない。

「もしもし？」

ちやおつす、満流。

「うん。明けましておめでとう、リボーン君？ 今年もよろしくね！」

ああ、よろしくな。ところで、今時間あるか？

「どうかしたの？」

実は今日ボンゴレ式ファミリー対抗お正月合戦つてのをやるんだ。オメエも参加するか？

「おお……対抗……合戦……何とも甘美な響き！ 是非とも参加します？」

わかったぞ。じゃあ川原の所に来てくれ、皆待ってるぞ。

「了解〜〜？」

電話を切ってポケットにしまう。

急いで着てきたコートを羽織り、身支度を整えるが

「どこに行くの？」

「おっ……っ……。」

そっぴやそっぴやでしたね。

すっかり忘れてました。

「えつとですね？ リボン君に誘われて今から合戦をしに行きます。」

「赤ん坊に？」

一瞬、恭弥君の目が光った気がした。

そう言えばリボン君の事気に入ってる感じだったっけ。

「合戦ってなに？」

「え〜っつと・・・簡単に言えばツナ君達のグループでお正月イベントをやる、みたいな？」

「ああ、そう。」

こっちには全く興味無い様子。

「と言うわけで、仕事は帰って来てからするのでヨロ！」

返事を待たずに駆け出す。

廊下の窓から飛び降り、中庭に着地。

そこを横切って反対側に行くと、生徒用の駐輪場がある。

その一番校門に近い場所に、一台分のスペースがハッキリと区切られている。

夜月満流様専用スペース

と書かれた板が屋根の所に着いている。

誤解しないで欲しいのだけど、これは何も自分でやった訳じゃないよ？

風紀委員の仕事とかで、私の登校時間は生徒の平均よりも早い。

尚且つ、いつもその日の気分で乗り物を変えて登校している。

なので大概の場合この場所が空いているので、使っていたらある日いつの間にか取り付けられていたのだ。

一度恭弥君に、アレはいいのかと言ってみた事はある。

しかし、彼は全く気にしていない様だった。

私としても特に損は無いので、それ以来遠慮なく使わせもらっている。

今日は普通にママチャリで来ていたので、鍵を差し込んでロックを外して乗る。

肌寒い風が前から吹いて、体の奥がブルツと震える。

やがて川原に着くと、ツナ君や獄寺君に山本。

着物姿の京子ちゃんにハルちゃんに了平さん。

それにリボン君と・・・・・・・・・・なんか黒スーツの人達がた~~~~つくさんいた。

「お待ちせ~~~~?」

「お、来たな。」

「あ、みーちゃん。」

「おせーぞ。」

「よっ、夜月。」

まっ先に気付いたのはリボン君とツナ君達三人。

声を聞きつけ、京子ちゃん達もやって来た。

「明けましておめでとう、満流ちゃん。」

「おめでとうです！」

「今年もよろしくな、夜月！」

「はい！ よろしくね？」

それぞれに挨拶をしていく中、私は皆の後ろにいた人影に気付く。黒服の人達ではない、背丈からして私やツナ君達と同年代。

向こうも私に気付き、此方にやって来た。

その瞬間、私は本当に稀にしか感じた事のない、本心からの驚きをおぼえた。

何故なら、そこにいたのは……。

「……………誰？」

「同じクラスだよ！？ 何度か話した事あったよ！！？」

「そうだったっけ？」

肩まで伸ばした黒髪の子、同じクラスらしいその子は涙目で訴えかけてくる。

それはさておき、この人が痛者である事が問題だ。

最近音沙汰が無くですっかり忘れてたけども、そんな奴らいたよね確かに。

そんな中、ツナ君がこっちにやって来て。

「みーちゃん。この子は千坂沙知ちさかって言うんだ。小学六年の時に俺のクラスに転入してきた子なんだ。」

「因みに一昨日から千坂もツナのファミリーに入ったぞ。」

「へえ〜。」

「うん、そういう事。よろしくね？」

そう言つて、手を差し出してくる。
自己紹介中もその人の顔を見て、必死にクラスの人物と照らし合わせた結果。

ある人物と合致した。

「あ、思い出した。」

「え、ホント!？」

そう、この人は確か

「325号。」

「なにそれ!？ どう言う認識したらそうなの!!？」

そうだ、転校初日に、私に対して敵意等の感情を向けて来なかった人。

まあ少しは大目に見てやろうかなあとか思つてた人だ。

そういや326号と327号はどうしてるんだろ？

アイツらつてツナ君と関わる為に転生して来たんじゃないの？

転校して来てから不思議な程にアクションがないから全然接触してないし。

さらに言えば最近駄神とも会ってないな、どうかしたのかな？

「ああごめんね？ 今のは気にしないで。 改めまして、夜月満流

だよ。 よろしく?。」

「あ、うん! よろしく!!--。」

私を手を握り返した瞬間、落ち込んでいた状態から一瞬で満面の笑顔になった32・・もとい沙知ちゃん。
なんか語呂悪いな。

「突然だけど、沙知ちゃんだと語呂悪いからさ、さっちゃんが良い？」

「全っ然良いよ！！ 私も満流って呼び捨てで良いよね？」

「いいよ〜。」

よし、さっちゃん固定成功。

「はっはっは、何だか賑やかだなあツナファミリーは。」

「あ、ディーノさん。」

「？ ディーノ？」

明るい声と共にやって来た金髪の外人さん。

整った顔立ちで、まさにイケメンと称されるだろう人物だ。

「紹介が遅れたな。俺はツナの兄弟子でキャバッローネファミリーのボスのディーノってんだ、よろしくな夜月。」

「ディーノさんですか。よろしくお願いします？」

「よし、そんじゃあ満流との顔合わせも終わったし、そろそろ始めるぞ。」

リボーン君の言葉と共に、ツナ君率いるボンゴレファミリー、ディーノさん率いるキャバッローネファミリーが別れる。

私は勿論ボンゴレだ。

「さっきも言ったが正月合戦はそれぞれのファミリーの代表が正月にちなんだ種目を競い合い、その総合得点で勝敗を決めるんだぞ。」

勝者には豪華商品、敗者は罰金一億円だ。」

「勝つても負けても恨みつこ無しだぜツナ。」

「はあ、なんでこんな状況に・・・。」

楽しんでるディーノさんに対し、乗り気じゃなさそうなツナ君。

新年早々幸が薄くなっちゃうよ〜？

「第一回はおみくじだ。」

「おみくじ！？ そんなんでどうやって競うんだよ！」

「簡単だぞ、大吉2点・中吉1点・吉0点・凶1点・大凶2点だ。」

「なんだそれ・・・。」

「オレに任せろー!!」

「!」

声に振り返ると、了平さんが自信ありげにおみくじの箱に向かう。

「オレは占いなんて信じぬ。何故なら運命は自分で切り開くものだからな。そしてこれがオレの、やり方だア!!!!」

そう言つて手を箱に突っ込み、一気に大量のおみくじを取り出す。

言ってる事はカッコイイのに何てせこい真似をするんだらう。

しかも何だかんだで誰も文句を言わないのは何でだらう？

目指すは大量得点だと言つておみくじをリボン君に渡す。

「大凶、大凶、大凶、凶、大凶、大凶、大凶、凶、凶、大凶、
7点。」

「ええー!?!」

余りの運の無さに、驚愕するツナ君。

流石に私も、と言うより皆が驚いている、ってか哀れんでいる。

可哀想な子を見る様な視線が了平さんに集まり、当の本人も相当シヨックを受けている様子。

そんな中、キャバツローネ代表の人が普通に一枚引いて

「私は中吉。」

「1対 17」

リボン君の淡々とした結果報告により、了平さんにトドメが刺された。

何処からともなくボードが出てきて、点数が張り出される。

「京子・・・甘酒持ってこい・・・。」

「もーお兄ちゃん。」

「何やってんだテメエは！！」

獄寺君が怒って突っかかるものの、それすら相手にする余裕がないようだ。

「第二試合は羽根付きだぞ。 勝てば20点、三回勝負で最大60点取れるぞ。」

「ここはスポーツ万能、山本頼むよー！！」

「ん、任せろって。」

「えっと、じゃあ私は二回戦に出よっかな？」

ツナ君が武君に縋り付き、さっちゃんも出場する。

「みーちゃん！ 三回戦出てくれない？」

「ん？ いいよ〜？」

「よっしゃー！ これで何とか逆転出来るかもー！」

踊りだしそうな程に喜ぶ。

だが、キャバツローネの代表は元テニスプレイヤーのマイケルさん。

「何で元プロがマフィアにいのー！！？」

リアクションが大きいなあ、一億円がかかっているからか。

他のボンゴレ側の皆は獄寺君以外はリボーン君の冗談だと大半が思っているみたいだし、温度差は否めないよね。

「試合開始。」

「ほい。」

手始めに軽く打つ武君。

「いきなりチャンスボール！ スマッシュ！！！」

流石は元プロ。

素人相手にスマッシュ使うなんて、プロのプライドなんてとっくの昔に消えた様だ。

しかし相手は武君。

羽根付きは素人でも運動神経は随一だ、得意の野球フォームで打ち返す。

一瞬、喜びに染まるボンゴレ勢の顔。

しかし、予想外に羽は遙か彼方に飛んで行き、星になった。

「あ……。」

「アウト。」

「わり。」

苦笑いで謝る武君。

沈黙に包まれるボンゴレだが、その空気を払拭せんとさっちゃんが元氣よく前に出る。

「さあ！ くよくよしても仕方ないって！！ 次行こ次！」

「そうだぞ、二回戦始めるぞ。」

キャバツローネからも代表が出て、二回戦が始まる。今回はプロではないようで、互角の闘いをしている。

「頑張れ！ 千坂さん！！」

一億円の影響で、必死に応援するツナ君。

それが関係したかは知らないけど、さっちゃんは見事勝利を納めた。

しかし、何とも言えない空気が漂っている。

いや京子ちゃんやハルちゃん何かは褒めているんだが、その他が・

別に何かが悪かった訳でもなく。強いて言うなら無さ過ぎた。

一回目と比べて何の変哲もない無難な勝負。決着だって相手が空振ったので終わりだ。

さしてコメントが出てこないんだよね。

「満流ー！ 勝ったよー！！」

「ああ・・・うん、おめでとー！！」

何とか返事をしながら、羽子板を持って相手の前に立つ。
私の相手はどうやら黒人男性らしい。

「因みに、コイツはマイケルと同じ元プロのジョニーだ。」

「またプロ!?」

「コイツはマイケルよりも強いぜ?」

「カットバスゼー。」

素振りしながら身振り手振りで此方を挑発してくるジョニーさん。
いや、そんな安い手には引つ掛からんけども。

「じゃあ三回戦開始だ。」

鳴り響くホイッスル。

先攻はジョニーさん、最初から勢い良く打ち込んで来る。

私もそれに加速させる打ち方で返し、それをさらに加速させて返される。

それを二度、三度と繰り返し、今や羽根付きの領域を超えた攻防が繰り返されていた。

「す、すごい・・・。」

「羽がブレて見えるぜ・・・。」

両陣営のボスがあんぐりとして見ているのが横目で見える。
板で羽を叩く時の甲高い音が鳴り響き続ける。

そんな中、ふとジョニーの顔が目に入る。

何故か異様にニヤニヤしていて、羽を打つポイントがイジメかと思う程に左右に別れる。

「ちよつ、なにそのドヤ顔？ キモイんですけど・・・」

「オウ、ナンデモナイゼ？ ソノママオモイッキリフリツツケテクレヨォー！」

「振る？」

何を？ と思いつつ、ジョニーの視線を辿る。

その視線は、羽には無く私に向けられ、もつと言えば私の顔の十センチ程下で

「・・・殺ス・・・」

全力疾走で羽の行く先に辿り着き、思いつき振りかぶる。

全身のバネを利用し、全体重も加算した状態で渾身の一撃を羽に叩き込む。

「死にさらせ〜？」

先程までカンツカンツと音を出していた羽が、今度はパキヤァン！

！と音を出しながら一直線に爆進。

小さく風を巻き起こしながらジョニーの眉間にクリーンヒットし、碎け散った。

「アウチツ！！！」

余りの衝撃に、ジョニーは上体を仰け反らせながら後ろに吹っ飛ばす。

二メートルくらい後ろに飛び、ドサツと音を立てて転倒。

そのまま沈黙した。

【・・・・・・・・・・・・・・・・】

全体に訪れる沈黙。

私は打ち出した後の構えをゆっくりと解き、ツナ君の元へ行く。

「殺っちゃった？」

小さく舌を出して言い放った。

「殺っちゃった？　じゃないよ！？　それと死んでないからね！！」

「今のは満流の負けだぞ。　これで41対3だ。」

「そんなー！？」

頭を抱えて叫ぶ。

負けた身なので何も言えない。

いや、でも後悔はしてないけどね？

むしろ気分はとて晴れやかだ。

そしてその後も、百人一首、福笑い、凧上げ、すごろく、様々な種目せ競ったものの、惨敗。

百人一首はハルちゃんが開始直後に足を痺れさせ、福笑いはランボちゃんがおふざけで、凧上げはイーピンちゃんが飛ばされかけ、すごろくは獄寺君がマスの目の課題を達成出来ず。

まあ何とも見事な迄の連敗である。
ツナ君は絶望し、叫び始める始末。

そして現在。

「ボス・何すかこのハンマーは？」

「わかんねえ、餅を食った事はあるんだが・・・」

私達は餅を作っていた。

何があつたかと言うと、余りのワンサイドゲームに見兼ねたディーノさんが、ハンデを付けると言ってきた。

大人対子供だと不利だと言う事だったが、リボン君は今までの点数を全部チャラにしてしまった。

そして最後の種目として、それぞれが美味しいアンコ餅を作るとの事。

これに勝った方が勝利だそうだ。

そして双方餅作りを開始した。

しかし、キャバッローネは作り方が分からず、頭を抱えている。

対して此方は、順調に作業が進んでいる模様。

今度は此方のワンサイドゲームになってしまったが、まあ勝てれば
いいか？

そして私はと言うと、役割が無いのでランボちゃんやイーピンちゃんと一緒にマル秘と書かれた遮り用の・・・布？ みたいなのを支えている。

「満流〜、ランボさんあの飴欲しくなつたもんね！」

「ああチュツパチャプスの事？」

「そう、そのチョツプの事だもんね！」

「そっかく、じゃあハイ。今日はキャラメル味？」

「やったもんねー！」

嬉々として包みを剥ぎ取り、くわえる。

そんなランボちゃんを、イーピンちゃんがジーンツと見ていた。

「ん？ イーピンちゃんも欲しい？」

「っ！・・・ん・・・ほ・・・しい。」

まだ片言ながらも、欲しいと発言した。

「そっか、じゃあイーピンちゃんにはイチゴ味？」

「あ・・・り・・・がとう！」

ペコペコ頭を下げながら飴を舐める。

そんな光景を見てみると、土手の方からビアンキさんが降りてくるのが見えた。

「あ、ビアンキさん。 こんにちは。」

「あら、満流じゃない。 明けましておめでとう、今年もよろしくね。」

「ハイ、よろしくお願いします！ それで、その・・・ビアンキさんも餅作りに参加するんですか？」

「ええ、餅はもう出来そうだから、餡子を作るわ。」

「そう・・・ですか、頑張ってください。」

「勿論よ、リボーンに食べてもらうんだから。」

そう言って餡子を作ってる京子ちゃん達の方に向かうビアンキさん。

これは、どうやら引き分けかな？

もしかしたら最低でも味の採点が出る分、ディーノさん達が勝つかも？

「満流〜！ 羽根付きで遊ぶもんね〜！」

「はいはい？」

ランボちゃんに急かされ、端っこの方で軽く打ち合う。

案の定、ビアンキさんの参加した餅は悲惨な進化を遂げ、人が食える代物じゃなかった。

リボン君が寝たふりをした事により、ツナ君とディーノさんに食べさせようとするビアンキさん。

両陣営のボスが逃亡したことにより、結局合戦は引き分けとなりましたとさ。

第二十八話（後書き）

ちよつと最後の方は適当になってしまったWWW

感想等、お待ちしてます（＾|＾）／

第二十九話（前書き）

更新するのすっかり忘れてました。

すんまっせんm | | m

第二十九話

「さっさっさささささあぁあぶうううういいいいいい！
！……！」

現在地は並盛町のザ・ナミモリ〜ニヨの最上階の一室のコタツの中。
つまりは私の家のコタツの中。

正月も過ぎ、雪が降り積もりつて寒さも激化の一途を辿る。

もはやコタツ無しでは生きられない季節となっている並盛町である。
ただっ広い部屋の中、中央にポツンと置かれたコタツの中で猫の如
く丸まって入っている。

「はぁあ、コタツは人類史上最高の癒やし道具な気がする。 冬の
間だけ……。」

自分以外は誰も居ない部屋で呟く。
段々と虚しくなっているのは此処だけの話。

そんな中、コタツの上に置いたケータイが、カタカタと震えだした。

「誰〜〜〜〜？ ふんっ！ うううう〜〜〜。」

寝転んだ状態で精一杯手を伸ばし、しかしギリギリ届かずに腕がプルプルと震える。

仕方なく上半身を起こし、素早く引つ掴んで再び潜り込む。

「は〜〜いもしもし〜？」

ちやおつす満流。オレだぞ。

「ああリボン君？ どうしたの〜？」

特徴的な声と挨拶だから良いものの、言葉だけならオレオレ詐欺だよ。

今度言つといた方がいいかな？

ああ、実は今度は雪合戦をやるつもりと思ってな。満流も殺るか？

「雪合戦・・・だと・・・!?」

思わず硬直してしまう。

楽しそうなイベントに参加したいと言う思い、しかしクソ寒い外に出たくないと言う願望。

相反する想いの葛藤に、しばし沈黙してしまった。

どうした？ 来ねえのか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・いや、行くよ。何処に行けばいい？」

並中だ、なるべく早く来てくれ。

「了解？」

電話を切り、コタツから出て素早く厚着に着替える。

最初は断ろうかと思った。

だがしかし、次の瞬間にとてつもない予感を感じたのだ。

何故か行かなきゃならない様な、行くことが当然の様な。

行かないと何か駄目な様な、もう脅迫概念に近い何かを感じ、了承した。

別に嫌な予感じゃ無いんだけど、行かないと存在が否定されそうな

気がした。

寒さで頭が逝ってしまったのだろうか？

疑問に思いつつも、最後に厚手のコートを羽織り、私は部屋を出た。

「うっさぶっ、てか何でこんな日に学校で雪遊びなんだよ!？」

庭でランボやイーピンとやればいいだろ!!!」

「奴らも来てるぞ。」

「がハハハハハハ!!!」

リボーンに言われて見てみると、楽しそうに走るランボとイーピンの姿があった。

すると、後ろからも雪を踏む音が聞こえた。

「待ってよツナ兄〜。」

「フウ太！」

つい最近から家に住んでいるフウ太が来ていた。

誰が一番大きい雪だるまを作るかをランキングしようと考えているみたいだ。

まさか、今日一日子供らのお守り!?

つうか既に日曜のパパ状態になってるし・・・。

「十代目！」

「？」

「こつちつす。」

「あつ、あれ！ 皆!?! こんな所で何やってんのー!?!?!」

声の方を向くと、そこには獄寺君と山本、ディーノさんやお兄さんまでいた。

「今日はコイツらに呼ばれたんだぞ。」

「え?」

「俺達もたまにはチビ達と遊んでやろうと思ってな。」

「え!?!」

「考えて見たら十代目はチビ達の世話ばかりですからね。」

「こんな日ぐらい手伝うぜ。」

「水臭いぞ、沢田！」

「み、皆・・・。」

こんなに俺の事考えてくれてたなんて、やっぱり皆は大人だよ〜。

「お待たせ〜〜!」

「寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い。」

「あ、千坂さんに・・・み、みーちゃん?」

振り返ったそこには、元気よく手を振る千坂さん。

そして、恐らくみーちゃんだと思われる、前進をマフラーでぐるぐる巻きにした何かがあった。

頭部らしき部分に僅かに隙間があり、そこからみーちゃん特有のライトグレーの瞳が覗いているのが見えた。

「も、もしかして二人も手伝いに来てくれたの?」

「うん、そう! 満流とは校門の前でバッタリ会ったんだ。」

「わだじは・・・リボンぐんに・・・呼ば・・・れ・・・て・・・。」

こっちにも伝わりそうな程にガタガタと震えながら話す。

そう言えば昔から寒いのは苦手だったっけ。

「え? リボンが?」

「ぞう・・・ゆぎがつぜん・・・じにぎだ・・・。」

「はい?」

何て言ったの?

ああそうか、雪合戦しに来たのか。

へえ〜そうなんだあ、雪合戦なんてするのかあ。

「って!?! 雪合戦!?!?」

「そうっす! やっぱやるなら雪合戦っすよね。」

「燃えそうだな！」

「かつてー雪玉つくるか。」

「合戦！ なんと面白い響き！！！」

前言撤回！

この人たち子供だー！！

その後、何故か鎧姿になったリボンが考えたチーム分けによって二つに分かれる。

俺と山本とフウ太にみーちゃん、そしてイーピン。

向こうはディーノさんと獄寺君と千坂さんにお兄さん、ランボだ。獄寺君が唯一不満を上げたもの、結局はそのままやる事になった。

それぞれが雪玉や塹壕（身を隠したりするアレ）を作る。しかし、みーちゃんは先程から座り込んで震えているだけ。

首の辺りにチームの印である白いマフラーが追加されただけだ。

「みーちゃん？ そろそろ出てこない？」

「さむいさむいさむいさむいさむい……。」

「おーい……。」

ひたすら寒いと連呼するだけ。

このままでは戦力外は避けられないだろう。

「おいおい夜月、そんなに寒いんなら動いた方がいいぜ？ じっとしてるから体が冷えるんだよ。」

塹壕を作っていた山本がやって来て、至極もつともな事を言う。

「ねえ、そう言えば君って誰？」

「え？ ボクはフウ太だよ、ツナ兄から話は聞いてるよ、ミチ姉^{ねえ}！」

「おお！ 何か新鮮な響き！ フウ太だっけ？ よろしくね？」

「うん！」

自己紹介が終わった途端、すぐに打ち解けあつた二人。

こう言うすぐに人と仲良くなる所は相変わらずだなあ。

リポーンにもうすぐ始めると言われ、塹壕の後ろに隠れる皆。

みーちゃんはフウ太を抱き締めたままだ。

「こうしてないと動けない。」

いや、動けても手が使えないじゃん・・・。

頑として放そうとしない。

フウ太も嫌ではないらしく。むしろ自分から身を寄せているくらいだ。

別にちょっと羨ましいなんてこれっぽっちも思っていない。

それはさておき、雪合戦はレオン争奪戦だそうだ。

三十分間レオンを奪い合い、最終的に持っていた方の勝ち。

「んじゃ、始めるぞ。」

映画でしか見たことの無い様な戦国時代風の笛の音が鳴り響き、雪合戦が始まった。

しかし、だれも全く動こうとはしない。

「今出ていったら集中砲火だかな。」

「迂闊に近づけないね。」

「いや、そうでもないみたいだよ？」

「え？」

みーちゃんの言葉に疑問をおぼえるも、すぐにそれは解決した。お兄さんがいきなり現れ、レオンの所に向かっていったんだ。

「極限に攻めずして勝利は掴めん!!!」

「まあ了平さんらしいっちゃんらしいよね。」

「ははっ、んじゃ俺らは定石通りにいくか。」

山本が得意の野球フォームで玉を投げる。

もの凄い勢いで飛んでいく雪玉、しかしお兄さんが繰り出した拳にあっさりと碎かれる。

「そんななまくら玉、この極限ストレートの前ではマシユマロ同然!!!」

「笹川さんも凄い・・・。」

「さすが常時死ぬ気男・・・。」

「かあっこい〜？」

「んにやる〜、まだいくぜ!」

「極限連射^{ラッシュ}!」

負けじと次々に投げる山本。

だけど全てが打ち落とされていく。

俺達も必死に援護して投げ込んでいたけど、それも纏めて落とされる。

段々と押され始め、ヤバイと思った時、イーピンが飛び出して行った。

お兄さんを抑えている間にレオンを取りに行くつもりらしい。
ディーノさんが雪玉を投げようとするが、部下のいないディーノさんは運動音痴なので明後日の方向へ飛んでいく。

獄寺君が投げけてきても、餃子拳で撃ち落とすイーピン。

「ほうほう、凄いねイーピンちゃん。こりゃ私も負けてらんないね？」

「あれ、みーちゃん？ 何処行くの？ っていうかフウ太なしで動いていいの？」

「さすがに温まってきたからね、こっそり回り込んでレオン取って来るよ。」

「おっそうか、頼むぜ夜月。」

「頑張つて、ミチ姉！」

「あいよ〜？」

ニカツと笑ってホフク前進で移動していった。
これで何とか勝てるかな？

相手の注意を俺たちを集めるため、より一層雪玉を投げていった。

ツナ君から離れ、迂回しながら進んでいく。
と思ったが、さっきから微かに妙な臭いがしている。

なんだろうと思って辺りを見回すと、何やら淀んだ空気が漂っていた。

どうやらイーピンちゃんが繰り出している技が原因らしい。

前に聞いた餃子拳かな？

しかも運悪くツナ君達の場所が風下だったため、被害があつちに集中しているみたい。

遠目で見ても気の毒な程にグロッキーな顔してるし・・・。
そのせいで弾幕が薄くなって平さんがレオンに近づいている。

「ヤバッ！ こっちも行かなきゃ。」

慌てて走り出す、私の方が近かったから先に取れそうだ。
あともう少し、という所で・・・

爆発した。

「ぎゃふんっ！...！」

「うお！ 無念！...！」

互いに吹っ飛ばされる私達。
地面に思いつきり突っ込んだ後、爆風で飛ばされた雪が上に落ち、完全に生き埋め状態になった。

外から微かに聞こえる声を聞いてると、やはりというか獄寺君の仕業だったらしい。

どうやらツナ君サイドに寝返ったらしいことはわかった。

了平さんを阻止するためとはいえ、巻き添えをくらってしまった訳だ。

まあこっそり動いたせいではあるんだけどね？

っていうか、ヤバイ。

雪が服の中まで入ってきたせいでまた寒くなってきた。

一刻も早く脱出しないと。

「ふんっ！ よおいしょつとお・・・。」

力の限り踏ん張り、雪の中から這い出した。

しかし、目の前の光景に硬直する。

えっですすね？

簡単に言っと、いつの間にかビアンキさんとかディーノさんの部下が加わり。

ランボちゃんとイーピンちゃんがビアンキさんと三人で第三勢力になっただけだった。

あ、あとリボーン君の衣装がより古風になってた。

などと考えていると、遂に寒さが限界値を超えつつあった。

「寒い寒い寒いいゝゝ！！　フウ太も見つかんないし、走るしかない！！」

そう言う訳で全力疾走。

吹っ飛ばされたせいでかなり距離があり、現場に着くまでに殆どの選手がリタイヤになった。

残りはどうやらツナ君だけらしい、途中でガ〇ラの横を通り過ぎた気がするけど気にしない。

「やつほゝツナ君？　よく生き残れたねえ。」

「みーちゃん！？　今迄どこに？」

「獄寺君の爆弾で吹っ飛ばされた。」

「……あゝゝゝ……。」

引きつった顔で苦笑いを浮かべるツナ君。

段々とレオンに近づき、もう少して捕まえられる。

そう思った所で、誰かが前方に現れてレオンを拾い上げた。

何奴と思っただけで見てみれば、そこには恭弥君の姿。

「何これ？　あとそのデカイ亀。」

「雲雀さん！？　いや、あの……。」

「お、恭弥君。」

恭弥君の手に乗ったレオンの頭から、WINと書かれた旗が出てきた。

「せっかくの雪だ、雪合戦でもしようかとね。まあと言っても、群れる標的に一方的にぶつけるんだだけ。」

あ、なんかそれ面白そう。
今度不良相手にやってみようかな。

「ここで会ったのも何かの縁だ、今日は君を標的にしようかな。」
「え、そ、そんな！　ってかレオン投げてくんのー!？」

振りかぶって投げる動作に入る恭弥君。
とっさに何かを掴んで盾にするツナ君。

こらこら、イーピンちゃん盾にしちゃダメでしょう。
しかも何か額に何か浮かんでない？

あれってもしかして話に聞いた何とか爆弾って奴？

「と思ったけど、風紀委員の仕事がたまってる、またね。満流も行くよ。」

「え？　私も？」

「君、何回電話したと思ってるの？　家に直接入っても居ないし、携帯は置きっぱなしだし。」

「・・・あ。。。」

そう言えば携帯がポケットに無い、忘れたみたいだ。

「それ以前に何で恭弥君は私の家の場所を知っているのでしょうか？」

「さあ、早く行くよ。」

「無視かい。」

さっさと歩いていく恭弥君に、渋々ついて行く。
校舎に入った辺りで、何やらもの凄い爆発音が鳴り響いた。

「どうやら今度咬み殺しておいた方がいいみたいだね。」

ツナ君、ご愁傷様。

どうか生きていてね。

応接室に入り、自分の机を見るとお馴染みのエベレストが、今回は二つ立っていた。

思わず重い溜め息を吐きながら、紅茶を入れる。

因みに後日聞いたところ、優勝者はリボン君だった。

第三十話（前書き）

いや〜最近ちょつとずつお気に入りとかアクセス数が増えてきて嬉しい限りです！！

楽しいと言う感想も頂いてテンションが振り切ってます！

相変わらず更新ペースがチグハグな私ですが、これからも宜しくです。

ではごっご。

第三十話

春、それは出会いと別れの季節。

ある者は一つ上がった学年で新たな友人作りに励み。

ある者は小学から中学、または中学から高校、もしくは高校から大学、或いは社会へと進み、新たな環境に期待と不安を抱えて身を投じ。

時には別れ、そして出会う。

常に新しい何かを感じ、知っていく。

そしていつの日か、この満開に咲き誇る桜の下で

共に歩いていく、あの人と

「そんな幻想、何もしなくてもその内現実にはぶっ壊されるけどね」

手に持ったPOPを操作しながら、私は目的の場所へと向かっている。
忌まわしき季節がようやく過ぎ去り、段々と暖かくなってきたこの頃。

リボン君から連絡が入った。
今度はお花見をするとの事。

季節に沿ったイベントにホント敏感だよねえ。
青春を謳歌してるって感じ。

快く了承し、スケボーに乗って移動している。
勿論POPやりながら。

しかし、実は今、少し困った事が起こってるのです。
それは

花見するから今から来てね。

「マジか……。」

そう、我らが風紀委員長さんからもお誘い、ではなく命令が下った
のです。

しかも聞けば場所が同じ。

これは、もしかしなくても鉢合わせフラグでは？
いや、むしろ既にルート確定してると見ていい。

どうやら新学期の前に血を見る事になりそうだ。

「了解、今から行きまゝす。」
急いでね。

「そんなに早く私に会いたいだなんて、大胆だね」
……

「あり？」

既に切れていた携帯をしまい、スケボーを加速させる。
何度か警官に呼び止められたが、持ってきておいた風紀委員の腕章

を見せると一発解決。

なんかもうタダ飯食つてもこれ見せればそれで済みそうな気がする。事件現場とかに行つて「風紀委員だ！」とか言えば入れそうな気がする。

スケボーで道路を走る中、POPのバトルが佳境に入る。内容は、皆さんご存知のモンオンである。

新しいのつてガンランの新アクションが堪らなくカツコイイんだよねえ。

特に最後の振りかぶりから出す一撃は良い、あれで雑魚とか吹っ飛ばせるとスカつとする。

そこらかさらに一発ぶち込めるんだから最高だね！仲間とか吹っ飛ばすのに手間要らずで楽しいよ。

復讐しにきた人もゴミの様に返り討ちなんだから笑いが止まらない。この前アド○ツク・パ○ティーでやり過ぎちゃって追い出されたけど、私は気にしない！

まあ音声のやり取りもしてたから私の爆笑ダダ漏れだったしね。向こうがぶち切れるのも無理はないよ。

いやあ、あの時は腹筋がはち切れるかと思つたよ。モノプロの突進を回避した人を送り返して上げた時の悲鳴は最高だったなあ

槍の人が私を吹っ飛ばそうと突進してきたけど、甘いね、私のは放射型さ。

射程では完全に上、タイミングさえ間違わなければ負けは無い！

まあそんなこんなでネチケツトがん無視のプレイを続けたわけですよ。

だってゲームだよ？ 自分を抑えててどうするのさ。

そんな事を思い出している内に、ようやく目的地に到着。

スケボーから降りて桜の下を歩いていくと、見えてくるお馴染みの学ラン。

「やっときたね。」

「いや、これでも早い方だと思う。」

なんせ移動中に連絡されたんだから。

「ところで、さっきから向こうの方が騒がしくてね。今から咬み殺しに行く所だったんだ。」

「ああ、さいですか。」

十中八九ツナ君達だろう。

バトルするのはいいんだけど、花見もしたいしなあ。

恭弥君と二人で歩いていく。

すると予想通り、ツナ君達だった。

傍には風紀委員が倒れており、既にやられた後の様だ。

「何やら騒がしいと思えば、君達か。」

「雲雀さん！？ あっ！ この人風紀委員だったんだ！？」

遅いよ、今更気づいたの？

っていうかこの町でリーゼント頭の学ランなんて風紀委員以外にいるの？

「僕は群れる人間を見ずに桜を楽しみたいからね、彼に追い払って貰ってたんだ。」

さすが並盛最強の唯我独尊。

町民の花見を邪魔することは風紀の乱れではないのか。

一体彼の風紀の基準はどうなっているのだろう。

「でも君は役に立たないね。 後はいいよ、自分でやるから。」

「い、委員長……。」

「弱虫は、土に帰れよっ。」

「ガハッ!!！」

トンファーで容赦なく殴り飛ばす恭弥君。

まあ今回はあの人の自業自得だね。

風紀委員に入ったならこの程度は覚悟してなきゃだし？

仕事が出来ない子には逆らう権利は無いのです

「っ！ 仲間を!？」

「見ての通り、僕は人の上に立つのが苦手な様でね。 屍の上に立つてる方が落ち着くよ。」

「っ!!！」

恭弥君の言葉に、背筋が凍った様に顔色を悪くするツナ君達。

その時、近くの木陰から人の近づく気配があった。

「いやー絶景！絶景！　いいねー花見つてのは。　か〜〜っ、やだねえ男ばっか・っ!?!?」

「ドクターシヤマル!!」

「まだいやがったのか!!　このヤブ医者ヘンタイ！　スケコマシ!!」

やけに突っかかる獄寺君、いつの間にかリボン君が木の上に座っていた。

リボン君が呼んだらしい、さつきから私を見てワナワナと震えている。

「赤ん坊、会えて嬉しいよ。」

「オレ達も花見がしてーんだ。　どうだ雲雀、場所をかけてツナがゲームをすると言ってるぞ。」

「何で俺!?!?」

「いいよ、どうせ暇を潰すつもりだったしね。」

またたく間に対戦が決定した。

なんか途中からリボン君の思惑通りって感じだねえ。

面白いからいいけど。

その時、突然誰かに右手を握られた。

びっくりしてそちらを見ると、いつの間にか移動していたシヤマルさん。

「お久しぶりですね、満流さん。　お変わりありませんか?」

「え、ええ・・まあ。　シヤマルさんも相変わらずな様で・・。」

「あっはっは、満流さんに会えたので日頃の疲れなんて吹っ飛びま

したよ。」

「そう……ですか……。」

二度目だけでも全く慣れない。

この人は二重人格かなにか？

ツナ君達と話している時と違いすぎて対応しづらいんだけど。

「ちよつと……。」

「あん？ なんだよ噂の暴れん坊主じゃ……。」

「消える。」

「のへっ!! ふぎゃあ————!!!!!!」

振り向いた瞬間にトンファーで殴り飛ばされる。

先程の風紀委員よりも遥かに吹っ飛び、木に激突して動かなくなつた。

「あの程度は自分で処理しなよ、なに言い寄られてんの？」

「え、だって特に何もしてないし。」

「……あつそ。」

こころなしか、若干不機嫌そうにツナ君達に向き直る恭弥君。

あれ？ 何かしでかしてしまつたかな？

私がナンパされている間に、ルールは決まったらしい。

ツナ君達三人が、順番で恭弥君と闘う。

先に膝を着いた方が負けだ。

一番手は獄寺君。

「テメーだけはぶっ飛ばす!!」

「いつも真っ直ぐだね、わかりやすい。」

そういてトンファーを振り下ろす。

しかし、予想外にもそれは躲された。

「!」

「へえ。。。」

流石に驚く恭弥君に、思わず声をだす私。

その隙に獄寺君は恭弥君の周りに爆弾をバラ撒き、そのまま横を通り抜ける。

「果てな。」

言葉と共に一斉に起爆する。

おお、なんかカツコイイ!

めっちゃ決まってたし!

「ええっ! マジで雲雀さんを!?!」

「あのスピードと柔軟性は強化プログラムで身に付けたものだぞ。」

なんだって!?

そんな面白そうな事やってたの?

呼んでくれれば良かったのに。

「で・・・? 続きは無いの?」

煙が晴れ、無傷の恭弥君がトンファーを構えた状態で姿を表す。

「なっ！ トンファーで爆風を！？」

「二度と花見が出来なくしてあげよう！」

「くっ！！」

思いつきり横雑に振るわれたトンファーをしゃがんで避ける獄寺君。その際、膝が地面に着いて負けが決まった。

「獄寺は膝を着いたからストップだぞ。」

「やだよ。」

「ああ！」

リボン君が待ったをかけるが、当然それでは止まらない。思わず叫ぶツナ君。

しかし獄寺君に当たる直前、武君が刀で防いでいた。ちよ、遂に武君まで戦闘集団の仲間入り？

しかも刀なんて、カツコイイじゃないですか。ジャパニーズサムライ目指すんですか？

「次、オレな。」

「山本のバット！？ 何物騒なもん渡してんだよー！！」

「これならやり合えそうだな。」

「ふーん、どうかな？」

一度武器を弾き、続いて攻撃を仕掛ける恭弥君。武君は持ち前の運動神経でそれを捌いていく。

おお、本当にそこそこやり合えてるねえ。

「ボクの武器にはまだ秘密があつてね。」

「？ 秘密？」

その瞬間、トンファーと接触している刀を捉える様に鉤かぎが飛び出す。そしてそのまま力づくで引っぱり、武君は体制を崩して転がされてしまう。

これで残りはツナ君だけだ。

「ねえ恭弥君？ それ一度でいいから中の構造見せてくれない？」

「やだよ。」

「え〜。だってそのトンファーの仕掛けて物理的に無理があり過ぎるよ？ もはや神秘に近いつて。」

「どうでもいいよそんな事。」

そつちが良くてもこつちが良くないんだけど。

「復リ・ボーン・活！！ 死ぬ気で雲雀を倒す！！」

出た、ツナ君のカオスマード。

訳ありっぽいのであえて聞いたりしてないんだけど、やっぱり変だよな。

なんかこの半年だけでもかなりの奇行に走ってたし。

クラスの人達曰く、ツナ君は時々純愛の女神が降臨するんだそう。

一体いつからそんなシャーマンみたいな事が出来るようになったのやら。

「レオン!!」

ツナ君が呼ぶと、レオンが姿を変えてツナ君の手に納まる。
その姿は

「はたき？」

「し、渋い。」

そう、はたきだった。

何故に掃除用具。。。

ツナ君のはたきと、恭弥君のトンファーがぶつかり合う。
はたきの部分が、恭弥君の頭にかかっている。

「うおおおお!!」

「君は変わってるね、強かったり弱かったり。よく解らないから、

殺してしまおう。」

「だあ!」

恭弥君の猛攻にはたき一本で五角に渡り合うツナ君。
ある意味凄い。

しかし、そんな時間も長くは続かない。

やがてツナ君の頭にある炎みたいなのが萎み、消えていった。

「いっつ!! わっ、ちょ! 待ってえ!!」

容赦なく殴りかかるようにする恭弥君。

ツナ君は思わず目を瞑って頭を抱える。

しかし殴打の音は聞こえることはなく。
何と恭弥君が膝を地面に着いていた。

「あれ？ 恭弥君？」

「おお。」

「やったぜ！」

「え？ うそ！ 俺がやったのー！？」

「違うぞ、奴の仕業だぞ。」

リボン君の指さす先。

そこでは先程殴り飛ばされたシャマルさんが、頭を振りながら起き上がっている所だった。

「おーいて、ハンサムフェイスに傷が付いたらどうしてくれるんだい。」

「ドクターシャマル！？」

「シャマルは殴られた瞬間にトライデント・モスキートを雲雀に発動してたんだぞ。」

「あの酔っぱらいがそんな器用な事を！？」

「悪いが、くぐり抜けて来た死線の数が違うんだよ。」

詳細は解らないけど、どうやらシャマルさんの仕業らしいね。

「へえ、恭弥君に気付かれずに仕込むなんて、シャマルさんって結構凄い？」

「！ いえいえ、私の技など満流さんの美しさに比べれば大した事などありませんよ。」

「またシャマルが変になったー！！？ しかも言ってることが違うしー！」

私に近づき、恭しく低頭するシャマルさん。
武君も獄寺君もかなり驚いている様子。

「では満流さん。勝負も決まった事ですし、私と一緒に桜の下で語り合いませんか?」

「え〜っ・っど〜。」

その時、シャマルさんの後ろでユラリと一つの影が立ち上がる。

「雲雀さん!?!」

「約束は約束だ。精々桜を楽しむがいいさ。」

そう言つてフラフラしながら歩いていく恭弥君。
あれ? よく考えたら、私何もしてなくない?

どこかの某・龍玉アニメの名前がヤで始まるキャラみたく解説役になつてしまつていた!?

「あの、恭弥君を送つたらまた来ますので、それでは!」

「待ってますよー! 満流さー!ーん!ー!」

シャマルさんの言葉を背に、恭弥君の所まで走る。

覚束ない足取りで歩く姿を捉え、すぐさま横に並んで体を支えてあげる。

「花見をしなくていいのかい?」

「こんな危なっかしく歩いてる人は放つていただけません。 気になつて楽しいめないよ。」

「・・・そ。」

それつきり会話は無く、恭弥君の家まで送り届けた。

途中何度も一人で良いと言ってきたが、頑として譲らなかつた。

だってホラ、あんまり早く行くとシャマルさんに絡まれるし。

ピアノキさんが行動不能にしてくれる時間帯までは・・・ね。

第三十話（後書き）

そついや満流の転校を恭弥が何故把握していなかったのか？

と言つ疑問を以前書くと言っておいて書いてなかった事に気付いた

（汗）

なので追加しておきました。

まあ態々見直して貰う様な内容じゃないので気にしなくても良いです
wwww

次回もお楽しみに！！

初公開！ 夜月満流イラスト！・・・・・・・・やっちまった・・

タイトルの通り、満流のイラストとなります。

あくまで私の中の満流なので、想像を壊したくないと言う方は回れ右してください。

それでもいいさ！ と言ったださる方はどうぞ

> i 3 5 3 4 8
— 4 4 4 9
<

大体こんな感じですよ、ハイ。

ヴァリアー服で殺し終わった後の風景ですね。

フードと仮面は難しいので省きました、満流の顔をお見せするのが目的なので。

全然違うじゃないか！　と思われた方すいません。

可愛くもなんともねえじゃん、と思われた方、ゴメンナサイ。

これが作者の限界なんで大目にみてください。

出来たら感想なんかくれると嬉しいです。

勿論批判以外でお願いします・・・。

初公開！ 夜月満流イラスト！・・・・・・・・・・やっちまった・・（後書き）

後悔はしない、例え批判されようとも・・

第三十一話(前書き)

更新遅れてすみませんm | | m

第三十一話

「と、言う訳で南の島に行ってきます。」

「君はいつも唐突だね。」

現在応接室。

いつもの如くチヨモランマを制覇し、草壁さんが入れてくれた紅茶を飲んでいる。

因みに、少し前に私達は無事に二年に進級しました。

ツナ君率いるファミリー五人は見事に同じクラス。

今年も面白くなりそうだなあと楽しみで仕方ない。

そんな中、例によってリボン君から先程電話がかかりまして

南の島に行くぞ。

と言われました。

段々とスケールがデカくなってきてるよねえ。

そのうち月に行くぞとか言われそうでワクワクするよ

まあそんな訳で勿論行くと答え、こうして一応報告しておく。

「とまあカクカクシカジカな訳よ。」

「赤ん坊か、君はよくあの連中と群れるよね。」

「そりゃあだつて友達だもん、遊ぶのは当然じゃない？」

「・・・そう。」

そう言つて仕事に戻る恭弥君。

なんか反応が急に冷めた様な気がする、気のせいかもだけど。

「あ、勿論恭弥君も大事な友達だよ」

「……いきなり何？」

何故か睨みつけて来た。

ヤバイ、なんかやらかした感が……。

だがしかし、ここは敢えて攻める！

「だから……心配しなくても恭弥君に寂しい思いはさせないよって事　あ、じゃあ夏に祭りとか一緒に行こっか？」

「咬み殺されたいの？」

今度は視線だけじゃなくて明確な殺気が室内に溢れる。

ありゃ、ちよつちやりすぎちゃった。

ここらで止めておいた方がいいかな。

「ゴメンゴメン。もう止めるからそんな怒らないでよ、それじゃあ私は明日の準備あるから今日は帰るね」

席を立ててカップに入っていた紅茶の残りを一気に流し込む。

カップを洗って棚に戻し、机の後片付け。

書類をそれぞれの場所にしまつて終わり。

その間も恭弥君は無言で仕事をしていた。

「それじゃあバイバイ。」

「……」

無言です。

どうやら完全に切れさせてしまった様子。

こりゃあその内ご機嫌取つとかないと後で面倒になりそうだなあ。
どうしようかと悩みながら、私は応接室を出た。

「おおおお〜、すっごい豪華客船!」
「数多くのマフィアが投資したからな。」
「見た目に反して実情はドロドロって事ね。」
「ガハハハハ! おっきいもんね!」
「お・・きい・。」

翌日、私、リボン君、ビアンキさん、ランボちゃんにイーピンちやんは南の島行きの船の前にいた。
ツナ君は私達とは別に手続きしている為、少し到着が遅れるそうだ。

ランボちゃんといーピンちゃんを両手に抱いて船に乗る。
内装も外観に劣らず煌びやかで、周りはスーツやドレスで着飾った
大人で溢れていた。

「私達つてやや浮いてるね〜。」

「気にすんな、そうでなくとも浮いてるぞ。」

「だよね〜。」

見た目小さい子が三人で親御さんらしい人が居ないもんね。
ピアンキさんは大人だけど保護者にはちよつと見えないし。

「んじゃあちつと早い飯にするか。」

「了解」

「ええ。」

「ご飯だもんね！」

「わか・た。」

リボーン君の先導に従って歩いていく。
進んでいく内に食欲をそそる臭いが漂って来た。

やがてたどり着いた場所で、リボーン君が入口の所に立っていた人
と一言二言話すと、テーブルへと案内される。

それぞれ席に着いて、ナプキンで暴れ出したランボちゃんがリボ
ーン君にシバかれたりしながら、料理が運ばれるのを待った。

「あゝ食べた食べたゝゝ　満腹ゝゝ。」

運ばれた料理を綺麗に平らげ、一息つく。
ランボちゃんなんかはお腹を膨らませて床に寝転んでいる。

リボン君は何処かに行ってしまった。

何でもそろそろ来るから準備があるそう。

来るって、ツナ君かな？

奈々さんと二人で来るって話だし、一緒に食べれば良かったかも。

「えー！ みーちゃん!!?」

「あれ？ あ、ツナ君。 やっほゝゝ」

突然聞こえた大声はツナ君だった。

隣に奈々さんもいて、笑顔で手を振ってくる。

反応からして私が来る事は知らなかったみたいだね。

「これってみーちゃんが？　って！　食い倒れて寝てる奴いるし！
！」

「アホ牛ったらママンが居ないって教えたら泣き出してね。」

「ってか何でビアンキもいんの!?!」

「もう帰って来ないって脅したらこの子まで泣き出して散々よ。」

「イーピンまで!?!」

ビアンキさん・・・夕子悪いよ・・・。

なんてとんでもない嘘ついてるの・・・。

そして、気付けばツナ君の後ろにはほぼ全裸のリボーン君がポーズを取っていた。

コスプレ好きだねえ、相変わらず。

「ルネツサンス。」

「服着ろ!! っーかどこから入ってきたんだよ!」

「正面からだぞ、正々堂々ガードマンを倒してな。」

「んな!?! 倒して!?!?」

え? なんだって?

たしかちゃんと正式に入った筈・・・。

リボーン君と目が合い、アイコンタクト成立。

いつものツナ君弄りって訳ね。

お茶目と言っか、ツナ君からしたらたまったもんじゃないだろうけど。

そうしている内に何人かの船員の人達が来て、ツナ君に不審人物がいないか聞いてくる。

咄嗟に知らないと答えると、別の場所へと向かっていった。

そして、リボーン君がこのままでは船を纏めて下ろされると更にツナ君を追い詰める発言をしていく。

狼狽えるツナ君に、ピアノキさんが心配ないと告げる。
その言葉に若干の期待を寄せるツナ君だが

「俺達はヒットマンだぞ？ ガードマンを消す。」

「それ間違ってるー！ー！ー！ー！」

ツナ君、そろそろオチを読めるようにならなきゃ。

彼らと自分との圧倒的な価値観の違いを認識しないと。

いや、それだと反応がつまらなくなるから今のままでいいのか。

「そんなじゃあ私もガードマン狩りに行きますか？」

「え！？ みーちゃんまで！？ 勘弁してー！ー！ー！ー！」

「ふはははは、やめて欲しければ私を見つけてご覧なさい！」

全力疾走して離脱する。

後ろでツナ君が「待ってー！ー！ー！」とか叫んでいたけど。

いやー久しぶりにツナ君弄りすんの楽しいなあー。

最後にやったのは転校してきた時だったから、半年以上してなかった訳だ。

風紀委員の仕事とか忙しかったからな。

初日だけならいざ知らず、何で毎回チョモランマを持ってくるのか・
。

あれって私が来る前もあつたんだよね？

くどいけど本当に中学生の仕事じゃないよ。

町長とか市長だかの人は何やってんの？
バカンスでも行ってる途中なの？

だったら帰ったら必ずシバく。
主に私の過激労働の恨みを晴らす為に。

そんな事を考えてる内に、随分深い所まで来てしまったみたい。
周囲に人影は無く、薄暗くなってきた。

どうやら船員などが主に利用するフロアのようだ。
そこらかしこに関係者以外立ち入り禁止の文字がある。

物珍しさに進んでいく。
部屋の中に入らなければそんなに問題は無いよね。

見回っていると、何処からか鳴き声がある。
そう、泣き声じゃなくて鳴き声。

人じゃない他の動物の声だ。
声を辿っていくと、そこには貨物室があった。

ブヒブヒ聞こえてくるから豚っぽいね。
きっと食用だろう。

死にゆく定命の家畜……か……か……か……ぶっ
そんじゃあ一目見ておこうかなあ。

「おっじゃま〜しま〜す」

「なっ!?!? なんだ夜月かよ。ビックリさせんな。」

「え? なして獄寺君?」

誰かいるのは解ってたけども、まさか知り合いとは。
あ、まさか……

「豚の飼育員でも始めたの？」

「ちげえよ！！ 十代目の行く所に右腕たる俺がお供するのは当然
だろうが！」

「まあそれはいいとしてえ、何でこんな所にいるの？」

ツナ君の近くに行けばいいのに。

「俺は不法乗船してつからな、船員に搜索されてんだよ。」

「アンタだったんかい……」

「それに……」

「それに？」

「姉貴がいるからな……」

「……あ……」

そう言えば苦手なんだってね。

つつか見ただけで腹痛が起るとか、最早トラウマでしょ。

「そっかあ。じゃあ黙ってるから頑張ってるね。それほど長い時

間はかからないってリボン君が言ってたから。」

「おう、サンキューな。」

「いいって〜。あ、そう言えば一ついい？」

「ん、なんだ？」

前からちよい引つかかってたんだよね〜。

良い機会だからサッパリ解消しちゃおう

「獄寺君だけ名字呼びなのちょっと違和感あるからさあ、これから隼人君って呼んでいい？　ってか呼ぶね」

「なんだよそりゃあ・・・まあ別にいいけどよ。」

「え、ホント？　正直そんなに好かれてないって思ってたんだけど。」

初対面から敵意丸出したったからね。

隼人君は誰にでもそんな感じだけど、最初のドンパチでむしろ嫌われてる方だって思ってたのに。

「まあ最初はな。でもよ、十代目と一緒にいる所見てたら、なんつうかとにかく悪い奴じゃねえってのは分かったんだよ。十代目も、お前と居る時は本当に楽しそうだしな。」

「・・・そつか・・・」

本当にツナ君の事はよく見てるんだね。

普段の行動は八割がた空回りしてるけど、大切に思ってくれてるのは間違いない。

リボン君の影響なのかなあ。

段々と人を惹きつける何かを身に付け始めてる。

何だかんだで、ツナ君もやっぱりボンゴレの血統なんだね・・・。

いつか戦う時とか来るのかな。

来るんだろっとなあ・・・。

「隼人君、これからもツナ君の事よろしくね。右腕さん」

「あん？　んなこと当たり前・・・っ！？　っだ・・・っつうんだよ。」

「ん？」

どうしたのさ、いきなり顔背けて？ もの凄いドモリっぷりだったし。

なんか前にもこんな事なかった？

そう、あれは確か恭弥君が入院した時の事だ。

あの時の恭弥君と殆ど同じ反応な気がする。

「どうしたの？」

「べ、別に何でもねえよ！ いいからさっさと行け！」

「え〜？ ホントにいい！？ 何か耳赤くなってない？」

「部屋が暑いだけだったの！！ いいから行け！！」

「もう、分かったよ。 向こうに着いたらどっか回るうねえ〜。」

言いながらドアをくぐり、廊下に出る。

背後から「ああ。」と返事が返って来たので、私は上機嫌に皆の所へと帰って行った。

いかのミニマムサイズ。

ちょうどリボーンと同じだ。

見た目も赤ん坊であり、リボーンの知り合いらしい。

そんな赤ん坊、コロネロと言っらしい。

コロネロに、俺は今絶賛スパルタ訓練を受けていた。

この島に着いた後、リボーンに言われて入島手続きをしに行った。

そこでは招待状が必要らしく、当然持っていない俺は試験を受ける事になった。

よりにもよって賄賂を渡す実演をしるなんて言われた時は泣きたくなかった。

確認するまでも無く、勿論不合格。

罰として、俺はこのマフィアランドの裏に連れていかれ、ここにいる訳だ。

要は再チャレンジする為の訓練を受けると言うこと。

そんな訳で、今こうしてスパルタ訓練を受けている。

死ぬ、マジで死ぬ。

さっき母さんやランボ達は海で楽しそうに遊んでたし。

意外な事に獄寺君やとみーちゃんが一緒にアトラクションを回ってた。

いつの間に仲良くなってたんだろっ、あの二人。

前はあそこまでじゃなかったのに。

まあ、いい事なんだけど。

「ボケつとすんなコラ！」

「ぎゃふっ！！！」

後頭部を思いつき蹴られた。

うつ伏せに倒れ込んで頭を抱える。

いつもながらサイズ度外視な威力だ。

世の中ってこんな赤ん坊が他にもいるんだろうか？

悪夢だ、そんなの。

とにかく、今はこの地獄を乗り切る事が最優先だ。

早く終わってくれ〜と祈り出した、まさにその時。

大きな揺れと共に、爆発音が響いた。

「ん？」

「どうした？」

「ああいや、なんでもないよ。」

少し先で立ち止まって此方を振り返っていた隼人君に追い付く。ここ、マフィアランドに着いてからもう何時間経っただろう。

最初は奈々さん達と海辺で遊んでいたんだけど、隼人君と廻る為に抜けてきた。

探し初めてから、この広い場所で探すのは困難では？ と思っただけ、ラッキーな事にすぐ見つかった。

それからジェットコースターやウォーターライダーなど。

色んなアトラクションを楽しみ、そろそろ昼食でも食べようかと話していた時だった。

399

突然何か説明し難い感覚に襲われ、思わず足を止めてしまった。

これは何というか、直感とかよりも明確な認識だ。

「何か・・・来る？」

そう、まさにそうだ。

何かが来る、近づいてくる。

この感覚は覚えがある。

これは・・・・・・・・

その時、突然の爆発音が響く。

「なんだ!？」

「何かのイベント、じゃなさそうだね。」

一気に混乱の渦に巻き込まれる。

いくら全員がマフィア関係者とは言え、必ずしも戦闘経験者じゃない。

奈々さんの様に誰かの家族であるだけで入れる。

ただの子供も、老人でも。

パツと見ただけでは本当に只のテーマパークにしか見えない。

だからこそ、彼等の動揺は凄まじかった。

係員の誘導を聞いた途端、そちらに向かっに一目散に駆けていく。

私達は素早く横道に入り込んだおかげで巻き込まれずに済んだ。

「どっかのマフィアが襲撃してるみたいだよ？」

「クソっ！ 早く十代目と合流しねえと!！」

「マフィアの構成委員が避難所とは別に集まっているみたい、多分そこに行けば会えるよ。」

きつと迎撃準備とかしてるんだろうなあ。

指揮系統とかで揉めそうな気がする。

「よし、ならそこ行くぞ!！」

「私はちよつと別行動していい？ 敵がどんなのかも知りたいし、足止めくらいは出来るだろうし。」

「そうか。 まあオメエなら心配いらねえだろうが、無茶すんなよ。」

「了解 隼人君も程々に頑張つて〜。」

「おう！」

それぞれ別の方向へ向かって走る。
ヤベツ、何か久々に暴れられそうな予感！？

「リゾート気分には飽き飽きしていた所よ！ スリルがねえ。」

「やっぱりマフィアは殺し合わねえとな！」

「久々に銃をぶっぱなせるかと思うとワクワクするぜ！」

なんなのこの人達ー！！？

今、俺はマフィアランドの象徴らしいマフィア城にいる。

沢山のマフィアの人達が集まり、攻めてきた敵マフィアを迎え撃つらしい。

だけど、むしろこの状況に喜んでいる。

しかもどのファミリーが指揮をとるかで喧嘩し始めたし。
やっぱりマフィアの世界にはついて行けない・・・。

「十代目！ ご無事でしたか！」
「獄寺君！」

人混みを掻き分けてこっちにやって来る。
周りのマフィア達が迷惑そうに睨んでくるし！

「おい、紛らわしいぞガキ！ 十代目とか変なあだ名付けんじゃねえ！」

「あだ名じゃねえ！ 沢田さんはボスだコラ！」

いや、対抗しなくていいからね？
素直に引き下がってくれていいから！

ついでに十代目は俺も止めて欲しいんだけど。

「ほお、どこの馬の骨のファミリーかな？」

「ボンゴレで文句あるかあ！」

次ぎの瞬間、広間全体に動揺が走った。
多くの視線が俺に注がれる。

「あれが、次期ボンゴレ・・・」

「ゴツドファーザーだ・・・」

なんか、無性に嫌な予感がしてきた。

先程言い合っていた内の一人が、突然深々と頭を下げた。

「これはとんだご無礼を！」

「俺たちの大将は決まったな。」

第三十一話（後書き）

予想外に長くなってしまったWWW

今回は後半と、夏祭りまで一気にいきます。

黒曜編まで、もうすぐです！

ではまた次回。

第三十二話

ほんの数十分前までは多くの人々の楽しそうな喧騒に包まれていたマフィアランド。

今となつては銃撃と、爆音と、逃げ遅れた人の悲鳴が響くのみ。

島にいたマフィア達が各地で応戦しているものの、満足な備えがある訳でもない彼らは圧倒されるのみ。

向こうは十全な装備に、戦艦からの支援砲撃まであるのだ。

そんな、一部の者達が諦めの感情を抱き始めた戦場の中で

「あつはつはつは〜！ 死にさせ〜い？」

「ぎゃあああ！！」

「ぐっはあああ！！」

ものつそい良い笑顔で敵を蹂躪している悪魔がいた。

どこから持って来たのか、手には二メートル程の鉄パイプが握られている。

両端がひん曲がっていることから、そこらのガレキからもぎ取って来たのだろう。

銃弾が飛び交う戦場を、微塵も臆することなく突っ走って行く。

ヘルメットの上から相手の頭をカチ割り、防ぐ為に掲げられた銃器ごと腕をへし折る。

一人一人が丁寧に五体のいずれかを壊され、戦闘不能にされていく。

「やっば〜い、楽しくて手が止まんな〜い？」

まるで母親に新しいオモチャを買ってもらえた子供の様だ。
それが返って相手の恐怖心を煽り、徐々に敵が逃げ出して行く。

「に、逃げるー！！！」

「化けもんだ！ 殺されるー！！！」

「むっ、何と失礼な！ ギリギリ生かしてあげてるのに！」

逃げた者の前に回り込み、意識を刈り取っていく満流。

本当なら即座に殺すところだが、今は殺人を犯す訳には行かない。

「ホントさあ〜あ？ ものすっごい溜まっちゃってたからさあ〜。
いっぱい楽しませてよあ〜？」

ちろりと唇を舐める。

久しく感じていなかった感覚が胸の奥から沸き上がり、抑えるのが
一苦労のようだ。

自然と、息が荒くなる。

鼓動が激しくなる。

体が火照って仕方がない。

本当はもっとやりたい、やりたい、殺りたい。

それでも我慢する。

我慢して我慢して我慢して我慢して我慢して。

いつかきつと、何もかもぶちまけた時は最高に気持ちいいだろうな
ああ。

そう自分に言い聞かせ、今は出来る範囲で楽しむ。目の前の獲物を狩り続ける。

そして周囲の敵を一掃し、一息ついて空を仰ぐ。

「ふうー……ちよつとスッキリしたかなあ……」

まだ敵は大勢いる。

それでも、もうすぐ島にいたマフィアが一斉に反撃に出るだろう。

獄寺がいることで、殲滅戦は圧倒的に有利になる。

いざとなればリボンもいる。

楽しめるのは後僅かだ。

満流は数秒だけ目を閉じて、耳を済ませる。

なるべく近く、出来るだけ多くの敵がいる場所を探す。

そして、明らかに戦場には不釣合いな音が動いているのを感じた。

「これって何だろ？　なんか人以外の生き物が動いてるって感じ……」

数瞬だけ思考する。

だがすぐに結論を出し、謎の生物がいる方向へと走る。

「わかんないなら見れば済むってね？」

沸き上がる興奮を適度に抑えながら、満流は森の奥へと消えて行った。

「何だ！」

突然、前から数人の人が吹っ飛んで行き、前方では叫び声が聞こえてくる。

「何だ！？ 何かいるぞ！！」

「ふぎゃー！」

勢い良く降ろされ、いや、落とされた。

痛みに呻きながら前を見る、

すると、茂みから大きな影が出てきて、また数人を空高く放り投げた。

そして、その影の前に小さな影が立っているのが見えた。

他の敵とは違う柄のヘルメットを被ったチビだ。

そう、まるでリボンやコロネロの様な。

「奴はカルカツファミリーの軍師、スカル！」

「え！ あの小っこいのが！？」

「間違いない、あの紫色のおしゃぶりは、アルコバレーの証。」

「アルコ・・・バレーノ？」

また知らない単語が出てきた。

勘弁してよ。

「アルコバレーノとは虹。そしてマフィア界にいる最強の赤ん坊の事を指すんだ・・・。」

「はあ？」

最強の赤ん坊って……。

まあ、確かにリボーンは赤ん坊の中じゃ最強だろうけど……。

きっとそう言う意味じゃないような気がする。

皆が銃を連射するが、後ろにいた大きな影が弾いた。

ようやく影の姿が見えるようになる。

それは、全身のいたる所に鎧を纏ったタコだった……。

って！ タコ！？

「スカルは巨大な鎧ダコを操ると聞いた事がある!!」

「夢だ！ 夢に違いない!!」

必死に目を擦ってもタコは消えない。

またもや多くの人がタコに投げられる。

「さあ、次はどいつだ。」

「ヒイッ！」

「何だ、まだそのタコ食ってなかったのか？ きっとつめーのに。」

「！」

「あっ！」

突然聞こえた声に振り向くと、ついさっきお昼寝状態になったリボーンがいた。

「やっと起きたのかよりボーン！ こっちは大変だったんだぞ!？」

「な・・なんでリボーン先輩がここに?」

「ちやおつす。」

「先輩!? またリボーンの変な知り合いかよ〜〜!!!??」

あといつたいたいどれだけ変な奴に会わなくちゃいけないんだ!?
もうちょっとマシな知り合い居ないのかよ!

リボーンが久しぶりに一杯やろうと誘う。

が、命令を受けているから無理だと言われた。

ああ、やっぱりダメか。

「お前いつつも誰かのパシリだな。」

「うるさい！ お前だけだ、俺をパシリにするのは!!! 舐めやが
つて！ 許さんぞ！」

「リボーン!？」

タコに掴まれるリボーン。

銃を撃つも、手に掠っただけでタコに防がれる。

「左手を・・・さすが早撃ちだな。 少し油断した、だが片手があれば十分だ、潰してやる！」

そう言っって手の片を握るように閉じる赤ん坊。

タコの手も締めまり、リボーンが銃を落とす。

「どうだ！ 俺はもう昔のスカルではないんだ、死ねリボーン！」

ぎゅっと手を閉じる。

しかし、タコは何故かりボーンを締め殺さずに、目を見開いて硬直しているだけ。

その間に、リボーンがゆったりと這い出していた。

「何故だ！？ どうしたタコ！」

「戸惑ってるよーだな、お前のそんな姿、見たことねえだろうしな。」

「な！？ これは！」

いつの間にか、スカルの手が何倍にも大きくなっている。

「そうか！ 死ぬ気弾を拳に撃てばゲンコツ弾！ タコは命令の意味が解らなかつたのか！！」

「俺の番だぞ。」

「げっ！」

思いつきりスカルを殴り飛ばすりポーン。

勢い良く木にぶつかり、地面に倒れた。

しかし往生際が悪く、戦艦に砲撃命令を下す。

「無駄だぞ。 コロネロもそろそろ起きた頃だしな。」

「なっ！ コロネロ先輩もここに！？」

その時、スカルの無線から全艦撃沈の報告が来た。

これで終わり、なのかな？

「つーか寝ないで最初からやれよ！」

「いーだろ？ ツナは今回戦ってねえんだから。」

「あ、そう言えば。」

もしかして、今日は守ってくれた？

「俺のパシリは俺がシメる。」
「ひいいい。」

なんてことは無かった。
なんとなくスカルに同情しちゃったよ。

その時、茂みからガサガサと音が鳴った。
思わず叫んでリボーンの後ろに回り込んでしまった。

だけど、そこから現れたのは

「終わってる……だと……。」

何故か絶望したようにガツクリと崩れたみーちゃんだった。

「みーちゃん！ 無事だったの？」

「まあねえ……不完全燃烧だけど……。」

「へ？」

「いや、気にしないで……ツナ君も大丈夫？」

「あ、うん。リボーンが敵を倒してくれたから。」

「ふーん。……あれがさっきの……ねえ……。」

最後の方に何か呟いた気がしたけど、小さくて聞こえなかった。
訊ねようと思ったら、みーちゃんが勢いよく立ち上がる。

「さっつて、終わったことだし。 奈々さん達の所に戻るっか！」
「ああ、うん。」

そのまま、皆でマフィア城に帰っていく。

その後、ようやく入島許可が下りてやっと遊べる！

と思った時には、帰る時刻になっていて泣きたくなった。

夏です。

突然ながら、夏です。

夏と言えば、海ですよ。

友達との海、家族との海、恋人との海。

人によってそれぞれだと思います。

とにかく、夏と言えば海です。

いつもの如く

今度は海だぞ。

と、リボン君に誘われもしました。

勿論了承しましたとも、はい。

夏に海に行かないなんて、よっぽど忙しい日々を送っているか、元から海が嫌いか。

或いは一緒に行く知人が居ない悲しい人かのどれかだと思います。

まあ、大まかには、ですが。

それはさておき、そんな事を言う私はどれかと言いますと。

「忙しくなかった筈なのに巻き込まれた可哀想な人……ってね。」

「いきなり何？ さっさと仕事してよ。」

「合点でさあ、風紀委員長（笑）殿……。」

余りの書類の多さに、最早お互いの姿も見えない。

声だけの命令に応え、目の前の資料の山を見る。

いや、これはもう山ではない。

だってもう空間そのものが書類で埋もれている。

片付けなければ帰れないだろう、物理的に。
というかどうかやって運んだのこれ？

これはもうチヨモランマですら生ぬるい。
ラピ〇タだ。

某天空のキャツスルだ。

いっその事、あれみたいに宇宙の果てまで飛んでいって欲しい。

もしくは破滅の呪文の一言で弾け飛んで欲しい。

しかし、どれだけ望んでいても現実には消えない。

尋常じゃない倦怠感を抱えながら、私は仕事をこなして行く。

「せつかくの夏に書類仕事とは……神は私を見捨てたのか……」

今度会ったらシバこつ。

「ねえ。」

「ふぁい？」

声は聞こえど姿は見えぬ。

「明後日、五時から見回りだから遅れず来なよ。」

「明後日？ 見回りの予定なんて無かった筈だけど？」

スケジュールはキチンと確認してるし。

「君が言ったんじゃないか。行くつて。」

「うん？ 私が？ 明後日……あ、もしかして……」

夏祭りの事？

あれ？ でも行くなって返事されてないし。

いや、予定は空いてるけども。

まさかこんな土壇場で言われるとは……

しかも何だかんだで行くと言い出すなんて、これは……

「いわゆるツンデレですね？ わかります。」

「……咬み殺されたいの？」

書類の山の向こうから濃密な殺気が溢れ出して来ます。
ゴゴゴゴゴと擬音が聞こえてきそうな感じ。

傍にいた草壁さんが若干震えてるし。

「ゴメンナサイ。行きますから許して。」

「ならさっさと仕事して。」

「ハイ。」

素直に仕事に準ずる私でした。

「……………あつ。」

と言う間に二日経った。
現在恭弥君と祭りの見回り中。

主に出店から風紀委員の活動費を徴収している。
要はシヨバ代って奴だね。

「ごめんなさい！ 許してください〜！ 払いますから〜！！！」

泣きながら許しを乞う店主。
しかし、それを無視して店を壊していく風紀委員達。

残念、この町でやっていくにはこれくらい知っておかないと駄目だよね〜。
前みたいに非が無い飛び火なら庇うけど、根本的な事が解ってないなら自業自得。

これを教訓に、来年ガンバ？

「どれ位集まったの？」

「今のでちょうど五十万だね。」

「うわぁお、とても中学校の委員会にかかる金じゃないね？」

惨状を見て、他の店の人は顔を青くして大人しく払う。

それでも抵抗する勇者は僅かにいたものの、魔王の手下の前に虚しく散っていく。

この街では、魔王に辿り着くのも一苦労なんだよ。

まあ偶に魔王自ら勝手にエンカウントしてくるけどね。

まさに無理ゲー。

そんな徴収をしている内に、今度はチョコバナナの店に着いた。

チョコバナナかぁ、あんまりいい思い出ないんだよね。

いや、美味しと思うよ？ 実際に好きだしね。

でも、なんかなぁ。

食べるといっても周りから視線がね？

最初は何かの勘違いかと思ってたんだけど、そうじゃなかった。

その時に限ってナンパされたり、変なオジサンに声かけられたり。

何かおかしいなぁと思ってネットで調べたわけ。

そしたらなんとまぁ、焼き殺そうかと思いました。

顔から火が出るかと思ったよ。

同時に沸き上がる殺意を抑えるのが大変だった。

男の人って何でああも妄想力豊かなんだろう。

「五万。」

「雲雀さん!？」

「な! 何しに来たテメエ!!」

「まさか・・・。」

「ジヨバ代つて風紀委員にー!？」

「活動費だよ?」

「みーちゃんも!？」

なんと、チョコバナナ屋はツナ君達だったんだあ。
変な意図は無いよね？

「払えないなら、店を潰す。」

「マジだよ? あっち見てごらん?」

現在進行系で粉碎されている店を指さす。

それを見たツナ君達の顔が青くなり、慌てて差し出して来た。

「確かに。」

「ウチの風紀委員つて地元最強だなあ・・・。」

「そりゃあ今更だよツナ君。」

ツナ君達と別れ、集金を続ける。

しかし、ここで問題発生。

段々と払わない店が増えているのだ。

いや、正確には払えない店がだ。

なんと、ひったくりに会ったらしく、売上が根こそぎ奪われたらしい。

そんな店が急増し、集金がかどらない。

流石にその店を全部潰すと祭りに支障が出る為、壊すのは私が止めた。

恭弥君によれば、去年も同じ事が数件あったらしい。

「じゃあ今日その犯人を捕まえられる可能性もある訳だね。」

「むしろそれも今日の予定なんだよ。ひつたくり犯を捕まえれば集金の手間が省けるからね。」

「ですよ〜。」

間違っても元の持ち主に返す訳ないよね。

ご愁傷様。

「こ、コラー！ー！！」

「あれ？」

「？」

突然ツナ君の叫び声が聞こえ、そちらを見る。

階段を必死に駆け上がり、誰かを追いかけている。

その手には大きな箱を抱えているようだ。

「もしかしなくても、当たりかな？」

「そうだね。早速咬み殺そう。」

「了解〜？」

階段を登り、寺の前に着く。

そこには、いかにも柄の悪そうながわんさか。

ツナ君は一人で囲まれており、リーダーっぽい人に胸ぐらを掴まれている。

まさに絶体絶命な状態だ。

ツナ君でカオスマードに自分でなれないのかな？
リボン君がいる時だけなってるみたいだけ。

考えてる内に、恭弥君が不良の一人を容赦なく殴りつける。

「嬉しくて身震いするよ。うまそうな群れを見つけたと思ったら、
追跡中のひつたくり犯を大量捕獲。」

「んだコイツは!？」

「並中の風紀委員だ。。。」

「集金の手間が省けるよ、君達が盗んだ金は全部風紀が頂く。」

そんな大っぴらに言わんでも。。。。。

「ムカつくガキがもう一人。。。おお？ いい女も一人付いて来や
がったじゃねえか。」

「ん？」

何やら今度は私が注目の的。

一人残らず不快な視線を向けてくる。

うん、全殺し決定？

「中坊一人しめる為に後輩集め過ぎちまってよお。」

さつきから木陰に隠れていた連中が、次々と姿を表す。
ってか本当に集めすぎだよ、五十人はいるんじゃない？

問題ないんだけどさあ。

「力持て余してるんだわ。」

「何人いるのー!?」

「加減はいらねえ! そのイカれたガキもシメてやれ!」

「ひい! いくら何でもこの数はヤバイんじゃない?」

「だつたらお前も戦え。」

「え? リボーン!?」

突如現れたりボーン君が、ツナ君の眉間を撃ち抜いた。
流石にビツクリしちゃったよ。

でもすぐに変化が起こり、ツナ君のカオス状態になった。
さらには爆発も起こり、隼人君と武君が助っ人に来た模様。

もう過剰戦力だなあ。

「気に食わねえガキがゾロゾロと!」

「雲雀との初の共同戦線だな。」

「冗談じゃない、ひつたくった金は僕等が貰う。」

「右に同じく?」

「なあ、どうすんだ?」

「やらん!」

「当然つす。」

そして無双。

「ぎゃああ!」

「何だコイツら! ホントに中坊か!」

「女もバカ強ええー!」

そんなこんなで大勝利。

ツナ君達は何とか自分たちの分だけ確保して離脱していた。

「いや、スッキリしたね？」

「集金も充分。まあそこそこの成果だね。」

ついでに不良達の財布も巻き上げる恭弥君。
ざまあ〜。

「それじゃ行くよ。」

「おう。って、あれ？　なんでそっち？」

恭弥君は階段の方じゃなく、なんか森の脇道の方へ向かっていく。

「いいから来なよ。」

「いやあ、そんな危険な香りのする薄暗い所に誘われても……。」

「君は本当に一度咬み殺そうか……。」

「いやゴメンナサイ嘘ですハイ。」

大人しく付いていく。

段々と喧騒が遠のき、夜の静けさと虫の鳴き声が響くのみ。

暗い森の中、年頃の男女が二人つきり。

何かイケないシチュウではあるが、ウチの風紀委員長に限ってそれはない。

全財産賭けてもいいね、負ける気がしないよ〜だ。

「恭弥君〜？　何処まで行くの〜。」

「もっ着くよ。」

そう言った後、開けた場所に出た。
空を遮る木が無くなり、綺麗な空と、並盛町の街並みが一望出来る。

「うわあ~~~~!! 綺麗・・・。」

その瞬間、そらで光が弾けた。

夏祭りの目玉の花火が始まったのだ。

「うお~~~~!! こっちもスツゴ~~~~イ？」

思わずはしゃいでしまう。

こんな絶景の花火を見るのは初めてだ。

「よくこんな場所知ってたね〜。」

「小さい頃に見つけたのさ。 誰にも知られてない秘密の場所だよ。」

「え？」

その言葉に、驚いて恭弥君を見る。

彼も空を見上げていて、花火の光に照らされている。

その顔はいつも通りのムスツとした表情だった。

でもどことなく、笑っている様にも見えた気がした。

「いいの？ せっかく独占してたのに・・・。」

「別に。 何となく気が向いただけだよ。」

此方を見ず、素っ気なく答える。

何故かそれが可笑しくて、クスッと笑ってしまった。

「なに？」

「いゝやゝ？ 恭弥君は可愛いなあゝって思ってる？」

「……意味わかんない。」

横目でこちらを見て、不機嫌そうに顔を歪める。
でもすぐに花火に向き直る。

それに釣られて、私も花火に視線を戻す。

久しぶりの日本の花火は、何度も夜空に綺麗な花を咲かせた。

第三十二話（後書き）

ついに、次回は黒曜編です！

お楽しみに！！

誤字脱字ありましたら気兼ねなく言ってください。

これってこの字で合ってたっけ？ 程度の疑問でも構いません。

作者も自身の無い所が多々ありますんでwwwwww

それでは次回（、ー、）ノ

第三十三話（前書き）

ついに黒曜編の始まり始まり〜〜〜！！〜（*、（ノ

待ちかねていてくださっていた方々、お待たせしました！

第三十三話

夏休みもチャチャッと終わり、二学期が始まった。

太陽の光をうつとおしそうに見ながら、生徒達が登校していく。

夏の暑さはまだまだ健在で、セミ共の生命活動もラストスパートだ。中二なお年頃の男子が、気になるあの子の汗で透けそうな半袖姿にいちいち反応している。

女子から見れば余りにも挙動不審で、見ているのがバレバレなのは知る由もない。

そんな、ある意味いつも通りの平和な日常が続く中。

並中校内の応接室で、強制収集が行われていた。

「八人やられた？ 風紀委員が？」

「はい。それも委員会の中で腕の立つ者ばかり狙われています。」

副委員長の草壁の話を聞き、驚いた表情で手元の書類を見る満流。そこには被害者の簡単なプロフィールと、容態や被害を受けた現場や時刻などの情報が載っている。

「彼らの証言から、犯人は隣町の黒曜中学の生徒である事は分かっています。」

「わざわざ隣町からご苦労な事だねえ。自殺願望者以外の何者で

もないよ。」

そう言つて苦笑する。

黒曜と言えば結構な不良達の巣窟だが、並中の風紀委員に牙を向く

など論外。

誰もが潰されるのは時間の問題だと思っっているだろう。だから今の所は大きな騒ぎにはなっていない。

「にしても二日で八人かあ。結構強いのかな？ それともリンチ？」

「犯人は二人組で、どちらか片方、または両方で襲ってくる様です。」

「へえ、ならそこらの不良よりは強いんだろうねえ？」

思わず、と言った感じで唇をペロリと舐める満流。どうも最近の戦闘から、意欲が表に出始めている。

少しでも戦いを匂わせる話を聞くと、つい反応してしまう様だ。

「で、これからどうすんの？ 恭弥君。」

「どうもこうもないよ。さっさと見つけて咬み殺すだけさ。」

いつも通りの平坦な声だが、僅かに不機嫌さが混じっているのを他の二人は感じた。

自分の縄張りに余所者が土足で踏み込んだのが許せず、憤慨しているボス猫みたいだ。

「二度と並盛に來れなくしてあげるよ。」

はたしてそれは精神的にか、もしくは肉体的にか。恐らく両方。

「そう言う訳ですので、夜月さんも十分に気を付けてください。」

「了解です。それじゃあ授業が始めるので。」

手をヒラヒラと振りながら応接室を後にする満流。

自分の教室へと歩き、道行く生徒達は次々と道を開けていく。

渡された資料を手に、もう片方の手を口元に当てて思考している。

「風紀委員の中から強めの人達ばかり狙われる、しかも歯を抜かれて、か……。」

普段から快活な態度でいる満流が難しい表情をして歩いている。

その事に、他の生徒達が何事かと議論している。

「何で犯人は誰が強いかなんて知ってるんだろう？ 歯を抜く意味は？ さっきは自殺願望者なんて言ったけど、ただの不良の犯行にしては変なやり口だよねぇ……。」

雲雀や満流の様に、ある程度知名度のある人物なら分かる。

しかし彼らがどの程度の強さか、などの情報は内部ならともかく隣の不良なんか知っているのは不自然。

犯行時刻は早朝か夜中。

しかし場所はバラバラで、規則性などは見られない事から、襲う人物は最初から決まっている様に感じられる。

「これからもっと被害者出るだろうなあ。単純に風紀委員に対する挑発っただけなら簡単なのに。」

溜め息を吐いて、窓の外を見る。

遅刻寸前の生徒が走って登校してくるのが見える。

「被害者さん達以外はいつもの日常だね〜。　　・あつ、ツナ君もいるし。」

ツナが大慌てで校門をくぐっているのが見え、思わず吹き出す満流。笑いながら、もうすぐ授業が始まるのを思い出し、再び教室へと歩き始めた。

「うん。。。」

「どうしたツナ。お前が頭で考えても意味ねえぞ？」

「うん、そっだよね。。。。って！物凄く酷くない!？」

せつかく表面上は忘れてたのにい！
ヤバイ、顔が凄い速さで熱くなってくる。

同時にあの時の仕草とか、ちよつと潤んだ瞳とか、真つ赤に染まった表情とか・・・！！

「つつつか話がすり替わってるよ！ 昨日のみーちゃんの様子が変だつて話だろ！？」

「そうだな。 まあ大方今朝の話が関係してんだろ。」

「風紀委員が襲われてるつて話？ みーちゃんも風紀委員だしなあ、確かにそうかも。」

と言うことはみーちゃんも危ないつて事だよなあ。

きつと大丈夫なんだろうけど・・・。

「満流なら心配いらねえと思うぞ？ アイツに敵う奴なんてそうそう居ないだろうしな。」

「そうだとは思っけどさあ。」

でもやつぱり気になるんだよ。

大切な幼馴染みが危ないかもしれないんだ、理屈じゃないよ。

考えている内に、学校の校門前まで着いた。

だけど、そこには風紀委員の姿。

よく見てみると、周辺のいたる所に風紀委員の姿があった。

「そりゃああんな事件が多発してんだ。 ピリピリもするぞ。」

「そうだよなあ。 やっぱ不良同士の喧嘩なのかな？」

「違うよ。」

「え、雲雀さん!？」

振り向くとそこには雲雀さんの姿。

「ちやおつす。」

「あの、俺は今日は何も・・・。」

「これは身に覚えのないイタズラだよ。まあ身に降りかかる火の粉は元から絶つけどね。」

やっぱり怖い〜！

犯人も何でよりよってこの人を敵に回したんだ!？

死刑確定なのに。

その時、不意に並中の校歌が聞こえてきた。

当たりを見回しても何も無い。

すると、雲雀さんが携帯を出して電話し始めた。

着メロが校歌って・・・。

雲雀さんただけ並中が好きなんだろう。

とりあえず、今は早く離れよう。

「あの、じゃあ俺はこれで・・・。」

「たしか、君の知り合いじゃなかったっけ？」

「へ?」

背中を向けた瞬間に声をかけられた。

何で俺の知り合いの話が出るの？

みーちゃんの事ならすぐに名前が出るだろうし。

「笹川了平。 やられたよ。」

「……」

「そうですか。 了平さんまで……。」

ええ、もう一般生徒の間でもかなりの騒ぎになってます。 次々と犠牲者が発見され、お見舞いと称して他の生徒も病院に固まってる有様で……。

「仕方ないですね。 風紀委員だけならまだしも、自分達まで狙われる可能性も出てきたんですから。」

そうですね。 一刻も早く犯人を捕まえなければ、休校も考えないといけません。

「それで安心、とは言えないですけどね。 分かりました。 忙し

いのに態々すいません。」

いえ、それでは・・・。」

通話を切り、ケータイをしまう。

これで被害者の数は二十人になった。

よくもまあ一日で頑張ってくれちゃって。

よっぽどやる事が無い暇人なのか、それともやり手なのか。

それにしても

「了平さんが五本、かぁ・・・。」

草壁さんから伝えられた情報だと、了平さんがやられたのが今日の
早朝。

その前の被害者がそれより三十分程前で、抜かれた歯の数が六本。

その前はさらに三十分前で七本。

「何かの順番、だよなぁ？」

それに、なんとなくだけど狙われる人の強さが上がって行ってる気
がする。

最初は名もない風紀委員から、徐々に名の知れた部活の主将。

そしてその中でもトップの了平さん。

明らかに弱い者から強い者に変わってきてる。

「こりゃあ次も知り合いつて可能性が大だよなぁ。」

隼人君とか武君辺りが危険だろう。
恭弥君を除けば並中でも一二を争うし。

でも、歯を抜くのは何でだろう？
こっちにヒントを与える様な真似してる。

いや、与えたいんだろう、誰かに。

「とにかく、了平さんのお見舞いに行きますか〜。」

と言っても、もうすぐそこなんだけどね。

受付に部屋番号を聞き、ドアの前に辿り着く。

既に他の人が来てるみたいだ。

入ってみるとツナ君と京子ちゃん、それにリボン君だった。

「お邪魔します〜す？」

「あ、みーちゃん。」

「満流ちゃん！」

「おお来たか夜月！」

「ちやおっす、満流。」

「思ったより、ってというか思った通り元気そうだねえ了平さん。」

この人に限って打ちのめされるって事は無いだろう。

「聞いた時は流石にビックリしちゃいましたよ〜。」

「心配かけてすまんな。」

「ごめんね満流ちゃん。お兄ちゃんが煙突に登ったりするから・・

。」

「え？ 煙突？」

「あー！ー！！ えつとみーちゃん？ ちょっと話があるから来てくれない？！」

「あ、ちよっ・・・。」

突然絶叫したツナ君に背中を押され、部屋の外に出る。

少し離れた所まで来て、二人でイスに座る。

「どうしたの？」

「いやね？ 京子ちゃんには本当の事は言っていないんだ。」

「それまたどうして・・・。」

「喧嘩したって知ると京子ちゃんに心配かけるって・・・。」

充分にかけてる気がするけど。

まあ不良に襲われたなんて言われたら昔の事思い出しちゃっつかもね。

あの時から喧嘩とかに敏感に反応するようになったしね、京子ちゃん。

「ひっ！」

「ん？」

その時、また突然ツナ君の悲鳴。

何事かと視線を辿ると

「レオンの尻尾が切れちゃったな。」

「おやまあ。」

「大丈夫なのかそれ！？」

「これが起こるって事は・・・不吉だ。」

その発言こそがフラグだよ。

その後、機能不全になってしまったらしいレオンが様々な変化をしていく。

タコ、トートムポール、餅。
全く統一性なしだ。

「どきなさい！ また並中生がやられた!!」

辺りに響く医者たちの声。

その言葉に、動揺が広がる。

やられた生徒を見た瞬間、騒ぎは一気に大きくなる。

「草壁さん？」

「う・・・夜月さん。 すみません・・・無様な姿を・・・。」

「気を遣う余裕があるなら安心です。 黒曜生でしたか？」

「はい・・・歯は・・四本抜かれました・・。」

「なる程、わかりました。 後は任せてゆつくり休んでください？」

「お願いします。 後・・・委員長の姿も・・見かけません。」

「恭弥君が？ 敵の尻尾掴んだのかな？ でも被害出てるし・・。」

「

草壁さんが運ばれて行く姿を見ながら、思考する。

恭弥君がやられたって可能性も視野に入れないと、だよねえ。

その時、リボン君が肩に跳び乗って来た。

「アイツは四本だったか？」

「歯の事？ そうだよ。」

「そうか。 なら、他に考えにくいな・・。」

「なんのこと言っただよりボーン。」

「喧嘩売られてんのはツナ、お前だぞ。」

「へ!?!」

一日に何回驚いてるんだろうね。

今度数えてみようかな。

そこから、リボン君による長い解説が始まった。

歯が折られているの相手のカウントダウンであり、皆はその犠牲者だと。

その一点をツナ君が理解するのに時間がかかったただけなんだけど・・・

「カウントダウンでピンと来たんだ、こいつを見てみる。」

差し出された髪を、二人で見る。

沢山の名前がズラツと並んでおり、その大半が今回の被害者だ。

一番上に、 並盛中の喧嘩の強さランキング と書かれている。

「やられたメンツと順位がピッタリ一致してるんだぞ。」

「本当だ! つつつかこのランキングって・・。」

「ああ、フウ太のだぞ。」

「フウ太の?」

フウ太のランキングの情報ってトップシークレットだよな?

なるほど、なら自ずと犯人は限定される訳だ。

「私ちよっど行くところ出来たから別行動ね?」

「え！ いや、みーちゃんが居てくれるとスツゴイ助かるんだけど・
。。。」

「男の子なら自分でなんとかしなさい？」

「そんなー！！！」

背後から聞こえる悲鳴を無視して、病院を出る。

まあ犯人共の居場所は黒曜の人達に聞くとしてえ。

「久しぶりにアレの出番かもねえ。」

何があるか解らないし、備えはしておこう。

流石に鎌は持って行けないけど。。。

時間を短縮するために、屋根伝えに自宅に戻った。

第三十三話（後書き）

骸達が、出ない・・・WWW

殆ど状況説明だけで終わってしまったWWW

次回出ます、ハイ。

それではまた（・・・） /

第三十四話（前書き）

いや〜執筆が進むわ進むわ。

リング争奪戦までそう遠く無いっすよ！

ではどうも〜！

第三十四話

ザ・ナミモリ〜ニヨにて。

私は今、部屋中をあさっていた。

「あれ〜？ どこしまったかな〜？？」

肝心の物が見つからない。

なにせ最後に使ったのが一年以上前だもんなあ。

何処に仕舞っておいたか忘れちゃった。

「ここでも無い、ここも違う・・・やヴあい、完全になくした・
」

何気にその手の世界じゃ国宝クラスの価値があると言つのに・・・
余りにも簡単になくしてしまったよ。

まいったね？

これじゃあアレ無しで行くしかないかなあ？

《・・・ちる・・・ち流、おーーい！ 満流！！》

「うわあビックリしたア！！ あれ、もしかして駄神？」

《いつまで駄神って呼ぶんだよ・・・まあそつだよ、久しぶり
だな。》

「いやホントにねえ。」

久しぶりの登場だねえ、色んな意味で。

全然出てこないから遂に神の役職クビになったかと思った。

《いやいや、俺がクビとか有り得ないから。》

「勝手に人の思考読まないでくれない？ 例えば無能すぎて解任されるかも知れないじゃん。人間なんか尻拭いさせてる位だし？」
《ぐうっ！ 相変わらず痛い所を・・・それはさておき、今日は特に用事がある訳じゃ無い。仕事がようやく一息ついたから様子を来んだ。》

「仕事・・・してたんだ・・・。」

軽くトリビアだ。

九十三へえを与えよう。

《いらねえよ。つか仕事ぐらいあるわ、転生者共の問題はまだまだ山積みなんだからな。》

「ああなる、そつちね。」

《他の世界の協力者が死んだりすると他を探すのも一苦勞なんだよ。その点、お前は本当に優秀で助かるわ。まあそれで最近顔が出せなかつたんだが・・・。》

はあ、と

溜め息をついてソファに座る駄神。

どうやら本当にお疲れの様子。

あくまで自業自得だけど・・・。

《しかし、ここもまた相当増えてるなあ。お前がせっかく海外まで行つたのにな。》

「そうだねえ。しかも最近全然音沙汰が無くってさあ、忙しいから助かつてるんだけども。」

《何か企んでるのかもな。ついこの前、一部の転生者達に協力者

の存在が伝わったしな。》

遅いよ。

ものすつごい今更じゃない？

「上も上なら下も下って奴だねえ。」

《勘弁してくれ……。あと、ボンゴレに入った千坂って奴の事なんだが……。》

「ん？ さつちゃん？」

《アイツ、実は正規の転生者だから始末しなくてもいいぞ。》

「え……。正規？」

《つまり、ちゃんとした理由で転生させられたって事。不正も何も無い。》

「ああ……。」

そんな転生者に初めて会ったなあ。

じゃあさつちゃんは痛者には入らない訳だ。

番号繰り上げないと。

「でも、そう言う事なら何か特典って奴は多く貰ってるって事？」

《そうだろうが、それは担当した神じゃないと内容までは解らん。》

だが満流が今迄遭遇した奴らよりは優遇されてるのは間違いない。

《「ふ〜ん……。」

ここでまさかのさつちゃん強敵フラグ……。か……。

何が起るか分からないね〜？

やっぱりた〜のし〜？

《他の奴らは、流石に記憶が弄れる範囲を超えたのも多いからな。
お前のペースで狩ってくれればいい。》

「了解。」

確かに、他にもウジャウジャ居るしねえ。

もしかしたら、もうじき強い痛者が出来てきてるかも知れない。

音沙汰が無いイツらを放置してたのは、実がそれが狙いだったりする。

例え最初はただの中身雑魚だったとしても、時間が経てばそれなりに力を使える様になるかも知れないって思ったから。

まあ、要はゲームの一環ね。

育てばラッキー、育たなくても何時でも処分出来る。

まさに祭りで手に入れる金魚みたい？

生かすも殺すも気分次第、みたいな？

《あ、因みにさっきから探してるのだがな、その二個下の引き出しの奥だぞ。》

「まじ？ え〜〜ととお・・・お、あつたあ！！」

たまには使えるじゃないか神。

《こんな時だけ神呼ばわりかよ。》

「信頼とは結果の積み重ねだつて誰かが言った。」

《耳が痛いな。》

「そんじゃ私は今回の騒動の根源に会いに行くから、じゃあね。」

《お〜う、頑張れ〜。》

天井を仰いだまま手をヒラヒラ振ってきた駄神を残し、私は黒曜へと向かった。

《あれ？ 呼び方が戻ってね？》

「ここかぁ・・・懐かしいけど、変わり果てたね。」

黒曜の不良さん達を五十人程絞め上げた結果、この黒曜ランドにたどり着いた。

いや、最近の不良は前にも増して根性が無いねえ。

ちよつと目の前で仲間の関節外しただけですぐに従順になつちやうんだから？

あまりにも言いなり過ぎるからちよつと遊んじやったじゃない。

「どつやら先客が居るみたいだねえ、ツナ君達かな？」

入口周辺にある足跡を見るに間違いない。

中には有り得ない程に小つこいのもある、これはリボン君のだろ
う。

門をくぐり、奥の方へと歩みを進める。

しばらくすると、何故か犬の死体があつた。

「脈絡がなさすぎだつて・・・。」

しかも盛大に血を吐き散らしてる。

ツナ君とか軽いトラウマになつちやいそう。

その時、近くに開いていた穴の中から微かな音が聞こえた。
あと人の気配も。

「誰かいるの〜〜？」

穴を覗き、呼びかける。

すると、なにやら縄で縛られた黒曜生が居た。

「あん？ またアイツらの仲間か！？ 何しに来たびよん！」

「随分とまあ個性的な・・・。」

語尾にびよんとか・・・誰得？

とりあえず飛び降りて中に入る、黒曜生を見ると、顔に横一文字の傷のツンツン頭だった。

おお、顔に傷とかカツコイイじゃん。

「！ お前は確か、一位の夜月なんか！！」

「一位つてランキングの事だね？ やっぱりマフィア関係者が・

」。

「うるへえ！ マフィアなんかと一緒にすんな！！」

「うお。。。」

なんか地雷的な物を踏んでしまったみたい、キレちゃった。

「えつとお、じゃあ何で君らはこんな事してんの？」

「はんつ！ お前なんかに教える訳ないびょん！ このブース！！」

「・・・カッチーン・・・」

周りを見る。

丁度いい大きさの岩を発見。

持ち上げ、思いっきりぶん投げる。

顔面にクリーンヒット。

「ぎゃん！……！！」

「はいもう「丁」〜？」

「ぎゃひんっ！……！！」

「ワンモア〜？」

「ぎゃうん！……！！……！！」

一回、二回、三回、四回。

犬の悲鳴と、鈍い音が鳴り続ける。

「話す気になつたかな？ このクソ犬野郎？」

「ゴメンナサイ……話すから許してください……びよん……」

「そうそう、最初から素直に教えれば良かったんだよ。」

それから洗いざらい吐いてもらった。

自分達は元々三人だけで行動していた。

自分らはあるマフィアで実験動物にされていた。

抜け出す事には成功したが、マフィアへの憎しみは消えなかった。

だからまずマフィアの世界を滅茶苦茶にする事にした。

その為に、ボンゴレの次期十代目候補の体に乗っ取るうとしている。並中の生徒を襲ったのは、詳しい身元が解らなかった為、強い奴らを潰してあぶり出すためだった。

などなど。

「体に乗っ取るってのは？」

「骸さんにはそう言う力があるんだびよん。今迄それで多くのマフィアを潰したびよん。」

「へー、そんな便利な能力が……って、ん？」

気のせいかな？

「今、誰が持つてるって？」

「だから骸さんだびよん。俺達をあのだ獄から救ってくれたびよん。」

「……君達が実験動物にされていたファミリーっ

て・・・」

「エストラーネオファミリーだびよん。」

「あつちや〜・・・。」

思わず手で顔を覆う。

まさか、こんな早くここまで手を伸ばしてくるなんて。

今だ縛られたままの黒曜生、確か城島犬じょうしけんを見る。

ああ、言われてみれば面影があるような・・・。

「なんだびよん？」

「いやあまあ、意外と狭い業界だなあって・・・。」

「？」

「えっと・・・こうすれば分かるよね？」

私がそう言った瞬間、右手から闇の様に黒い霧が溢れ出す。

それが私に全身を包み込み、向こうからは見えなくしてしまう。

ほんの数秒後、霧が晴れた時には私の外見は変わっていた。

いや、犬には変わっている様に見えるだろう。

黒いロングコートにブーツ、ズボンから手袋にいたるまで真っ黒。

そしてその中で、一箇所だけ銀色に鈍く輝く白銀の仮面の姿。

そう、懐かしのヴァリアー隊服に。

「!!!?・・・お前は!!!」

「久しぶり? もう六年以上だよね〜?」

「お前、ボンゴレの人間だったのかびよん。」

「まあ〜ね〜、あの時は君には名前無かったからすぐには気付か

なかったよ。」

「けっ！ ならさっさと行くびよん。 骸さんは時々お前を探してたびよん。」

『え、そうなの？ 何でまた……。』

「知らねえびよん。 結局見つからなかったから意味無いびよん。」

話す間に元に戻り、向かい合せて座っている。

「そっかあ、なら顔見せに行こうかな？」

立ち上がり、はたいて土を落とす。

「後、もう一つあるびよん。」

「ん？ 何？」

「俺らと少し前から一緒に行動してる奴が居るびよん。 そいつはお前の事は知らねえから気を付けるびよん。」

「何で骸は許可してるの？」

「そいつも、骸さんと同じく幻術が使えるんだびよん。 使えそうだからそばに置いてるけど、アイツは何か信用ならないびよん。」

「ふ〜ん……。」「

きな臭いねえ。

まだ感じないけど、新しい痛者の予感がビンビンだよ。

ここに来て出番とは、流石ウザ属性デフォルト装備なだけはある。

「なら別に始末しても良いんだよね？」

「むしろ殺っちゃって欲しいびよん。 いつも偉そうな態度がムカツクびよん！」

えらい嫌われよう。
きつと特定の人物以外はぞんざいに扱うタイプなんだね。

これを私の中ではタイプ と呼称している。
前になんとなく暇潰しに考えた。

「じゃあそろそろ行くね、バイバイ。」

「おう。 って！ 縄解いて行くびよん！！」

「人は、自身の力で乗り越えてこそ、前に進めるんだ……。」
「んなことは知らないびよん！ こらあ、行くな————！！！！！！」

哀れな子羊の叫びを無視し、私はよじ登って奥へと向かう。
ツナ君達のものらしき足跡を辿り、歩くこと数分。

少し先にツナ君達つばい後ろ姿を捉えた。
なにやら戦闘中だった模様。

なんか変な小柄なおっさんが隼人君にのされる所だった。
その近くには、何とかというか凄惨な有様の黒曜の女子も倒れていた。

上半身がビアンキさんのポイズンクッキングまみれになってる。
容赦無え……。

「あれ、フウ太？」

その時、茂みの方からフウ太が現れた。
何かツナ君と話している。

かと思いきや、森の中に走り出す。
ツナ君も慌てて追いかけて行った。

「うっん・・・何か訳ありっぽいね。」

すぐさま近くの茂みから森に入り、ツナ君を追う。
隼人君達の方から凄いい音が聞こえた気がしたけど、まあいいや。

元から距離が開いていた為、勘で方向を決める。
違っていたらその時はその時だ。

その時、前から突然人影が飛び出してきて、お約束のごとくぶつかった。

「あいたつ。」

「うわあ！」

私は少し後ろによるめくだけだったけど、相手は盛大に転んでしまった。

「大丈夫？　って・・・フウ太じゃん。」

「え、ミチ姉！？」

驚いた顔で私を見上げたフウ太。

でもすぐに慌てて逃げようと起き上がる。

「ていつ！」

「うわっ！」

すかさず足払い。

何も言わずに立ち去るなんてお姉さんが許しません。

世の中は非常なのだと！

それから、二分間くすぐり続けた。

「さあ、キリキリ吐きなさい〜？」

「はあ・・・はあ・・・ぜえっ・・・ぜえっ・・・カハツ！ コホツ
！」

思いつきり蒸せた後、涙と鼻水でグシャグシャになった顔で説明する。

その間、話を聞きながらハンカチで顔を拭いてあげる。

そのままにしておくと、面白すぎて爆笑し、シリアスな空気をぶっ壊す気がしたから。

「なる程、それで骸に付いて行く。か・・・。。。」

「うん。だからミチ姉も止めないで・・・。」

「いいよ別に。」

「え？」

再度、驚いた顔で見上げてくる

「何処に行くかなんて個人の自由だしね〜。それに口を挟むつも

りなんて無いし・・・それに・・・。」

「それに？」

「私が無もしくなくても、フウ太はツナ君が助けしてくれるよ。」

「ツナ兄・・・が？」

「うんそう。」

フウ太の上から退いて、手を引いて起き上がらせる。

服に着いた土を叩いて落とし、また向き合つ。

「フウ太の望みも、きっとツナ君が叶えてくれるからさ。」

「……………」

「だから今は、行つて良いよ。」

肩を掴んで、回れ右をさせる。

背中を押して、見送る。

フウ太は一度振り返りかけたけど、森の中に走つて消えた。

「ふう、それにしてもツナ君は何処行つちやっただら？ 迷子にでもなつたかな？」

「いいえ、彼は今私の先輩と戦つてますよ。」

「そつかあ、さっきの音はその人のせいなあ。」

「ええ、彼はとても強い。 貴方とアルコバレーノ以外では相当難しいでしょうね。」

「ふう〜ん。 で・・・」

そこで振り返る。

そこには、懐かしき南国果実の姿が・・・。

「久しぶりだね、骸？」

「クフフ、久しぶりですね。」「首狩り王女」さん。」

第三十四話（後書き）

久しぶりに神登場です。

そして、久しぶりに新たな痛者の出現！？

次回、新キャラ痛者はロリコン！？

お楽しみに！！

第三十五話

イタリアのとある森の中。

人里から遠く離れ、人の通る道など幾らもない。

そんな自然の生い茂る木々の間を、二人の人影が歩いていた。いや、実際歩いているのは一つだけ。

もう一つはもう一方の両腕に抱かれている状態だ。

「ねえ、まだ？」 もう五時間は歩いてるよ。」

「もう少しだよ。このやり取りも何度目だい？」

「だってさつきからそればっかじゃん。全然見えてこないし。」

二人の影は、こんな森の中に居るには異常に小さい。抱かれている方に至っては赤ん坊だ。

「はあ、こつやつてモフモフしてなきややつてらんないよ。」

「僕にまで被害を広げないでくれるかい？ やられている方はたまつたもんじゃない。」

「と言いつつ、最近ちよつと膨らみかけてる柔らかさに、「グへへ、ラッキー」と思っているマーモンなのでした？」

「勝手に人の思考を捏造しないでくれる？」

小さい方の影、マーモンが少し力を入れて抜け出そうとする。すかさず腕に力を入れて離すまいとする。

「ごめんごめん。ちよつとした冗談だつてば。」

「まったく……。」

力を抜いて身を預けるマーモン。
それに苦笑する影、満流。

「それでえ、今日の任務って具体的に何なの？」

「スクアードから聞いてないのかい？」

「うん。だっていきなり「マーモンと行ってこおおい!!」って半ば追い出されたし・・・。」

「ああ、そう・・・。」

はあ、と二人同時に溜め息を漏らす。

「なら言うよ。今日はエストラーネオファミリーの研究所の破壊、及び職員のアサシナシだ。」

「そこは何してる所なの？」

「簡単に言えば違法研究、非人道的な実験の数々さ。それに特殊弾の開発も行なっているらしい。」

「特殊弾・・・ねえ。ボンゴレに伝わる死ぬ気弾みたいな？」

「そうだろうね。満流は特殊弾を見たことはあるかい？」

「無いよ流石に。死ぬ気弾ってのがどんな物かも知らないし。」

死ぬ気弾はボンゴレの秘密兵器と言われている。

あるかないかは別として、そうそうお目にかかれる物ではない。

それに満流自身、あまり興味が無い。

「だから強力な兵器を作られる前に潰すってこと？」

「それもあるね。エストラーネオは既に特殊弾の開発に成功した事もあるし。」

「へえ〜」。

話を聞きながら歩いていく内に、ようやく研究所らしき建物が見えてくる。

森の中では不釣り合いな近代建築が、違和感だらけで存在している。

「お、ようやくか。」

「じゃあ早速始めようか。」

「了解。」

マーモンを放し、背中に背負ったバッグから鎌を取り出す。

全ての連結部を固定し、肩に担ぐ。

そしていつもの仮面で顔を隠し、二人並んで堂々と正面の入口から入る。

しかし、中はやけに慌ただしい空気に包まれていた。

外からは聞こえなかったが、大音量の警報がやかましく鳴り響き、職員らしき者達が必死の形相で走り回っている。

『何これ？』

『さあ、何かトラブルがあった様だね。』

『どうする？』

「丁度いいさ。僕は裏手に回るから、君はここから殺して行ってくれ。」

『ほいほい？』

直後にマーモンの姿が掻き消え、その場には満流だけが残る。

職員達はよほど慌てていて、まだ満流の存在に気がついていない。

『さっさととて、お仕事と行きますか？』

踏み込んで一閃、一度に飛ぶ三つの首。
血飛沫が舞い上がり、それに気付いた者の口から悲鳴が上がる。

多くの者達が気付き始め、その横を影が通り過ぎる。

次の瞬間にはその者達の首が宙を舞い、新たに飛沫の数が増える。

ものの数秒で清潔感溢れる空間だった場所は赤一色になり、警報と共に断末魔の悲鳴が鳴り響く。

奥へ奥へと進み、次々に出てくる人間の首を片っ端から狩る。

勿論、鼻歌を口ずさみながら。

いつもの如く、周りから首狩りの単語が飛び交い始める。

今更のように銃で応戦してくる者が現れ、しかし呆気なく散っていく。

銃弾はかすり傷一つ負わせる事無く、むしろ弾き返されて自滅する。

『もうちょい骨のある人は居ないんですかあ？ 強い実験動物の一つくらいあるんでしょ？』

「クフフ、ならばお望み通りにしてあげましょうか・・・。」
『うん？』

声が聞こえた瞬間、満流の足元から火柱が発生する。

鋼鉄すらも一瞬で溶かす地獄の劫火が、全身を包み込んだ。

「どうです？ 最後に望みが叶って満足でしょう。 楽に堕ちなさい。」

『残念だけどちょっと足りないかなあ？』

「！ おやおや、これはまた驚きですねえ。」

平然と火柱から出ていた満流に、恐らく火柱を出した犯人である子供が目を見開く。

両者は向かい合って立ち、お互いに相手を楽しそうに観察している様だ。

「貴方はここを潰しに来たのですか？」

「うんそうだよ。そしたら既にトラブってる最中だったけど、君の仕業？」

「ええ、そうですよ。まあ貴方が職員共の多くを葬ってくれたおかげでかなり助かりましたがね。」

「そっか、君はエストラ・ネオの人間？」

「そうですが、厳密に言えば物ですね。実験動物ですので。」

「ああ、君が・・・。」

そう言って少年の服装を見る。

確かに、いかにもモルモットつと言ふ感じの服装だ。

よく見れば少年の後ろに、同じ境遇であろう子供が二人、柱の影に隠れている。

「脱走中つてとこかな？」

「ええまあ、貴方はこの人間を全員始末するのが仕事でしょう？なら私達はお互いに障害な訳ですよ。」

「う〜ん。実はそれでも無かったりするんだよね〜」

「？」

「私の任務はあ、この研究所及び全ての職員の暗殺なわけよ。実験動物つて職員になるのかなあ？物なんでしょ？」

人差し指を顎に当て、わざとらしく首を傾ける満流。

少年が訝しげに顔を僅かに歪ませる。

「どう言うつつもりですか？」

『いやね？ 君って将来強くなりそうじゃん？ 今ここで殺すのはちょっと惜しいなあって思ってる。』

そう言い、少し横に跳んで道を譲る様に開ける。

『だからあ、いつか私と戦うって約束してくれたら逃がしてあげる。』

「……クフツ、クツハツハツハツハツハ！！！」

心底可笑しそうに笑う少年。

しまいには腹を抱え、少し前のめりになっている。

「面白い方ですねえ。 口約束なんてアテになりませんよ？」

『別に破ってくれても良いよ？ 私と戦うのが怖いなら……ね？』

「クフフ、なる程。 なら破る訳には行きませんねえ。」

もう一度、小さく笑った後に振り返る少年。

「行きますよ。」

呼びかけに応え、柱の影から二人の子供が出てくる。

満流を警戒しながらやって来る、眼鏡をかけた子供とツンツン頭の子。

『そう言えば、君の名前は？』

「名前、ですか。 そうですねえ……六道骸、とでも名乗りま

しよう。」

『骸かぁ。残念ながら私は名乗れないんだよねえ、もしプライベートで会えたら教えるよ?』

「そうですか、楽しみにしていますよ。それでは。」

二人の子供を引き連れ、満流の横を通り過ぎる骸。

両脇に居た子供は、最後まで満流えおチラチラを伺っていた。

『さっつてとお、そろそろマーモンもこっちに来るねえ。合流するか?』

ちよつとした将来の楽しみを得たからか、先程よりも弾んだ声を出しながら、満流は奥の方へと消えて行った。

満流と骸が森の中で再会するよりも少し前。

獄寺によって負傷し、眠っていた柿本千種かきもと ちくさが目を覚ました時の事。

「ボンゴレのボスに接触しました。」

「そのようですね、彼ら遊びに来てますよ。犬がやられました。」

「！」

「そう慌てないでください。我々の援軍も到着しましたから。」

「……………」

援軍、の言葉に千種の顔がほんの僅かに歪む。

「相変わらず無愛想ね、久々に脱獄仲間に出会ったっていうのに。」

そんな彼に、一人の黒曜生の女子が話かける。

しかし、黒曜生と言っても制服を着ているだけだ。

他にも四人の人物がいるが、皆一様に学生とは思えない者ばかり。

「何しに来たの……？」

「仕事に決まってんじゃない。骸ちゃんが一番払いが良いんだも

の。」

「答える必要はない……。」

「……………」

「……………」

「スリルを欲してですよ。」

似通った顔をしている二人以外が答える。

「千種はゆっくり休んだ方がいい。ボンゴレ狩りは彼らに任せましよう。」

「そのことなんだがよ。一ついいか骸？」

「おや、空牙^{くつが}じゃありませんか。 どうしました？」

突然現れた一人の男。

黒髪で、瞳が血のように真っ赤だ。

おおよそ二十代半ば、と言ったところだ。

この者だけは黒曜の制服を着ておらず、他者を見下す目をしている。男が現れた瞬間、千種の顔があからさまに歪み、すぐにそっぽを向く。

まるで視界に入れる事すら拒否するように。

先程の女子すら不快そうな目付きで男を睨む。

しかし男はそんな視線に微塵も気付かずに話を続ける。

「そいつらとは別に入ってきた女がいただろ？ ランキング一位のよお。」

「ああ、夜月満流の事ですね。それが何か？」

「そいつは俺に殺らせる。他は好きにくれてやる。」

始めから決定事項だと言わんばかりの物言い。

女や千種の顔がますます悪化する。

だが骸は気にした様子もなく受け流す。

「ほう、そうですね。 ですがその前に彼女と個人的に話をしたいのですが、良いですか？」

「何の話だ？」

「なあに、ちょっとした世間話ですよ。 ちょっとした知り合いで

してね。」

「なに？ あいつが……。」

なにやら考えながらブツブツと独り言を言い始めた。

骸はそれを邪魔するでも無く、男の返答を待つ。

その顔は表面上は微笑んでいるものの、瞳には明確な侮蔑の意思が宿っていた。

「まあいいだろう。悔いのねえ様に思う存分話すがいいさ、今日でお別れなんだからなあ。」

「クフフ、ではそうさせて貰いましょうか。」

それを最後に、各々が自分の配置へと向かっていった。

今俺は夜月とか言う女を殺す為に森の中で様子を伺っている。
視線の先では骸が女と会話しているが、流石にこの距離じゃ聞こえ
ねえな。

「神の野郎から聞いちゃいたが、会つのは初めてだなあ同類さんよ
お。 いや、それとも差異の方があ？」

ここはリボーンの世界に限りなく酷似した世界つつてたからな。
多少の違いがあるって事だ。

それに俺様意外にも複数の転生者がいるとも言っていた。
あの女がどちらかは知らねえが、計画の邪魔になるなら消すだけだ。

まあ、不確定要素は問答無用で殺すんだけどな。
つまり俺が存在を知らねえあの女は死刑確定って訳だ。

俺の計画。

それはクローム・いや、凧と一生を共に過ごすことだ！！

原作介入？ ハーレム？ なんも興味ねえつつの。

あんな見るからにメンドくさそうな世界に誰が好き好んで入るかつ
てんだ。

そんなもんガキの転生者だけのアホな考えだ。

いくら特典で有利な力を貰ったって、怪我する時はするんだよ。

現実でハーレムなんて作ってたって面倒事が後からやって来るだけだ。
だったら特定の女とやりながら過ごしていた方が結果的に楽なんだ

よ。

だから俺はこの作品で一番のお気に入りである凧と生きる事に決めた。

さしあたって特典の一つは骸並みの幻術能力。

これで骸より先に凧を救い出して俺のモノにする。

それに幻術は生活にも便利だしな。

盗みもやりたい放題、金には困らねえ。

前世じゃ手に入らなかった金持ち生活をゲット出来るぜ！

次に外見だ。

いくら命の恩人でも顔が不細工だと無理があるからな。

具体的に思いつかなかったから、とにかくイケメンにしてくれと頼んだ。

そんで最後に、能力は無理だが小さな願いなら出来ると言われ、格闘の才能を貰っておいた。

殆どオマケだな。

だが、もしかしたら凧が抜けた変化に関して他の転生者共が来ないとも限らねえ。

貰えるモンは貰っておくって奴だ。

さあ、これだけあれば原作に関わりさえしなけりゃ最高の第二人生がまってるぜ！！

待ってるよ～～凧ーーーー！！！！！！

第三十五話（後書き）

満流と骸の出会い、そして新たな痛者が登場！

名前からして痛いｗｗｗｗｗｗ

満流に弄られるのが透けて見えるようだ・・・。

ではまた次回（、、）／

第三十六話

「ボンゴレの跡取り狙うなんて、また随分な事をやらかしたねえ。」

「クフフツ、弱小マフィアを潰すのに飽きが来ただけですよ。」

飽きでボンゴレ狙おうなんて考える所がまた面白いね？
どうやら無事にすすくと育ってくれた様で良かった。」

これでボンゴレの権威に怯えるような腰抜けに成り下がってたら即座に殺すつもりだったけど。」

「一つ、聞きたい事があるのですが。」

「ん、なに？」

「貴方は術師ではありませんね？　なのに何故幻術が使えるのですか？」

「ああそれね。」

犬と会った時に使ったのを見られたか。

まあ骸にならバレても良いんだけど、そこまで隠す事じゃないし。

「私自身には幻術の才能はからつきしだよ？　これのおかげでようやく使えるの。」

「？　指輪……ですか。」

「そう、これ。」

右手を、手の甲を前にする様にかざす。

指にはめたリングが見える様に。

「これは・・・強力な力を感じますね。」
「骸なら聞いた事くらいあるんじゃない？ ヘルリングって奴。」
「！これがあの・・・。」

骸が珍しく驚いた顔でリングを見る。

私の右手の中指と薬指にはめているヘルリング。

私のはその中でも瞳メロッキョのヘルリング、666のヘルリングと言っセイ・セイ・セイらしい。

とは言え、精神を食わせるのはまっぴら御免だから契約した事は無いんだけど。

マフィア界では強大な力を得ると評判の呪いのリングだからねえ。値段なんてとてもじゃ無いけどつけられないよ。

まあ国宝は過剰な表現だったかな・・・。

「これで幻術を・・・。」
「そうそう。世界を回つてると年齢とかで色々不便な事とか多いじゃない？ それを解消する為にゲットしました？」
「そうほいほい手に入れられる代物ではないのですがねえ・・・。」

まあそれでも骸みたいない流の術師とか、ヴァリアーの皆みたいない達人レベルには通用しないんだけどねえ。
私ってばとことん幻術の才能が無いっばい。

「それで貴方は・・・。」
「名前で呼んでいいよ。」 名乗る前に知られちゃったけど、改めて宜しくって事で？
「クフフ、そうですか。では満流、と呼ばせて貰いましょうか。」

「よろしい。」

お互いにニッコリと笑い合う。

そして

お互いの武器を眼前に突きつけ合った。

私の目の前には三叉槍。

骸の目の前のはナイフの切っ先。

しかし、私が持つのはナイフと呼ぶのは躊躇いのある異形。

刃が幾つも枝分かれし、鏢にあたる部分に不気味な目玉の様な装飾がある。

互いに笑顔は変わらない。

それでも、身周囲の空気は一変する。

鳥や虫、風邪や木々のざわめきが途絶える。

ここだけ世界から切り離された様な静寂が周囲を包む。

「おや、その不気味なナイフは一体何処から出したのですか？」

「これも一応ヘルリングの恩恵でね？　と言ってもすぐに壊れるけど、首一つ狩るくらいなら問題無いよ？」

「そうですね。」

「そう言う事で？　・・・ここであの時の約束・・・はたそうか？」

切っ先を少しだけ上げる。

また数秒の沈黙が流れる。

そして

「クフフ、残念ですが今はやめておきましょう。」

先に骸が武器を下ろした。

空気が霧散し、再び森のざわめきが聞こえてくる。

「ま、そうだよな。　なんだか取り込み中みたいだし。」

「犬から聞きましたか。　そう言うコトです、またの機会にしますよ。」

「了解。　立場的に複雑だから両方とも応援してるよ？」

ツナ君が乗っ取られた時にどうするか。

それはまたその時になったら検討しよう。

今考えても思いつきそうにないしね。

「ところで話は変わるんだけどさあ。」

「なんでしよう？」

「今そつちに物凄くうざったいアホ野郎とか居るでしょう？」

「ええ、いますね。」

伝わったよ、今ので。

それだけウザイの一言なんだろうね。

裏世界の人間にもお墨付きを頂いちゃったね、痛者共よ。

「それを個人的に殺っちゃいたんだけど、良い？」

「構いませんよ。」

「即答・・・何かに使えるから傍に置いてるんじゃないの？」

「そのつもりだったんですがねえ。　彼はどうも能力はあっても知

恵が足りない。使いこなせていない。言わば宝の持ち腐れですね。」

ポロクソ言われてるし。

「そこまで酷いの?」

「現に今も、この有様ですしね。」

「ああ、このねちっこい視線はそいつのか。なる程、確かに使えないね。」

「未熟な術師にありがちな初步的なミスばかり。そのくせ態度だけは一級品と来ましたから、今回の事が終わればどの道始末する予定でしたよ。」

「そりゃあ好都合だねえ。」

保護者さんのお許しも出だし、最初から欠片もない遠慮がマイナス振り切って思う存分殺れるってつまんだよ?

「でさあ、何でアイツは私達を覗き見してんの?」

「先程、彼が貴方と戦いたいと言って来たからですよ。」

「……へえ……。」

「クフフツ、とても楽しそうな顔になりましたね。」

それは仕方ない。

まさか向こうから来てくれるなんて、手間が省ける。

何気に相手から挑戦されるのってスツゴイ久しぶりなんだよね。たっぷりとおもてなししなきゃ、ね。

「それなら相手してあげなきゃね、骸もそろそろ戻らなきゃじゃない?」

「ええそうですね。ボンゴレの戦いも見ておきたいですし。」
「そうしなよ。私は私で楽しませて貰うから?」
「クフフフ、それでは・・・。」

森の中へと消えていく骸。

それと同時に、ゆっくりと此方に近づいてくる気配。

アレで気配を殺しているつもりらしい。
姿を隠しながら来る辺り、ドッキリでも仕掛けようとしてるんだろ
うね。

込み上げてくる笑いを抑えるのも一苦勞・・・ぶつ。
ヤバイ、そんなに持たない。

来るなら早く来て欲しい、その瞬間にカウンター叩き込んでやろう?

「死ねや!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・ええ~~~~~

「ヤダ。」

「グハア!!!」

反射で回し蹴りを食らわせ、後方に吹っ飛ぶ痛者328号。
因みに何が起こったか説明すると。

もう少しでカウンター出来る範囲までやって来た瞬間、背後でいき
なり幻術を解いて姿を表し、襲いかかって来ました。
ハイ終了。

……マジですか。
なしてアソコで幻術解くの？

今迄の過程が全部ペアじゃん。
何の為に近づいて来たん？

バレバレの接近に爆笑こらえていた私の努力を返せ。

「骸が言つてた通りのアホっぷり。」

「ちつくしょうが！ やっぱ並中最強の一角だな、簡単には行か
ねえか。」

いやいや、君はそれ以前にアホだ。

勝敗以前に戦略がカスだ。

これじゃあ何時もの痛者共の二の舞だよ。

早いトコ何かしてくれないと萎える。

「で、一応聞いておくが、お前は俺と同類か？」

「何の事がさつぱりだけど、君と一緒にしないで欲しいな、うん。」

いつものやりとり。

痛者は基本的に私に聞いてくる。

と言うか、ある程度強い相手には大概聞いている様だ。

自分が知らなくて強い奴には同類の疑いをかけて生きていく。

つまりその度に他人に変人扱いされて生きている訳だ。

うわぁ、痛い人生。

さすがと言わざるをえない。
だから惚とほけつつキツパリと反論する。

万歩・・・いや、億歩譲っても一緒にされたくない。
関係者ではあっても同類なんかじゃ決して、ない！

「そうか、差異の方が。でもまあどんな影響出すか解らんから殺すだけだな。」

「相変わらず他人からしたら意味不な独り言が得意だよねえ。さつさと死んでよ。じゃなきゃ面白い抵抗してみてよ。」

瞳のヘルリングからナイフを二本出して両手に持つ。
それを見て、向こうも手に持った武器を構える。

先端が大きく膨れた杖状の物で、棍棒としても使えそう。
構えからして接近戦も出来るらしいね。

「そついやあまだ名乗ってなかったなあ。」

「いや、別に君の名前なんか興味な・・・」

「自分を殺す奴の名前くらい知りたいだろ？ 俺の名前は・・・」

無視かよ。

いらんつてのに。

痛者共の名前なんかイチイチ覚えてたらキリが無い。
何人いると思ってるんだ、だから番号表記をあみ出したのに。

「霧きりしま島空牙くうがだ！」

「・・・・・・・・・・さすがですハイ。」

私だったらこんな名前つけられたら速攻で両親ぶつ殺すよ？
いや、殺したけども。

そんな名前をこんなに堂々と名乗れるなんて、勇者だ。
しかも見てよあのドヤ顔。

僕の考えたカツコイ主人公の名前 を初めて友達に発表した中
二そのものじゃないか。
確か痛者って基本的に前世の名前をそのまま流用するか、希望の名
前に変更するんだよね？

たまに天に委ねるケースもあるらしいけど、大体はそうだった筈。
つまりアレは間違いなく自作だ。

前世だろうが現世だろうが、あんな名前をつけるなんて極悪非道な
親が居るとは考え辛い。

居たらむしろ斬新すぎるでしょ、名前で一生の嫌がらせとか。

親だけに出来る奥義だよ。

下手な虐待より万倍ヒデエ。

「さあ、名乗ってそうそうで悪いが死んどけ。」

「フリフリのリボンでも付けて返すよ、その言葉。」

殆ど同時に駆け出す。

向こうは駆けけると同時に姿を消す。

また同じ手を使いたいらしい。

学習能力のない・・・。

アイツ（とてもじゃないけど名前でも呼べない）がいる場所にナイフを投げる。

「そこ。」

「くっ！」

避けた瞬間に姿が見える様になった。

ホントに初心者丸出しだ。

「俺の幻覚を見破るとはやるな。さっきのはまぐれかと思ったが。」

「コメントに困る。」

「ならば本気で行くぞ！ これで終わりだ！！」

「そんなテンプレ・・・お？」

痛者がポケットから何かを取り出す。

すると、それから大量の何かが吹き出す。

そして奴が再び幻術を使うが、なんと先程までとは段違いの精度だった。

実際に今も私の周りはヘンテコな空間へと変貌している。

まるで古代の遺跡の内部みたいな空間、しかし物理法則を無視した無数の階段。

どこまでも無限に空間が広がっていきそうな錯覚を覚える場所だ。

「これはたまげたねえ。こんな力隠してたんだ。」

「これは骸にも見せてないからな！ 実戦で使うのはテメエが初めてだ。」

「ほうほう、それはまた気前のいい事だねえ？」

「そうやって余裕でいられるのもここまでだ。行くぞ！」

幻術で戦う術師が「行くぞ」ってどうなの？
タイミング教えるって……。

私の周囲を、不思議な炎を纏った無数の槍が取り囲む。
私やボス、ツナ君のとは種類の違う死ぬ気の炎だろう。

さっき懐ふくみから取り出したのはリングかな？
向こうも一つ持っていた訳だ。

つまり、これは死ぬ気の炎を混ぜた幻覚って解釈でいいのかなあ。
実際に精度が跳ね上がったんだし、間違いないだろう。

死ぬ気の炎って結構応用が効くよねえ。

「これは今のお前の状況を解り易く表現してやったんだ、そして・
」

無数の槍が、霞んで消えていった。

「お前は見えない槍に貫かれて死ぬんだよお！」

「おお、中々芸が細かい。」

痛者にしちゃあ上出来。

戦闘（？）開始からもう十分は経った。

歴代痛者共の中でもベスト3だね！
誇って良いよ〜。

「この期に及んでまだ減らず口を。最後に遺言でも聞いてやろうか？」

「え？ 聞くのって私の役割でしょ、今のうちに言っというた方がいいよ？」

「この……まあいい、槍に貫かれて無様に泣き叫ぶ姿でも拝んでやるよー！」

瞬間、数多くの何かが接近する気配。

姿は見えないけど、今頃ドヤ顔で私を見ていることだろう。

そして

「ほい、パチンつとお？」

「っ！ なっ！！」

目ん玉見開いて驚愕している所だろう。

なにせ一瞬で透明になっている槍はおろか、空間そのものが燃え上がり、消し炭と化したんだから。

空中には燃えカスがヒラヒラと舞い、私の前方ではアイツが口をあぐりと開けて放心している。

ああ、やっぱりこう言うのっていいわあ？

最初っから勝つ気満々のバカを一気に落した時の顔とか、マジでそれ。

体がゾクゾクしちゃってやめられないよお。

「な、なん……だ？ 何をしやがったテメエ！！」

「別にいい？ 君と同じで死ぬ気の炎使わせてもらっただけ？」

「ふざけんな！ こんな芸当が出来る炎なんて知らねえぞ！？」

ヒステリー気味に叫ぶ痛者。
ああいいねえ……。それ。

どうなっているのか解らない、どうしたらいいか分からないって顔。
不安と恐怖でいっぱい顔。

これだから抑えるのも大変なんだよ。
近い内に思いつきり発散しないとなあ。

「炎の扱いが拙つたないから解らないんだよお、単に撒いておいた火種に着火しだくけ。」

「火種?! そんなもん、いつ……。」

「君と殺り合い始めてからだだよお、ホントに面白いくらいに気づかなかったね?」

「そ、そんな……。」

「それと残念なお知らせなんだけどお、この火種って君の体にも撒いてるんだよねえ。」

「なっ!!!」

顔色が一気に恐怖一色に染まる、いいねいいねえ……。

「だからあ、早く次の手を出してねえ? もし無いなら消し炭にしちやうよお?」

「くっ! ……こおんのお……クソアマがああああああ!!!」

怒号と共に、一気に吹き出す炎。

それが痛者を包み込み、放たれる威圧感が急激に増大する。

しかも、荒々しく燃え上がる炎によって火種が吹き飛ばされた。

「おお……。」

「そこまで言うなら見せてやる！！ さっさと殺さなかった事をあの世で後悔しやがれえ！！！」

右手を高く掲げる痛者。

そこには先程取り出したと思われるリングがはめてあった。

しかもそれは

「あれ？ アイツのもヘルリングじゃん……。」

そう、私が持つのと同じく呪いのリングだ。

勿論種類は違うが、ヘルリングを持つ者故か、直感で分かる。

その間も溢れる炎は勢いを増し、私達の周囲を飲み込む。

新たに幻術空間が構築され、今度はどこかの闘技場の様な場所になった。

「フツハツハツハツハツハア！！ さあ行くぞ、八つ裂きにしてやる！！」

「うわああ、オバケだ。」

声の主に振り向き直ると、そこには服を残して体が骸骨になった痛者がいた。

炎も威圧感も先程とは比べ物にならないくらいに上がり、目がぎらついている。

これは……オッサ・インプレッション骨残像のヘルリングだね。

ヘルリングの名称と外見、大まかな呪いの内容は知ってる。

自分の手に入れる時に相当調べ尽くしたからねえ。
それにしても、マジで自分の精神を食わせるなんて。

度胸があるのか、浅はかなのか。

まあさっきの状況でアホに残されてるのはアレくらいしか無かった
んだろう。

戦術に幅のないことで・・・。

「クロームと・・・いや、風と生きるのは俺ダアアアア!!!!!!」

「いや、誰だよ・・・。」

なけなしの理性すら失った痛者が突っ込んで来る。

カウンター狙いで串刺しにしてやろうと強めに踏み込む。

「あっ・・・。」

その瞬間、一足元にあった泥で足が滑った《・・・・・・・・・・・・・・・・

目の前には杖を振りかぶり、振り下ろす直前の骸骨野郎。

「ヤッベえ。」

こんな時に・・・不運がやって来た・・・。

第三十六話（後書き）

久しく転生者の戦闘を書きましたWWW

十年前なのでヘルリングの扱いを勝手にする。

二話もツナ達が出ないWWW

主人公にだけ視点を当てすぎな気がしてきた……。

次回からもっと多くのキャラの絡みを取り入れたいと思います。

それではまた次回。

感想待ってます(´・ω・´)ノ

第三十七話

満流と空牙が戦闘を開始した頃。

ツナ達は骸の本拠地である黒曜ヘルシーランドに向かっていた。

骸の影武者として送られたランチアとの戦闘で、山本は負傷して動けない状態だった。

ランチアも千種に口封じとして襲撃された為、両名とも応急処置をして残して来た。

「いよいよすね・・・。」

獄寺が呟く。

実際ここに来たのはほんの数時間前だと言うのに、遥かに長かったように感じる。

決して楽ではない戦いの連続だったせいだろう。

「・・・そう言えば、みーちゃんは結局何処に行ったのかな？」

不意にツナが言う。

用事があるとかで去って行った幼馴染み。

今回の事と関係はある筈だ。

しかし全く姿が見えない。

「そう言えばそうね。 てっきり先に乗り込んでるかと思っていたけれど。」

「もしかして、もうやられて捕えられてるって事は・・・あつ・

」。

しまった、と慌てて口を嚙む獄寺。

その視線はツナに向けられ、心配そうに顔色を伺う。

「すみません、十代目……」

「い、いや……大丈夫だよ獄寺君。それに、みーちゃんに限ってそれは無いと思うし。」

必死に笑顔でいようとするが、一度出た不安は消しきれない。

あの雲雀ですら帰ってこない今、骸がどれ程の強さなのか想像もつかないのだから。

影武者だったランチアで既にあの強さだ。

あれ以上なんてツナ達にとっては悪夢でしかない。

「ここで考えていても仕方ねえぞ。今は骸を倒す事に集中しろ。」

「うん、そう……だよな。」

「それに満流の事だ、いつもみてえに突然ひょっこり出てくるかもしんねえからな。」

「そうっすよ、アイツはある意味じゃあ雲雀よりもしぶといっすから！」

「いざ行ってみたら、もうあの子が骸を倒しちゃってたってのも有りそうね。」

「アハハッ、確かにそうだね。」

なんとか空気を保ちつつ、建物の中を進んでいく。

上へと続く階段が壊され、ようやく見つけたのが非常用のハシゴだった。

しかし、そこにはランチアに口封じをしようとした柿本千種が待ち構えていた。

警戒する一同、そんな中で獄寺がいち早くボムを投げる。

千種が迎撃しようとした瞬間、ボムから煙幕が吹き出した。

「十代目、ここは俺に任せて先に行ってください。」

「獄寺君！」

「隼人！」

ビアンキは獄寺に話す。

前回千種にやられ、体に入り込んだ毒の事。

それをシャマルのトライデント・モスキートにより危機を脱した事。

そして、副作用の発作がいつ起こるか分からないとも。

「それでもやるの？」

「あたりめーだ、その為に俺はいる。」

「……行きましょ、ツナ。」

「え、でも……。」

頑として譲らない獄寺を見て、ビアンキはツナに先を促す。

「行ってください、十代目は骸を。」

「それは、そうだけど……。」

「終わったらまた皆で遊びに行きましょう。勿論、満流の奴も一緒に。」

「っ！……そ、そうだよな。行けるよね？」

「もちっすー！」

「わかった、行くね！」

獄寺を残し、ビアンキ、リボーン、ツナはハシゴを登っていく。その間、千種は全く動きを見せなかった。

「大人しく行かせてくれたじゃねーか。」

「骸様の、命令だ。」

ただ一言だけ呟く。

余計な事はせず、己の武器であるヨーヨーを構える。

「そうかよ、なら行くぜ！」

「……」

互いに踏み込もうと足に力を込める。

その瞬間、激しい揺れが二人を

いや、建物全体を襲った。

「なっ!?!」

「っ!」

予想だにしなかった事態に、体勢を崩す二人。

これは、建物だけでなく一帯に影響が及んでいる。

それほどの激しい揺れだった。

しかし、一瞬の揺れからして地震ではない。

「ちくしょう、何だ今の……っ!」

咄嗟に横に跳ぶ、今まで自分が居た場所に大量の毒針。見ると、既に体勢を立て直した千種がヨーヨーを手に納めていた。

「ちっ、お構いなしかよ。ならこっちも行くぜ!」

獄寺もボムを取り出し、導火線の火を着ける。そして先程と同じく、二人同時に駆け出した。

「ゴフツ……さすがに、モロは痛い……。」

口元の血を手で拭いて、ゆっくりと起き上がる。フラフラと、足元が安定しない。

頭を思いつきりぶん殴られたからなあ、しばらくは視界もグラついたままだろう。

どくどくと流れ出てきた血が滴り落ちる。

叩きつけられた闘技場の壁が、ガラガラと音を立てて崩れる。

砂埃がだんだんと晴れてきた。

まさかこんなタイミングで666のヘルリングが邪魔するとは。ずっとしまつてたから忘れてたよ。

これは所有者を666回不運な目にあわせた後、それをチャラにする位のラッキーを一回だけ起こすらしい。

今だ成功例が居るかは不明らしいけどね……。

今んとこ何回目だっけ？

600を超えた辺りから数えるの忘れた。

「ハッハッハッハッハア！！ どうだ思い知ったか！ これからテメエを肉塊になるまで殴り続けてやる！！！」

「地味にスプラッタな趣向してるね。まあ私も人の事は言えないんだけど……。」

思い出すのは記念すべき痛者第1号の末路。

いやあくあれは楽しかった？

「潰れるお！！！」

「このっ……。」

アイツに向けて瞳のヘルリングをかざす。

その瞬間、リングから大量の刃が次々と生えて標的に向かっていく。

それらがアイツを貫いて串刺しにする。
しかし、その時に奴の姿がブレる。

その場に残ったのはただの骸骨、本体は真っ直ぐに私の方へと飛んでくる。

「ちっ、ヘルリングの呪いかぁ。」

骨残像のヘルリングは所収者が攻撃をくらった時、身代わりを生み出して守るらしい。

ヘルリングの中ではかなり実践向きの能力だ。

「もう一度吹っ飛ばえ!!」

「おわつと!!」

凄まじい速さで振り回される棍棒っぽい杖。

さすがにあのナイフじゃ受けられないから躲す。

「ちょこまかとお、これならどうだ!!」

「げっ。」

奴の横にズラッと現れた分身の骸骨。

左右に三体ずつ、計六体。

「くらええ!!」

周囲から六体の骸骨が同時に攻撃してくる。
ナイフを投擲してなんとか二体は潰した。

しかし他のは防いだり躲したりしてやり過ぐす。距離が近い二体にリングから直接刃を出して迎撃しながら、両手に再び出したナイフで残り二体の攻撃を防ぐ。

分身なら何とか防げるみたい。

しかし、それで動きが取れなくなった私の頭上に本体が飛び出す。

「これで終わりだ!! 死ねえ!!」

「うわあ、これマジでヤバイ。」

闘技場に鳴り響く鈍い音。

それが何処か遠くに聞こえる。

先程のように壁に、そして先程以上に強く叩きつけられた。派手な破砕音が響き、ガレキが体の上に落ちてくる。

息が荒い、心臓がウルサイ。

視界が暗い、耳も遠くなっていく。

アイツが何かしら言っているのが聞こえる。しかし明確には聞き取れない。

今のうちにトドメを、なんて考えは無いようだ。

ホント、馬鹿。

それにしても、ヤバイ。

最初の一撃が思ったより効きすぎた。

血もだんだん足りなくなってきたし。力も上手く入らなくなってきた。

「お互い・・・狂っちゃおうかあ・・・」

右手のリングに意識を向ける。

手に入れたその時から、食わせる食わせると頭の中で囁やき続ける。

一人は大人しく、もう一人は盛りのついた犬の様に。

目をギラつかせて見つめてくる。

今の私の心境を感じ取ったのか、よりいっそう吠えてくる。

「いいよ・・・ちょっとだけ・・・食べさせてあげる・・・？」

己の敵が吹き飛ぶ姿を見て、空牙は勝利を確信した。

った。

なにかが壊れた様な危険性。

ネジが外れた機械のような。

動きを縛る糸が切れた人形のような。

そんな、何かとんでもない物が解かれたような危うさを感じる声。

そして次の瞬間、ガレキの山が弾け飛んだ。

「ぬおっ！」

飛来するガレキを防ぎ、満流が居るであろう場所を見る。

『フハッ、フッフッフッフ・・・アハハハ・・・』

そこにはおぞましき異形の存在が居た。

全身から大量の血を垂れ流し、全身から不気味な刃を生み出している化け物。

背中や腕、腹や足に至るまで。

ありとあらゆる場所から刃が生え、根元から血が吹き出している。

二つに纏められていた髪は解け、腰の辺りまで垂れ下がっている。

ライトグレーの瞳は、白目の部分も含めて血のように真っ赤に染まっている。

そして、その額には大きな第三の目が大きく見開かれている。

ただ骸骨になっているだけの空牙がマトモに見えそうな程の不気味

さ。

大きく両手を左右に広げ、空を見上げている満流らしき化け物。

その三つの目が、不意に空牙を捉える。

瞬間、口元がニヤリと醜く歪む。

『ほおラさあ……せつかク同じ土俵に来てあげタんだからサあ……いっつっつぱいヤろうよあ？　たくさん楽しく気持ちヨクさあ……』

ノイズ混じりに響く声。

狂気に満ちた三つの目。

知らず、空牙の足が一步退いた。

精神を食らわせ、理性を失った筈の心が恐怖している。

条件は同じ。

自分も相手も、同じ力を持った呪いに身を委ねただけ。

であるにも関わらず。

「ふざけるな！！　この俺が！　今の俺が貴様如きに恐怖するかあ
！！」

それを吹き飛ばすように大きく叫ぶ空牙。

ありつたけの力を集中し、満流に向かって飛び込む。

『アハハッ！　そうソウ、それでイイんだよあ。』

左手を空高く上げる。

すると、肉を引き裂く音を出しながら刃が幾つも生える。

新たに血が吹き出しても、本人は涼しい顔。
痛みなど微塵も感じてない。

「今度こそ死ねえ!!」

「やアだあ?」

ぶつかり合う棍棒と複数の刃。

満流の立っている地面が大きく陥没し、砂埃が吹き荒れる。

闘技場の風景が霞んで消え、元の森に戻る。

攻撃に力を集中するため、空牙が幻術を解いたのだ。

二人が打ち合う衝撃に、次々と木が倒れていく。

鳥達が一斉に飛び立ち、避難しようと思死に羽ばたく。

「スキありイ?」

「ぐはああ!!?」

つばぜり合いになった瞬間、満流がもう一方の手を空牙の左肩に当てる。

そして掌から刃を生やし肩を切断したのだ。

「こんのお!! 死に損ないがあ!!!!」

「アツハツハ! 何言ってるんお? 今はキミが死にそうダヨお?」

骸骨であってもハツキリ解る程に必死の形相の空牙。

対して、満流は心の底から楽しそうに恍惚とした表情。

頬が血とは別にほんのりと赤く染まり、額以外の両目は快樂の色に染まっている。

激しく交差する二人の化け物。

辺りは陥没した地面で埋めつくされ、マトモな足場は無い。それでも、そんなものはお構いなしに殺り合う。

『ホラホラア！ ちゃんと防がないト逝っちゃウよお？！』
「うがあああああ！！」

段々と、満流が優勢になってくる。

攻撃の速度が、空牙の防御を上回り始める。

いや、実際には満流が上回し始めたと言える。

空牙が防げる範囲から、少しずつスピードを上げていく。

やがて体を切り刻まれて行き、防ぐ動きも減ってしまう。

切られる回数と防ぐ回数が反比例になり、辺りに血が飛び散り出す。

『ほうラよつとオ？』

強く踏み込んで、杖を弾く。

杖が回転しながら飛んでいく様を、空牙は止まった思考で捉えていた。

そして、腹に感じる鋭い感触。

見れば、幾重も重なり合った刃の束が、腹を貫いていた。

「ぎゃああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

『骸骨の串刺し〜？ アハッ、まるで串刺し死体の白骨化したの見

てるミたくらい？』

空牙ごと刃を持ち上げ、空に掲げて笑う満流。
そして刃を地面に突き立て、腕から切り離す。

『イイ事思いついちゃった〜？！』

そして、思いつきり跳ぶ。

距離にして五十メートルは跳んだ。

刃に貫かれ、浮いた体をダランと垂らしていた空牙が上空を見る。

『敵を倒すんだからあ〜、やっぱり必殺技的なノで殺らないトね〜
〜？』

両手を上げ、無数の刃が天に伸びる。

やがてそれは途轍もなく巨大な剣の形になった。

それも、剣腹の部分におびただしい数の目玉がある不気味な剣。
見ただけで吐き気をもよおしそうな剣が、空に現れる。

大きさは人間の数十倍はある。

個人にトドメを指すにはあまりにもオーバーキルな規模だ。

「あ……ああ……あああああああああああああああ
あああああ！！！！」

状況を理解した空牙が悲鳴を上げる。

心身共に大きなダメージを負った彼は、とくにヘルリングの呪いが
解けていた。

第三十七話（後書き）

さらば空牙 W W W W W W W W

ちなみに、私はヘルリングが霧属性であることと呪いの契約は別個と解釈してます。

なので、何故満流が霧属性じゃないのに契約したかを疑問に思った方は何卒平にご容赦ください。

それではまた次回（＾o＾）ノ

第三十八話

「うわぁ！」

「なに！？」

「くっ！」

獄寺と別れ、骸の元へと向かっていたツナ達。突然襲ってきた激しい揺れに、三人ともが驚く。

ピアンキとりポーンは何とか体勢を保って耐えたが、ツナは思いつきり尻餅をついた。揺れはすぐに収まり、辺りを静寂が包む。

元々が老朽化した建物だった為、所々にヒビが入っている。天井からコンクリの欠片がパラパラと落ちる。

「無事かお前ら？」

「私は平気よ。」

「いつて~~~~。」

ツナが尻をさすりながら立ち上がる。

「何だったのかしら、今の。。。」

「獄寺君の爆弾じゃないの？」

「いや、今のは建物の中からじゃねえな。原因は外だぞ。」

ガラスの嵌ってない窓から外に視線を移すりポーン。他の二人もつられて外を見る。

そこには、高さ五・六十メートルはあるつかという土煙が森から立ちのぼっている光景があった。

「な、なんだよあれ！」

「何か大きな爆発でもあったのかしら？」

「……どうだろうな。」

リポーンは返事もそこそこに思考していた。爆発物にしては派手な爆発音が聞こえなかった。

それに、この距離であの規模の爆発なら揺れだけじゃなくて激しい風が建物を襲う筈。

聞こえたのは、まるで大地を穿つような野太い破壊音のみ。

あらゆる状況からして、あれが爆発によるものとは考えにくい、と。

「今考えても分かりそうにねえな、行くぞ。」

「ええ、そうね。」

「うん。」

例えアレがなんであれ、今の最優先は骸だ。

僅かに後ろ髪引かれつつも、三人は先を急ぐ。

二階のボウリング場には骸はおらず、三階へと上る。

三階は映画館で、一昔前の映画のポスターが壁に幾つも貼られている。

やがて上映場所への扉を見つけ、慎重に開けて中に入った。

「また会えて嬉しいですよ。」

「！ ああつ、君は！！」

室内の奥に置かれたソファーに腰掛ける人影。
それはツナが先程、森の中で会った黒曜の生徒だった。

「もしかしてここに捕まってるの？ あつ二人とも、この人はさつき森で会った黒曜生の人質なんだよ。」

「ゆっくりして行ってください。君とは永い付き合いになる、ボンゴレ十代目。」

「え？ なんで俺がボンゴレって・・・。」

黒曜生の言葉に、足を止めるツナ。

「違うわツナ、こいつ！」

「クフフ、そう、ボクが本物の六道骸です。」

「な、はぁー！ー！？」

直後、後ろのドアが閉まる音。
驚いて振り返ると、そこには。

「フウ太！？」

森で別れたフウ太がいた。

「はぁ……はぁっ……。」

ちくしょう……視界が霞む……。

目の前にはメガネ野郎と、山本に倒されて姉貴にトドメを刺された
筈のアニマル野郎。

メガネ野郎との戦いの途中、発作が起こった隙を背後からつかれた。
それでこのザマだ。

足元がフラつく、立っているのもやっとだ。

「生きてたの？」

「死ぬかと思っただけだね、色んな意味で。」

「？」

俺の前で悠々と喋ってやがる。

もう自分らの勝ちを疑ってねえ……。

くそっ。

体が後ろに下がり、カーテンで隠されていた階段の下に落ちていく。

もう立ち上がる力も……ねえ。

「ぶっざまー」

体が、動かねえ……。

壁に空いた穴の所に、あのバースとか言う奴の鳥が止まる。

『ヤラレタ、ヤラレタ。』

ちつくしよう、変態野郎の鳥まで嘲笑ってやがる・・・。

・・・何が・・・十代目の右腕だ・・・。

何の役にも立ってねえじゃねえか・・・。

くそ・・・くそっ・・・。

これじゃあ・・・満流にも合わせる顔が無え・・・。

『緑のたなびく並盛の』

? なんだ・・・。

『大なく小なく並がいい』

変態の鳥が並中の校歌歌ってやがる・・・。

「・・・へへ。」

そうか。

そこにいやがったか・・・。

震える腕を動かし、一本のダイナマイトを取り出す。

「っひゃー、こいつまだ戦う気だよ。」

ライターで着火し、なけなしの力振り絞って壁の所に投げる。

「っひゃー、どっつってんのー？」
「……………!」

ダイナマイトが爆発する。

ガラガラと崩れる壁、その向こうの空間にうずくまる一つの影。

「へへ、ウチのダッセー校歌に愛着持ってるのは……お前くらいだぜ。」

「んあ？ コイツ……。」

「並盛中学風紀委員長……。」

影が顔を上げる。

相変わらずシケたツラしやがって。

「自分で出られたけど、まあいいや。で、その二匹は僕にくれるの？」

「へ、好きにしやがれ……。」

変態の鳥を肩に乗せ、雲雀が相手の前に出た。

「……………うう…ん……………ん？」

目を開くと、雲一つない青空。

鳥が悠々と空を飛んでいる。

ピューヒョローとか聞こえてきそうな景色。

「ああ、寝ちゃってたんだ…。」

自分が寝そべっている事に気付いて、体を起こす。

その瞬間、体中に激痛が走る。

「ぐっ…ゴハツ！」

そして吐血。

よく見れば、私の体は既に相当な血溜まりの中に沈んでいた様だ。

制服なんて血で真っ赤だし、髪も血でビチャビチャ。

我ながらよく生きてるなあと思う程の出血量だ。

と言うか、完全に致死量超えてる気がする。

「ヘルリングとの契約の影響かなあ？」

考えても分からないけどね。

オカルト方面は専門じゃないし。

私はインテリなのです。

「そういや、中二君はどうしたのかな？」

辺りを見回す。

死んでる事は間違いないが、どんな有様なのが興味がある。

あの大剣で殺られたら、さぞかし面白可笑しい姿になっていることだろう。

「お、もしかしてアレかな？」

痛みを堪えて立ち上がる。

片足を引きずりながら歩いて行くと、そこには肉塊があつた。

まるで豚肉をさばくの失敗した様な光景。

人間の形など留めていない、ハイエナにでも食い散らかされたみたいだ。

そう、簡単に言うなら某ロボットアニメの赤い二号機さんの最後みたい。

常人が見たら一瞬で昼飯をリバーすするであろう光景。

「これこれは・・・凄いで来栄え〜？」

ここまでグロッキーな死体を制作したのは今迄にないよ。
記念に一枚パシャ　つと。

「あ、携帯壊れてる・・・。」

完全に二つに折れ、画面は粉々だ。
むしろ原型を留めてるだけマシな方かな？

改めて自分の体を眺めると、他人からしたら凄惨な状態だ。
制服はいたる所が裂けて肌が露出してゐるし。

髪はピンも髪留めもどっかに消えて垂れ下がり、ボサボサ。
しまいには体中血だらけ。

むしろ真っ赤つかだ。

これで人の前に出たら死人の怨霊か何かだと思われる事必至だよ。

「せめて血を何とかしないと・・・建物の水道って生きてるよね？」

骸が使ってるんだし、水くらいは出るだろう。

「じゃあさっさと・・・うん？」

建物に向かおうとした時、視界の隅に微かな光が見えた。
そちを見ると、どうやら中二の死体の中に何か埋まつてるみたい。

「なにか・・・あつ、もしかして・・・。」

死体に駆け寄り、躊躇いなく手を肉に突っ込む。
グチュグチュと音が鳴り、異臭が鼻を突く。

ツナ君ならこれだけで気絶、もしくは吐くだろう。
でも私にはいつもの事、死体の臭いなんて嗅ぎ慣れた。

「たしかここらへん・・・お、あつたあゝ？」

硬い感触を感じ、それを引き抜く。
するとそこには

「骨残像のヘルリング、ゲットだぜ？」

そう、中二が使ってたヘルリングだ。

流石にこれは頑丈だねえ、あの攻撃でも傷一つ付かないなんてさ。

「と言っても、もうヘルリングはいらないんだよねえ・・・。」

幻術使うなら二つで充分だし、そもそも実戦で幻術を使う気なんて無いし。

幻術はマーモンの役目だもんね、お株を奪うような事はしない。

それに、それ抜きでも最初から骨残像だけは手に入れる気は無かった。

それこそ、ヘルリングの力を調べ上げた当初から。

何故って、そりゃつまんないじゃん？

さっきも言ったように、これはヘルリングの中でも特に実戦向きの能力を持つてる。

相手の攻撃を身代わりするとか、使う人によってはチートじゃない？
そんなもん使って戦っても面白くないじゃん。

自分が有利すぎる状況で余裕で勝ったって全然楽しくない。
むしろこんな便利アイテムばかり使ってたら腕が鈍るよ。

そりゃあコレ一っだけならいいよ？

でも私は既に二つ持ってるし、今日は同じリング持ち相手だったから契約もしたけど。

自分と対等に渡り合える相手と殺し合うから楽しいんじゃない。だから今回みたいな相手を期待して痛者共の掃除をしてるんだし。

まあ、ほぼ九割九分がハズレなんだけどね・・・。

アホ神共から貰った力でゴリ押しすれば勝てると思っかけてない素人ばっか・・・。

まあつまらない思考はここまでにしてえ。

「これをどうするか、だよねえ。」

右手で摘つまんでいる骨残像のヘルリングを見つめる。

さっきから食わせる食わせると語りかける。

さっき中二の精神たっぷり食ってた筈なのに、本当に食欲旺盛なことで。

「ま、いらぬし。 適当に売りさばくかあ。」

そう結論し、無事だったポケットに入れる。

使う気は無いし、これならマフィア界でウン千万・・・いや、億は下らない値段で売れる筈。

特に金に困ってはいないけど、金はいくらあっても困る事はない。

「それじゃあ行きますかあ。 ツナ君達は上手くやれてるかなあ？」

そう言えば、私はどれくらい寝てたんだろう？

もしかしてとづくに終わって皆帰宅済み、なんてオチはないよね？

アレ、今のってフラグ？

自分で立てちゃった？

「ヤバイ、思考が変な方向に・・・。」

出血量が半端ないせいだろうね。

自分の手が二つに見えるし。

「これは、急がないと・・・ねえ。」

体を引きずりながら坂を登る。

因みに、私や中二がいた辺りを中心に、馬鹿デカイクレーターが出来ていた。

故に、私は今そこから這い出ようとしている最中。

自分の技で自分の首を絞める事になるうとは・・・。

何度も足を滑らせそうになりながら、やっとの事で踏破する。

体が重い、視界も悪い。

こころなしか体温も下がって来てる気がする。

でも気分は悪くない。

むしろ最好調だ。

長年の欲求不満を大分発散できたし。

最高に良い気分。

だから体も動く、歩ける。

森の中を歩き続ける。

鳥の鳴き声が遠くに聞こえる。

それ以外は草を踏みしめる音と、私の荒い呼吸だけ。
方向なんて正確には解らない。

何となくでしか決めてない。

それでも、コツチで合っていると感じる。

今頃、ツナ君は骸と対峙しているだろう。

本来、敵う相手じゃない。

たとえツナ君の、多分死ぬ気状態だと思われる時の姿でも。
いくら死ぬ気になったとしても、結局は元が元なのだ。

倒せる相手にも限度がある。

そして、骸はそれを十分に超えている。

しかし、それでも

「ツナ君なら、戦いそう・・・だよ・・・ねえ・・・。」

ここに来るまでに手に入れた情報で、獄寺君も被害に会ってる事は知っていた。

それにココの戦闘でも、何人が傷ついただろう。

それを放っておける程、腐ってはいない。

例え、普段がどれだけダメでも。

「ツナ君は・・・友達・・・大事にするもんね。」

初めての友達だと言われ、いつも引ッ付かれていたからこそ、
どれだけ彼が友達と言う存在を尊んでいるか。

どれだけ大事にしているか。

もう嫌と言う程、小さい頃に思い知らされた。

自分がかかわれていると、私の後ろに隠れているくせに。

次に私がバカにされると、上級生相手にも涙目ながらに怒鳴って。

私は気にしてないのに、止めても引き下がろうとしない。

それで、結局向こう側が退散しちゃう事もあったっけ・・・。

「ふふっ・・・。」

思い出せば笑ってしまう。

私と彼は、本来なら友達になれるような者同士じゃない。

彼は根っからの優しい子で・・・。

私は根っからの殺人狂・・・。

普通なら一生掠りもしない様な立場で生まれ、生きている。

ただ、ツナ君も普通とは言い難いだけ。

ボンゴレの血筋だから、この世界に関わらざるを得ない。

だから、今もこうして同じ事件に立ち向かってる訳だけど・・・。

人を傷付けるのが何より嫌いなマフィアのボス候補・・・。

人を殺すのが何より楽しい人殺しの女……。

やっぱり不自然だ。

それに、私はいつかツナ君達の敵となる。

いや、最初から敵だった……。

ツナ君が、ボンゴレの十代目候補である限り。

もしかしたら、私の手でトドメを刺す事にもなるかも知れない。

先の事なんて解らないけど、少なくとも傷付ける事には必ずなる。

私が人殺しだって知ったら……ツナ君はどんな顔するかなあ……。

驚くだろうな、やっぱり……。

きつと嘘だ、とか、冗談でしょ？ とか言ってくる。

そして絶望した顔するかも。

そのあとは……なんだろう？

怒りか憎しみか、それとも侮蔑や軽蔑の眼差を向けてくるかもしれない。

さすがにちよつとショック受けるかも。

今から覚悟しておかないとなあ……。

はあ、シリアスは苦手なのに……。

と言つかこんな風にしんみりするのもキャラじゃない。

「頑張れ、ツナ君……。」

きつと必死に戦っているだろう幼馴染みに向け、呟く。

いつか敵になるだろうけど。

今は、応援くらい……いいよね？

痛い、体中が痛い。

骸との戦い、正直言ってバッドエンド寸前。

骸が前世の記憶持つてるとか、六つの能力持つてるとか。

もう訳の解らない展開すぎて付いていけない。

雲雀さんや獄寺君も来てくれたけど、形勢逆転された。

雲雀さんとフウ太、リボン以外の皆の体が乗っ取られるし。

レオンがマユから吐き出した俺の武器は毛糸の手袋だし。

ダイナマイトの爆発で黒こげだし。

もう散々だ。

こんなの、もうたくさんだ。

もう死ぬのかな？

いいよな？ もう・・・。

俺、結構頑張ったよな？

ただの中学生なのに、こんな所でよくやっただろ？

みんなゴメン、俺はもうここまでだ。

痛いのも怖いのも苦しいのも、本当にもうたくさんなんだ。

『んまあっ、この服！』

！？

『ツナったらまたこんな散らかして出かけて、自分の事は自分でしなさいって言ってるのに！！』

頭の中に響く声、同時に映像が流れ込んでくる。

母さんが俺の部屋で、散らかってるのを見て呆れている。

え？ 母さん？ これ・・・夢なのか？

『なんだこれ！？』

新たな声と共に、映像が切り替わる。

『日直日誌に沢田のテスト紛れてんじゃない！ しかも・・・二点・・・』

あっそれ、国語のテストだ・・・。

『あいつマジでダメだな〜。京子モノにしたいんならもうちよつとシツカリしろよ〜。てかアイツ満流と京子とどっちかに決めろっつうの〜。』

余計なお世話だ・・・。

「・・・つか・・・何で黒川の悪口が・・・？」

『特殊弾の効果だな・・・。』

「ん？」

今のは、目の前にいるリボンからだ。

『お前が感じ取っているのは、リアルタイムで届く皆からお前の・・・小言だ。』

・・・は？

小言？

な・・・何でこんな時に小言聞かされなきゃならないんだよ・・・。アレか、最後の最後にまたダメツナって思い知らされるのかよ・・・。

『はひー！！？ 何考えてるんですか！！ 犯人のアジトに乗り込むなんて正気じゃありません！』

ゲツ、ハルだ・・・。

『ガハハハ！ ハル泣いてるもんね！』
『な！ 泣いてません！！ ハルはマフィアのボスの妻になるんです、こんな事で泣きませんよ。』

グシグシと涙を拭くハル。

思いつきり泣いてるじゃないか。。

『ツナさん、頑張ってください！』
「！」

視界が変わる。

これは・・・病院、お兄さんの病室だ。

『落ち着け、京子』

『だって・・・ツナ君や満流ちゃん達がのりこんだって・・・』

『心配するな・・・』

『・・・でも・・・』

『お前も知っているだろう？ 夜月はそんなヤワではないと。』

『それは・・・そう、だけど・・・』

まあ、そうだよね・・・みーちゃんは強いし・・・

『それにな・・・』

『え？』

？

『沢田は俺が手を合わせた中で最も強い男だ。 負けて帰ってきたら俺が許さん・・・』

お兄さん……。

『そうだよ、大丈夫だよ。ツナ君、満流ちゃん……元気で帰って来てね……』

……京子……ちゃん。

『俺と同じ過ちを繰り返すな。』

！ランチアさん……。

『仲間を、守れ……。お前がその手で、ファミリーを守るんだ……。』

次々、と皆の言葉が流れてくる。

さっきまで感じていた諦めが、消えていく。

「俺の小言は言うまでもねえな……。」

ああ、そうだな……。

体の内から、何かが込み上げてくる。

そうだ、まだだ……。

まだ、終わってない。

皆、骸のせいで傷ついた。

お兄さんも、獄寺君も、山本も……。

ビアンキや、フウ太も……。

考える内に、また映像が流れて来る・・・
さっきまでいた外の森。

そこを・・・血塗れの幼馴染みが、歩いていた。

『頑張れ、ツナ君・・・』

いつもの様に、笑顔を浮かべて・・・。

うん、頑張るよ・・・。

もう、頭に来た。

絶対にコイツは・・・コイツだけは・・・！！

目を開け、眼前まで歩み寄っていた骸を睨みつける。

「ほう、この後に及んでそんな目をしますか。 ですが。 もう幕引きにしましょう。」

手にした三又槍の先端を、振りかぶり。

「このまま死なれては困りますからね。」

振り下ろしてきた。

でも、不思議だ。

動きがゆっくり見える。

掴もうと思えばいつでも掴める。

何が起こったのかは解らないけど、今はありがたい。

「！ なっ！！！」

掴んだ瞬間手袋が光に包まれ、グローブに変化した。その時、体中に力が溢れ出し、そのまま槍を砕いた。

「！！！」

「骸……お前を倒さなければ……。」

飛び退いた骸を見据えながら、俺は立ち上がった。

「死んでも死にきれねえ。」

第三十八話（後書き）

次回で黒曜編は終了、リング争奪戦です!!!

もうすぐ・・・もうすぐです!!!

感想いつでもまっす。

誤字脱字指摘も同じくです。

ではまた次回（^o^）ノ

第三十九話（前書き）

黒曜編完結！

第三十九話

血溜まりの中に立ち、下を見下ろす

うるさくわめいた肉の塊

最後までやかましく喚いて

暴れて狂って散らかして

泣いて縋って引っ付いて

叫んで倒れて這い回って

びくびく震えて呻いて

いつしか止まって逝った

・・・アハハハハ

「どうだったかね？ 初めて人を騷った気分は？」

いいね

「初めて踏みにじった気分は？」

悪くない

「初めて見下した気分は？」

ゾクゾクする

「初めて決った気分は？」

最高

「初めて殺した気分は？」

楽しくてたまらない

「そうか。では……………初めて……………一人になった気分は？」

……………退屈

「そうだね、退屈だ。人を見下すのはとても気分が良い。殺すのも爽快だ。しかし、だからこそ君はこれから、生かす事も覚えねばならない。」

生かす？

「そう。人の喜怒哀楽とは自分以外の何かによって生まれるものだ。君の今の快樂が獲物あってこそであるようにね。だが、根絶やしにしてしまつてはそこで終わりなのだよ。」

それは・・・困る

「だろう？　これから君は獲物を狩り、一方で逃がすんだ。人が動物を殺す一方で生かすように。そうすれば新たに獲物を生み出してくれる。強者を、ね。」

強者・・・強い？

「君の基準はとても厳しいだろうね。しかし、そうだ。世界は君の狩場だ、失った分を補う機会を与えねばならない。バランスを崩さぬようにしていれば、君は末永く狩りを楽しむ事が出来るだろう。」

楽しそう

「理解してくれたなら結構。さて・・・私はもう行くよ、君のはもう解いてある。短い間だったが、本当にありがとう。いつか、また会おう。」

うん・・・いつか・・・あなたも狩りたい

「・・・ふふふつ。では、それまでに一人でも多く強者を用意しておかなければいけないな。」

楽しみにしてる

「ああ。それではな、」。

《………！……！　　おい、満流！　起きろ〜》
《………う……え……？》

聞き覚えのある声で意識が浮上する。
視界には誰もいない。

当たり前だけど。

「駄神？」

《そうそう。　　……いや、違うぞ！？　神だ、神！！》

「もう遅い、最高神様による言質は既に取れた。」

《俺は自分の言質すら覆せないのか……。》

下らないやり取りの間にも、自分の周囲を確認する。
向かっていた骸のアジトの中らしい。

私のすぐ隣には水道があり、蛇口が開きっぱなしだ。
水が次から次へと流れ出し、小さな水溜まりが出来ている。

どうやら無意識にでも辿りついてはいたみたいだ。

「私、どれくらい寝てた？」

《せいぜい三分だ。　その水道で水分補給した途端に崩れ落ちて
気絶しちまったんだよ。》

「ああ、どつりで。」

さっきまで渴ききっていた喉が潤っている。

体の調子もほんの僅かに良くなっている。

戦闘は出来そうにないけど。

ツナ君の所に行くくらいは出来そうだ。

時間も惜しいので早く行こう。

頭からサツと水を被り、ボウっとしている体を覚醒させる。

体についてた血を洗い流すけど、傷口から新たに流れ出す。

諦めて蛇口を閉め、上へと歩く。

「ツナ君の・・・様子は分かる・・・？」

《ああ、結構凄い事になってるぞ。お前が見たら仰天しそうだ。》

「へえ・・・それは・・・楽しみだなあ・・・。」

言い回しからして、悲惨な事にはなっていないだろう。

あくまでもツナ君は、だけど。

他の人はどうなっただろう？

そう言えば、恭弥君も見つかってないし。

「ねえ、恭弥君って何処にいるの？」

《同じ所に居るぞ、もう気絶して床で倒れてるがな》

「それはまた・・・逆に見てみたい・・・。」

そんで一枚保存出来れば面白いだろうなあ。

携帯が壊れているのが悔やまれるよ〜。

あ、ハシゴ発見。

「うう・・・登るのもキツイ・・・」

《こうして起きて動いてるのが有り得ないんだがな、普通。》

「遠まわしに私を人外だと言いたい訳ね。」

《うん、まあ・・・そう。》

否定はしない。

自分でも結構不思議だ。

なにせ体中の骨が軋んで悲鳴を上げているのに、動けない程じゃない。

あばらは三本折れてるし、右腕には多分ヒビが入ってる。

傷から流れる血は止まってないし。

なにより、さつき起きた時から右目が見えない・・・。

完全に失明したって訳じゃないだろうけど。

それでも、難なく動く。

いや、実際にはメツチャ痛いんだけどね？

なんか、まるで夢の中で動いているみたいとでも言えばいいのかな。

どこかフワフワしてる感じがして、痛いけど痛くないみたいなの。

言葉だけ聞いてるとかなりヤバイ感じに聞こえるけどね。

「二階にはいないんだっけ？」

《ああ、三階の映画館だ。》

「地味にキツイなあ・・・。」

運良く階段を見つけ、ノロノロと上がっていく。

《おい、大丈夫か？》

「大丈夫ではない・・・けどねえ。まだいけるよあ・・・。」

《お前、気づいてるか知らないがさつきからちよくちよく意識が途切れてるぞ。》

「まじかあ・・・。確かにこう、階段とか三段飛ばしに上がっている気がした・・・。」

気合でこなしていた訳ではなかったのか。

もう末期状態だね。

もしかして途中退場フラグかな？

「だが、私の冒険はまだまだ続くぜえ・・・。」

《やめろ、それこそフラグだ。》

「おっと・・・。」

いかんいかん。

やっぱ色々と限界みたいだ・・・。

だってさつきから一度もセリフや文末に音符が使われてないし。テンションが底辺状態の証拠だ。

《いい加減にしる・・・。お、着いたぞ。そこの扉の中だ。》

「おお、やつとかあ・・・。」

音を立てない様にそっと開け、中を伺う。

するとそこには・・・。

両手に炎が灯ったグローブを嵌め、宙を飛び回って骸をシバくツナ君が居た。

「うつそおん……。」

あ、ヤベツ……

手に入れた新たな力、Xグローブによって骸を追い詰める。
力量はこちらが上、倒すのも時間の問題だ。

そんな中だった。

「うっそあん……。」

「！」

不意に、呟く程度に響いた声に、体に電流が走った。

数時間前に別れたきりの、しかしつい先程に凄惨な姿で歩いているのを見た、幼馴染みの声。

骸やリボンも、珍しく驚いた様子だ。

全員が一斉に声のした方に視線を向ける。

そこには、やはり凄惨な状態で扉に寄りかかる様に立っている幼馴染みの姿があった。

「満流！ 無事なのか!？」

「え？ ああうん……なんとかねえ。」

手をヒラヒラと振りながら笑って返事をしてくる。

しかし、その笑顔はとても弱々しく、声色からも疲れが感じ取れる。

「満流、座って休め。 手当てするぞ。」

「おおリボン君。 ありがとう……。」

素早く満流の元に移動したりリボンが、どこからか応急処置用の道具を取り出す。

手早く容態を見るリボン。

そこに焦りの色は無い、どうやら命に別状は無さそうだ。

「クフフ、よそ見とは余裕ですねえ。」
「！ 骸!？」

しまった、と思った時にはもう遅かった。

後ろから両手を掴まれ、即座に後頭部に頭突きをくらう。

体勢が崩れた瞬間に、今度は脇腹に蹴りを入れられる。

「ぐっ！」

「何故君に多くの刺客を向かわせたかわかりますか？」

体を引き寄せ、耳元で囁く骸。

「君の能力を十分に引き出してから乗っ取る為だ、ご苦労でしたね。」

背中を思いつきり蹴り飛ばされ、前方に吹っ飛ぶ。

「もう休んでいいですよ！」

「カハッ！」

「飛ばされた先を見るがいい。」

「！」

壁にある亀裂。

そこに、先程弾いて飛んでいった三又槍の先端部が挟って突き出ていた。

「空中では受身が取れまい、君はその甘さで自分を無くすんですよ。」

空中で、ふと視界の端に見えた満流。
壁に寄り添う形で座り、荒い呼吸をしながら俺を見ていた。

今にも途切れそうな意識を、必死につなぎ止めているように見える。
その目は、今の光景に対する不安。

そしてその奥にある、俺への信頼を宿していた……。

「いけツナ。今こそ、Xグロブの力を見せてやれ。」

「うおおおおおー!!」

リボーンという言葉と共に、両手に力を集中する。

その瞬間、手から死ぬ気の炎が大きく吹き出した。

それによって体が空中で静止し、槍に刺さる寸前で止まる。

「な！ 炎を逆噴射だと!?!」

驚く骸に向かい、炎の推力で一気に接近する。

骸の頭を右手で鷲掴みにして、そのまま前へと飛ぶ。

「うわあああああ!! ……あ……ああ……。」

骸の体を包むオーラが、死ぬ気の炎によって浄化されていく。

そのまま舞台に突っ込み、その衝撃で骸は気絶した。

後ろの方で、金属が割れるような音が響いた。
訪れる静寂。

後ろから、リボーンが歩いて来た。

「終わったな・・・」

「・・・うん。」

こうして、短いようで途轍もなく長い戦いは終わりを告げた。

カッキーン！ と、スッキリする程の音が鳴り響く。

会場を歓声が包み、中には黄色い声もしばしば。

そんな中、武君が悠々とグラウンドを走っている。

「わーっ！！」

「ホームランです！」
「やっぱり山本すごすぎ！」

ツナ君やハルちゃんがはしゃぐ。
他の皆もそれぞれに騒ぎ、楽しんでるようだ。

あの戦いから、早くも一ヶ月経った。

骸達は、あの後すぐにやって来た復讐者ウインディイチエに連れて行かれた。
マフィア界の掟の番人、捕まったら逃げられないと評判の人達だ。

ツナ君が犬や千種に身の上話を聞いた時はちよつとヒヤツとしたなあ。
うっかり私の事を話されたらどうしようかと。

幸いそこは考慮してくれたのか、私の事には触れなかったけどね。
その後、私の事を心配して泣きそうになってたツナ君。

戦ってる時とは本当に別人だよねえ。
いつもあんな感じだったらきつとモテるのになあ。

とか考えて苦笑してたら、突然ツナ君が痛みを訴えだした。
なんでも、小言弾とやらの副作用みたいなものらしい。

と言っても、結局はツナ君の体が軟弱なだけで、後遺症みたいな物は無いとの事。
ほどなく気絶し、倒れた。

リポーン君も流石に疲れた(?)らしく、ツナ君の隣で眠った。

手当のより幾分か楽になった私は、ツナ君を仰向けにして頭を自分の膝の上に乗せた。

リボン君は、昔にマーモンにした様に抱きかかえた。

医療班とやらが到着するまで、私は二人の頭を空いた手で交互に撫で続けていた。

と、そんな感じの話を病院でさっちゃんに話した。

まっ先に見舞いに来たのが彼女であり、話していた途中で聞いてきたからだ。

そう言えば、この騒動の間は殆ど見かけなかった事に今更に気付いた。

本人曰く、どうしても外せない用事があったツナ君達と行けなかったらしい。

本心から申し訳なさそうに謝るさっちゃんを見て、気にしないでと伝えた。

しかし、彼女の言う事は嘘だろう。

申し訳ないと感じているのは本当だろうけどね。

転生者は、この世界における未来の情報を持っている。

つまり、この事件についても全容を知っていた可能性が高い。

多分、ツナ君が骸を倒す事も。

この世界で彼女が何を思い、何を成そうとしているのかは解らない。でも、今回は干渉しないと結論したのだろう。

下手に変化を生じさせない為とか、そんな感じで。私と言うイレギュラーに関しては手を打たないのだろうか？

私は転生者達の知る物語においては異質な存在だ。それ故に、誰もが私を警戒する。

実際、さっちゃん自身も私を見た時に何かしら疑問くらいは感じた筈だ。

……まあ、今考えても埒があかないと言えばそれまでなんだけど……。

「ファール行つたぞー!!」
「お。」

気付けば、ボールが私達の方へと飛んで来た。とはいえ、誰かの直撃コースではないので焦りはしない。

しかし、私の後ろで誰かがキャッチする。そこにはビアンキさんの姿。

ちよっ、ゴークルしないと隼人君が……。

「ビアンキ!」
「お弁当持って来たわよ。」
「でー!ー!ー!ー!ー!」
「わっ、獄寺君が!?!」

言わんこつちゃない。

その時、不意に強い視線が私を貫く。

見ればツナ君も違和感を感じたらしく、辺りを見回している。
順調に血が目覚めてるっばいねえ。

「ねえ、リボン君・・・。」

「ああ・・・。」

いつの間にか隣に居たりボン君と共に、振り返る。

そこには、小さな子供とその母親が仲良く手を繋いで歩いていた。

「一人はさみしそうだな、またいつでも相手になってやるぞ。」

「そうそう、次は私も一緒に遊んであげる？」

言葉を投げかけ、視線を戻す。

試合は武君のチームが勝利し、互いに握手を交わしていた。

「・・・また・・・いずれ・・・。」

小さく、背後から呟きが聞こえた・・・。

第三十九話（後書き）

次はいよいよリング争奪戦！

長かった・・・本当に・・・。

まさか自分がここまで続くとは思ってませんでしたよwwwwww

正直、暇潰し程度に思いついて書き始めた作品でしたので。

まあ、批判されて終わりだろうなあって思っていました。

今では何十人もの方に登録され、楽しいと感想も送ってもらえました。

嬉しいかぎりです。ヽ（*´、´）ノ

もう暇潰しなんかではないですね、ここまで来たら完結まで頑張ります。

これからも楽しんでいただけるように精進しますので、宜しく願います！

いつでも感想待ってます！

誤字脱字の指摘も同様です、それでは（＾o＾）ノ

第四十話(前書き)

リング争奪戦!

始まり始まり〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!
*、
、
(
)

第四十話

晴れやかな青空の下。

俺達は商店街を闊歩していた。

「アホは呼ぶなっつったのによ。」

「誰のことですか!」

「ハルちゃん・・それ自分で肯定しちゃってるよ?」

「ああ〜!」

獄寺君は相変わらずハルとはそりが合わないみたいだ。

ランボやイーピンはそこら中を駆け回り、それを京子ちゃんやみーちゃんが微笑ましく見守っている。

リボーンは山本の肩に乗って移動し、千坂さんは露店から漂う香ばしい臭いと葛藤しながらなんとか付いてきていた。

「おいツナ、さぼった分は後でネッチヨリやるからな。」

「ネッチヨリやだー!」

叫んでみても虚しく響くだけ。

そんな感じで、かなりの大所帯で行動している俺達。

事の発端は、父さんが帰って来る事になったからだ。

正直に言っつて、好きじゃない。

むしろ、どつちかと言えば嫌いな方なのかも。

二年前に蒸発したつきり、顔も合わさなかった父親。

しかし実は普通に仕事をして、俺や母さんの生活費を稼いでいた。蒸発するのは両親がグルでほざいた嘘だったのだ。

まあ、よく考えなかった俺も悪いんだけど。

男手が居なくなっただのに、変わらず家事をこなしている母さんに疑問を持つべきだったんだ。

とまあ、そんな事があった訳で・・・。

気分が完全にブルーな俺に気を遣って、山本が遊びに行こうと言い出してくれた。

それに獄寺君も便乗し、どうせならと皆も呼んで行く事になった。そしたら全員が運良く空いていて、こうして集った訳だ。

特にみーちゃんは、父さんが帰ってくる事に喜んでいた。

まあ、昔よく遊んでもらってた思い出がそのまま残ってるもんね。

俺だって、あの頃は正直に言えば大好きだったと言える。でも、流石に二年も家をほったらかきにされたら・・・ね・・・。

「あれ？ ランボ君がいないよ？」

「あ、そう言えば・・・。」

京子ちゃんの言葉で辺りを見回せば、確かに居なかった。しまった、考え事に夢中で厄介なのを見失った。

「あ、ツナ君・・・あそこ・・・。」

「え？」

ふと、みーちゃんが指さした先を見る。

そこには、猫とかが入るケースの中で眠りこけてる牛の姿。

「違和感ないけどさあー！」

「しばらく置いておいたら売れそうだねえ？」

サラッと物騒な事を言うみーちゃんをよそに、店員の人にひたすら謝る。

「すみません！ 本当にゴメンナサイ！！」

ひとしきり頭を下げ続け、やっとの事で許してもらえた。その間、誰も助けってくれなかった。

なんでいつも世話役が俺なんだよお……。

その後も、幾度となく店の人達に迷惑をかけ続けるランボ。段々と胃が痛くなってきた……。

下着売り場でブラを装着して遊んでいた時は殺意が湧いた……。マジで勘弁しろよオイ……。

やがて喉が乾いたと言うので、皆と一旦別れて自販機で飲み物を買う。

近くにあったテーブルにつき、ランボがそれを飲んでいる間に俺はテーブルの上に崩れる。

はあ、せつかくの気晴らしなのに、結局いつものパターンだし……。

「お疲れさま。ランボ君、すごく楽しそうだね。」

「！ 京子ちゃん！？」

突然目の前に飲み物の缶が置かれ、顔を上げると京子ちゃんがいた。その奥に、イーピンが自販機から飲み物を取り出している姿が見える。

そうやらイーピンにせがまれて来たみたいだ。

「私、ツナ君が黒曜から帰ってきた時にホツとしたんだ。」

「え？」

「もっと怖い感じになっちゃうと思ったけど。」

隣のイスに腰掛けながら、話す京子ちゃん。

「ツナ君はいつものツナ君で、なんかホツとしちゃった。」

柔らかく微笑む姿に、思わず胸が高鳴る。

よくわかんないけど、褒められてるっぽい？

「ねえツナ君。」

急に身を寄せ、顔を近づけてくる。

「え！ 何？」

「これ、なんの音だろ？」

「え？」

一瞬、意味が分からずに素っ頓狂な返事えをしてしまった。だけど、すぐに気付く。

いつの間にか、辺りが少し騒がしい。

遠くから、何かが壊れるような音が響いてくるからだ。

強いて言うなら、何かが破壊されている感じの音が。

そして直後に、近くの建物から爆発が起こった。

「な、なに!？」

慌てて立ち上がる。

そして建物の方を見ていると、煙の中から影が飛び出して来た。

いや、どっちかと言えば吹っ飛んできた。

そして、よく見るとそれは人影。

さらには、どんどん大きくなって……。

「え……ええ!？」

訂正、こっちに向かって来た!!

「ぎゃあああ!!!」

避ける間もなく激突。

そのまま倒れ、思いつきり地面とサンドイッチにされた。

「す、すいませ……! おぬし!!」

「え……二十一世紀に……おぬし?」

ぶつかってきたであろう人からの謝罪が中断され、時代錯誤な呼び方をされた。

京子ちゃんやみーちゃん、獄寺君や山本達が次々と駆けつけて来た。

「十代目ー!!」

「大丈夫かツナ!」

「生きてる?」

「ツナ君大丈夫?」

痛みを訴える体を、何とか起こす。皆にも手伝ってもらったけど。。。

「う、お、おおい!!」

その時、辺り一帯に響き渡りそうな大声が聞こえた。見ると、煙の中から人が出てきた。

女の人も中々ここまででは行かない、ってくらいに長く伸ばした銀髪。しかし、見るだけで足がすくむ様な凶悪な顔をした男が立っていた。

「なんだあ? 外野がゾロゾロとお。邪魔するカスはたたつ斬るぞお!」

「ああ?」

「な、なんなの一体?」

「嵐の予感だな。」

それぞれの反応をしながらも、男から注意を反らせない。だから、気付かなかった。

「……うつそお……。」

一人だけ、物陰に隠れて頭を抱えていた事に。

「ひい！ 何なのあの人！？ スッゲエやばいよ〜！！」

毎度の如くビビりまくるツナ君。

リボン君は冷静に、京子ちゃんやランボ君などの非戦闘員を避難させていた。

見れば、ツナ君にぶつかってきた少年が何か話している。

その頭には、ツナ君のように死ぬ気の炎が灯っていた。

色は青だった。

死ぬ気の炎って何色あるんだろう？

と考えるのも束の間、いきなり少年はツナ君の手を取って走り出した。

しかし、スクアール口がそれを見逃す筈はなく。

ひとつ飛びで追いつかれる。
どうしようかなあ、下手に出たら正体がバレるよねえ。

「ひいー！ 出たー！！」

いやツナ君・・・オバケじゃないんだから・・・。

「で？ なんだそいつらは。 そろそろ教えてもらおうかあ？」
「っ！ があー！」

踏み込んで来たスクアーロに応戦する少年。
しかし容易に躲され、その隙に下から斬り上げられて吹っ飛んだ。

近くのガラスに突っ込み、派手な破碎音が響く。
少年は動く気配がない。

その間に、スクアーロがツナ君に迫る。

「こいつとはどーゆー関係だあ？ ゲロツちまわねえとお前を斬る
ぜ？」

「ひいっ！？ そんな・・・えと・・・あの・・・」

恐怖の為に、呂律が回らないみたいだ。
流石にヤバイかな？ と思った時。

スクアーロの上空に多数のダイナマイトが放られた。

「！！ なんだあ？」

咄嗟に建物の壁を蹴って回避。
問題なく着地する。

そして、予想通りと言うか、隼人君と武君が立っていた。

「その方に手を上げてみる、タダじゃ済まねえぞ。」

「ま、そんなところだ。相手になるぜ。」

「獄寺君！ 山本！」

ツナ君の表情が一気に晴れる。

ヤバイ・・・罪悪感が・・・。

さつきから隠れて見てるだけだしなあ・・・。

でもタイミングがなあ・・・。

というか、あれ？ そもそもスクアーロは何しに来たの？

わざわざ日本まで来るなんて、しかも少年一人相手に・・・。

よっぽどの事があったのかな？

「テメーらも関係あんのかう？ お、おい！ よく分かんねーが一つだけ確かな事を教えてやる。」

残虐な笑みを浮かべるスクアーロ。

おお、なんか凶悪さがますます際立ってるねえ。

「俺にたてつくと、死ぬぞお。」

「その言葉、そのまま返すぜ。」

「ありや剣だろ？ 俺から行くぜ。」

いやいや隼人君。
返せないよ、そのままくらっよ。

二人がかりでも十秒持てば奇跡だよ？

「やめてください！ おぬしらの敵う相手ではありません！」

おお、ナイス少年！

流石はスクアー口相手に生きてるだけはあるね。

少なくともあの子は他の三人より遥かに強いだろうね。
かなり健闘してたのが伺えるし。

「後悔してもおせえぞお。」

「行くぜ！」

しかし、少年の叫び虚しく戦闘開始。

二人の剣がぶつかり、硬い金属音が鳴る。

それから数手打ち合い、切り結ぶ。

相手取れている風に見えるが、完全に遊ばれている。

強い一撃を降りおろされ、呻く武君。

その瞬間に、スクアー口の剣から仕込み火薬が飛び出す。

さすがと言うべきか、咄嗟に顔を逸らして避ける武君。

しかし、背後で起こった爆発は避けられない。

響きわたる轟音。

爆風が辺りを吹き抜け、煙が高く舞う。

やがて、体中が傷だらけの武君が地面に倒れた。

「山本お!？」

「ヤロツ！」

「おせえぞお。」

ダイナマイトを構える隼人君。

次の瞬間、それらが横一閃に斬られる。

次いで頭に蹴りをくらい、地面に叩きつけられて気を失う。

「話にならねえぞコイツら。死んどけえ！」

トドメを刺そうと、剣を振り下ろす。

しかし、ギリギリで先程の少年が受け止める。

「そろそろゲロツちまう気になったかあ？」

「断る!！」

「ならここが貴様の墓場だあ!！」

そう言つて、再び交戦する二人。

しかし本当にやるねえあの子。

あんな傷だらけでスクアール口とやり合つてるよ。

こりゃあ良い師に教えられたんだらうなあ、よく鍛えられた感じがするし。

だけど、やっぱり実力差は厳しい。

すぐに限界が訪れ、吹っ飛ばされる少年。

死ぬ気の炎も、遂に消えてしまった。

「う、お、おい、まさか俺に勝てるつもりだったのかあ？
野良犬
の分際でえ、話は向こうのガキから聞く事にしたぞお。」

剣を構える、勿論トドメを刺す為に。

「テメーは死ねえ！」

降り下ろされる剣。

瞬間、聞こえてきた発砲音。

そして、またもやスクアーロは妨害された。

今度は、直に腕を握られて。

「リ・ポーン復・活！！　ロン毛！　死ぬ気でお前を倒す！！！」

弾ける衣服。

そして、雄々しく燃え上がるオレンジの炎。

この前のとは違う、いつもの死ぬ気モードのツナ君がいた。

「う、お、おい、なんてこった。」

さすがのスクアーロも、突然の展開に戸惑う。

「死ぬ気の炎に、この手袋のエンブレムは。　・　・　まさかお前、
噂
に聞いた日本のお　・　・　そうか、お前と接触するために。」

ツナ君の正体に気付いたようで、再び目に敵意が宿る。

「ますます貴様ら何を企んでんだあ？ 死んでも吐いてもらうぞオ
ラアー！！」

交戦を開始する二人。

しかし、やはり先程までと同様の結果だ。

死ぬ気弾の効果じゃ力不足だ、多分この前のツナ君でもスクアーロ
には勝てない。

能力以前に、経験とかセンスが違いすぎる。

肝心の小言弾も、ツナ君に負担がかかるしねえ。

見ればリボン君も、使うかそうか決めかねているみたいだ。

少しの間、攻防が続く。

だけどそれも死ぬ気が切れて終わりを告げる。

「うゝお おい、いつまで逃げる気だあ！？ 腰抜けが！！」

「うわ！ うわあああああああ！！」

仕込み火薬を打ち出し、ツナ君へと飛ばす。

流石に受けたらシャレにならない。

思わず出ていきそうになり、体が動く。

しかし次の瞬間、何かが飛来して火薬を根こそぎ斬る。

一斉に火薬が爆発し、スクアーロの視界を塞ぐ。

その隙に、いつの間にか復活していた少年がツナ君を連れて隠れた。

リポーン君もそっちに行く。
これ、チャンスだよな？

いましかない、接触するのは。
周り誰かいないかを確認し、すぐさまスクアーロの元に行く。

「う、お、おい！ 隠れたって無駄だあ！ すぐに見つけ出して・・
」

「ハロ、スクアーロ？ 元気にしてたあ？」

「！ テメエ満「グブう・・。」

「ちよ、つと今は大声で名前飛ばないでくれるう？ 面倒になるか
ら。」

慌てて口を塞いで耳元で言う。
すぐに頷いたので、手を退かす。

「テメエ散々探したぞお。 なんだってこんな所にいやがるう。」
「しいて言えば青春を謳歌してたのさあ？ そっちこそ、何かあつ
たの？」

すると、何故かスクアーロがニヤリと笑う。

「あるぞお。 まず一つ目だが、XANXUSがお帰りだあ。」

「っ！！ ボス・・が・・？」

さすがに・・・驚いた・・・。
そっか・・やつと・・・出れたんだ・・。

「そっか・・なら、会いに行かないとね？」

「おう戻ってこい。 ついでに一仕事あるぞお。 今度こそボンゴ

レを手に入れるんだあ。」

「うん。そこでさあ？ ちょっと頼みたいんだけど？」

「なんだあ？」

「詳しい事は後で話すけどね？ 実は私、そのこの集団の仲間なわけよ。」

スクアアローの目が見開く。

まあ当然の話だね。

「どう言う事だそりゃあ！？」

「だから後で話すって。ただ、私は裏切ったわけじゃないとだけ言っとくね。」

「………帰ったら話せえ。」

「うん？ それでね？ 今は正体は伏せておきたいから、誘拐に見せかけて欲しいんだ。」

帰って何があるにせよ、そう言う形にしたほうが後々利益になる気がした。

少なくとも今正体を知られるよりは、使える筈だ。

「気絶でもさせて誘拐って感じて良いのかあ？」

「うん、そんな感じ。」

「よおし分かったあ。」

その瞬間、腹に訪れる衝撃。

急速に遠のいていく意識、流石にもろにくらったら一発だねえ。

っていうか………普通………ここは……フリだけじゃない？……ガクリッ。

第四十話（後書き）

なんか大半が解説でしたね W W W W W W W W

満流がヤム〇ヤみたいな感じになってしまった W W

最初が肝心かと思ったら、ただ原作をそのまま書くだけに終わってしまった・・・。

次回からは大丈夫！

それでは（＾o＾）／

第四十一話

メツチャ強いロン毛に襲われ、山本と獄寺君がやられた。死ぬ気の炎を、俺と同じく頭に灯した人に助けられ、今は隠れている。

そんな中、バジルって名乗った人が俺に小さな箱を差し出して来た。中には指輪みたいな物が8つあった。

でも、指輪にしては妙に歪な形をしている。

「なに？ コレ。。。」

「それは、リボンさんが知っています。」

「え、君リボン知ってるの!？」

「うう、おい!」

「!?!」

突然、あのロン毛の声が聞こえた。

おれもバジルって人も体がビクツと震え、その瞬間に近くのテープルが吹っ飛んだ。

その向こうには、やっぱりアイツの姿。

「そおいう事かあ。こいつは見逃せねえ一大事じゃねえかあ。

貴様らをかっさばいてから、そいつはいただくぜえ!」

「くそっ!」

「ひい! 何なの!?! どうしよ!?!」

にじり寄って来るロン毛。

応戦しようとするバジルって人。

でも傷だらけで立つのも辛そうだ。

「相変わらずだな、スクアーロ。」

「！」

あ、この声は！？

驚いて声のした方を見る。

そこには、思ったとおりディーノさんがいた。

「子供相手にムキになって、恥ずかしくねーのか？」

「ディーノさん！」

部下の人を従えたディーノさんが、ロン毛を睨む。

いつもの優しげな雰囲気とは全く違う、マフィアのボスとしてのディーノさんだ。

二人が睨み合い、場に緊張が走る。

「う、お、おい跳ね馬。ここでお前を潰すのも悪くない。だが

同盟ファミリーとやり合ったとなると上がつるせえ。」

そう言つて剣を降ろすロン毛。

思わずホッと息をついた。

「今日の所は大人しく・・・。」

すっかり気が抜けた瞬間。

いきなり髪を思いつきり掴まれ、一気に持ち上げられた。

「帰るわきゃねえぞぉ！」

「ぎゃあ！」

「手を離せ！！！」

慌ててディーノさんがムチを振るうのが見えた。

でも、それと同時にロン毛も剣から火薬を飛ばし、煙が辺りを包む。

その後、不意に手を離されて地面に落ちた。

「ゴホッ！ ゲホッ！！！」

「ゴホッ！」

見ればすぐ近くでバジルって人も咳き込んでいた。

「お前ら、大丈夫か！？」

ディーノさんが駆け寄って来る。

咳が止まらず、返事が出来なかった。

「貴様に免じてこいつらの命はあずけといてやる。だがコイツは

貰って行くぜえ、うゝおゝおい！」

「ああ、ボンゴレリングが！！！」

ロン毛がいつの間にかさっきの箱を奪っていた。

それを見て、バジルって人が叫ぶ。

そんなに大事なものののかな。

「ああそれとなあ。この女もついでに賣って行くぜえ！」
「え・・・？ ああ！！？」

煙の下から、何かをかつぎ上げたロン毛。
それを見た瞬間、思わず叫んでいた。

「みーちゃん！？」

力が入っておらず、グッタリと手足を垂らしているみーちゃん。
完全に気を失っているみたいだ。

「じゃああなあ！」

「あ、待つて！！」

「ま、待つて！ つぐう！！」

「おい、無茶すんな！」

二人して、ディーノさんに止められる。
でも、俺にそんな余裕はとづくに無かった。

「みーちゃん！ みーちゃん！！」

「深追いは禁物だぞ。」

「！？ リボーン！」

いつの間にか、隣にリボーンが居た。

「なんで今頃出てくんだよ！ どうして助けてくれなかったんだ！
！？」

「俺は奴に攻撃しちゃいけないー事になってるからな。」

「な、何でだよ？」

「奴もボンゴレファミリーだからだ。」

「な!?!」

知った事実には、驚かすにはいられない。
アイツがボンゴレ?

何で同じファミリアの人に殺されかけてんの?
何でそんな奴がみーちゃんを……。

やがて、遠くからサイレンの音が聞こえてくる。
今更ながら、警察が来んだ。

ディーノさんの提案により、ひとまず近くの廃病院に行く事になった。

「大丈夫か、ツナ!?!」

「いったい何なんすか奴は!」

「二人とも!?!」

山本と獄寺君が戻ってきた、無事でよかった。

「お前らの戦闘レベルじゃ足手纏いになるだけだ、とっとと帰っていいぞ。」

「!?!」

「リポーン!? なんてことを!」

「行くぞ。」

「わ、ちょ!?! ちよっと!」

事情も展開も読めないまま。

俺はリポーンに引つ張られていった。

薄暗い部屋の中。

長いテーブルを五人の人物が囲っている。

「チェックメイトですね。」

一人が口を開き、話し合いが始まる。

「まさか向こつからボンゴリングぶら下げてくるとかさあ、手間が省けたんじゃない？」

心底愉快そうに笑う、言葉の内容にはほぼ全員が同意と言った雰囲気だ。

「後はスクアーロの帰りを待つだけね。」

これでもう全部終わった。
そんな空気すら流れ始める。

「やはり正統後継者は、ボス、あなたです。」

最初に口火を切った男が、一人の男に視線を向ける。それに合わせる様に、全員の視線が集まる。

この中で唯一、テーブルの上に足を乗せて座している。いかにもこの場のトップ、と言った空気を全身から漂わせる男。

「はあ？」

ただ一言、男はそう返した。

それだけで、場に沈黙が訪れる。

返された男以外の者が、またかとも言いたげな感じだ。

「そう言えば、同じ場所で満流も見つかったって言ってたよ。」

先程まで喋っていなかった最後の一人が言う。その瞬間、空気が一変する。

「え、マジ？ ようやく揃うじゃん」

「まったくもうあの子ったら本当に神出鬼没だったから、探すの苦労したわ。でもやっと残業も終わりね？」

「そうか、見つかったか・・・。」

こころなしに雰囲気明るくなり、トップに素っ気なく返されて萎縮していた男も立ち直る。

そして肝心のトップすらも、名を聞いた時に眉がピクリと動いたのを、全員が見逃さなかった。

「帰ったら何か本人から話があるみたいでね、今スクアーロと一緒に向かつてるってさ。」

「あら？ 何かしらねえ、改まっちゃって。」

「ま、帰ったら聞きゃいいんじゃないかね？」

その後も、みるみる話はエスカレートしていく。

満流の本拠、ヴァリアーの会議は、うるさくなった空間にXANX USがブチ切れるまで続いた。

「あ~~~~も~~~~!!」

ディーノさんがいる廃病院に行く途中で、思わず叫んでいた。

「ダメオヤジは帰ってくるわ、変な指輪が届くわで、ダブルで滅茶苦茶だよ~~~~!!」

そう言いながら、首にかかった指輪を見る。
昨日、ロン毛に持っていかれた筈の指輪。

だけどそれは偽物で、本物はディーノさんが持っていた。
しかも、これはボンゴレの後継者の証だとか。

これを巡って沢山の血が流れたとか言う物騒な代物みたいだ。
冗談じゃない……。

さつさとディーノさんに返すにかぎる。

だからリボーンの話の途中で切り上げ、こつして向かっているんだ。

目的地に着き、そつと扉を開ける。

「ディーノさん、いますか？」

「よおツナ。」

「十代目、お早うございますー！」

「二人とも！」

そこにいたのは山本と獄寺君だった。

どうやら怪我は心配ないみたいでよかった。

「あの、昨日はごめん。 助けてもらったのに……。」

「あ、いや……。」

「……。」

気まずい沈黙が流れる。

リボーンにあれだけ言われたのはやっぱりショックだったみたいだ。

「んなことより、妙な事があってさ。」

「そーなんすよ！」
「え？」

そう言つて、二人がポケットから何かを取り出した。
それは

「ポストにこんなもんが入つててさ。」
「もしかしたら昨日の奴がらみかと思ひまして。 跳ね馬にこの場
所は聞いてましたから。」

「ああ〜！ そのリングつてまさか!？」

そう、俺の首にさがっている激ヤバのリングだった。

「なんだツナ、知つてたのかコレ。」

「やっぱり十代目も持つてるんですね。」

「ヤバイつて！ それ持つてると狙われるんだよ!？ つーか、な
んで山本や獄寺君にも!？」

「選ばれたからだぞ。」

「!?!?!」

不意に聞こえたのは嫌と言うほど聞きなれた声。
振り向けば、やっぱりそこにはリボーンの姿。

そして、隣にはディーノさんもいた。

「ボンゴレリングは全部で8つあるんだ。 そして八人のファミリ
ー持つて、初めて意味を持つんだからな。」
「!?!?!」

「お前と満流以外の6つのリングは、次期ボンゴレボス沢田綱吉を守護するに相応しい六名に届けられたぞ。」

「なあ！？」

それからも、ディーノさんの説明が続く。

初代の中核メンバーが残した物だとか、それを代々受け継いでいるとか。

「それでボスの証とかってー！？」

「十代目！！」

「！？」

いきなり呼ばれて見てみると。

獄寺君がブルブルと震えながら俯いていた。

そして顔を上げたかと思うと。

「ありがたき幸せっす！ 身の引き締まる思いっす！！」

めっさ喜んでいた！

「獄寺のリングは 嵐のリング。 山本のは 雨のリング だな。」

「？ そっぴや違うな。」

「ん、そうか？」

「何？ 嵐とか雨とか、天気予報？」

「初代ボンゴレメンバーは個性豊かなメンバーでな、その特徴がリングにも刻まれてるんだ。」

初代ボスは、全てに染まりつつ全てを飲み込み包容する大空のようだったと言われている。

故にリングは 大空のリング だ。

「そして守護者となる部下達は、大空を染め上げる天候になぞらえられたんだ。」

全てを洗い流す恵みの村雨。 雨のリング

荒々しく吹き荒れる疾風。 嵐のリング

何者にもとらわれず我が道を行く浮雲。 雲のリング

明るく大空を照らす日輪。 晴のリング

実体のつかめぬ幻影。 霧のリング

激しい一撃を秘めた雷電。 雷のリング

そして

全てを染め上げつつ、全てを飲み込み食い尽くす宵闇。

宵のリング

「つつてもお前らの持つリングだけじゃまだ・・・」
「ちよっ！ ストープ！！」

これ以上話させちゃ駄目だ。

最近よく反応するようになった直感が告げている！

「とにかく俺はいらなから！」

「あの、ワリーンだけどさ。俺も野球やるから指輪は付けねーなあ。」

さすが山本！

そつだよね、野球に指輪つけてたら邪魔だもんね！

味方が出来た、このまま行ける！

「それに、そんなの持ってたら大変なんだって！ 昨日のロン毛がまた狙ってくるんだよ！！」
「！！！！」

二人が驚愕して目を見開いた。
よし、これで大丈夫だ！

「ヤバイでしょ！？ しかも下手したらたつた十日でだよ！！？」
「・・・そうか、あいつ来んのか・・・。」

うん？ なんか反応が変？

「十日・・・。」

「・・・あれ？ ど、どうしたの二人とも？」

「これ、俺だよな。 やっぱ貰っていくわ。」
「え!?!」

なんで!?!

あのロン毛が来るのに!

「負けたまんまじゃ居られねー質たちみたいだわオレ!」

「十代目! 俺もこの十日で、このリングに恥じないように生まれ変わってみせます!!」

「ちよつ! 獄寺君まで!? そ・・・そんな、二人とも・・・。」

止める間もなく走り去っていく二人。

俺は啞然と見送る事しか出来なかった。

「やるなーツナ。 二人は鍛える気マンマンになったみたいだぜ?」
「そ、そんな・・・。」

風化しそうな俺の肩に、リポーンが跳び乗って来た。

「それにツナ、お前大切な事忘れてねえか?」

「は? なんだよそれ・・・。」

「アイツらに満流を攫われた事、覚えてない訳ねえだろ?」

「!?!」

そう、確かに忘れたわけじゃない。

今だって、鮮明に思い出せる。

と言っても、つい昨日の事だけ。

「十日間みっちり鍛えねえとヴァリアーには勝てねえ。」

同時に満

流も取り戻せなくなるんだぞ？」

「そ、それは……。」

頭の中を色んな事がグルグル回っている。
助けたい、それは本当だ。

でも、相手は本当にヤバイ連中だ。
そりゃ、骸だつてヤバかつたけど。

なにか、今回はそれ以上にヤバイって感じるんだ。
でも……でも……。

こんがらがって、訳が分からなくなる。
助けたい、でも怖い。

「……。」

「……まあ、どの道アイツらと戦う事はもう避けられねえ。そ
れもその内分かるだろう。もうすぐ晴の守護者が来るぞ。」

「え？ 晴って？」

顔を上げると、そこにはいつぞやのゾウさん頭のコスプレをしたり
ポーンがいた。

確か、パオパオ老師とか……

「パオパオ老師!!!」

「え、ま……まさか……。」

直後、聞こえてきた声。

それは非常に聞き覚えのある声で……

「この俺を鍛え直してくれると言うのは、まことか!?!?」
「きよつ! 京子ちゃんのお兄さん!?!」

なんでよりによって!?!?

しかも話は聞いたとか言うからちゃんと分かっていると思ったけど。

結局全部忘れたいらしい。

いや、確かにこの人なら晴にピッタリだとは思ってけど。。。

そして、お兄さんを鍛える役目の人間を呼んでいるらしい。
誰だろう?

その時、リボーンのおしゃぶりが光り始めた。
激しく嫌な予感。。。

「近いな。」

「おしゃぶりが光るって事は、やっぱり。。。」

「久しぶりだなコラ!」

「コロネロ!」

何でも、今回はそれぞれの守護者に専属の家庭教師をつけるらしい。
コロネロはお兄さんだ。

そしてお兄さんを通り見たコロネロが、なんと笑った。

「こいつは面白い奴を見つけたなコラ。もし十日間俺のトレーニ
ングに着いてこれれば、他の六人なんてぶち抜くぜコラ!」

「?」

「そのかわり厳しいぜ、やるかコラ?」

「望む所だ! オレは負けん!!」

「よし、付いてこいコラ！」
「おうー!!!」

そんなこんなで、二人は走り去っていった。

そして、ディーノさんも生徒の所に向かうと行って出ていった。

仕方なくリボンと外を歩きながら、続きを話す。

「そう言えば、ディーノさんの生徒とか、他の守護者の人って誰なの？」

それに、リボンの言い方からしてみーちゃんも守護者の予定だったんだよな？

でも連れ去られちゃったし……どうするんだろ。

「ディーノの生徒は雲雀だぞ。」

「……は!? あの人群れるの嫌いなのに入る訳ないだろー!?」

「だからこそ 雲のリング が相応しいんだ。後はディーノに任せとけ。」

「色んな意味で大丈夫かな……。」

「人の心配なんてしてるヒマはねーぞ。」

「!?」

「はつきり言っつてヴァリアーの戦闘力は超死ぬ気モードのお前より上だ。よっぽどみっちり鍛えないと殺されるぞ。」

「いや、だから俺は!」

まだ納得してない。

そう言いかけて言葉に詰まった。

みーちゃんを助けたい気持ちだが、ずっと頭の大半を占めているから・・・。

「レオンが大量にこさえてくれたぞ、見る。」

そう言つて銃を両手に構えるリボン。

その体に、大量の弾が巻き付けられていた。

「それ・・・全部死ぬ気弾!？」

「そうだぞ。 そんじゃ修行の第一段階を始めるぞ。」

「ちよつ! まっ・・・。」

反論する間もなく眉間を撃ち抜かれた。

「ふつかーつ! 死ぬ気で鍛える!!」

頭が修行で埋めつくされ、ひたすら体が走つて行く。

「死ぬ気でやれよ。 もし負けたらお前だけじゃない、お前の大事な者が全て殺される事になる。」

だから遙か後ろでのリボンの呟きは、俺には聞こえなかった。

第四十一話（後書き）

なんか・・・あんまり進まねえ W W W W

もうちょい展開早く出来るよう頑張ります!!

それでは (^o^)/

第四十二話

イタリア、ヴァリアーの本拠邸宅の前にて。

「とりあえず一発？」

「グホオツ！ いきなり何しやがんだあ！」

満流がスクアーロにボディブローをかましていた。

予想だにしていなかった不意打ちに、スクアーロは反応できず。

まともにくらい、それどころか足が僅かに宙に浮いた。

「日本での借りを返した。」

「テメエが誘拐に見せかけろって言ったんだろあがあ！！」

「確かに言ったよ？ でも普通あそこは演技でしょ、マジで鳩尾とかないでしょ。」

目の前で怒鳴り散らすのをもともせず、サラリと返す。

グウの音も出ず、スクアーロは顔をしかめて黙る。

「まあ今のでチャラってことで、さっさと入ろうよ。」

「チツ！ うお、おおい、帰ったぞお！」

扉を勢い良く開けて入っていく。

何人かの下っ端隊員が迎え、通路のど真ん中を二人で進んでいく。

「おお、懐かしの我が家よ。ちっとも変わってないねえ？」

「つたりめえだあ。変える必要がねえからなあ。」

「いやいや、生活に潤いをもたらす為にもリフォームは必要だと思

「うよ。」

「ルツスみたいな事言ってるじゃねえ。」

「・・・あれ？ なんだろう、心がとても痛い・・・。」

両手で胸を抑えながら頂垂れる満流、しかしその間も歩く。
やがて広間のドアへと辿り着く。

先程と同じく、スクアア口が開けて中へと入る。

「うゝおゝおい！ 帰ったぞお！！！」

「二回も言わなくていいつつの。」

「待ちくたびれわよん。」

返事をしたのはベルとルツスリア。

他の視線はスクアア口よりもその後ろに注がれている。

「やつほゝ皆あゝ、ひっさしっぶりい？」

「お帰り、満流。」

「やつと帰って来たか。」

応えたのはマーモンとレヴィ。

マーモンの姿を捉えた満流が、すかさずマーモンに跳びつく。

勿論、両手に抱いて。

「んんゝゝゝ？ やっぱりこのモフモフは格別だあゝ。」

「はあ・・・帰ってきて早々これとはね・・・。」

「いいじゃゝん。昔と違って、今は少なくともCはあるんだよ。」

「・・・聞いてないよ・・・。」

本人の言葉も無視して、ひたすら頬ずりをし続ける。
しかし、マーモンも強引に振りほどこうとはしない。

すでにコミュニケーションとして定着しているようだ。

「ししっ、姫は相変わらずだな」

「ホント、清々しいくらいに昔のままねん？」

「あ、ベルにルツスも久しぶり〜。会いたかったよ〜。」

「おひさ。」

「私もよん、お帰り。」

残りの者とも再会の言葉を交わす、マーモンを抱いたまま。
それが終わった直後、再び広間のドラが開いた。

全員がそちらを見る。

満流は最初、ポカンとした表情を浮かべていた。

しかし、入ってきた人物を見た瞬間、その顔に満面の笑みを浮かべて。

「ボ~~~~~~~~ス~~~~~~~~!!!!!! お勤めご苦労さんでしたあ

「?!?!?!」

飛びついた。

マーモンと同じ要領で・・・。

「うゝおおい・・・。」

「おお」

「まあ？」

「ふむ・・・。」

「ぬう!？」

思わず当の二人を除く全員が驚愕の声を上げる。普通に考えたら自殺行為以外のなにものでもない。

それをごく自然にやってしまったのだから。

しかし実際は……。

「うっせえカス。」

「いつつたあつ!?!？」

拳骨だった。

殺されないだけ遙かにマシとは言え、遠慮のない拳が脳天にヒットした。

頭を抑えてうづくまる満流。

プルプルと震えて悶絶している。

「うう~~~~、ここはお互いに抱擁し合う感動の再会シーンなのに~~~~。」

「知るかドカス。」

目の前にうづくまる満流の横を通り過ぎ、奥のイスにどっかりと座るXANXUS。

テーブルに置いてあったウイスキーをグラスに注ぎ、一息に飲み干す。

他の全員が心の中で同情と賞賛の意を満流に示す。

そんな中、スクアア口がXANXUSの元に行き、例の箱を差し出す。

「報告の通り、ボンゴレリングを持って来たぞお。」
「。。。。。」

無言で受け取り、蓋を開ける。

しばし見据えた後、大空のリングだけを取り出した。

残りを箱ごとスクアーロに投げ返し、自分の指に嵌める。

既にそこにあつたもう一方のリングに、カチツと小気味の良い音を立てて繋がりが合う。

「オメエらも自分のを取れえ！」

「了解」

「私のはコレね。」

「ムツ。。。」

「又。。。」

テーブルに置かれた箱から、次々にリングが取り出されていく。そして、残った最後の一つ。

宵のリング。

「あれ？ これ私の？」

「あたりめえだろうがぁ！」

思わず出てしまった言葉に、スクアーロが怒鳴る。

「だがその前に、テメエの話を聞かなきゃなあ。。。」

「そついえば言ってたわね。」

「なんかあんの？」

スクアーロの言葉に、今思い出しようで他のメンバーも疑問顔だ。

「コイツが日本いる十代目候補と一緒に行動してた事だあ。」

「・・・え、マジ？」

「あらあら・・・。」

「それは・・・確かに聞きたいね。」

「貴様、どう言う事だ！」

さすがに、場の雰囲気が変わる。

レヴィに至っては、明確な殺気を向けている。

XANXUSも、黙って視線を向けてくる。

顔のせいで、本人にその気が無くとも睨むような目だ。

そんな状況の中でも、当の満流は平然としている。

先程の痛みがまだ抜けていないのか、頭を片手でさすりながら。

「ああ、その話ね。」

と言い放った。

「そんな目くじら立てなくたって今から説明するってば。」

そして、満流が洗いざらい話す。

八年前に旅に出た直後に日本へ行った事。

そこで沢田綱吉に偶然出会った事。

さらには友達にまでなり、幾度となく遊んだこと。

しかも九代目と鉢合わせ、あまつさえ遊んでもらった事まで。聞いていたメンバーの方がド肝を抜かれる様な話をペラペラと。

それからしばらくして日本を離れ、去年戻ってきた事。それから彼らと行動を共にして、何度も共闘したとも。

最早清々しい程に包み隠さず、満流は全てを暴露した。

「とまあこんな感じだね？」

「ししし、さつすが姫。やる事が半端ねえ」

「九代目と遊ぶとか、正気の沙汰じゃないよ・・・。」

「むしろそこが姫らしいわねえ・・・。」

聞き様によつては裏切りとも取れる話に、三人はむしろ平然としている。

それどころか納得と言った感じた。

しかし、レヴィはそうは行かないようだ。

良く言えば素直というか、悪く言えば愚直。

言葉を額面通りに聞きすぎる傾向がある。

今にも背中パラボラの電気傘を抜いて来そうだ。

「おお〜レヴィ凄い顔だねえ、将来シワが増えるよ？」

「貴様!!!」

わざとらしい挑発に乗るレヴィ。

両手に電気傘を持ち、電気を纏わせて襲いかかる。

勿論、周りは焦りも慌てもしない。

結果なんて目に見えている。

「相変わらず鈍重だねえ、近接専門って訳じゃないのに無理しちゃつてえ？」

「ぬう！？」

気が付けば、目の前に濃紺の刃が迫っていた。咄嗟に後ろに飛んで回避するレヴィ。

しかし視線を戻した時には、首元に刃が突きつけられていた。

「素質からして術士だもんねレヴィは？ それでも少しは動体視力を養った方がいいよお？」

「ぐっ！」

「うう、おい、そこまでだあ！」

スクアール口からの静止がかかる。

同時に構えを解き、武器をしまう二人。

先程から話に入って来なかったスクアールとXANXUS。

その二人を、満流が見据える。

「それで、ボスとスクアールはどう思うの？ レヴィみたいに私を殺そうと思った？」

おくびもなく、笑顔で問いかける。

どちらかを願うでもなく、むしろどちらでも構わないと言いたげだ。

その様子を、静かに見続ける二人。

場に沈黙が訪れる。

レヴィはひたすらXANXUSを見ている、同意してもらえないのを期待しているのかも知れない。

他の三人は、何故か面白そうに見物していると言った感じだ。

やがて、スクアーロが口を開く。

「もう一度だけ聞くぞお、裏切ってはねえんだなあ？」

「うん、そうだよ。それに……。」

「？」

疑問顔のスクアーロから視線を外し、満流はXANXUSと目を合わせる。

珍しく怒った気配もなく、無言でただ満流を見ていた。

「ボスには八年前に……と言ってもボスにとっては数日前か。言ったよね？ 私はボスの部下で、ファミリーだって。」

先程とは少し違う。

穏やかな笑顔で満流は告げる。

いや、宣言している。

これから日本の彼らと戦うとしても、自分は貴方に付く……と。

「……。」

XANXUSは応えない。

黙って、懐から何かを取り出す。

そして、満流に向かって静かに投げ渡した。

それを受け取る。

手を開いてそれを見れば、箱の中の物と瓜二つ。そう、宵のリングのもう一つの片割れだった。

「ありがと、ボス？」

立ち上がり、ドアへと進んでいくXANXUSの背中に向けて呟く。ドアが閉まった後、満流はリングを右手の中指に嵌める。

そして箱の中にあつたリングも同様に嵌め、二つを一つに繋げた。窓の光にリングをかざし、見つめる。

他の守護者のリングと違い、菱形のリングだった。

「ボスの決定だあ。レヴィも従ええ！」

「ボスが決めた事ならば異論はない・・・。」

「思いつきり納得行かねえって顔してるし」

「あつさり負けたのが悔しいんじゃないかい？」

「さすが満流よねえ、前よりもさらに速くなってたじゃない。」

満流の後ろで、他のメンバーはいつもの空気を取り戻していた。しばらくして、満流もそれに混ざる。

もっぱらの会話の内容は、満流が居なくなつてからのヴァリアーの様子。

そして満流の世界旅行でのエピソードなどだった。

そして、スクアア口の持ち帰ったリングが偽物だと判明したのは、それから数日後の事だった。

ヴァリアーを迎え撃つ為に修行を始めて数日。
俺はバジル君とスパリングをやっていた。

死ぬ気をコントロールする為の修行らしい。
と言っても、途中から記憶が無い事が多いんだけど。

「いつつ。」

「起きたな。」

「あれ？ 父さん居なかった？」

「さーな。」

「まいりました、さすが沢田殿です！　すごい一撃でした！」
「え、俺が？」

聞けば、最後にバシル君に一撃加えたらしい。
やっぱり覚えがない。

「と言うわけで第三段階に移るぞ。」

「待つてよ！　もうたくさんだよ!!！」

「何甘つちよろい事言つてんだ？　そんな暇は・・・」

直後、リボーンの腹から盛大に音が鳴った。

訪れる沈黙。

リボーンはサツと身を翻して。

「飯食いに帰るぞ。」

「お前の腹優先かよ!!！」

「ちなみに、バシルの親方様も飯に来るからな。」

「・・・え？」

何気に重要な件をサラっと言ったりリボーンに、思わず声が裏返る。

「行くぞ。」

「ちよっ！　待てつてえ！」

聞く耳持たずに歩いていくリボーンを俺は追いかけるしかなかった。

『並盛よ、私は帰って来た!!!』

「何やってんの姫？」

『いや、なんとなく……。』

はい、やって来ました並盛町。

すっかり夜遅くになったけどね。

ボスがハーフボンゴレリングが偽物だと見抜き、本物を奪いに来た。でもまあ、本来の狙いは違うんだけどね。

ボスとスクアーロに、今回の作戦の概要は聞かされている。

ツナ君達を利用し、自他共に認められる正式な後継者になるためのプランだ。

いや〜聞いた時は鳥肌が立ったね？

まさに鬼畜、外道、人の風上にも置けないような非人道的な作戦！

モス力を紹介された時は驚いたよ。

遂に時代はSFかと。

これなら遠くない将来ギャンダムとかエヴォとか出来そうだなあと
かと思うとワクワクするよ。

少なくともワイトメアフレームは期待していいだろう。

まあそんな事はさておき。

『レヴィが先んじて守護者狩りに行ってるんでしょ？』

「そ。マーモンが雷のリング見つけたらしいから、今頃ミンチに
なってるじゃね？」

「可能性は大きいね。」

「あゝら、それは気の毒ねえ。」

『ふーん、雷・・・かあ・・・』

誰だろう？

仮面の奥で眉を潜める。

ツナ君が大空は明らかだけど、他は分からないなあ。

武君と隼人君が守護者なのは分かるけど、どのリングまでかは・・・
ねえ。

家の屋根を飛び移って移動しながら、頭の中にツナ君の勢力図を描
く。

先の二人以外で守護者になりそうなのはあ・・・。

やっぱり了平さんかな？

リポーン君、けっこう狙ってたみたいだし。

イベントにも参加させてたしね。

あと、本人の意思を度外視するなら恭弥君だね。

今現在では最高戦力だし、なるなら絶対に雲の守護者がピッタリだし。

残りは三人だけど、誰？

どれかにさっちゃんが選ばれるかな？

その為にファミリーに入れられたっばいし。

「お、レヴィいたぜ」

「どうやら他の守護者もいるみたいだよ。」

「あらそうなの？ 手間が省けるじゃない？」

「さっさと行くぞお！」

スクアア口を先頭に、現場に向かう。

一番後ろを、モスカが付いてくる。

ボスは……まあ自分のペースで向かってます。

見ると、今にレヴィが相手を殺そうとしている場面だった。

「待てえレヴィ！」

その場に居たレヴィやツナ君達が驚いているのが見て取れる。

全員が地面に降り立ち、両者が対峙する。

「一人で狩っちゃダメよ。」

「他のリング保持者もそこにいるみたいなんだ。」

「うわわわ。こ、こんな……。」

私達の姿を見て、狼狽えるツナ君。

なんと言っか、もはやお約束になってるね。

こころなしか、マーモンとリボン君がお互いを意識してる。
アルコバレー同士だもんね。

「う、お、おい！！ よくも騙してくれたなあ、カスどもお！」

「で、出たー！！」

「！」

「あんにやろう！」

スクアア口が出ると、武君と隼人君が過敏に反応する。

まああれだけケチヨンケチヨンにされたんだもん、仕方ないね。

「雨のリングを持つのはどいつだあ？」

『あ、ついでに宵の人も出てきてくんない？』

スクアア口に便乗する。

大人しくしてるつもりは無い。

楽しめそうな時はとことん殺らせてもらおうよ？

「雨はおれだ。」

出てきたのは武君。

ああ、ご愁傷様。

「宵は私よ。 . . . と言っても、代理だけど。」

『お？』

そう言っただけに出てきたのは、さっちゃんだった。

へえ、これは嬉しい誤算。

最後に何か言ってた気がするけど、それは置いて。正規の転生者と戦うのは初めてになる。

どれだけ強いか楽しみ？

「なんだあテメエかあ。三秒だ、三秒でおろしてやる。」
『スクアールが三秒なら私は二秒でおろしちゃうもんねえ？』

剣を構えたスクアールに対し、私も鎌を肩に担ぐ。

あ、ちなみにこれはここに来るまでに家に寄って回収した。

「なんだとお！？ なら俺は一秒だあ！！」

『じゃあ私は0.1秒〜』

「んなもん出来るわきゃねえだろお！！」

『出来ますう〜。スクアールには難しすぎて出来ないだろうけど、私には出来ますう〜？』

「上等だあ！！ なら俺は0.01秒だア！！」

『え、何それ？ 中二病マジ乙〜？』

「んだとお！！？」

それから小学生レベルの言い合いが続く。
ヴァリアー側は呆れ顔。

ツナ君達はわけが分からないと言った顔だ。

「な、なんなの？」

「さあ・・・な。」

「銀色の仮面？ まさか・・・。」

向こうの面々が困惑している。

そんな中、私達の後ろからボスがやって来た。

スクアーロの肩に手を置き、押しのけて前に出る。

「退け。」

「ぐっ！」

それを見て、レヴィも便乗した。

「退け。」

「う、お、おい！ テメエは関係ねえだろお！？」

確かに。

ただマネたかつただけだもんね。

「出たな、まさかまた奴を見る日が来るとは。 X A N X U S。」

「！う・・・。」

ボスの威圧感に押され、怯むツナ君。

追い打ちをかけるように、ボスが強い殺気を叩きつける。

「ひっ！ うわっ！」

思いつきりビクツて尻餅ついちゃった。

ボス怖いよね、そこは同情。

「沢田綱吉・・・。」

直後、ボスの手に光が灯る。

またたく間に、どんどん大きくなっていく。

「まさかボス、いきなりアレを！」

「俺達まで殺す気か!？」

『あ、ちよつ、それ勘弁。』

「死ね！」

放とうとするボス。

さすがに対応しようかなあと思ったけど。

その前に、ボスの足元に何かが刺さった。

これは・・・つるはし？ ピッケル？ だと思っ

なんか作業現場とかでカンカン突くアレ。

「そこまでだXANXUS。」

『おっ。』

直後、聞こえてくる懐かしい声。

「ここからは俺が仕切らせてもらう。」

そこには、ツナ君の父親でありボンゴレの実質ナンバー2。

沢田家光。 と言うか家光おじさんが居た。

第四十二話（後書き）

XANXUSじゃなくて普通にザンザスって打てばいいんじゃない？
って今更に思った作者ですwwwwww

修正メンドイのもう変えませんがねww

もし読みづらかったら言ってください。

いや〜執筆が進むわ進むわ。

早く満流の秘密ツナたちに暴露したくてたまりませんよwwww

感想、誤字脱字指摘、アドバイス等、いつでも待っています。

それではまた次回（＾　　＾）ノ

第四十三話（前書き）

執筆が順調に進みすぎてマジワロタWWWWWW

ではどじろ…！

第四十三話

「一対一のガチンコバトル・・・ねえ。」

ソファに寝転がり、天井を見上げながら呟く。

現在は日本のヴァリアー仮アジトに住み、今夜の対戦まで暇潰しして感じた。

「自分の番までお預けかあ・・・早くやりたいなあ。」

「それは全員思ってるって、俺もだし。」

「そしてそれを口に出す人に限って後になるって言うオチね。」

「マジかよ。」

こうしてベルとくつつちゃべってる位しかやる事がない。

下手に出歩いて知り合いに出くわしたら大変だしね。

・・・暇だ・・・。

「そつだ、やる事ないから回想にでも入ろう。」

「は？」

「問答無用、では画面ホワイトアウト。」

「え、ちよっ・・・。」

「同じリングを持つ者同士のがチンコバトル〜!?!?」

夜の町に、ツナの叫びが響く。

「ああ、後は指示を待てと書いてある。」

「指示?」

その直後、新たな人影が二つ、場に降り立つ。

目をアイマスクで隠し、同じロングヘアの髪型をした女性だった。

「お待たせしました。 今回の争奪戦では、我々が審判ジャッジを務めます。

」

謎の人物が現れても、誰も何も言おうとしなない。

しかし、それが続きを促す無言の催促になる。

「我々は九代目直属のチエルベツ口機関の者です。 リング争奪戦において、我々の決定は九代目の決定だと思ってください。」

一部の人間が動揺するが、それでも話は続く。

「九代目は、これがファミリィ全体を納得させるギリギリの措置だとおっしゃっています。 異存はありませんか? XANXUS様

」

「.....」

XANXUSは応えない。
いわゆる無言の肯定。

「ありがとうございます。」

「さて、異議ありだ。チエルベツ口機関など聞いた事がないぞ、そんな連中にジャツジを任せられるか。」

「異議は認められません。我々は九代目に仕えているのであり、あなたの力の及ぶ存在ではない。」

「なにっ!？」

家光の異議がにべもなく却下される。

悔しげに顔をしかめる家光を他所に、話はどんどん進んでいく。

「今回は異例の事態となつてしまいました。二人が相応しいと考える八名が食い違い、それぞれが一方だけを与えたのです。すなわち、九代目が認めたXANXUS様率いる八名と、家光氏が認めた綱吉氏率いる八名です。」

故にどちらが相応しいかを証明する。

それも、命をかけて。

さらに、場所は並中だと言っ。

「え、並中でやんの!？」

「それでは明晩11時、並盛中でお待ちしています。」

「おい待て、一つ聞きたい事があるぞ。」

「! リボーン?」

立ち去ろうとしていたチエルベツ口を静止する声。

それは、今まで一言も口出しをしなかったリボンだった。

「なんででしょうか？」

「後継者と守護者は全員で八名だ。このままだと引き分けになる可能性があるぞ、その時はどうするんだ？」

言われて、何名かが気付いたようだ。

予め気付いていた者は、いつか聞く気だったのだろうか。

「その場合、最後の試合で後継者が守護者が勝った側の勝利とします。再戦等はありません。」

「そうか、わかったぞ。」

「はい。それでは、さようなら。」

去っていくチエルベツ口。

場に一瞬の沈黙が流れる。

しかし、XANXUSがツナを再び睨み、ツナが怯える。それを最後に、ヴァリアーもその場から去っていた。

「さて、次はどうしよつかあ。」

「さすがにもうやる事ねえな。」

数分前以上にだらけ度合いが増したよ。

だってもう本当に……………はあ……………。

「あ、そうだ！ なあ姫、ここらへんの殺し屋狩りに行かね？」

「お？ それは面白そうかも……………」

もしかしたら当たりが出るかも知れないしねえ。

そうと決まれば即行動。

ソファから跳ね起きて、壁にかけてあった隊服を着る。

テーブルの上に置いてあった仮面も拾って、武器は……………どうしよう？

鎌ってこう言う時に色々不便だよね。

白昼堂々持ち歩くのもどうかと思うし……………それを言うなら仮面もか。

「うん……………これでいっつかあ。」

「え……………それ？」

「うん、これ。」

そう言って私が手に取ったのは、キッチンにあった出刃包丁。

なんかこう、これって一度でいいから全力で振り下ろして何かをぶった斬りたくならない？

それを試す絶好の機会だと思つたよ。

「姫って何でもありだよなあ……。」

「あつはつは、何を言つてんのさべル。人間の作った道具なんてのは基本なんでも人殺しに流用出来るんだよ?」

「そりゃ……まあ。」

目が確認出来ずとも呆れた視線を向けられているのは分かる。

「それじゃあ行こつかあ?」

「了解。」

包丁を懐にしまい、玄関へと向かう。

どうか当たりが出ますように、そこで今夜戦えますように……。

俺は今、久しぶりの学校に来ている。
リボーンが行けって行ったからだ。

昨日まではあんなに修行修行って押しつけまくってたのに。
クラスの皆には、俺が風邪で休んでたって伝わってたみたいだ。

でも、誰もがズル休みだと思ってる。
本当だったらどれだけ幸せな事か……。

むしろ今は学校に行ってた方が遥かにマシだと思えるくらいだっ
のに。

因みに、みーちゃんは家の都合でしばらく休むと言う事になってい
る。

リボーンやディーノさんが色々と手を回したみたいだ。

「ツナ君、おはよ。よかった、風邪治ったんだね。」

「京子ちゃん！ お、おはよ……。」

京子ちゃんに声をかけられた。

普段なら嬉しいのに、今はそんな気分になれない。

「昨日はごめんね？ フウ太君達とはぐれちゃって。」

「気にしなくていいよ。あれははぐれたアイツらが悪いんだから。」

むしろ、はぐれてくれて良かったなんて言えない。

もし一緒にいたら、京子ちゃんやハルまで被害にあってたかも知れ
ないんだ。

家に帰って来てたら、家や母さんも危なかったかもだし。イーピンは少し怪我を負ったけど、フウ太達も重傷だったわけじゃない。

結果として、あんまり被害が出なくてよかった。

「あの、ツナ君・・・」

「？」

なんだろう、元気がない。

昨日の事を気にしてるって訳じゃないっばいけど。

「最近、お兄ちゃんがボクシングの事以外に夢中みたいで様子が変わるの。何か心当たりある？」

「え!？」

心臓が跳ねる。

もしかして、お兄さん今回の事は言っていない？

どうしよう、俺が巻き込んだせいで、京子ちゃんに心配かけてる。いつも笑顔な京子ちゃんが、凄く気落ちした顔で下を向いている。

胸の奥が、ズキリと痛んだ。

お兄さんを戦わちゃいけないんじゃない・・・。

俺、もしかして大変なことしちゃってるんじゃない・・・。
とにかく、ちゃんと言わなくちゃ。

「京子ちゃん、ごめん！ 実はお兄さんは・・・。」
「相撲大会だ!！」

「「!」「」

突然教室に響く声。

ビククリして後ろを見ると、ドアからお兄さんが入ってきた。

「獄寺や山本達と相撲勝負をするから特訓しているだけだ。」

「お兄ちゃん!」

え、相撲?

なんの事だか分からない俺をよそに、話が進んでいく。

「沢田も出場するんだぞ。コロネロも相撲を見るのが好きだな。」

「なんだ、そうだったの。」

え、それで納得するの?

「沢田、シコを踏みに行くぞ!」

「え、ちよつと!?!」

問答無用で肩に手を回され、教室から強制退場させられた。

所変わって外。
校舎と校舎の間にある連絡通路だ。

「すまん、沢田。京子の奴、ケンカ絡みになると異常に心配するんでな。」

「え？」

「この額の傷な。」

そうやって、お兄さんは自分の左目の上にある傷を指差した。
確か、初めて会った時には既にあつた気がする。

「俺と京子が小学生の時、満流を通してお前と知り合うほんの三ヶ月前くらいの事だ。」

お兄さんは語りだす。
今迄見たこともないような真剣な表情で。

「近所に俺を敵対視する中学生がいてな、ある日京子を使って俺を呼び出したのだ。」

呼び出された場所に行くと、そこには何人もの不良が待ち受けていた。そう、畏だつたんだ。

俺は袋叩きにあい、頭を割られて重傷だつた。」

「ひいつー!!」

思わず声がでる。

小さい頃にそんな事があつたなんて。

「まあ、実はその時に偶然通りかかった夜月が助けに来てな。俺を背負って病院に運んで来れなかったら、俺はどうなっていたか分からん。」

「みーちゃんが……。」

「加えて、アイツが撮った写真が証拠となり、犯人達は全員少年院行きになった。」

「うわ、さすがと言うか……。」

今も昔も、変わらないんだよな……。

「そして、京子は未だそれを自分のせいだと思っているんだ……。」

「あ、それで……。」

「なあに、どの道黙っていても問題はない！」

「え?。」

どうして、そんなに……。

「俺は勝つからな、任せておけ！」

「……お兄さん……。」

その時の、お兄さんの言葉が……。
何故だかとても、胸の奥に染み込んだ。

大通りでは人が行き交う夜の町。
会社帰りの大人達が自分の家へと足を向けて。

最近夜遊びを覚えた若者が友達と駄弁り。
恋人同士の男女が楽しそうに喫茶店で話し。

商魂逞しい露店がまだまだ商売を続ける。
そんな、ありふれた町の風景。

その外れ、ほんの僅かにズレた場所。
しかし、絶対的な差異のある路地裏のそのまた奥で。

『リアル人体模型！』
「うっわ、グロ〜」

二人の悪魔が遊んでいた。
周りは既に血の海、かつて人だった肉塊が三つ。

いずれも、大通りとこの路地裏の様に、表の人間とは違う裏の世界の人間。
地面にある肉塊は、その世界で少しずつ名が知れ渡り始めたばかりだった。

依頼を果たし、報酬も受け取り。

これからささやかに乾杯でもしようかと思っていた所だった。

そんな気を抜いていた瞬間に、悪魔と出くわした。

それからはもう、一方的な虐殺。

いや、二人にとってはただの暇潰しなのだ。

まず先に舌を切り飛ばされ、叫び声すら封じられた。

一人目は、単純に全身をバラバラに斬り刻まれた。

二人目は、世界中にある残酷な処刑方を次々と試された。

全てを中途半端に中断し、ギリギリ生きていられる一線を保ちながら。

そして、最後には発狂してのたうち回る犠牲者を見てひとしきり笑った後、首を跳ねられた。

最後の一人は、それを見ていることしか出来なかった。

両手足の腱を切られ、動く事も出来ず。

目を閉じて見ないようにしようにも、そこにはもう閉じる瞼が無かった。

あまりの恐ろしさに失禁し、歯がカチカチと鳴って噛み合わない。

全身が震え、しかし叫ぶ事も出来なければ、命乞いさえさせて貰えない。

そして、最後に悪魔が選んだ遊びは……。

お医者さんごっこ。

聞くだけなら可愛らしい。

しかし聞いた瞬間に、幸か不幸かその意味を読み取ってしまった。

しかし、逃げる事は出来ない。

助けも呼べない。

下を噛み切って自殺も出来ない。

涙と鼻水、涎と血で顔をグシャグシャにしながら男は呻き続けた。

そんな男を縛り付け、遊びは幕を開く。

手術中の医者と看護婦のようなやり取りをしながら、男の体にナイフを突き立てる。

痛みに暴れる男を、手足の骨を踏み砕いて大人しくさせる。

男の口からは泡が吹き溢れ、下半身からは尿が漏れ続ける。

体中から吹き出る血も相まって、もはや辺りには異臭と言う言葉すら生ぬるい様な臭いが漂っていた。

一般人が数秒でも嗅げば、それだけで嘔吐してしまいそんな程の臭い。

それでも、悪魔にとっては嗅ぎ慣れた臭い。

そして、小学校の理科室にでも飾っていきそうな人体模型。

その異様にリアリティの高い版のような物が一体生産される頃には、とつくに男は息絶えていた。

『さつてとお？ 思ったよりずっと効果あったねえ。』

「しっつ、そうだな。 丁度いい時間じゃん？」

現在の時刻を確認した一方の悪魔、ベルが笑う。
もう一方、満流も同様だった。

満流の方は、自分が考えていたあたりは出なかったものの、結果的には大満足だった。

手にした出刃包丁は血塗れ、しかし服などには一切汚れはなかった。しかし、まるで演出のように仮面には血が飛び散っている。

『ようし！ じゃあ早く行こうか、皆もう着いてるかもしれないし。』

『そうだな』

包丁を空中で一閃し、血を払う。
懐にしまい、歩き出す。

その時、ポケットの携帯が震えた。

『ん、メール・・・スクアール？ えつとお・・・鎌はモスカが持っていく？ おお、忘れてた！ 危なかったあ、もし今夜私だけならせつかくの使う機会が台無しになる所だった。』

『よかつたじゃん、ならさっさと行こうぜ。』

『了解、えつと・・・ありがとう・・・っと！ よし返信。 じゃあレッツゴー？』

言葉と同時に地面を蹴って飛び上がる。

壁を何度も蹴り上がり、すぐさま建物の屋上へと出る。

下の路地裏では、死体と血溜まりにいつの間にか灰色の炎が灯っていた。

それはまたたく間に血を燃やし、肉を燃やし。

まるでそれだけを狙っているかの様に、他の物には一切燃え移らない。

二人が建物を飛び移って移動して去ってから、僅か二分足らずで燃え尽きた。

残ったのは、鼻を突くような異臭と、ほんの僅かな黒いシミ。

誰かがここを見ても、つい先程まで血の海だったとは思わない静かな空間だった。

夜の学校、昼間に来た時とはやっぱり違う。
腕にランボを抱え、校門を乗り越える。

グラウンドの手前の中庭まで行くと、そこに皆がいた。

「みんな！」

「おお！」

「おす。」

「やっほー。」

「十代目！」

こちらに気付き、返事をしてくる。
息を切らしながら辿り着き、呼吸を整える。

「遅くなってゴメン。ランボがかくれんぼ始めちゃって。」

「このアホ牛！ 十代目の手を煩わせやがって！」

「つつてもまだ来てない奴もいるけどな。」

「相変わらず霧の奴は姿を見せん。」

「雲雀さんもだけどね。」

「そうなんだ。」

霧か、誰なんだろう？

俺が知ってる人なのかな、全然思いつかない。

それに千坂さんも・・・。

こうして、彼女は本来守護者になる筈だったみーちゃんの代理として参加している。

リボーンが頼んだんだ。

今も右手にリングを嵌めている。

本人はあっさりと了承した。

みーちゃんを助ける為に、喜んで協力するって言うてくれた。

俺は最初は反対した。

女の子を危険な戦いに巻き込むなんて、って……。

でも本人が譲らなかった。

私も強いから大丈夫だと。

時間の合間に千坂さんの修行を見てきたリボンが、大丈夫だって太鼓判押してたけど。

「静かだね、本当に並中でよかったのかな？」

「もしかして奴らまだ来てないんじゃない……。」

「とつくにスタンバイしてますよ。」

「っ！」

「上だ！」

誰かが叫び、皆が上を見る。

そこには、連絡通路の上に立ったチェルベツロとか言う女の人。

そして、その横にはヴァリアー。

「厳選なる協議の結果、第一線は
晴れの守護者の対決
です。」

こうして、リング争奪戦が始まった。

第四十三話（後書き）

ちよいとだけ残虐シーンWWW

ついに始まった守護者戦！

どう描こうっかな〜って迷います。

皆さんは適度に飛ばすのが好きですか？

それとも細かく書くのが好きですか？

。と言っても殆ど原作と変わらないですけどねえこればかりは・・・

もし意見がありましたらメツチャ早めに言ってくれと助かります。

感想は多くないですから少数の意見が反映されやすいですWWW

それではまた次回（＾　|　＾）ノ

第四十四話（前書き）

本編と重複する箇所はサラッと書く方針で。

ではどうぞ

第四十四話

『・・・ふっ、ほらね。』
「しっつ、だな・・・。」

並中、守護者戦の現場。

見事にオチが当たった私とベルは、意気消沈しながらその場にいた。

今の私はと言うと、モスカの上に乗っかっている。

いわゆる肩車の形で。

両手をモスカの頭の上で組み、自分の頭を乗せてだらけている状態だ。

結局この子が持ってきて来てくれた鎌も無意味になっちゃったしね。

今日は晴、ルッスの番だ。

向こうは、了平さん。

二人ともが歴代と同じく格闘家。

戦うステージもそれにちなんだ物になっている。

目の前に立つ特設リング。

あ、言っておくけど指輪のリングじゃなくてボクシングのリングね。

鉄格子で周りを塞がれ、大きなライトが天井からリングを照らしている。

まるで地下闘技場のデスマッチとかに使われそうな奴だ。

二人がリングの中央に立ち、対峙する。

了平さんが上着を脱いだ瞬間、ルツスのグラスンの奥がキラリと光った気がした。

「あらあ？ んまあ！ よく見りやあなたいい体してるじゃない、好みだわあ？」

「なに！？」

ああ、出たよ。

久しぶりに見たけど、相変わらずだねえ。

見なよ、ツナ君達とか顔が青ざめてるし。

「お持ち帰り決定？」

「何を言っている！」

了平さんも訳が分からず混乱しているみたい。

「めったにないよ、ルツスーリアのお眼鏡にかなう奴なんて。」

「あのガキ・・・ついてないな・・・。」

『さすがに同感、ご愁傷様・・・。』

思わず合掌して祈ってしまった。

せめて死ぬ時は安らかに逝けますように・・・。

「さっきから何を言っているか分からんが、俺は正々堂々戦っただけだ！」

そう言っただけで構える了平さん。

「んまあそのポーズはボクシングかしら、またいけてないわねえ」。

このルツスーリアが立ち技最強のムエタイで遊んであげる？」
「なにい！？」

「それでは晴のリング、ルツスーリアVS笹川了平。バトル開始」

カーンと、どこからか聞こえてきそうな感じで始まった晴戦。
ハッキリ言おう、一方的でした。

まずアレだね、証明がまぶい。

いきなりライトの光量が上がり、目を開くのも困難な程になった。

私は仮面のおかげで大丈夫だけどね。

見た目からは想像出来ないインテリ仮面ですから。

インヘル入ってる仮面ですから。

ルツスもグラスン付けてるから大丈夫。

ヴァリアーの皆も、それぞれがあるから問題なし。

でも、了平さんはそうじゃない。

故に目が見えず、ルツスの居所も解らない。

あとはもうワンサイドゲームだ。

一方的にボコられる良平さん。

しかも、左腕をルツスのメタル・ニーで砕かれた。

加えて、ライトの熱で脱水症状も起こし始めている。

まさに絶体絶命？

そんな時、現れたのはコロネロ君。

「あのチビはアルコバレーノのコロネロだぜえ。」

「何故ここに？」

スクアードとレヴィが疑問を口にしてる。

そう言えば皆はツナ君達の交友関係はあまり知らないんだよね。

「そろそろ頃合だぜ、お前の真の力を見せてやれ了平。」

喝を飛ばすコロネロ君。

「今更誰が何を言っても無駄よ。この子はもう終わり、いただくわ？」

「コロネロ……師匠……。その言葉を待っていたぞ。」

「！」

了平さんが笑い、立ち上がった。

まだ、やるんだ……。

悪あがきだと諭すルツス。

しかし、了平さんはあきらめない。

バトルが始まってから一度も振るわれなかった右手。

それは、圧倒的不利を跳ね返す為の右なんだそう。

いかにも主人公サイドだから使えるフリーズって感じだね。

「いくぞ……。」

そう言つて、再度構える。
今迄と違い、どこか魅せる物がある。

「へえー。。。」

「中々雰囲気があるよ。」

『記念に一枚』

ルッスがフットワークで迫る。

それを見切つた了平さんが仕掛ける。

「うおおおおお！ 極限太陽！！」
マキシマムキャノン

「や、やった！」

命中する一撃、ツナ君が思わず声を上げた。
でも、浅い。

難なく体勢を立て直して着地するルッス。
失敗かと思われたけど、そうでもなかった。

直後に割れる証明。

開かれる了平さんの目。

拳圧だけで割つたのかと思つたルッスは警戒する。
しかし、知ってみればただのトリック。

体の表面にある塩の結晶を飛ばしただけ。
それさえ分かれば、ルッスにも容易に出来る。

それでも諦めない了平さん。

コロネ口君に背中を押され、再び踏み込む。

「マキシマム・キャノン!!!」

鈍い音と共に、ぶつかり合った平さんの拳とルッスのメタル・ニー。
勝敗は、やはりルッス。

碎ける右腕。

響き渡る叫び。

これでもう、勝敗は決まった。

というか、もう見るべき物が無い。

事実、ヴァリアーの皆ももう興味が消えかけてる。

「うお おおい! いつまで待たせんだあ!?!」

「んもう、せつかちね。言われなくても締めるわよ?」

「・・・お兄ちゃん?」

「!?!」

突如、場に響いた声。

それに驚愕する平さんとツナ君。

振り向けば、そこにはなんと京子ちゃんがいた、それに花ちゃんも。

「京子ちゃん!? な、なんでココに!?!?!」

「娘さん達がコロネ口を探してたんでエスコートしたんだ。」

「父さん!」

おじさん……正気ですか……。
いや、私と言える立場じゃないんですけどね？

その間にも、京子ちゃんがリングに駆け寄る。

「あらまああなたこの坊やの妹なの？ お兄さんはねえ、私との戦いに破れ、殺されるのよ？」

「！ お兄ちゃんやめて！！ 喧嘩はしないで約束したのに！！」

京子ちゃん……無垢すぎる……。

この場を見てただのケンカで済ませられるなんて……。

「ああ……確かにこの額を割られた時、喧嘩はしないと約束した……」
「！！」

床に倒れていた了平さんに、力が入る。
その体が、ゆつくりと起き上がる。

「だがこうも言った筈だ……。

それでも俺も男だ、どうしても喧嘩をしなくちゃならない時が来るかもしれない……。

しかし京子がそれ程泣くのなら、もう……俺は……負けんと！！」

立ち上がった。

次いで、思いつきり踏み込む。

「みさらせ！　これが本当のー！！」

「まったくしつこいわねえ、これで終わりにしましょ。」

フットワークで迫り、トドメをさそうとするルツス。

両者の一撃が、再び交わる。

「マキシمام・・・キャノン！！！！」

ぶつかり合う。

その瞬間、了平さんの拳が光って見えた。

刹那の硬直。

そして、砕かれたのは・・・ルツスの方だった。

「ぎゃあー！！」

吹っ飛ぶルツス。

勢い良く床に落ちる。

形成は、逆転した。

「お兄さんのパンチが・・・。」

「うぎゃあああああああああ！！！！！！」

「決まったー！！」

歡喜するツナ君達。

「う、うそよお！　メタル・ニーが碎かれるなんてえー！！」

「勝負あったね、ルツスーリアにはもうあのパンチを防ぐ術がない。」

「

「笑かすよな、あの変態。」

『ああ、余裕なんてこいてるから。。。』

モスカの上で、頬杖をついて溜め息をつく。

見ると、 कोरोना君が京子ちゃん達を連れて行く所だった。

きつと、この後の事が分かってるからだろう。

リング上では、青ざめたルツスが試合続行を急かしていた。
そしてモスカの右腕が、静かに上がる。

照準はルツス。

ヴァリアーのルールを遂行するんだろう。

「さあ！ 続けるわよ！ 早く！！」

「？ 何を焦っているのだ。」

瞬間、野太い発砲音。
挟れるルツスの背中。

吹き出す血液。

ツナ君達がまりの展開に呆然としていた。

「やる時はやる、さすがボス補佐だね、ゴーラ・モスカ。」
『よく出来ました〜？』

モスカの頭をナデナデ、意味ないけどね。

「あいつ・・・味方を・・・」

「どうなってる・・・。」

「弱者は消す。これがヴァリアーが常に最強の部隊である所以の一つだ。ルツスーリアはそれに恐怖して動揺していたんだ。」
「弱者は・・・消す？・・・そんな・・・」

了平さんが、ルツスに駆け寄ろうとする。
しかし、チエルベツロにそれを阻まれた。

「たった今、ルツスーリアは戦闘不能と見なされました。よって晴のリング争奪戦は、笹川了平の勝利です。」

淡々と告げるチエルベツロに、誰も口を挟まない。

「勝負はこれで終わりですが、今回より決戦後に次回の対戦カードを発表します。」

「え、もうわかつちゃうの!？」

「う、お、おい！次は俺にやらせるお!!！」

今回は、何も言わない。
言ったらまたフラグになりそうで・・・。

「それでは発表します。明晩の対戦は 雷の守護者同士の対決です。」

現実・・・非常だった。

「雷ってランボじゃん！こいつ戦えんの〜!？」
『・・・・・・は?』

思わず声が出た。

幸い、ツナ君達の方には誰にも聞こえなかった様だ。

ランボ君が守護者？

なにそれ、どういっつもり？

守護者以前の問題だと思っただけど・・・。
心も体も、色んな意味でおかしい。

家光おじさんが選んだなら、まあ何も無いつて事は無いんだろうけど・・・。

考えている内に、特設リングが解体される。

モスカが動き、ルツスの所に行く。

両手で持ち上げ、回収する。

その際、私が身を乗り出してルツスの首のリングを掴む。

鎖から外し、了平さんに弾いて渡す。

『はいど〜ぞ？ 生きてて良かったね〜？』

「貴様ら、そいつをどうするのだ！！」

『どうすると思っ〜？ まあ教えてあげないけどお。』

そのままモスカが飛び上がり、他の皆も続くように地面を蹴る。

校舎を乗り越える様に外に出て、アジトへ帰った。

「はあ……。」

ランボが戦う事になった。

あの恐ろしい連中の一人を相手に。

「ランボのボスもなんでオーケーしちゃうかなあ。ランボまだ五才なんだぞ？ 死んじゃうんだぞ？」

風呂上がりで濡れた髪を、タオルで乱暴に拭きながら部屋へと向かう。

だけど、夜中なのに台所に明かりがついてる。

「こんな時間に……。誰？」

「お久しぶりです、若きボンゴレ。」

「あー！」

そこにいたのは、十年後の大人ランボだった。
というか、十年後なんだから十五歳ってことだよな？

よく考えてみると大人って付くのはおかしいのかも・・・。
まあ、それを言うなら十年でこれだけ変わり過ぎるランボも異常な
んだけど・・・。

「こんな時間に、どうしたの？」

「眠れなくて牛乳をのんでいたら、いつの間にか十年前に。」

「な・・・。」

「おそらく、寝相が悪かった子供の俺が、寝ぼけて十年バズーカを
爆発させたんでしょう。」

「いやに冷静な自己分析・・・。」

これだけ頻繁にタイムスリップすると、もう慌てる事はないんだな
。。。

一種の悟りの境地？

こうしてみると、やっぱり今のランボとは違って見える。

せめて明日戦うのが子供じゃなくて、このランボだったら・・・
ん？

「って、出来るじゃん！ 十年バズーカ！ そうだよ、大人ランボ
が戦えばいいんだ！！」

「やれやれ、メモにあったリング争奪戦の事ですね。」

「え！？ ランボ、明日の勝負の事知ってたの？」

「一週間前、十年バズーカの暴発でこの時代に来た時に、オレ宛に
メモとリングが置いてあったんです。」

父さんの仕業だ、絶対に・・・。

「それに、満流さんが攫われた事も書いてありました。」

「！！！」

また、心臓が跳ねる。

押し込めていた不安が、胸の内を埋め尽くす。

今日の戦いで、連中がどれだけヤバイのか。
それが改めて分かった。

そんな奴らに攫われたんだ……。。
今頃どんな目に会ってるか分からない。

どうか、無事で居て欲しい……。みーちゃん……。

「と、とにかく知ってるんなら話が早いよ。相手は大人なんだし、戦つてよ！ じゃないと子供のキミが殺されるんだよ！？」

「しかしですねボンゴレ、もし子供の俺が殺されずに済んだとしても……。十年後の俺が戦って死ぬかも知れません。」

「あ……。。」

そうだった。

「と言うわけで、子供の俺にくれぐれも十年バズーカは使わないように言ってくれますか。」

「なあっ!？」

このヘタレ戦わない気だー!!

さっきのみーちゃんのくだりは何だったの!？

ここは戦う空気だったじゃん!!

思いっきり無視しやがったー!!

『くっ！ こんな日に限って大勝ちするから調子に乗ったのが過ちだった！』

例の如く、夜までの暇を持て余していた。

それで、久しぶりに町に繰り出した訳ですよ。

と言っても、知り合いに出会わないように隣の隣の町にまで行って、そこで賭場で博打やってた。

もうちょいで百万獲得しようかと言う所で、今夜の事を思い出した次第。

慌てて時刻を確認したところ、開始十分前。

全力で走り出しました、ハイ。

時間が無かったので、勝利の栄光を置き去りにして……。

思い出したら目頭が熱くなってくる。

いくら金には困ってないとはいえ、今回のこれは痛い。

今頃、負け組の連中が騒ぎを起こしているんじゃないだろうか。

『ちくしょ~~~~~!!!!』

叫びと共に、雷鳴が響いた。

落ちた先に、目的の場所が見える。

『せめて次回は私だったらいいな~~~~~……はっ!!』

しまった……フラグ……。

もう、いやだ……。

半べそかきながら並中に到着。
すぐさま屋上へと向かう、余りにも珍妙な物があつたので、間違いなくあそこだろう。

『ランボ君は大丈夫かな？』

屋上に降り立つ。

丁度、既にボロボロになったランボ君にレヴィが一撃を加えようとしていた。

そして、そのランボ君の手に筒状の物体……。

『バズーカ？』

攻撃が当たると同時に、爆発。

自分で自分にバズーカを撃った？

もくもくと立ち上る煙。

その奥から、ランボ君とは違う人影が見えてくる。

「やれやれ……。」

聞いた事のない声。

煙が晴れた先には……。

「餃子が最後の晩餐になるとは。」

右手の箸で、何故か餃子を持って座る青年がいた……。

『
いや……誰……？
』

第四十四話（後書き）

サクサク行きます。

宵戦はいつにしようかな？。

感想等待ってます。

それではまた（＾
|
＾）ノ

第四十五話（前書き）

まる一日空いてしまいました（汗

少し体調を崩し、執筆が出来ない状態でしたので。

待っていてくださった方には申し訳ありませんでしたm（　　）m

皆さんも、体調にはくれぐれもお気を付けて。

そして健やかに新年を迎えましょう！

それではどうぞ。

第四十五話

「う、お、おい！ 何だありゃあ、部外者がいるぜえ！？」

スクアーロの怒号が響く。

仕方ないだろう、いつの間にか知らない人が餃子持って現れたんだから。

「いいえ、彼は十年バズーカにより召喚されたリング保持者の十年後の姿です。よって彼を候補者と認め、勝負を続行します。」

「へー、面白いじゃん。」

「初めてみたよ。」

『もう何でもありだね。』

そんな兵器があつたなんて……。

世界って広いなあ。

本格的にSF要素が絡み始めて来たね。

その内、未来に来ちゃった！ みたいな展開あつたりして。

あつはは、まさかね。

「ごめんランボ！ やっぱ子供の子供の君じゃ無理だったんだ！」

「やれやれ、謝らないくださいボンゴレ。」

大人ランボ君が、足元にあつたリングを拾う。

それを首にかけながら、ツナ君に語りかける。

「こうなる気はしてたんです。それに俺は、こう見えてやる時は

やる男ですよ。」

なんとまあ、言うねえ。

十年であんな事言えるようになるなんて、お姉さんは嬉しいよ。

まあだからと言って勝てる訳じゃないけども。

「俺より目立つな。」

そんなランボ君に、レヴィが敵意をガンガンぶつける。

きつと頭の中はボスに褒められる事で一杯なんだろうなあ。

プラス思考で考えれば良い部下なんだろうけど……。

ハッキリ言つと、ちよつとキモイ。

レヴィに睨まれても臆する事無く、ランボ君は対峙する。

「お前がヴァリアーか。それは無理な相談だ、俺にはスター性があるからな。」

取り出した角を頭に嵌め、避雷針を無視して雷を呼ぶ。
マーモンとかが感心する中、ランボ君は攻める。

「くらいな！
エレクトロニック・コルナータ電撃角！！！」

「！ 貴様、目立ちすぎだぞ。雷の守護者として申し分ない働きをし、ボスから絶大な信頼を勝ち得るのは、この俺だ！！！」

言葉と共に、レヴィの背中にある電気傘が宙に散る。

二人を囲うように周囲に位置取り、全ての傘が開く。

それぞれが帯電し、一気に放電。
ランボ君に一点集中して浴びせられた。

「ぐああああ！！！！」

「ランボ！」

「アホ牛！！」

叫ぶランボ君。

その悲痛さに、ツナ君達が声を上げる。

ステージの仕掛けに足を引っ掛け、転ぶランボ君。
その体は、所々焼け焦げている。

「う、うう……が……ま……うえええええん！！
痛いよおおおお！！！！」

泣き出した。

前言撤回、根本的にちっとも変わってなかった。

見た目は黙っていればそこそこモテそうなイケメンなのにね。

追撃とばかりに、レヴィが手に持っていた傘を投げる。

勢い良く左肩に刺さり、そのまま後ろに倒れるランボ君。

「う、ああ……。」

「お前は徹底的に殺す。切り刻んで焼肉にしてやる。」

「うう……うわあああ！！！！」

泣きながら、そばにあった何かを掴む。

それは……

「あれは！ ランボが置いていった十年バスーカ！？」
「？」

意図が読み取れず、怪訝な顔をするレヴィ。
響く爆発音。

えっとお……十年後のランボ君がアレをくらったって事は……
……お……っつ。

思わず、溜め息が零れる。
場の空気に……変化が訪れる。

ツナ君達はともかく、ヴァリアーの皆も気付いた。

「ん？」

「何だ……このただならぬ威圧感は？」

煙が徐々に晴れる。

奥から、僅かに電気が迸っているのが見える。

見えてくる人影。

それは、先程よりもさらに一回り大きくなっている……。

「あ、あれは……まさか……。」

誰もが口を閉ざしていた中で、ツナ君の言葉がよく聞こえる。

「二十年後のランボ！？」

姿を現したのは、明らかな強者の威厳を纏った男だった。

「やっぱり・・・凄い・・・。」

誰にも聞こえない程小さな声で、そつと呟いた。

視線の先にいるのは、十年バズーカでやって来た二十年後のランボ。

原作でもかなり強い感じに書かれていたけど、こうして目の前にしてみるとよくわかる。

現代や十年後とは似ても似つかない圧倒的な存在感。

対峙しているだけで気圧されそう。

月日と言つのは、こんなにも人を変えるのか・・・。

この世界にやって来てから、もう十三年になる。
神様に会い、力を貰って転生してから、時間が経つのがとても早かった。

私は、特に理由があつてここに来た訳じゃない。
どこにでも居る普通の学生で、ありふれた人生。

何か不幸があつた訳じゃないし、自分の人生の凡庸さを卑下していた訳でもない。

良くも悪くも普通の人生を送った。

強いて言えば、飛行機ジャックに家族仲良く巻き込まれた事くらい。
まあ、それが私の死因なんだけど・・・。

周りの客と同じく、銃で脅されて、素直に従った。

アニメや映画みたいに、勇敢に戦うヒーローなんて勿論現れない。

犯人グループはある宗教の狂信者だったみたいで。

最後まで訳の分からない事を叫びながら、飛行機を墜落させた。

逆転劇など起こることなく、即死だった。

そこからは、もうテンプレと言えいいのか・・・。

神様のミスだとか、そんなこんなで転生させられた。

上級神だとか言ってたけど、何か凄い悪人顔だった覚えがある。

矢継ぎ早しに説明したら、勝手に能力押し付けてさっさと転生させられた。

幸運だったのが、送られたのがリボーンの世界だった事。

いや、正確には限りなく酷似した世界だって書いてあった。神様が送ってきたメモに・・・。

他にも転生者がいる事、私が知っている話とは若干の差異がある事も。

そして、転生者を狩る存在の事も。

説明を読んだ瞬間、背筋が凍った。

曰く、不正に送られた転生者が蔓延している。

その対策として、各世界に協力者を設けている。

私は正規の転生者だから心配はいらないが、あまり過剰な行動は控えた方がいい、と。

なぜなら、この世界の協力者は酷く好戦的で、むしろ殺し上等な人らしい。

というか、役を引き受けた理由の大半が強者と戦えるから、と言う事らしい。

・・・この人はヤバイ。

そう感じた。

それに、よりによって最高神様とやらが転生者を見分ける能力を与えたらしい。

何やっちゃってんの最高神様。

正規の人も皆殺しにされちゃうじゃない……。

だから、神様に貰った能力の説明は何度も読み返し、頭に叩き込んだ。

毎日ずっと練習し、強くなることに励んだ。

そして小学校に入り、ツナと出会った時、何故か避けられた。

いや、子供のツナが人見知りが激しい事は原作を見ていれば容易に想像できるけど。

しかし、それでも異常だったんだ。

他の人とも、ぎこちないながらも話をするのに。

何故か私の事はあからさまに避けられた。

正直、かなりショックだった。

諦めずに根気良く接して行き、何とか避けられる事は無くなったけど。

それでも、今でもどこか壁がある。

前に真正面から聞いた事がある。

何でも、転校生に良い思い出が無いとか。

そしてさらにビックリしたのが、ツナに仲良しの幼馴染みがいた事。流石に失礼かとは思ったけど、本当にビックリした。

その時は海外に言っていたので、会えるのが楽しみだった。

最初は転生者かと思ったけど、それならツナから離れる理由が思いつかない。

きつと差異の方だろうと結論したのだ。

そして、中学生になって出会ったあの子は、とても綺麗な子だった。

太陽の光に照らされ、妖しく輝く濃紺の髪。

吸い込まれ、どこまでも落ちて行きそうなライトグレーの瞳。

可愛いと美しいを両立させた、美少女と美人の中間みたいな女の子。正直、見惚れちゃった。

こっちに視線が動きそうだと分かった瞬間、慌てて表情を偽った。あまり興味を持って無さそうな、ポーカーフェイスを作り上げた。

そして目が合った瞬間、心臓が飛び出るかと思った。

笑っていたからだ、彼女が。

元々ニコニコしながら教室を見回していたけど、その時は違っていた。

ただの勘違いかも知れないけど、目がこう、細められた気がしたんだ。

それだけなのに、全部見透かされたような気がして。

それでも表情を崩さなかった自分を褒めたくなくなるくらいだった。

と、まあそれが満流との出会いだった訳で……。

本人とは、結局しばらくマトモに話せなかった。

満流が転校早々に雲雀さんに目をつけられ、あまつさえ風紀委員に

入ったからだ・

忙しくあちこちを移動していたために、話す機会がなかった。

正月にやっと思つたら、覚えてもらえてなかった時は泣きそうだった。

しかも、なにやら変な認識をされてみたいで・・・。

まあ、その後普通に自己紹介あつて友達になれたんだけど。

黒曜の時は、参加しなかった。

あれはツナ達が強くなる上で、無くてはならない戦い。

私に変に介入して、もしツナがXグロブをゲットしなかったなんて事になったら目も当てられない。

それに、満流もいるから大丈夫って・・・心のどこかで頼ってた。

だから、満流が大怪我して入院したって聞いたとき、思わず大泣きしてしまった。

肝心の本人は拍子抜けするくらいにピンピンしてたけど。

嘘をついてる事に、胸が痛んだ。

いつか、必ず協力するからとその場で誓った。

その矢先に、これだ。

リング争奪戦が始まるのはいい。

私は守護者じゃないし、ツナ達が勝つのは変わらない。

唯一の懸念は満流だけだ。

満流がどれくらい強さなのかは、ハツキリとは分からない。だから、もし修行で手伝える事があれば、喜んで手を貸すつもりだった。

なのに、満流はスクアーロに攫われた。もう、何がなんだか解らなくて。

何で満流が連れて行かれたのか、何の目的があるのか。原作知識もまるで役に立たない。

混乱していた私の前に、リボンが現れた。そして、私にリングを差し出して言ってきた・・・

夜月の代理をしてくんねえか？

これしかない、そう思った。私が、満流を助ける。

戦った相手に、居場所を聞けばいい。せめて無事の確認だけでも出来れば、ツナの心労は格段に良くなる筈だ。

だから私は、宵の守護者代理を引き受けた。私達が勝っても、私は守護者にはなれない。

でもそんな事はどうでもいい。元々そう言う目的で来た訳じゃ無いし。

と言うか、そもそも望んで来てもないんだけど・・・。

でも今はもう関係ない。

二回目の人生で、私は変わった。

上辺だけじゃない友達。

守りたいと思える家族。

共に戦う仲間。

どれも、前世では得られなかった大切な物。

絶対に失わない、それが私の決意であり、覚悟。

目の前では二十年後のランボがレヴィを圧倒している所だった。そうやら、相当の時間思考に耽っていたみたいだ。

丁度タイムリミットが来て、現代のランボに戻る。

「ぐびゃあああああ！！！」

響き渡る悲鳴。

思わず駆け出しそうになる。

ごめんね・・・ランボ。

すぐに終わるから、ほんのちょっとだけ・・・我慢して・・・。

握る手の平から、今にも血が出そうだ。

知っていたのに、ただ物語として見るのでは天地の差だ。

紛れもない本物の悲鳴。

耳を塞ぎたくなるのを必死でこらえる。

動かなくなったランボを、レヴィが何度も踏みつける。
そして、ついにツナが駆け出した。

「くっ！」

「どこへ行くんだ？ 失格になるぞ。」

「……わかってる、でも俺、ランボを守らなきゃ！」

「……しょうがねえ奴だな。」

銃を取り出すリボン。

ステージでは、レヴィがトドメを刺そうとしていた。

「やめるー！！！」

獄寺君が叫ぶ、聞く訳はないけれど。

対して、ヴァリアーの人達は楽しそうに見ている。

「エグい死体が見れそうだね。」

「うっおっ おおい！ とつとと殺れえ！」

そして、傘が降り下ろされる………ことは無かった。

避雷針が倒れ、それを避けるレヴィ。

皆が驚き、驚愕の表情を浮かべている。

「！ エレットウリコサーキットの外に……。」

全員が、チエルベツロの視線を辿る。

そこには、いつの間にか現れた煙の塊。

その中に、しゃがみこんで伝導体を掴んでいる一人の影。

「目の前で大事な仲間を失ったら……。」

顔を上げる。

額と、そして両手に大きな炎を灯したツナが、そこに居た。

「死んでも死にきれねえ。」

第四十五話（後書き）

原作に沿ってグダグダ書いてばかりなので、少し趣向を凝らしました！

なんと、初めての千坂視点です。

これまでの痛者共とは一線を控え、比較的マトモな思考の持ち主です。

まあ、それでもテンプレ転生者の一種ですけどねwww

はてさてコイツはいつまで生きていられるかなあ〜？

あっさりと死ぬか、それとも生き残るか・・・。

皆さんはどっちだと思います？

それではこの辺で！

感想いつでも待ってます。

また次回（＾o＾）／

第四十六話

「大空のリングゲットおめでと〜う！ パチパチパチ〜？」

「うっせえぞカスが。」

「おっとお。」

飛んできたウイスキー入りのグラスをヒラリと避ける。

そのまま飛んで行き、丁度部屋に入ってきたスクアーロに直撃した。

「ぶおっ！ うお おおい！ 何しやがんだあ！！」

「スクアーロって私なんかより遥かにヒット歴が長いのに、全然学習しないんだね〜。」

「んだとお！？」

むしろボスが投げスキルを上げていくばかりだと思っ。

スクアーロが回避した瞬間なんて見たことないし。

「うるせえカス鮫。」

「ぐぼおっ！！」

今度はビンが丸々やって来た。

私との口論に夢中になっていた為に気付かず、またもや直撃。

ちなみに私にも別のビンが投げられていたけど、これまた回避。

それどころか勢いを殺さずに掴み取り、体ごと一回転してからスクアーロに投げた。

それもまた見事に直撃。

今度はボスに怒鳴ろうと顔を向けていた為に気付けなかった。

「うゝおゝおゝ おおおおおいっ！！ 何でテメエまで投げてるだあ！！？」

「いや・・・ノリ？」

「ふざけんなあ！！！」

もはやブチギレ状態のスクアーロ。

しかしボスは知らん振り。

新たなグラスに、新しく取り出したウイスキーを注いで飲み続ける。

「いやあしつかしまあ、ボスの十代目襲名まであと僅かだねえ。」

「雑魚共かつさばくだけだからなあ、ベルを含めて後三回の戦いで終わりだあ。」

鼻を鳴らし、得意げに語るスクアーロ。

ボスは相変わらず無言だ。

「そうかなあ？ 案外ベルが負けるかもだし、その後だって分からないよお？」

皆あの短期間であつたという間に強くなったもんねえ。

ていうか、強くなりすぎ？

大人達の長年の努力を一瞬で塵にするような成長っぷりだよ。

さすが正義の味方サイドって所かな？

これが転生者達の言う物語の中なら、間違いなく主人公サイドは向

「こうだしね。」

強敵に立ち向かい、ギリギリでも勝って強くなる。

うん、王道漫画だね。

果たしてこの世界は王道を遵守するのか、それともぶち壊すのか。

「あ、そう言えばさあ。ずっと気になってた事があるんだけどあ。」

「なんだあ？」

「八年前にボスを氷漬けにしたあの技って何なのあ？」

「!!!」

「.....」

「ビシリ!と。」

あからさまに空気が凍りついたのが分かった。

その証拠に、ボスの手に持ったグラスが、ヒビだらけになっている。

スクアア口の顔が一瞬で引き攣り、額から冷や汗を流している。

「ヤバッ、おもしろ。」

「満流・・・テム・・・。」

「だつてさあ、普通の兵器とかにあんなの出来ないよねえ? 絶対

あれ九代目にやられたんでしょ? メツチャ気になるよ〜?」

「こんの・・・。」

ニヤケツ「.....もとい満面の笑顔で問いかける。

スクアア口のこめかみがピクピクと震えている。

ん〜、どうかしたのかな〜?

「……死ぬ気の零地点突破だ……」
「うえ？」

不意に、呟くように返答が返ってきた。
しかもボスから。

まさかボスが答えてくれるとは思わなかったので、素っ頓狂な声が出た。

「死ぬ気の炎を封じる力を持つ、ボンゴレの奥義だ。」
「おお〜。奥義……」

王道キタ〜！ とか言える雰囲気じゃないけど。
それでも何か感動せずには居られない。

だって奥義だよ？ バトル漫画の必須スキルだよ？
まさかモノホンに出会えていたなんて……

そうと知っていれば、もっと見ておけば良かった……

「そっかあ、ボンゴレの奥義かあ。九代目しか使えないの？」
「そうだあ、ボンゴレの血統しか使えねえ秘伝の技だあ。」
「そっかあ……ちつ。」

もし他にも使えるなら是非覚えてあった。
だって奥義だもん。

現実に奥義なんて出会ったら覚えるしかないじゃん？

「そんじやまあ謎も解けてスッキリしたのでえ、これにて失礼。」

部屋をでて、自室へと向かう。

明日はベルの嵐戦、相手は隼人君。

さっつてえ、どっちが勝つかなあ？

普通に考えれば間違いなくベルだけどあ。

またきつとどんでん返しとか来るんだろうなあ。

つつか、いつになったら私の出番来るのかと。

はやくさっちゃんとやりたいなあ。

あ、そう言えば私の呼び名的な物決めとかないと。

開始の合図の時に呼ばれて正体バレるとか、失笑もんだよ。
今迄誰かに呼ばれなかっただけ幸運だったとしか言えない。

危ない危ない。

ちゃんと考えとかないと。

「あ、そう言えば。 ナミモリ、ニヨの方の部屋はどうしよっかなあ？」

場合によってはもう使わない可能性もある。

使い続けるにしろ、引き払うにしろ、一度戻った方が良さそうだ。

「明日の昼頃にでも行きますかね。」

予定は決まったので、後はさっさと寝るだけ。

一日中賭場で集中してたせい、ひどく眠い。

重くなってきた瞼を擦りながら、私は部屋へと入っていった。

「久しき我が家〜。」

いや、思ったより来るのに時間がかかったね。

知り合いに出くわさない様に警戒しながら向かったら到着が遅れた。

久しいと言っても、実際には一週間くらいしか空けてないんだけどね。

だからさほど汚れていない。

ほんの少し埃が溜まっているくらいで。

「軽く掃除でもしよっかなあ？」

ダンスを漁りながら呟く。
どの道、夜までやる事が無いし。

まだ数日はこんな毎日が続くだろうしねえ。
何か暇潰しを考えないと。

まあ、何も無ければ前みたいにベルと狩りに行けば良いんだけどさ。

「お、これは。」

そんな中、見つけた二つのリング。

そう、瞳のヘルリングと666のヘルリングだ。

「これも、もう使い道無いんだよねえ・・・。」

骨残像のヘルリングみたいに売り飛ばそうかなあ？
アレはめっちゃ良い金になったしねえ。

世の中で真面目に働くサラリーマンの方々が泣いちゃいそうな値段
で売れたよ。

勿論買い手はマフィア関係者。

一般人の人に見せても只のグロい指輪だもんね。
そんな事を考えていた時、不意にヘルリングが鼓動した。

「？」

ドクン、ドクンと。

まるで心臓みたいに鼓動が強まる。

いつもの囁やきとは違う。
これは……

「誰かが干渉している？」

ヘルリングに意識を集中し、こちらから語りかける。
誰だ、と……。

そして

『クフフ、やっと繋がりましたか。』

「！ 骸？」

『ええ。久しぶりですね、満流。』

なんと返ってきたのは骸の声。
復讐者に連れて行かれ たつきりだね。

「しかしなんでまたヘルリングから骸の声？」

『貴方に用事がありますね。しかし居場所がわからなかったの
で、そのリングを通じて呼びかけていたんですよ。』

「ああ、そりやまたご苦労様。」

ずっと放置してたもんなあ。今日来なかつたらずっと徒労に終わ
っていたかも知れないんだよね。

「それで、用事って？」

『ええ、実は少しばかり面倒を頼みたい子がいますね。』

「ほお、それはまた珍しい。」

つまり骸が犬や千種以外の子を拾ったって訳だよね。
どんな奇想天外な子なんだろう？

『とりあえず直接会って欲しいので、黒曜ランドに来て貰えますか？』

「いいよ、丁度暇してたしね？」

『そうですか。それではお待ちしてますよ。』

繋がりが切れた。

静かになる室内。

ヘルリングをしまい、部屋を出る。

「さつてとお、一体どんな子かなあ？」

良い暇潰しが出来たのと、純粹に好奇心でテンションが上がる。

並盛さえ出れば後は楽なので、到着するにはそう時間はかからなかった。

門を潜り、園内を横切り、目的地であるヘルシーランドまで辿り着く。

「やつほー！！ 来たよお〜？」

建物の中に入りながら、大声で住人を呼ぶ。

すると、程なくして通路の影から犬が出てきた。

「おお、久しぶりだねえ犬。」

「うるへえ、さつさと来るびょん。」

「ほいほい。」

犬の後ろにつき、二階へと上がる。
一室の扉を開け、中に入る。

そこそこ広い空間で、以前映画館に置いてあったソファが中央に置いてあった。

私達が入ってきたのに反応したのは、二人。

一人は千種、こちらを一瞥した後、興味なさそうにまた視線を元に戻す。

そしてもう一人は・

「犬・それが、骸様の言ってた人？・・・」

「そうだびよん。」

「おお〜、これは・・・。」

そこには、二代目ナツポーがいた。

いや、女の子相手に失礼かとは思ってたんだけども。

そうとしか言えない、骸と同じ髪型の女の子が居たのだ。

しかも、それが不自然じゃないのが奇跡だ。

むしろ個性の一つとして成り立ち、ハッキリ似合つと断言出来る。

顔立ちもかなり整っていて、十二分に美少女と言える子だ。

髑髏マークの付いた眼帯は、一見かなりシユールだったけど。

黒曜中の女子の制服を身に付けていて、手には見覚えのある三叉槍。

そう、骸が武器として使ってる物だ。

「初めまして、夜月満流だよ！ 君が骸の拾った子だね？」

「・・・そう。 なg・・・クローム・・・髑髏。」

「クロームちゃんかぁ、よろしくねえ？」

名前には突っ込まない。

なんか最初に言いかけてやり直してたし。

きっと事情があるんだろうしね。

笑顔を絶やさず、出来るだけ優しい空気を纏って手を差し出す。

「う・・・あ・・・え・・・っと、その・・・。」

「？」

私の手を見て、挙動不審になるクロームちゃん。

なんか、顔も赤い。

いや、元々頬が赤みがかってはいた、きっと生まれつきだろう。

しかし、今は目に見えて真っ赤。

見れば彼女の手が、差し出されようとして引っ込んだりして、行ったり来たりしていた。

掴もうかどうか迷ってる？

どっちかと言えば戸惑ってるの方が正しいかな？

と言うわけで

「はいよろしくね？」

「あ!？」

ちよっと強引にクロームちゃんの手を取って握手する。

女の子らしい柔らかい手。

でも思った以上に、むしろ異常な程に細かった。
肌の白さも変な位だし、肉付きもちよっと少なすぎる気がする。

それに、何より冷たかった。

「うん．．．うん．．．よろしく．．．」

真っ赤になつて俯きながら、呟く様に返答する。
ヤバッ！ 何この可愛い生き物！！？

お持ち帰りして良いですか！？

「それで、骸が私に話があるって聞いたんだけど？」

「うん。あの、これ．．．握って。」

そう言つて差し出して来たのは、持っていた槍。

「握れば良いの？」

「うん。」

言われた通り、握る。

その瞬間、空間が変貌した。

いつの間にも外に出たのだろうか、辺りは緑が生い茂る草原だった。
木々の間を風邪が吹き抜け、髪がなびく。

どこからともなく鳥のさえずりが聞こえ、少し遠くに湖が見える。

「思ったより早かったですね。」
「おっ、まあねえ〜。」

振り向けば、黒いズボンに白い長袖のYシャツ姿の骸が居た。
この空間には私達だけ。

握っていた筈の槍も、そばにいたクロームちゃんも。
犬も千種も居なかった。

「精神世界？」

「正解です。　槍を通じてこちらに来てもらいました。」

相変わらず、常に微笑の耐えない顔で此方を見てくる。

何を考えているかイマイチ読めないけど、不思議と嫌な感じはしない。

「それで、あの子はどこで拾ったの？」

「何、すこしばかり散歩していたら、死にかけていた所を見つけてま
してね。」

「スタートからヘヴィな展開来たね。」

前座も余興もあつたもんじゃない。

「そうしたら、なんとあの子は私の声を聞き取ったのですよ。」

「・・・へえ、それはまた珍しい。」

「でしよう？」

クフフと、口元に拳を当てて笑う骸。

確かに、精神体の声を生身だけで聞くななんて奇異な存在は稀だ。

間違っても私には出来ない芸当。

「それで助けてあげたの？」

「まあ、そんな所です。そしてそんな矢先、沢田綱吉の父親と名乗る男が接触して来ましてね。」

「え？ 家光おじさん・・・が・・・？」

何だろう、激しく嫌な予感が・・・。

おじさんが骸に接触、しかもこの時期に。

目的なんて・・・一つしか思い浮かばないじゃん・・・。

「沢田綱吉の守護者の一人を担って欲しいといわれましてねえ。」

「やっぱりかぁ・・・。」

マジでフラグ回収率が半端ない。

まさか骸を守護者にするなんて、おじさん正気ですか。

息子の命狙ってる人間を傍に置くななんて・・・。

ランボ君の時といい、なんとも愉快的ファミリーになりそうだよ。

「骸が守護者って事はぁ・・・まあ間違いなく霧だよねえ。」

「ええ、その通り。」

「ちなみに、私の立ち位置って知ってる？」

「クフフ。まあおおよそは、とだけ言っておきましょう。」

「ありがたいねえ。」

遠まわしに、言いふらしたりはしないと。

まあ、最初からそこは心配して無かったけどね。

「それを踏まえた上で、私に頼みがあるってこと？」

「ええ、まあ大した事ではありませんよ。言うなればお世話を頼みたいんです。」

「お世話？」

言うまでも無くクロームちゃんの事だろうけど。

世話って？ 何を？

「実はあの娘、と言うか犬と千種もですが……少しばかり生活が不衛生でしてね。」

「……はい？」

何と言いました？

「マトモな料理など食べず、お菓子ばかり食べて、犬に至っては風呂もマトモに入りません。」

「マジか……。」

犬にさつき会った時の臭いは、そう言う事だったのか……。
てつきり廃墟だから何かあるんだろうなあとか納得してたのに。

「極めつけは、クロームは殆ど麦チョコだけしか口にしています。」

「

「なん……だと……!？」

麦チョコだけ？ 麦チョコオンリー？

それであんな容姿とスタイルを保っていた？

なんと言う理不尽な!!

いや、スタイルに関してはチョコイ痩せすぎだけでも。

「もはや食生活と呼ぶのもおこがましい惨状だね。」

「まったくです。私自身が直接言えば良いのですが、あいにくそうホイホイ出て来れる状態では無いのですよ。」

「そう言えば復讐者の牢獄ってどんなもん？」

「最高ですよ。全身の動きを封じられて水槽の中に入れられますから。貴方もどうですか？」

「全力でお断りします。」

もう人間に対する扱いじゃない気がする。

いや、それだけあそこに入れられる囚人ってのは罪が深いって事か。

法で裁けない悪を裁く番人、かあ。。。

そんな奴、言い出したらキリが無いよねえ。

「それで、私はクロームちゃん、と言うかあの三人の生活改善をすれば良いんだね？」

「その通りです、お願いできますか？」

「もつちろん？ 特にクロームちゃんは何か放っておけないもんねえ。」

だつてさあ、あれでしょ？

クロームちゃんって、前に殺った痛者が言つてた娘でしょ？

きっとアイツはあの娘が骸に拾われる事を知っていた。

つて事は、あの娘は物語に関わりがある人間である可能性が高い。

まあ、それ以前に放っておけないのも事実だしね。

「それで、クロームちゃんは私の事は知ってるの？」

「昔からの知り合いで恩人、とだけ言っておきました。後は貴方の判断に任せます。」

「了解。じゃあ後は任せてね。」

「頼みましたよ。それでは。」

景色が崩れ、闇に包まれる。

自分の体も消えて行き、視界が真っ黒に染まる。

やがて、手に槍の感触が戻ってきた。

足元のコンクリの感触、すぐ傍にはクロームちゃんの気配。

ゆっくりと目を開ける。

クロームちゃんが、若干心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「あの・・・終わった？」

「うん。ありがとね？」

「ううん。」

槍から手を放し、室内を見回す。

これでもかと言う位に散らかっていた。

床に散らばるお菓子の袋。

ポテチやカールなどのスナック系のカス。

三人も、よく見ると清潔とは言い難かった。

犬は髪がボツサボサだし、服はホームレスみたいに汚れている。

千種やクロームちゃんは大分マシだけど、それでも所々に染みや皺が目立つ。

「これは徹底的にやらないとね。」

「え？」

「はい注もくく!!」

パンパンと手を打ち鳴らし、三人の視線を集める。

「・・・なに？」

「話終わったなら帰れびよん！」

「黙らっしやい。これより私が骸から頼まれた事を実行するんだから。」

「え・・・骸様の？」

「そう。」

大きく頷き、次いでめいっばい息を吸って私は宣言した。

「君達と、この場所の大掃除です!!!」

第四十六話（後書き）

クロームとの邂逅！

数少ない同性キャラ、仲良くして行きたいです。

今回は嵐戦、適度に飛ばして頑張ります！！WWW

それではまた次回（＾　　＾）ノ

第四十七話

「よし、こんなもんかな？」

「つ……疲れた……」

「死ぬびよん……」

「……」

あれから約六時間に及ぶ活動により、三人は活動限界を迎えていた。そのかわり、彼等の居住空間は見違える程に様変わりしていた。

まず最初に、床に散らばったゴミを完全撤去しただけでも大違いだ。更に、窓ガラスが無い故に吹きすさぶ風。

これは町で購入してきたガラスを嵌めて塞いだ。

店に注文しに行った所、私の顔見たら弾丸の如き早さで用意してくれた。

こんな所で風紀委員の権力が役に立ったよ。

そんなもって、三人を銭湯にぶち込んだ。

いくら部屋が綺麗になっても、住人が汚かったらすぐに逆戻りする。嫌がる犬を拳で黙らせ、千種に運んで貰った。

クロームちゃんを一人にするわけには行かないので、私も一緒に入った。

その時に沢山お話して、何とか呼び捨てさせる事に成功。

そんなもって次は服。

私がつけてきておいた服を三人に着せたまま、町に繰り出す。

知り合いに出会わない様に細心の注意をしながら、適当な店で幾つも見繕った。

ここでも風紀委員権力が発動し、買い手も真つ青な割引をしてもらえた。

元々三人が来ていた服をコインランドリーで洗い、こうして戻ってきた。

これらを総合して、活動時間六時間に及んだ。

「今日はこれでお終いね。」

「ま、まだあるのかびよん!?!」

「あつたりまえじゃん。食生活とか部屋の細かい掃除とか、まだまだ課題は残ってるよ?」

項垂れる犬。

千種でさえ、ソファに座って下を向いている。

そんな中、クロームちゃんが此方にやって来て。

「あの、満流。でも……こんなにしてもらうの、悪いよ……。」

「大丈夫だってえ。どうせ骸に頼まれてやってるんだし。」

「でも……お金とか……。」

「一生遊んでても金にだけは困らないから。それとも、迷惑かな?」

「そんな事ない!」

「うお!」

軽い冗談のつもりで言った途端、もの凄い勢いで詰め寄られた。とても必死な形相で。

ちよつ、近い近い。

「こんなに沢山・・・良くして貰ったのに・・・迷惑なんて、全然ないよ。」

「そ、そっかそっか。うん、それならよかった。」

涙が滲んで来ていたので、慌てて返事をする。
その際、思わず頭を撫でてしまっていた。

「あ、あの・・・満流？」

「へ？ ああ、ごめん。思わず。」

赤くなりながら、上目遣いで見てくる。

ヤバイ、抱きしめたい。

なんとか理性を保ちつつ、手を離したが・・・

「あ・・・。」

などと。

なんかちよつと残念そつ目で見て来るもんだから

「え〜つと・・・。」

「・・・。」

「よしよし。」

再び撫で始めた。

目を細め、気持ちよさそうに身をよじるクロームちゃん。

まるで子犬？ 子猫？
とにかく可愛い。

ずっとうしても飽きなさそうな程だ。
しかし、どうしても現実は残酷なもので。

「……行かなくていいの？」

「え？」

突然話しかけて来た千種。

一瞬意味が分からず、ほうけてしまう。

しかしすぐに気付いて時計を見れば、バトル開始二十分前だった。
今から行けば何とか間に合う。

「おおそうだった！ ありがとう千種！」

「別に……。」

素っ気なく返し、ソファの上で横になる千種。
疲れたから寝るんだろう。

見れば、既に犬は床でいびきをかいて寝ていた。

「それじゃ私は行くね。 クロームちゃんも眠たいでしょ？ 今日
は早く休みな。」

「あ、うん。 そうする。」

千種と違い、素直にコクんと頷く。
もう行動の節々から母性本能をくすぐるねえ。

「それじゃあね〜。 また明日来るよ〜？」

「うん、バイバイ。」

お互いに手を振り、部屋を出る

黒曜ランドの外へと出て、急いで並中に向かう。

「あ、その前にヴァリアー隊服に着替えなきゃ。」

方向転換し、アジトに向かった。

『もはやこれはテンプレか。』

『どっしたんだい？』

『いや、別に……。』

モスカの手に乗っているマーモンが訝しげに聞いてきた。

モニターから目を離さずに答える。

嵐戦。ベル対隼人君。

ステージは校舎の三階全体。

ハリケーントービンとか言う仕掛けが施され、室内を突風が吹き荒れている。

今回は制限時間が設けられ、十五分以内に終わらせないと、タービンに仕掛けられた爆弾が作動するデスマッチだ。

そんなもって、バトルは始まる。

先程言ったように、もはや流れはテンプレだった。

最初は隼人君が押されに押され、ベルの強さが目立つ。

そして充分にツナ君達がそれを実感した所で、隼人君の反撃。

なんと、投げたボムが空中で軌道を変えた。

そのままベルに向かって一直線に飛び、見事に当たる。

予想だにしていなかった展開に、流石のベルも反応出来なかった。それにより、ベルの狂気が始まる。

「うししししし！ あああ、くくく！！」

校舎内に、ベルの奇声が響き渡る。

「流しちゃったよお・・・王族の血をおおおおくくく！！」

頭を抱え、小刻みに震えながら笑うベル。

完全にイッたみたいだ。

「よくわかんねえが、一気に行くぜ！ ロケットボム！」

好機とばかりに仕掛ける隼人君。

幾つものボムが、ベルに向かって飛来する。

「あゝゝゝ？」

しかし、ベルはそれを呆然と見ているだけ。
避ける素振りを見せない。

「へ、頭の中にまでヤキがまわったか？」

「しっしっ！」

突如、ボムに向かって駆け出すベル。

ボムが爆発する瞬間、思いっきり前に飛び出す。

直後にボムが背後で爆発し、それを利用して逆に加速する。

「いよいよ奴らしくなって来たな。」

「うむ。キレてこそ、ベルの天賦の才は冴えわたる。」

ナイフとワイヤーの併用。

ベル本来の戦い方で、隼人君を追い詰める。

近距離が危険だと判断したんだろう。

隼人君が図書室へと逃げ込み、迎撃しようと潜む。

「袋小路でベルと勝負なんて、自ら寿命を縮めるような物だね。」

『下手すりゃ文字通りの八つ裂きだもんねえ。』

図書室に入る前に、ナイフを投げてワイヤーを設置する。
そうして飛び入って来たベルに、隼人君は仕掛ける。

「飛んだな！　くらいやがれ！！」

ロケットボムとやらを大量に投げる。
しかし、それも一瞬でバラバラになる。

ベルが新たに投げたナイフと、予め設置していたワイヤーによって。

「反撃開始いっっつ！！」

「ぐあっ！」

次々と飛来するナイフに対応しきれず、どんどん傷を負う隼人君。
逃げ回って本棚に背を向け、ボムを構える。

「ま・・・まだだぜ・・・」

「いんちゃっ・・・でつきあっがりいっっ。。」

ベルが最後の数本を投げ、ワイヤーの囲いが完成する。
それに気付いた隼人君の動きが止まる。

「しししっ　おっしまっっい。」

「・・・・・・お前がな。」

「！！」

いつの間にか室内に聞こえる音。

それは、隼人君の足元から広がる火薬の導火線の焼ける音だった。

火薬が爆発し、本棚が倒れる。
設置されたワイヤーがたわみ、切断力を失った。

すかさず、ボムを取り出して火を着ける。

「そしてこのボムの行き先は、テメエのワイヤーに案内して貰うぜ

!!!」

「!!!」

ボムについた引っかけかりが、残ったワイヤーにかかってボムの軌道を定める。

そのワイヤーの終着点である、ベルの元へ……。

「これが嵐の守護者の、怒濤の攻めだぜ。」

ボムが、ベルに当たる。

連鎖する爆発。

図書室の窓ガラスを吹き飛ばし、爆風が室内を荒らす。

「こいつでダメ押しだぜ!!!」

トドメとばかりに追撃する隼人君。

爆発は十秒以上も長く続き、図書室は見るも無残な光景になった。

「……ばかな……。」

「これだけ撃ち込まれれば、さしものベルも……。」

「墜ちたな……。」

『あゝああ、ベルがねえ……。』

正直予想外。

善戦はするだろうとは思っていたけど、まさかベルに勝っちゃうとは。

これは残りの皆も油断ならないね。

私も、うかうかしてたら駄目だねえ。

「終わったぜ・・・。」

「いいえ、完成した嵐のリングを所持するまで、勝利と認められません。二つのリングを手にし、嵐のリングを完成させてください。」

「けっ、めんどくせー。」

「あと残り三分です。」

「ったく・・・っ!」

出血の為か、足元がフラついている。

向こう側のシャマルさんがヤジを飛ばし、隼人君が悪態を付きながらもベルの元に行く。

もう完全に勝利ムード。

私も早く帰りたい、つうか次の対戦カード知りたい。

「バカ面しやがって、天才が笑わずぜ。・・・テメエには訂正させたかったぜ・・・十代目の侮辱を・・・。」

ベルのリングを掌の上に乗せ、微笑む隼人君。きつとツナ君の役に立てて嬉しいんだろう。

その時、ベルの手が動いた。

「あゝ．．．．はあゝあゝ．．．」
「な!?!」

【!?!】

隼人君の首に下がったリングを掴むベル。
流石に全員が驚愕した。

あれだけのボムをモロにくらったにも関わらず、動いているのだから。

「勝つのオレ．．．」

「っ、テメエ! 放しやがれ!」

ベルの顔を殴る。

後ろに倒れそうな所を、隼人君の服を掴んでとどまるベル。

「ベルの奴、まだやれるのか?」

「いいや、恐らく彼を動かしているのは勝利への本能。 負けを認めない王子の本能だ。」

「知れば知るほど異常な奴だあ。」

『おほおゝ? 面白くなってきたあゝゝ。』

取っ組み合いになり、転げまわる二人。

お互いに力が入らず、相手を振りほどけない。

そんな中、ついにタイムリミットになった。

ハリケーントービンが爆発を始め、それが徐々に図書室へと近づいていく。

シャマルさんが、隼人君に引き上げると言う。

リングを完成させる時間は無いと判断したんだろう。

命を優先する為の判断。

しかし、隼人君は引き下がらない。

「ここまで来て負けられるかよー!!」

ベルを必死に押しつけようと踏ん張り、ベルも応戦する。
本棚にぶつかって、沢山の本が二人に降り注ぐ。

もはや意地のぶつかり合い。

まあ、たしかにあそこまでベルを追い詰めたんだからね。

これで負けって言うのは悔しい。

それに、きつと隼人君はまだ霧の守護者を知らない。

多分ツナ君もそうだろう。

骸がオジサンに頼まれたのはつい最近って言ってたし、ただでさえ
皆は敵対したんだから。

最後の方まで黙っていた方が得策だと思う。

そして、そんな正体の分からない者に勝利を期待出来ない。

隼人君としては、一勝でも多く勝ち取って余裕を持たせたいだろう。

まあ、全部私の憶測だけだね。

「ふざけるな!!」

「！」

『おっ?』

突如、響きわたる叫び。

隼人君の動きも止まり、思わず聞き入っていた。

「何の為に戦ってると思ってるんだよ!!!」

声の主は、ツナ君だった。

普段なら考えられない程に、怒っている。

「また皆で雪合戦するんだ!!! 花火見るんだ!!! みーちゃんも助けて、皆で沢山遊ぶんだ!!!」

『ツナ君……。』

「だから戦うんだ!!! だから強くなるんだ!!!」

ヤッバツ、泣いていい?

メツチャ来たよ、マジ感動。

ほんとに……いつの間にか言うようになったちゃって……。

「また皆で笑いたいのに、君が死んだら意味無いじゃないか!!!」

「……十代目……。」

直後、背後のタービンから発せられる電子音。

爆発する図書室。

モニターの画面が途切れ、三階が黒煙に包まれる。

両者とも死んだかと思われた時、隼人君が煙の中から姿を現した。

「獄寺君!!!」

「タコヘッド!!!」

「獄寺!!!」

すかさず、駆け寄る皆。

私はモスカに乗ったまま、ベルの回収に向かう。

「しししつ、リング アイムウイナ……」

『はいはい、お疲れさん。』

ベルの持っていたリングを一つに繋げ、手に握らせる。
モスカがベルを脇に抱え、全員が集まる場所に行く。

丁度、チエルベツロが次の対戦を発表する所だった。

「明晩の勝負は 雨の守護者の勝負です。」

別の意味で泣きたくなってきた。

何これ、イジメ？

さんざんフラグを立てた罰なの？

「この時を待つてたぜえ！！ 前回の圧倒的力の差を思い出して逃げんじゃねえぞ、刀の小僧。」

「ハハハ、その心配はないぜ。 楽しみで眠れねえよ。」

「……ガキが……」

「失礼する！！」

【！】

スクアールと武君が火花を散らしていたその時。
突如一人の人間がやって来た。

それは、レヴィの雷撃隊の人間だった。

「レヴィ隊長！ 何者かが校内に侵入しました！ 雷撃隊が次々とやられています！！」

「何？」

顔を歪めるレヴィ。

自分の部下をやられて不機嫌そうだ。

「言ったる？ 着々と守護者が集まって来てんだぞ。」

「え？」

リボン君の言葉が、いやに気になった。

つまり、この騒ぎはツナ君の守護者の仕業って事だよね？

ランボ君は病院だし、さっちゃんはここにいるし。

骸はこんな騒ぎを起こすとは思えない。

・・・となると、残りは一人だけな訳で・・・

「おのれ何者だ。」

「どんなハエが来るか楽しみだね。」

「うゝお おおい！！！」

いやいや、うゝお おおいじゃないから。

これから来るのは多分、ハエどころか龍かもしれないから。

彼だけは、正直ヴァリアー側の守護者でも勝敗の判断が出来ない。負ける可能性が充分にある。

「ぐわあああ！！！」

レヴィの部下が吹っ飛ばされる。

丁度両陣営の中間に階段があるため、そこから人影が出てくる。

そして、案の定それは・・・

「雲雀さん!!」

『お・・・つつ・・・。』

我が並盛中学、最強の風紀委員長。

雲雀恭弥こと、恭弥君だった。

第四十七話（後書き）

感想等いつでも待ってます（＾
― 　　＾
　　）
　　／

第四十八話

「で、どう言う事？」

「あーいや……それは……その……」

嵐戦の翌日、昼頃。

私はナミモリ、ニヨの自室にて正座をしております。

目の前には閻魔大王閣下こと雲雀恭弥様がいらつしやいます。ソファーにどっかりと腰掛け、相手を射殺さんばかりの眼光を向けておられます。

ボスの威圧とは毛色の異なる威圧。

ボスが面で押し潰すなら、恭弥君は点で突き刺す感じ。

お昼の暖かい光が差し込む部屋の中。

しかし、室温が四度くらい下がっている気がします。

「え〜これには海より深い事情があつてですね？」

「短く纏めて話して。」

「ハイ。」

さて、何故にこんな事になっているのかと。

それは、昨日あそこに恭弥君が乱入して来た後の事。

憤慨して襲いかかったレヴィを軽くあしらひ、ヴァリアーに喧嘩を吹っ掛けた恭弥君。

そこに武君が止めに入ったりと、まあ紆余曲折ありまして……。

それじゃあ解散、みたいな空気になった時。
恭弥君が私の方をジッと睨みつけて来た訳ですよ。

最初はえ？ って思ったんだけどね。
勘違いでもなく、ガチでガン見して来たんですよ。

訝しむツナ君達を残し、やがて視線を外して帰って行ったんだけど。
その時はホツとしたんだよね。

まあ、それが油断だったんだよ。

そんでもって今日の朝。

クロームちゃんの所に持っていく物を準備する為、こうして此処に
来た。

そしたら、閻魔様がいらっしやっただ。

そんで今に繋がる。

私はまあ、話しましたよ。

自分が殺し屋だとか、今回の争奪戦に参加しているとか。
学校休んでいたのはぶっちゃけ無断欠勤だとか、そりゃあもう洗い
ざらいね。

知られても全然問題ないし、恭弥君が誰かに言いふらすなんて天地
がひっくり返っても無いね。

「そんな感じなんですよ、ハイ。」

「ふうん、そう。」

私に用意させた紅茶を飲みながら、一言だけ呟く。

話す前は不機嫌オーラ全開だったけど、今はさして興味なさげだ。

「つまり・・・君は今回敵って事だよな？」

「うん、まあそうなるねえ。」

「そう・・・。」

カチャンと、カップをテーブルに置く音が響く。

目を瞑り、ほんの数秒だけ沈黙が続いた。

敵対する事に悲しみを覚えている表情。

などとは血迷っても思わない。

何故なら、彼なら絶対に

「じゃあ、君と戦う機会もあるわけだよな。」

「ですよねえ〜〜。」

こう言うからだ。

目を開け、無愛想な顔をニヤリと歪ませて言い放つ恭弥君。
普段滅多に見せない、イキイキとした表情だ。

もう輝いてると形容しても差し支えないかも知れない。

しかし、そんな反応にむしろホツとするよ。

「まあ、可能性はあるんじゃない？」

「そうでなくても、君の仲間の連中は噛み殺すけどな。」

「マジか・・・。」

「無関係者の校内への不法侵入及び校舎の破壊活動。昨日見逃してあげただけで最大限の譲歩だよ。」

「そつすか・・・。」

そうは言うけど、結構難しいよ。

恭弥君でも、全員は無理ゲーだって。

まあ、どう言う結果になったとしても？ 終わればすぐにイタリアに帰るから大丈夫かなあ。

終わったら時に誰がどうなっているかは分からないけど。

「あの〜、これから行かなきゃいけない所があるから解放してくれ
ると助かるんだけど・・・。」

「・・・。」

「あるえ〜？」

何故か、一気に不機嫌オーラが復活した。

眉間にシワが寄り、口がへの字に曲がっている。

要はムツスーって顔だ。

なんでやねん。

「どうしたの？」

「・・・別に。」

恐る恐る聞いてみるも、答えは得られず。

静かに時間だけが流れて行く。

でも、流石にこのままと言う訳にも行かない。

クロームちゃんにも行くと約束したし、何よりあれだ、膝が痛い。

「あ、あれだよ。 今度必ず埋め合わせするからさ！ ね？ ね！

「？」

「……………」

時間にして十秒ちよい。

思考するように顎に手をあてて黙る恭弥君。

きつとどれだけ書類地獄でこき使うか考えているに違いない。

そう思うとかなりゲンナリするが、今はそうも言っていられない。

「……わかった。今日はもういいよ。」

「ありがとうー!!」

思わずそこで床に三つ指ついて土下座でお礼。

我が人生最高の出来だったと言えるだろう。

次いで跳ね起きて準備にかかる。

足が痺れていたけど、そこは気合でねじ伏せる。

もう時刻は二時を過ぎていた。

あの部屋を完全に清掃するには膨大な時間が必要。

今は一分一秒でも早く向かわねばならない。

「それじゃあ恭弥君。また今度ね〜〜!!」

返事は返って来なかったけど、聞こえてはいただろう。

特に気にせず、私は黒曜ランドに向かった。

「窓は新聞でやれって言ったでしょうがー！ー！」
「ぎゃびん！！」

即頭部に回し蹴りをくらい、吹き飛ぶ犬。
部屋の隅にあったダンボールの山に突っ込み、砂埃が舞う。

ギャグアニメのように一本だけ突き出た足が、ピクピクと震えていた。

「まったく。一分前に言われた事すら覚えられないのか、この駄犬め。」

蹴り飛ばした本人、満流がヤレヤレと肩を竦めながら溜め息を吐く。クロームはその光景を見てオロオロしており、千種は完全無視で自

分の作業をしていた。

ダンボールが弾け、中から犬が起き上がる。

「いってーらー!! 何するびょん!!」

「だ〜か〜ら〜、窓ガラスは新聞紙で磨けつて言ったでしょうがっつうの。」

「んなもんどつちでやっても一緒だびょん。」

「・・・はっ、これだからイ又は・・・。」

「なんらとお!?!」

心底哀れむような目で見下ろす満流に、怒り心頭の犬。

「イ又は黙つてご主人様の言うことに従つてればいいの。」

「俺のご主人はお前らんかじゃねえ!! 骸様だびょん!!」

「うっわ・・・男同士で奴隷プレイ? キモツ・・・ちよっ、近寄らないでくんない?」

「むっきー!!!」

シッシツと手を振る。

犬の怒りは頂点に達する。

そこで、クロームが勇気を振り絞つて割つて入る。

「あ・・・喧嘩・・・駄目。」

「邪魔すんなこのブス!!」

「・・・ああ・・・?」

犬の吐いた暴言に、満流の何かが切れた。

瞬間、部屋の中をえも知れぬ重圧が支配する。

それも、それらは犬個人に一点集中する。

「う・・・げ・・・」

「おいコラ。 テメイヌの分際でこの子をブスだとかぬかしたの
かなあ？」

「が・・・ああ・・・」

全身に汗をダラダラとかき、後ずさる犬。

顔は思いつきり引き攣り、哀れなほどに真っ青だ。

満流は優しくクロームの肩に手を置いて押しつけ、ゆっくりと犬に
歩み寄る。

その顔は満面の笑みであり、通常時であれば見惚れるような輝かし
ささえ放っていただろう。

しかし、今それは犬にとって死神の嘲笑に見える。

何故か、大鎌を担ぎながらゲラゲラと笑う、ローブを纏った骸骨が
満流の背後に見えた気がした。

「こんな可愛い子がブス？ え、何？ 何様？ どの面下げて言っ
ちやってんの？ 死ぬの？」

「あ、いや・・・その・・・」

いつしか言葉に敬語が付き始め、体が震え始めた。

「あれかなあ、前に女の子をブス呼ばわりする意味を教えてあげた
のに・・・もう忘れちゃったあ？」

「ひっ!？」

「・・・・・・・・。」

返答するのはクロームちゃんだけ。

千種は単に無口なだけだが、駄犬の方は別だ。

完全に真っ白になっており、毛ほども動かない。

あれからミツチリと調きよ・・・・・・・・もとい説教をして、しっかりと謝らせた。

それからはもう馬車馬の如く働かせ、現状に至る。

しかし、その甲斐もあって結果は上々。

最初に来た時とはまるで違う光景となっていた。

一般住宅に比べれば整っているとは言いが、それでも大きな違いだ。

ゴミと言うゴミは全て排除され、ガレキや砂利などの物も撤去した。部屋全体に雑巾がけをして、最低限の家具も用意した。

まず買った服などを入れるタンス。

さらに元々あったソファよりも一回り大きいのを一つ。

床で寝る時用に広めのカーペットを部屋の端に敷いて、暖かい毛布も三人分置いた。

そんでもって最大課題である食生活。

一番良いのはこの三人、最低でも誰か一人に料理を覚えて貰うのが一番なんだけど。

正直こればかりは今すぐには無理。

私自身、人に教えられる程じゃないし。
なので、ちよい大きめサイズのカセットコンロを購入。

私がかレーなどの日持ちする物を定期的に持つてくる事になった。
まあ、ちよつとずつでも料理は覚えて貰うけどね。

手始めに初心者用の料理本を何冊か買って渡しておいた。
調理道具も一式プレゼントして。

「いやー我ながら良い仕事したなあ〜？」

「うん、本当にありがとう。」

「いいって、それよりさあ。」

「？」

「ちよつと骸と話したいんだけど、出来る？」

「うん、ちよつと待って。」

目を閉じ、沈黙するクロームちゃん。

何回か頷くように頭をコクコクと揺らし、やがて目を開けた。

「じゃあ、前みたいにコレ、握って。」

「はいよ〜。」

言われた通りに握る。

そして、前と同じく空間が歪む。

爽やかな風が頬を撫で、心地いい木々のざわめきが疲れを癒す。

「いい所だよね、ここ。」

「クフフ、そうでしょう？」

「またも背後から、振り向けば前回と同じ服装の骸。」

「精神だけでさ迷うのも、ここの御陰で存外に悪くないんですよ。」

「あつはは、でもこのままなんて事はないんでしょ？」

「勿論です。」

互いに微笑む。

「それで、私に話とは？」

「いやね？ 実は前から欲しかった物があつてね？ それを譲ってくれないかなあつて。」

「ほう。それは構いませんが、いったい何ですか？」

思わず、口元がニヤリと笑うのを抑えられない。

「だって、これが手に入れば面白い事が沢山出来るかも知れないんだから。」

「憑依弾、だよ？」

「……なる程、貴方の欲しがりそうな物ですね。」

「よく分かつてるじゃん。」

「そう、今や骸だけが持っている憑依弾。」

「人の体に乗っ取り、好き勝手に操れる物。」

「もう、これだけでイタズラの幅が無限に広がる。」

「想像するだけでワクワクが止まらない。」

「いいでしょう。思った以上の働きをして貰ったみたいですね、

これで済むならお安い御用です。」

「よっしゃー……！」

空に向かって腕を突き出して叫ぶ。
今から楽しみで仕方がない。

骸は、そんな私を見て可笑しそうに笑いながら、ポケットから物を取り出して差し出して来る。
それは一発の弾丸。

一目見ただけでは只の弾丸、しかし中身は全くの別物。

「貴方なら知っているでしょうが、これは死のリスクもありますし、何より相性が重要ですよ？」

「そんなの問題なし！ とにかく使ってみてから考える！！」
「まあ、そうですねえ。」

骸から弾を受け取り、しっかりと握る。

「それでは、またお会いしましょう。」
「うん、それじゃあね〜？」

景色が消え、元の場所の感覚が戻ってくる。
唯一違うのは、先程は無かった感触が左手の中にあること。

槍を握っていた右手を放し、左手を開く。
そこには、変わらず一発の弾丸があった。

「お帰り、満流。」
「うん、ただいま〜？」

憑依弾をポケットにしまい、辺りを見回す。

犬は相変わらず真っ白で、千種はコンロに火を点けている所だった。

今日は既にカレーを持って来ていたので、それを温めるのだろう。

「そう言えば、満流・・・行かなくて良いの？」

「うん？ ああ・・・雨戦かあ・・・。」

見れば、もう既に始まっている。

完全に遅刻だ。

でも

「正直、行かなくても良い気がするなあ・・・。」

武君には悪いけど、スクアアロには勝てないんじゃないかなあ。

ヴァリアアの幹部の中でも、スクアアロの実力はピカイチだもん。

たかが一週間足らずの修行で追い抜けるとは思えない。

確かに皆の成長は目を見張るものがあるけどね。

「でも、行かないとねえ。」

仕方なく、扉へと向かう。

「それじゃあ今日は帰るねえ。　バイバイ。」

「うん。　また明日。」

そうそう、クロームちゃんには私がマフィア関係者だって事は話した。

しかし、ヴァリアア側である事は言っていない。

なんつうか、サプライズ的な？
ツナ君達に隠しているのと同じ理由かな。

扉から外に出て、私は急いで向かうのだった。

『うつそ……。』

到着してすぐ、私の口から思わず声が出た。

校舎のB棟、その側面の壁に設置された巨大スクリーン。

そこに映される映像には、予想外にも程がある光景があった。

『勝っちゃったんだ……。』

「お、姫遅かったじゃん。」

「流石に驚いたみたいだね。」

『うん、そりゃあね。。。』

ベルとマーモンも、やっぱり驚いてるみたいだ。

やはり、スクアアロに限って負けは無いと思ってたんだろっね。

私も、まだちょっと信じがたい。

でも、武君の足元に横たわる姿を見れば信じざるを得ない。

そしてその直後、何やら大きなサメがステージ内に解き放たれた。

『うお、何アレ?』

「ステージの仕掛けだったよ。」

サメを見た武君が、スクアアロの処遇をチェルベツロに聞いている。

「スクアアロ氏は敗者となりましたので、命の保証はいたしません。」

ある意味予想通りに、淡々と告げる。

武君も同様に予想してたようで、スクアアロを抱え起こした。

助けるつもり・・・なんだよねえ、やっぱ。

「山本!？」

「てめー馬鹿か!!！」

普通、助けね?

モニターから聞こえてくる声に、ヴァリアー側が呆れている。

サメが二人の血に惹かれ近づいてくる。

足元の柱を壊され、二人の足元が崩れ落ちた。迫ってくるサメ。

その時、スクアーロが武君を蹴り飛ばした。そおして、サメの標的がスクアーロに定まる。

ガキ、剣のスジは悪くねえ。後は甘さを捨てる事だあ。

直後、サメの突撃に飲まれるスクアーロ。武君が叫ぶが、返事がある訳も無く。

その時、ボスが笑い出す。

「ぶはーっはっはっは！！ 最後がエサとは、あのドカスが！ 過去を一つ、精算出来た。」

此方の空気とは別に、ツナ君達の方は重そうだ。武君も、戦いには勝ったのに、その顔はやりきれなさで溢れていた。

「雨の守護者戦は、山本武の勝利です。 それでは、次の対戦カードを発表します。」

それでも、チエルベツロはお構いなしに続ける。まあ私も次のカードは気になって仕方ないけど。

「明晩の対戦は 宵の守護者の対決です。」

キツツツターーーーーー

.....

第四十八話（後書き）

ついにここまで来たー！ー！！！！

やっところ宵戦ー！！

まさに物語的にも作者の腕的にも佳境戦ですー！！

待ちわびていた方はお待たせしました！

すぐに投稿する保証はできませんが、なるべく早くお届けしたいと思います。

それではまた次回（＾　|　＾）ノ

第四十九話

《おい満流。 ちょっといいかあ?》

「お、神つちじゃん! ひっさしぶりい?」

《神つちって・・・ものっそいご機嫌だな・・・》

「ふふ、ま、ま、ね?」

神ちゃんが何かドン引きしているが、今の私は気にならない。

昨日、ようやく私の対戦が発表されたのだから。

この日をどれだけ待ちわびた事か。
度重なるフラグ回収による焦らし。

楽しそうに戦う皆を見て、どれ程やりたくてやりたくて仕方なかった事か。

スクアア口の事は残念だったけどねえ・・・。

これがこの業界だし?
皆も普通に生活してるし?

一人二人知り合いが死んで悲しんでたら時間がいくらあっても足りないよ。

それに多分・・・ねえ・・・。

「誰もかれもお人好しって事だねえ・・・。」

《ん? なんだって?》

「いんや何も。 それで、用事あったんじゃないの?」

《おおそうだった。》

勝手に冷蔵庫からお茶を持ってきて飲んでいた。
別に良いんだけどね。

コップを置いて、少しだけ雰囲気を変えて話します。

《お前、今日あの干坂って奴と戦うんだろ？》

「うん、そう。今か楽しみで仕方ないよ〜？」

《その事・・・なんだが・・・》

「うん？」

妙に歯切れが悪い。

言い出しにくい、何と言ったらいいか解らないって感じた。

しばらく逡巡した後、あきらめた様子で口を開く。

《その、出来れば深く傷付けないで倒してくれないか？》

「・・・はい？」

なんとおっしゃいました？

《知つての通り、彼女は正規の転生者だ。神の下手際で死に、それを埋める為に新たな人生を送って貰ってるんだ。》

「要は、そのミス分が帳消しになるくらいには生きていて欲しい、と？」

《その通りだ。お前と戦うとなると、即死はしなくともその時の傷が原因でと言う事もありうる。》

「ふむ・・・。」

確かに、それはある。

傷が元で何かしらの後遺症、障害や病気になる可能性はあるだろう。

そうなつては、転生してきた意味がない。
神様に協力もするって言ったしね。

「うん。 たしかにそうだね。」

《分かってくれて何よりだ。》

ホツとして表情を崩し、お茶を一口飲む神。

「だが断る。」

《ブフォオツ!!!》

「ヒョイっとお。」

吹き出されて宙を舞うお茶を紙一重で避ける。

盛大に撒き散らされ、天窓から差し込む光によって虹が出来ていた。

《ゲホツ！ ガハツ！ ゴホツ・ゴホツ！》

「お茶で蒸せる神様ってなんかシユールだねえ。」

《おまつゲツホツ！ なん・・・グツ・・・でえ・・・！》

「なんでって・・・。」

思わず溜め息が出る。

なに、もしかして本気で私がオーケーするとても？

勘違いも甚だしいよ。

「あのさあ、何で私がそつちの都合で楽しみを減らさなきゃいけないわけ？」

《いや、だから・・・。》

「そもそもだよ？ 私は転生者を狩る事には協力するとは言った。

でも今のは完全に業務範囲外でしょ？」
《そ・・・それは・・・。》

バツが悪そうに視線を外す神。
言われなくても分かっただけはいたみたいだね。

これで駄々をコネるようならどうしてくれようかと思っただけ。

「つまり、私は殺す事にはいくらでも力を貸すけど、生かす事には気分次第。オーケー？」

《・・・ああ、そうだな。》

「わかればよろしい。」

席を立ち、夜までの暇潰しに出かける準備をする。
ついでにクロームちゃんの所に様子見に行かないと。

「ま、だからと言って落ち込むのは早いと思うよ？」

《？ なんだ？》

「私はあくまで楽しめれば良いんであって、殺す事が絶対条件ってわけじゃないんだよ。」

そう、要は彼女が私を満足させられればいい。

私が勢い余って殺してしまう前に、十分な戦いをすればいい。

そうすれば生きれるって保証は無いけど、可能性はゼロじゃない。
それに、そうでなくとも私に勝てば生きられるしねえ？

まあ、ないとは思っただけ。

「ま、どうせ死んだらまた君らの管理不行き届きって事で諦めなさ

いな？」

《もう勘弁してくれ……。》

「それも断る？」

ソファアの上で頂垂れる駄神を残し、私は外へと出かけた。

昼下がりの学校。

毎晩壮絶な殺し合いが行われているとは思えないような日常が送られている。

破壊しつくされた筈の校舎は、何事も無かったかのように健在している。

生徒は疑問など浮かべる事なく、いつも通りに学校生活を満喫している。

そんな並中の屋上で、ツナ達は昼飯を食べながら話し合っていた。

「千坂さん。 今日だけど、大丈夫？」

「平気だつて。 ツナは本当に心配性だね。」

「だな。 千坂なら平気だつて。」

カラカラと笑って弁当をつまむのは、今日の選手の片方である千坂。そして昨日の対戦の勝利者である山本だ。

「うむ、そうだな！ お前なら極限に心配いらん！」

「テメエらは何の根拠があつて言つてんだアホども！！！」

同意する了平に、呆れながら怒鳴る獄寺。

雲と霧を抜いた全ての守護者が揃っていた。

成り行きを見守っていたリボンが、サボテンのコスプレ姿で口を開く。

「だが、実際おめえの相手は手強いぞ。 いや、どっちかつつと

凶悪だな。」

「凶悪？」

「ああ。」

ツナが頭の上に疑問符を浮かべる。

いまいちりボンの言うことが分からないようだ。

今までのヴァリアーとて、ツナから見れば十分に凶悪極まりなかった。

今更な表現に感じたんだろう。

他の者も同様に感じているのか、リボーンの言葉の続きを待っている。

そんな中、千坂がリボーンに尋ねる。

「どう言う事？ 私の相手って、あの仮面付けた人でしょ？」

「そうだぞ。 奴はスクアードと同じくヴァリアー幹部の中で跳び抜けて強え奴だ。」

「スクアードと、同じ？」

「……。」

出てきた名前に、山本が苦い顔をして沈黙する。

本人が選んだ事とは言え、目の前で死にゆく人間を助けられなかった。

自身の存在の半分が優しさで出来ているような彼には、辛い出来事として刻まれている。

しかし、今は過ぎた過去よりも、過ごしている現在だ。

話は進んでいく。

「あいつは八年くらい前に噂として流れ始めた奴でな、当時イタリア中のマフィアを恐怖のドン底に陥れた殺人鬼だ。」

「さ、殺人鬼い！！？」

物騒な単語にツナが震える。

殺し屋と殺人鬼では抱くイメージは若干異なる。

それに、ツナは元々リボーンの影響で殺し屋という単語に耐性が付いていた。

殺人鬼と言えば、無差別に殺しまくってゲラゲラ笑う。

そんなイメージがツナの頭の中に浮かんでいた。
あながち間違っではないが。

「それなら俺も聞いた事があります。 数え切れない小中規模のマ
フィアが一晩で消され、被害者は必ず首を切られて殺される。 た
しか通り名が、「首狩り王女」でしたよね？」

「その通りだぞ。 その後にヴァリアーとの関係が発覚したのは随
分後だけだな。」

「く、首を切られてって……またスプラッタな……。」

嫌そうに表情を歪める千坂。

他の皆も何となく想像したのか、少し顔が青い。

「しかもだぞ。 奴は九代目の守護者を嵐と雷の二人同時に相手し
た事があってな。 その時でさえ大した傷は負わせられず、それど
ころか嵐の守護者は片腕を奪われたんだ。」

「九代目の守護者が!？」

「マジ・・・かよ・・・。」

「そいつはヤベエな・・・。」

「うむ、只者ではないぞ。」

「っ・・・。」

それぞれが反応する中、千坂は押し黙って拳を握る。
跳ね上がる心臓を落ち着かせる。

大丈夫、やれると。

怖くない訳がない。

リポーンも、それを承知で話したんだろう。
相手の情報を隠す事に意味なんてない。

むしろ楽観して瞬殺なんてされたら、目も当てられない。
この程度で尻込みなんて、している暇はないのだ。

「奴はその戦闘力も化け物じみているが、それに加えて妙な技を使
うらしくてな。用心する事に越した事はねえぞ。」

「その、技って？」

「わかんねえ。 奴はその戦いからしばらく消息を絶っていたんだ、
三年くらいな。それから今度は世界中で出没するようになった。」

何百というマフィアのボスやファミリーが消された。」

全員が、息を呑む。

ここまで具体的に強さを聞かされたのは初めてだったから。

ヴァリアーは結局の所、暗殺部隊だ。

その強さを知られる事はあっても、強さの度合いまでもが細かく知
られる事はない。

ましてや、その活動の内容まで詳細には明記される筈はない。
人知れず、しかし完璧に殺し、潰し、破壊するのが使命。

「それでもここ一年はまた活動停止してたんだがな、ヴァリアーと
合流して動いていたって訳だ。」

「そっか……。」

応えたのは千坂のみ。

場には重い沈黙が流れる。

誰もが思っている、今までは考えないようにしてただけで。何だかんだで、昨日実際に体験したばかりなのだから。

今日、また人が死ぬかもしれない。

向こうは、間違いなくそうしようとして来るだろう。

殺しはビジネス、今日の相手に至っては遊び程度かも知れない。

そんな相手なのだから。

「……うん、大丈夫。やれるよ、私。」

「……そうか。」

ゆつくりと、力強い眼差しで言い放った。

その様子に、リボーンの顔に笑みが浮かぶ。

一方、ツナは先程よりも深刻な顔で俯いている。

「大丈夫かツナ？ 顔色悪いぞ？」

「え……あ、ああうん……大丈夫……。」

山本の問いにも、どこか上の空で答える。

そんなツナの横に、リボーンがやって来る。

「満流の事が心配なんだろ？」

「っ！！……。」

「ツナ……。」

「十代目……。」

「沢田……。」

「……。」

より顔を暗くする。

そんな様子に、全員の顔にも影が落ちる。

「そんな危ない奴がいる所に連れて行かれて、酷い事……され
てるんじゃないかって……。」

「……………」

「そう思ったら……もうなんか、頭がグチャグチャになって・
・もし、みーちゃんがもう……！」

「いい加減にしゃがれ。」

「げふうっ!!?」

涙を流し、自暴自棄に陥りかけたツナ。

その横つ面を、リボーンが蹴り飛ばす。

五メートルは吹っ飛んだツナ。

コンクリの地面を擦り、ゴロゴロと転がってようやく停止した。

「じゅ、十代目！」

「ツナ！」

慌てて助け起こす。

手や足がピクピクと震え、口から血が流れ出る。

かと思えば、突如ガバッと跳ね起きて蹴られた頬を抑えながら。

「いきなり何すんだよ!!?」

「あたりめえだろが。ダメツナの癖に頭でウダウダ考えてんじゃ
ねえ。」

「なっ!?!」

サラリと暴言で返され、言葉に詰まる。

前にも似たような事を言われた気がするから。

「守護者がやる気出してんのにテメエが腰抜けでどうすんだ。そんなんじゃ助けられるもんも助けられねえぞ。」

「っ……それは……。」

奥歯を噛み締め、俯くツナ。

頭では分かっている、こんなんじゃいけないと言う事くらい。

それでも、どうしても心が付いてきてくれない。
もしもやたらればの可能性が頭の中を渦巻く。

「別に心配すんな、なんて言う気はねえ。言ってもお前には無駄だろうしな。」

「うん……。」

「だけどな、それでお前が負けたら本末転倒だろうが。お前は負けて失いたいのか？ それとも取り戻したいのか？」

「……。」

「オメエがいくら考えたってマトモな解決策なんて浮かぶ訳ねえんだ。だったら勝つしか道はねえぞ、骸との戦いの時もそうだった筈だぞ。」

「っ！」

瞬間、ツナの脳裏にあの時の思いが思い起こされる。

満身創痍の中、頭に響いてきたみんなの声。

そして、血塗れになりながらも笑みを浮かべて、自分を応援してくれていた。

初めての友達にして、大切な幼馴染み。

あの時、早く彼女を助けたかった。
傍に行つて、支えてあげたかった。

なにより、彼女をあんな風にした奴が許せなくて。
だから、何よりもまず、目の前の敵を倒そうとした。

結局、最後に支えて貰っていたのは自分だったけど。
でも、だから、今度こそ……

「……うん。 そう……だよな。」

拳を握る。

空を見上げ、深呼吸をして思いっきり立ち上がる。

「ごめんリボーン。 目、覚めたよ。」

「おせえぞこのバカツナめ。」

言葉とは裏腹に、リボーンの顔には笑みが浮かぶ。
それに伴い、他の面々も一様に笑う。

「勝とう。 勝つて、みーちゃんを助けるんだ。」

「そうっすよ十代目!!」

「だなっ!!」

「うむ! 極限に燃えてきたぞ!!」

「そうこなくっちゃね!」

気合を取り戻す一同。

先程までとは違う、晴れやかな空気に満ちていた。

「まずは今日の宵戦だぞ。相手は強いが、だからって無敵な訳じゃねえ。」

「うん。絶対に勝つよ、私。」

「千坂さん、気を付けてね。」

「うん!」

タイミングを見計らったように鳴るチャイム。
各々の食事を片付け、ツナ達は校舎の中へと戻っていった。

『ふんふん? ふんふん ふんふんふん?』

「ししっ、姫超楽しそうだな」

『そりゃあもう! ああ、時間って何でこんなに経つのが遅いかなあ?』

「と言いつつニヤけているのが見なくても分かるね。」

はい、夜中の並中です！
現在バトル開始の三十分前。

かつてない程に余裕を持って来ました。
目の前には校舎のB棟。

昨日の雨戦と同じ場所である。

今回は、雨戦の時にくり抜いた校舎をそのまま使つみたいだ。

近くにチエルベツ口の人を見つけ、用事があつた事を思い出す。

『あゝもしもし？ ちよつといいかなあ？』

『なんででしょうか？』

『いやね？ 私の事は本名じゃなくて、セラって呼んで欲しいんだあ。 ちよつとしたサプライズにしときたい訳よ。』

セラと言う名の元は単純明快。

宵をイタリア語で読んだ発音をいじっただけ。

ついさつき考えた。

「承知しました。」

『どうも〜？』

ベルとマーモンの所に戻る。

この二人は、私がアジトから出る時に付いて来た。

二人とも暇だつたらしい。

「しかし、君と殺り合う向こうの守護者は気の毒だね。」

「だな。きつとバラツバラにされて面影も残さねえよ」
『いやあ〜それ程でも?』

「いや、褒めてねえんだけど……。」「
「楽しみ過ぎて浮かれてるね。」

なんか呆れた視線を送られている気がするけど、全く気にしない。
今の私は、阿修羅をも凌駕する存在なのだから!!

「お、向こうも来たみたいだぜ。」

『おお〜? 来た来たあ〜。』

ツナ君達が到着し、開始まであと五分を切っている。

ちなみにボスやレヴィ、モスカは既に観覧席の方に行っている。

「どうやら揃ったようなので、宵戦のルール説明をさせていただきます。
ます。」

全員を一瞥して、チエルベツロが話し出す。

同時に、ツナ君達の空気が少し引き締まった。

「今回は、昨晚のアクエリオンから水を排し、修正を加えたステーションです。その名も、セーラダンジョン。」

直後、何かが勢い良く叩かれるような音が連続して聞こえて来た。
そして、それは徐々に近づいていき、それと同時に明かりが消える。

そして最後の音が止んだ時、私達は一店の光も無い闇の中に居た。

「な、何これ!? なんなの!?!」

ツナ君の叫びが校舎内に響く。

「これがこのステージの仕掛けです。セーラダンジョンは、校舎内の全ての窓を光を完全遮断する素材で塞いでいます。その上で、電灯の数を四分の一に削りました。」

言葉と共に、電灯が点いて視界が戻る。

しかし、明かりと言ってもかなり貧弱で、本当につつすらとしか見えな

「今回はB棟全体を使います。一階から三階まで、隅から隅までの空間を含みます。」

「広いな。」

「今までで一番の広さだぞ。」

確かに、他の守護者戦とは違う破格の広さだ。

「校舎内の至る所に上下階に続く穴が穿たれ、また常に照明の強弱が変化、不定期で完全に消えます。」

『確かに迷路だねえ。』

普段から通っている所でも、穴があるから大して役には立たない。

「また、開始時に両名には此方の指示したポイントで、離れた状態から始めて貰います。」

「なるほどね。相手に見つからず、相手を先に見つけた者が有利って訳だ。」

「そう言う事です。そして、これからが宵戦においての重要事項ですが。」

【？】

チエルベツ口の含みのある物言いに、全員が疑問符を浮かべる。これ以上の仕掛けがあると言っのか。

「今まではどちらかが降参、あるいは相手を戦闘不能にしてリングを完成させる事が勝利条件でした。しかし、宵戦に限っては僅かに異なります。」

続く言葉に、誰も予想はしていなかっただろう。

いや、もしかしたら、誰かが必然として知っていたかも知れない。

「今回の勝利条件は
です。」

相手の守護者を、殺害する事

第四十九話（後書き）

ちよつと戦闘前のツナサイドの心境を書きたくなり、投稿させて貰いました！！

次こそ、宵戦スタートです！

もう少しだけお待ちください。

それでは（＾
|
＾）ノ

第五十話（前書き）

ついに五十話まで来た！！

ここまで読んでくださった皆様に、最大の感謝を！！

ありがとうございます！！（＝＾Ｏ＾＝）

第五十話

「殺害・・・って・・・。」

沈黙の中、ツナの眩きが辺りに響く。

ツナ側の人間は皆一様に顔を驚愕の色に染め、千坂は固まったように動かなかつた。

対して、ヴァリアー側はむしろ面白い見世物でも見たかのように楽しげだ。

「ししっ、おんもしれえじゃん」

「白黒ハッキリしていいね。」

『ひゅっっっ？』

まるでゲームでもするかのような雰囲気だ。

いや、彼らからすれば同じ事だろう。

しかし、もう一方の者達にとってはそうではない。

「な、なんで今日だけそんな!!」

「これは宵の守護者の使命を体現する為のルールです、異議は認めません。」

「し・・・使命？」

「はい。」

ようやく出た千坂の眩きに、チエルベッコが頷いて答える。

「全てを染め上げつつ、全てを飲み込み食い尽くす宵闇。宵の守

護者とは、戦いにおいて絶対の強者であり、勝者。 全ての敵に絶望をもたらす存在である事です。」

ツナ達の顔が、少しづつ陰っていく。

干坂においては、悔しげに奥歯を噛み締めている。

それも仕方のない事。

この使命はまるで、宵の守護者は人殺しをするのが当たり前だと言っている様にも取れる。

ツナ達からすれば、満流を人殺し扱いされた気分だろう。

初めから手遅れである事は知る由もなく。

「それでは、両名は此方の支持に従い、開始位置についてください。その他の方はこちらへ。」

話しを終えたチエルベツロが、踵を返して歩き出す。

その隣に居たもう一人がセラの所へ。

そしていつの間にか現れた三人目が干坂の横に立ち、それぞれを案内する。

他の者は観覧席に移り、ステージ内を見る。

A棟の二階に設けられた部屋で、幾つものモニターが置かれている。ステージ内の各所が映し出され、時折映像が切り替わっている。

暗視カメラの映像らしく、あれ程暗くて視界が悪かったB棟の様子がハッキリと見える。

そして、モニターの内の二つには、今回の対戦者両名が映っていた。

その画面だけは切り替わることなく、どうやら人が写っている時は画面が固定されるらしい。

「それでは、宵の対戦。 セラVS千坂沙知 勝負開始。」

絶対の死が約束されたデスマッチが、始まる。

二メートル先も見えない、薄暗い教室。
昼間のような騒がしさは微塵もない、荒れ果てた校舎。

床にはガレキがそこらかしこに転がり、何度か足を引っ掛けそうになる。

「……………」

声は出さない。

どこに敵がいるか解らないから。

ほんの少し呼吸を荒らげただけで、その音が嫌に響く。
あまりの静けさに、耳鳴りがしている気がする。

ただ戦うのとは違う緊張に、手が汗で滲む。
心臓の鼓動がうるさい。

これだけで相手に位置を知られてしまう気がする。
それでも、気力を振り絞って歩く。

一歩、一歩と、細心の注意を払いながら。
地面を擦る音が出る度に、心臓が跳ねる。

その都度停止して、辺りの気配を伺う。
開始から、五分経ったか否かと言う程。

なのにもう、精神的な疲労が酷かった。
今日、どちらかが必ず死ぬ。

その事が、頭から離れない。
私の相手は、まごうことなき殺人鬼。

殺す事に躊躇なんてしない。
油断した瞬間に終わる。

いや、もしかしたら既に相手は近くに來ているかも知れない。
脳裏に浮かぶのは、満面の笑みを浮かべた銀色の仮面。

エコーがかかった女の声。
仕草や言動の節々から無邪気な子供を連想させる雰囲気。

でも、そこには明確な狂気を直感させるには十分な違和感があった。
そんな奴が、今も暗闇の奥で私を狙っている。

すぐ目の前の闇の中で、私を見て笑顔を浮かべている。
そんな気がしてならない。

「……駄目……」

小さく、呟く。

例え聞かれたとしても、言葉に出さないと壊れてしまいそうだったから。

私は今、暗闇のせいで思考が麻痺している。
人が闇に抱く根源的な恐怖。

それに支配されている。
これじゃあ、勝てる勝負も勝てなくなる。

昼間にあれだけ意気込んだばかりなのに、もうこんな有り様だ。
しつかりしないと。

私が負けたら、もう後が無くなるんだから。
下を向いて、目をギュッと閉じる。

それから天井を向いて、思いつき深呼吸。
目を開け、よし！ と心の中で意気込み、再び一步を踏み出した。

「えっ!？」

直後、眼前に濃紺の刃が迫っていた。

真っ暗な廊下を悠々と歩く。

勿論足音なんて微塵も立てず、しかし歩調は普段と全く変わらない。

それもそのはず、この程度の闇なんて、私にとっては無いも同然。視界が塞がれた程度で動けなくなる領域なんて、ヴァリアーはとうの昔に抜けている者ばかりなんだから。

鼻歌を口ずさみそうになるのを堪え、さっちゃんの気配を探りながら二階へとやって来た。

私が最初に立たされたのは一階の端っこ、普通のクラス用教室だった。

開始から五分、一階には居なかつたのでこうして階段を上がつて来たのだ。

天井に開いている穴から行こうかと思つたけど、何となくやめた。

着地した所に砂利とかあつたら音を消すのは難しいしね。

どうせなら私の方から仕掛けて驚かしたいし？。

一つ一つ教室の中を覗きながら、同時に気配を探る。

耳を澄ませ、僅かな音も聞き逃さない。

『それにしても……ドンマイとしか言えないねえ。』

さっちゃんに、ではない。

駄神の事だ。

まさか頼んだその日に死んだなんて知らされたら、どんな顔するだろう。

また仕事が増える訳だ。

まあ、自業自得だけどね。

そもそも、ただ人生を与えるだけなら特典なんてやらなければいい。

そんなのがあるから、分不相応に首を突っ込む事になる。

結果として、寿命を縮めるだけなのにねえ。

これまでの痛者だつてそうだ。

一般の社会でそこそこの地位で満足すれば良いものを、調子に乗るから駄目なんだ。

力さえ手に入ればそれだけで強くなれると思ってる痛い子供達。元々人生がカスだった落ちこぼれが、そう簡単に変われると思ってるのか。

そんな甘つちよろい考えで生きてるから現実で上手くやれないんだと気付かないのかねえ？

だから神共にだって暇潰しの道具にされる。

生きてても死んでも人形扱い。

まあ確かに見てて超面白いけどね〜？

滑稽な見せ物としてならかなりレベルが高いと言えるだろう。と、まあそんな事は置いといて。

さっちゃんの件もそうだ。

生きていて欲しいなら、そもそも物語に関わるような転生をさせるべきではない。

全く関係のない土地で生み出し、何の特典も与えず、前世の記憶なんて以ての外。

つ〜ま〜り〜、これは全っ部向こうの不手際。

私に罪はありません？

「……………め……………」

『おっ、』

思考に耽っている私の耳に、微かに聞こえた声。

この場所に居るのは二人だけなので、声の主は決まっている。

思わず、口元が吊り上がる。

唇を舐め、肩に担いでいた鎌を両手に持つ。

階段を上がって三階。

そのすぐ前の廊下に、彼女は居た。

ハッキリとは見えないが、目を瞑って天井を向き、なにやら深呼吸している最中。

きっと気合的なものを入れているんだろう。

この暗闇の中、普通の人ならかなりの気力を消耗する。
しかし、これはドッキリを仕掛ける最大の好機。

よし行くぞ！ って感じて歩きだしたとき、いきなり襲われたらビ
ツクリするよね？

と言うわけで、音も無く私は駆ける。

丁度、さっちゃんが目を開けて足を踏み出そうとしていた。
顔面目掛けて、鎌をフルスイングで振るう。

「えっ!?!」

ビンゴオーー!!

超ビツクリ顔頂きました?!

「くっ!」

背中を仰け反らせ、ギリギリで避ける。

この程度躲せなかったらどうしようとか思ったけど、杞憂で良かった。

『よく避けましたね。』「褒美に飴あげよつかあ?」

『いらないっよ!!--!』

『おっとお。』

仰け反った勢いをそのまま使い、サマーソルトの容量で蹴り上げて来た。

身を引いて躲し、距離を取って暗闇に紛れる。

私はともかく、これでは向こうに私の姿は見えない。

彼女と私では、夜目の効きが違う。

『アツハハアツ? 見た所武器らしいの持ってないけど、貴方って素手なの?』

「さあ、どうかしらね。」

そう、さっちゃんは武器を持ってない。

完全に丸腰だ。

服の中に武器を隠している様子もない。

しかし、ルッスと昔よく手合わせしたから解る。

彼女は格闘家じゃない。

さっきのはあくまで身体能力の範疇。

構えから重心、私の攻撃への対応。

色んな情報が、その可能性を否定する。

『ふ〜ん。 まあいいけどお、出し惜しみしてたらサクッと逝っちゃうよお? 私を殺さないと勝ちにならないんだからさあ〜。』

「っ！」

最後の言葉に、表情が歪む。

ああやっぱり、そんなことで足踏みしてたんだ。

お人好しもここまで来るとお荷物だね。

私としてはさっさと力をみせて欲しいのに。

だから、出さないなら出させるだけ。

『ほうらあ、どっち向いてんの？』

「な!？」

背後から突然やって来た攻撃に、さっちゃんは驚愕している。

それもそうだろう、さっきは確かに前に居た筈なのに。

今度は、完全には避けさせない。

右腕に切り傷が出来る程度のタイミングで仕掛ける。

彼女が飛び退き、二の腕に刃が掠る。

血が飛び、彼女が一瞬顔をしかめる。

その隙にさらに踏み込み、鳩尾に思いっきり蹴りを入れた。

『ほいっとお。』

「かはあっ!？」

吹っ飛び、教室の扉にぶつかる。

勢いを受け止めきれず、壊れる扉。

そのまま中へと吹っ飛び、教室内に砂埃が舞う。
鎌を担いで中に入る。

教室の中央には、二階へと繋がる穴が空いている。
その横に机の山が出来ていて、どうやらそこに突っ込んだらしい。

こりゃあ痛そうだ。

と思いきや、すぐに山が崩れてさっちゃんが出てきた。

その顔は痛みを訴えてはいるものの、全体としてそれ程ダメージを追っている様子は無い。

『結構タフなんだねえ。痛くて泣いちゃうかと思っただけどお。』

「舐めないでよ、ねっ！」

『ん？』

気合と共に、勢い良く腕を振り上げたさっちゃん。

しかし、私達の距離は三メートルはある。

そんな所で素手の彼女が腕を振るった所で、何も起こらない。
その筈だったが……

『!?!?』

直後、直感に従って横に跳ぶ。

すると、左手に僅かな痛みが走る。

見ると、手の甲に切り傷が出来ていて、血が流れていた。
遠距離攻撃？

それとも彼女が武器を隠し持っていた？
或いは、これが彼女の特典か。。。

『うーん？ どんな手品かなあ？』

「タネが分かった手品なんてつまらないでしょ？ だから教えてあげない！！」

『うわあっ！』

今度は振り上げた腕を降ろす。

無数の何かが降り注ぎ、服の何箇所かに掠る。

攻撃は数秒続き、終わった頃には隊服の裾が穴だらけだった。

『ああ、これってそんなに安物じゃないのに。』

「降参するなら弁償するよ？」

『いやいや、降参無し。別に金には困ってないから？』

手を振りながら答える。

ちなみに、この教室には比較的強い電灯があり、互いの姿が目で確認出来る。

まあ、私には対して変化無いけど。

「……それは、人を殺して手に入れたお金？」

『そうそう。もう一般の人なら一生遊んで暮らせる金がいっぱい入るんだよ。真面目に働いてるのがアホらしくなっちゃうくらいなの、ね？』

「……そう……そう……」

小さく呟いて、彼女は口元を拭った。

口から流れていた血を拭き取ったかと思えば・

『・・・あれえ？ なに、それ？』

「さあ、自分で考えれば？」

目の前の光景に、流石に数秒だけ固まる。

それも仕方ないのだ。

だって、彼女の手に付いた血が、何故か浮いたのだから。球体になって浮かび、ユラユラと揺れながら浮遊している。

何の手品かと聞きたくなるようなそんな光景だ。

さらに、彼女の取った行動は予想の遙か斜め上を行った。

足元にあつたガラス片を拾い、片手で握る。

そして、そのまま手首を切ったのだ。

『え・・・ちよっ・・・』

訳が解らない。

自殺行為では決してないだろう。

何より私が御免だ。

まだ全然満足してないのに。

しかしそれも杞憂で、溢れ出した血液が恐るべき早さで止まってく。

五秒も経てば完全に出血が収まり、まるで切った事実が無かったかのようだ。

しかし、出た血はそのまま床に流れ、教室に赤い花を咲かせている。もしやとは思ったけど、まさにその通りになった。

血液が次々と球体状に変化し、空中に浮き上がる。

最終的に、四十はあろうかと言う数の球体が彼女を取り囲む様に浮かんだ。

「さあ、これからが本番だよ。」

『みたいだねえ。ゾクゾクする？』

幻覚じゃないのは明白。

どっちかと言えばレヴィのような術士だろう。

それに、沢山の血液を見て気付いた。

さっきは照明の弱さでそう見えるだけかと思ったんだけど。

『貴方の血ってさあ、黒いんだね。』

そう、黒い。

赤黒いとかではなく、真っ黒なのだ。

墨の様に、闇の様に。

混じり気のない純粹な漆黒色。

「そう、私の血は黒いんだよ。」

言葉と同時に、血が動く。

球体だった物が、細長く変化していく。

三十センチ程の長さになり、先端が尖る。

針の形になった血が、狙いを私に定めて止まる。

「行くよ。ブラディニードル！」

『技名つすか！』

まさに名は体を表す。

血の針が、一直線に飛んでくる。

その速度は速く、鎌で斬り落としながら回避していく。多分さつき服をボロボロにしたのもこの技だろうね。

だけど、まだまだ・

『ま〜だ全然余裕なんですけどお？ もっと楽しいもん見せてくれないのお〜？』

全てを回避しきった後、駆け出して彼女の眼前に迫る。

鎌を振り上げ、あえて威力重視で振り下ろす。

驚きから立ち直ったさつきちゃんは、血を集めて棒状にした。

それで鎌を受け止め、鏢迫り合いになる。

しかし、単純な力比べなら私に有利だ。

力担当ではないとは言え、碌に戦った事のない一般人に負ける程ひ弱じゃない。

「くう！」

『ほらほらあ、どうにかしないとスパッと殺っちゃうよお？』

体重をかけ、だんだんと追い詰る。

途中で後ろから血の針で刺そうとして来るかと思っただけ。

どうやらそこまで意識が割けないみたいだね。
棒の形状が、段々と変わってくる。

先端が二つに分かれ、刃が形作られる。
棒部分と先端部分が一体となっており、持ち手の部分はグルグル巻きの意匠である。

形が出来上がると、それは奇妙な形の……槍？
なんと言つか、物凄く言葉にしづらい形状のだが、伝えるのは難しくない。

だって、同じだからだ。

あの、某ロボアニメの……某神殺しの槍に……。

色が真っ黒である以外は何一つ変わらない。
まごっこことなきあの槍だ。

『貴方つてもしかして、オタク？』

「違う!!」

ものっそい勢いで否定された。
何故か力が上がり、弾かれた。

お互いに距離を取り、沈黙が流れる。

「もう、出し惜しみはしないわ。」

『そこなくっちゃ?』

エセ神殺しの槍の次は何がでるのか。

「行くわよ!!」

『つえ?』

気合の一言。

その瞬間、彼女の右目が……。

微かに、光輝きだした。

……え? イノベイダー?

第五十話（後書き）

どんどんヒートアップする宵戦！

次回、ついにっ……………！！！！

それではまた次回（＾　　＾）ノ
|　　|

第五十一話

おかしい。
何かがおかしい。

何に対してと言われれば、勿論さっちゃんの特典だ。
最初はイノベイダーかと思ったけど、どうも違っつぽいんだよねえ。

『ほいそこお。』
「くう！！」

私の攻撃を、ギリギリ槍で受け止める。

しかし、無理な体勢だった為に力が入らず、そのまま飛んでいった。

まただ。

どうにもムラがある。

そもそもよく見たら、光ってるのって右目だけだし。
しかも金ピカじゃなくて虹色っぽいし。

あんなの知りましえん。
槍にしたって本物じゃなさそうだ。

神を殺せるわりには大した力を感じない。
単に血で固めただけの槍だね、デザインが彼女の趣味っただけの。

『ほおら、休憩時間にはまだ早いよお？』

天井を切りつけ、落ちてきた無数のガレキを、羽子板の要領で弾き

飛ばす。

起き上がって来たばかりのさっちゃんに、散弾のように襲いかかる。

「そんなの当たらない!!」

しかし、それを見事に躲していく。

無駄のない、最小限の動きで。

その際、右目の輝きが強くなっているのを見た。
やっぱりアレはイノベイダーじゃないね。

さっきから主に回避にしか使ってないし。

イノベイダーならもっと総合的に強くなる筈。

筋力とか速さとかには全く変化ないし。

何故か攻撃を避ける時だけ異常に速くなる。

しかし、さっきのように攻撃をくらくらう事もしばしば。
ものっそいムラだらけの能力だ。

他世界の力だね。

まあそれを言ったら黒い血の方だって知らないけど。

『強いのやら弱いのやら。』

「今度は私の番!!」

『ばっちこ〜い?』

目をより輝かせ、凄まじい速度で駆けてくる。

どうやら攻撃にも使えるらしいね。

先程までとは段違いの速度で振るわれる槍。その全てを捌く。

回転を加えた円運動を使い、三十キロの大鎌を振り回す。遠心力が加わり、攻撃を弾く度に彼女の腕にダメージが伝う。

アタック・コ・デイ・スクエアロ

鮫衝撃の原理を応用した技術で、一撃に込めるのではなく小出しで蓄積させるのだ。

その証拠に、段々とさっちゃんの顔が歪む。

少しずつ腕の動きが鈍ってくるのに気付いたんだ。もう遅いけどねえ。

『あれえ、どうしたの？ 顔色悪いよ？』

「くっ！」

悔しげに歯を噛み締め、距離を取ろうと飛び退く。しかしやらせない。

ほぼ同時に踏み込み、一緒に移動する形になった。驚愕するさっちゃん。

その顔を左手で驚掴みにする。

空中にいたために回避は出来ない。

『つつかまゝえた？』

「がああ！」

私の腕を両手で掴み、もがく。

下手に抵抗される前に、私は跳んだ。

二階へと続く、穴の中へ。

『さあどうぞ一緒にい、ウィ〜キャ〜ンフラ〜イ?』
「っ!」

私の言葉と、感じる浮遊感で気付いたらしい。
必死に抵抗しようとする。

右手の鎌を上には振り投げ、彼女の体を拘束する。
と言っても、利き手を捕まえてやりづらくさせるだけ。

彼女が仰向けの状態で宙を舞い、私がある上に乗っている形になる。
そのまま落下を始め、風が頬を撫でる。

『あれ? こりゃ予想外。』
「?」

顔を掴んだままな為、呻き声しかだせないさっちゃん。
私の言葉の意味が分からなかったんだろう。

まあアレだよ、すぐにわかる。
だって何故なら。

「・・・っ!!! 〜〜〜っ! 〜〜っ!!」
『お、理解が早いねえ。』

数瞬の沈黙の後、より激しくもがく。

だってそうだろう、何故なら
いの中から。

落下する時間がやけに長

そう、私達が落ちた穴。
なんと、一階まで直通の穴だったんだなあこれが。

さすがに計算外、まあ既に手遅れだけどね？
さっちゃんの抵抗虚しく、近づいてくる床。

うっわあ、この勢いで叩きつけられたら痛いだろうなあ。
でもさっちゃんなら大丈夫だよね！

信じてるから！！

『はい到着？』

瞬間、轟音とも取れる鈍い音が響いた。

「っがっつはあっ！！！！」

ひび割れるコンクリ、撒き散るガレキ。
思いつきり吐血し、先程までとは違う種類の呻きを発する。

そんな彼女の上から飛び退き、上から落ちてきた鎌をキャッチする。
再び近づいて容態を見る。

やはりと言うべきか、彼女の損傷は比較的軽微だった。
いや、そうそう動けない重傷ではあるんだけど。

まず生きているだけで奇跡なのだから。
普通なら内蔵とかぶちまけたりして一瞬でお陀仏だよ？

それを吐血だけして五体満足とか、どんだけタフなのかと。

『やっぱり頑丈な体してるねえ、黒い血の応用でしょ？ それ。』

「あ……ぐっ……うう……。」

呻くだけで、答えられないっぽい。

まあ目だけは変わらず睨んで来てるけど。

答えは得られなかったけど、間違っではないだろう。

体内の血を瞬間的に固めて、防御力を上げる。

血を操る力なんて手に入れたらまっ先に考えられる使用法の一つだ。
まだ右目の方は解んないけど。

『それで？ こっから逆転する手とか持ってないの？』

「ぐう……。」

前屈みになり、彼女の眼前まで顔を近づけて問う。
嘘を見抜くには充分過ぎる距離。

相手の精神を威圧し、嘘をつきにくくする距離でもある。
まあプロには通用しないけど。

目を見据え、再度聞く。

『どうなの？ ホントにお終い？』

「くっ……う……。」

『……ふう……。』

どうも、終わりっぽい。

さすがに失望かなあ……。

これなら、まだ黒曜で殺った痛者の方がマシだった。どうも、不正の転生者よりも正規の方が強いと言う無認識の期待があった。

力があれば強い訳じゃないって考えてたばかりだと言うのに。少し、心の中で笑ってしまう。

目の前の子も、結局そこらのカスと同じなのか。そう思うと、急に萎えて来た。

もう、さっさと帰って寝たい。期待が外れて妙に疲れたわ。

『あつそう。じゃ、死ねば？』

「っ！！」

鎌を無造作に振り上げ、そのまま降ろす。死の恐怖に歪んだ顔とか、流れる涙とか。

色々視界に写った気がするけど、どうでもいい。死ぬのは皆自業自得、事故で死のうが他人に殺されようが。

生き残れる力を持ってないのが悪いのだ。いつ死ぬか分からないなんて、子供でも知っている事なのに。

根拠も無く明日も生きていられるなんて、日和ってるツケが来ただけのこと。

この状況もまた、同じ事。

咄嗟に後ろに飛び退いたが、五ヶ所刺された。
倒れて腕一本動かさなかった彼女が、起き上がる。

まるで壊れた人形のように、体全体をガクガク震わせながら。
やがて完全に立ち上がり、荒い呼吸を繰り返しながら、右手を上
突き出す。

彼女の体から大量の血が溢れる。

それらが全て収束し、一つの形を形成する。

それは強大な槌だった。

牛と同じくらいもある大きさで、表面に無数の針が突き出している。

デザイン性など欠片もない、ただ相手を蹂躪する事のみを考えた凶
悪な形。

あれで潰されたら、それはもう見事なミンチになるだろう。

物理法則をガン無視したように、空中にそびえ立っている。

そして、それを作った本人が般若の如き形相でこちらを睨みつけて
来た。

「うああああああああああああつつ！！！」

『ふふふつ、いい感じに壊れたみたいだねえ？』

向けられる殺意が心地いい。

死を眼前まで突きつけられ、生存本能が理性を飛ばしたようだ。

今、彼女の中に綺麗事など微塵も無い。

私を殺し、自分が生き残る事のみが全て。

いいねえ、その通り。
何があっても、何をしても・・・。

『 生きたもん勝ち・・・ってね。 』

巨大な槌が、私に向かって振りおろされた。

痛かった、体中が痛かった。

私は、力を充分に発揮出来ていない。

私の特典は、ソウルイーターの黒血と、ブラックキャットのグラスパー・アイの支配眼。
それに才能の三つだ。

黒血は、簡単に言えば血を操作する能力。
ただ、原作と違ってラグナロクが居ないせいか、防御面に欠陥がある。

体の血を固めても、そこまでの強度は出せない。

せいぜい人並み以上に頑丈になる程度で、物理攻撃に別段有利って程でもない。

攻撃においては問題はなく、武器もこれで代用している。

槍がアレなのは、血で作る槍のイメージだと、何となくあの槍を連想したから。

支配眼は、周囲の動きをスローにして、尚且つ自分は普通に動けると言う物。

はたから見れば、こちらの動きが速くなったように見える。

ただ体力の消耗が大きく、常時発動は難しい。

あのセラって人は速すぎて、発動する前に何度も攻撃された。

使いながらこつちも攻撃したのに、全部対応された。

これが本当のプロなんだと、改めて実感した。

最後のは、言ったまんま。

練習すればするほど、他の人より速く習得出来る。

勉強も運動も、戦いも。

あらゆる物事において俊才でいられる。

でも、それも全部通用しなかった。

攻撃は見切られ、回避にはどんどん対応されて。三階から一階まで叩き落とされて、もう決着だった。

黒血の御陰で無事だったけど、それが無かったら即死だった。そんな事を平然とやってのける目の前の人物に、恐怖した。

『どうなの？ ほんとにもうお終い？』

答えようとしても、呻き声しか出せない。

自分が何を言おうとしたのかさえ、よく分からなかった。

『……………ふう……………』

物凄くガツカリしたような空気が、ハッキリと伝わって来た。それも、仕方ないかも知れない。

この戦いは余りにも一方的だったから。

きつとこの人はまだ全然力を出していない。

他の人達がやっていたように、遊びの段階だっただろう。

そして、山本や獄寺がやったように、逆転してからが本番だったに違いない。

でも、私には無理だった。

皆よりも沢山の手札があつて、便利な力もあつたのに。

『あつそう。 じゃ、死ねば？』

「っー!!」

鎌が、振り上げられる。

何人もの命を奪ったであろう、濃紺色の大鎌。

支配眼も使っていないのに、世界が妙にゆっくりに見えた。
私……死ぬ……の？

『ばいばい。』

小さな呟きが、聞こえた。

それが、より死の現実を突きつけているようで……。

嫌……だ……。

嫌だ……。

嫌、嫌あ……。

死にたくない。

死にたくないよ……。

一度死んだのに、こんなにも怖い。

体が寒い、歯が噛み合わない。

体の奥底から震える。

吐き気が込み上げてくる。

視界がグラグラ揺れる。

鎌はすぐそこまで来てる。

一秒とかがからず、私の体を貫くだろう。

そう思った瞬間、私の中で何かが切れて……。

「ああ、わた．．．し．．．人．．．殺し．．．て．．．。」

両手で顔を覆い、その場にへたり込んだ。
先程までとは全く別物の恐怖が押し寄せ、全身が震える。

『ああゝあゝ、せつかく壊れたのに、もう戻っちゃったのお？』
「．．．．え？」

そんな中、煙の中から聞こえた声。
言葉の途中で、何かが砕けて落ちたような音が聞こえた。

そして、今迄かかっていたエコーが取り除かれる。
それから変化して聞こえて来た声に、掠れた声しか出なかった。

生きていて良かったとか、自分は人を殺してないとか。
そんな安堵が、一気に吹き飛んだ。

「今のは結構効いたよゝ。 あんな隠し玉持つてるなら言ってくれ
れば良かったのにいゝ？」
「あ．．．え．．．？」

どこか、聞いたことのある声。
それは、最近は何も聞けなかった声で。

同時に、一番聞きたかった声で。
自分がここに居る、一番の理由そのもので。

何より、今ここで一番、聞こえる筈のない声で

「一気に楽しくなってきたあ？ 悪いけどうちよい付き合
ってね？」

「う……そ……。」

色濃くなって行く人影。

先程の攻撃のせい、フードが取れていた。

その頭から、二つに結ばれた髪が垂れて風になびく。

僅かな照明の光に照らされ、淡く輝くライトグレーの双眸。

仮面は無く、その素顔が露わになっていた。

「みち……る……なの？」

「そうだよん？ さっちゃんからすればお久だね、元気だった
あ？」

記憶の通りの、快活と無邪気さを兼ね備えた笑顔で、普段通りに話
しかけて来る。

「な……なん……で……。」

「何でって？ そりゃあ私も宵の守護者なんだから、参加するのは
当然でしょ？ 私が守護者だってリボン君から聞いてない？」

ないわけがない。

自分こそが、その代理なんだから。

答えになつてない返答に、より頭がグチャグチャになる。

それも承知だったようで、セラ……いや、満流はクスクスと笑う。

「ねえ、それよりさあ？ 早くつ・づ・き、しよ？」
「つづ・・き？」

一瞬、何の事が分からなかった。
数秒の沈黙。

頭が答えを導き出した時には、首筋に大鎌の刃が添えられていた。

「だ・か・ら・あ・く、こ・ろ・し・あ・い？」

満流が、笑う。

まるで他者を蹂躪し、弱者を見下す……王女のように。

第五十一話（後書き）

ついに、ついにキタ (。。() !!

この作品で一番やりたかったシーン!!

もう執筆が進むわ進むわ W W W W W W W

指が止まらないぜ!!!

今回はツナの反応お届けします!!

それではまた次回!!

感想、質問などのその他、いつでも待ってます (^ | ^) /

第五十二話（前書き）

ギリギリセーフで更新！

第五十二話

痛い程の沈黙がその場を支配する。

半分は絶望にも等しい驚愕によつて声が出せず……。もう半分は、悪戯が成功した子供のような空気を漂わせて。

だ〜からあ〜、こ・ろ・し・あ・い？

モニターに映し出されるB棟内の映像。

そしてスピーカーから送られてくる、現場の音声。

どちらも、その場にいる人物をこれ以上無い程に示していて。否定しようのない現実が、ツナ達を襲った。

「みー……。ちゃん……。？」

誰にともなく、ツナが呟く。

それは、耳をこらしていなければ誰にも聞こえないような、消え入るような声。

しかし、それがこの場には、恐ろしい程によく響いた。

それを合図にしたかのように、それぞれが反応を示し出す。

「どう言う事だよ……。こりゃあ……。」

「これ……。ヤベエよな……。」

「どう言う事だ夜月！ 極限に分からんぞ！？」

「あれが、親方様に聞いた……。夜月殿……。なのですか？」

「……。」

リボーンは、何も言わない。
ただ黙って、モニターを見つめるだけ。

この中において、ただ一人だけそれ程驚いている様子がなく、
むしろすぐに受け入れたようだった。

満流をファミリーに誘った時の記憶が脳裏によぎる。
あの時から、なんとなく感じ取っていたのだ。

彼女がこちらの世界の人間であることは。
まさかヴァリアーの、しかもあの首狩りであるとまでは知る由もな
かったが。

「な、なんで……どうして……？」

「ししっ、んなの決まってるじゃん」

「え？」

啞然と呟き続けていたツナに、ベルが心底可笑しそうに答える。
これ以上ないくらいに口元を歪め、とても楽しげだ。

それは他のメンバーも同様で。
モスカ以外の人間が残虐な笑みを浮かべている。

そう、あのXANXUSさえも……。
以前のように声さえ上げはしないものの、今もモニターを満足気に
見ている。

ここまで彼が守護者戦に関心を向けているのは初めてだ。
それ程までに今の状況を楽しんでいるのか。

それとも、何か他の理由でもあるのか……。

「姫は……いんや？ 満流はずっと俺らの仲間だったってことと

」

「う……うそだ……そんな……。」

「君らも僕らの事はある程度知ってるんだろ？ なら「首狩り王女」の事も当然知ってるだろうに。」

「っ!!！」

ビクンと、ツナの体が跳ねる。

他の者も、マーモンの言葉の意味を理解したんだろう。

いや、最初から答えにたどり着いてはいた。

あの仮面が首狩りであり、その仮面の人物が満流なのだから、これ以上の思考など必要ない。

だが、僅かな希望に縋ってしまうのは人として仕方がない。

人違い、身代わり、そんな屁理屈のような可能性を信じたかった。

でも、敵はそれを許さない。

むしろそれをぶち壊す事こそが目的。

絶望のドン底に落として、見下ろして笑う。

ただその為に。

「姫は八年前からずっつと俺らと同じ殺し屋だってえの、残念でした。しししっ」

「嘘だ！ そんなの……信じるもんかっ!!!!！」

頭を抱え、ヒステリー気味に叫ぶツナ。
山本と獄寺が支え、ヴァリアーを睨む。

まだ、希望を捨てきっていないのがわかる。

「あゝらら、まゝだ分かってねえの？ さっすがモドキ共は頭も悪いな」

「んだとテメエ！？ ならアイツが首狩りだつっつう証拠はあんのかよ！」

「満流があそこに居るだけで充分な筈だけどね。 まあいいさ。」

マーモンがやれやれと言わんばかりに溜め息を吐く。

その際、一瞬だけ視線をリボーンに向けた。

ツナ達と違ってモニターのほうに体を向け、防止を目深に被って俯いていた。

既に色々と検討がついているんだろう。

「そつちの十代目候補は満流と八年前くらいから交流があつたんだろう？ なら、満流が海外を渡っているのも当然知っているだろう。」

「！」

「首狩りの活動期間を調べれば一目瞭然さ。 君が満流と居た時には姿を見せず、逆に離れた時には活動を再会している。」

誰も、何も言えなかった。

何故なら今日、まさにその期間を聞かされたばかりなのだから。

獄寺や山本は、詳しい所までは分からないが、満流が転校してきたのも丁度一年前。

了平にしても、満流が海外に出た時期を知っている。

ツナにとっては、もはや言わずもがな。

唯一バジルは知らないが、周りの反応を見れば答えは分かる。

全て肯定だと。

「その様子だと合点がいったようだね。まあ、例え君らがどれだけ否定してもすぐに分かるさ。」

「そうそう、なんせこれから殺すもんな」

「っ!?!」

その言葉に、ツナのみならず全員がモニターを見る。

先程と変わらず同じ部屋で、しかし状況は動き続けていた。

今度こそ、バイバイ?

「……え?」

そんなツナの声を嘲るように、乾いた音が鳴った。

さっちゃんの首に鎌を添え、続きを促す。
しかし、どう見てももう限界状態だ。

立ち上げられるかどうかも怪しい。

「どうする？ このままスッパリ殺っちゃってもいいんだけど、まだ抵抗してみる？」

「満流・・・なんで・・・？」

「何で、かあ。」

これまたテンプレな質問がやって来た。
しばし考える。

今思ったんだけど、これってそこそこ難しい。
きつと、向こうは私に何か事情があるんだと思ってる。

だからそれを聞きたいんだろう。

しかし、実際にはそんなの無いし。

私が人を殺すのはただ面白いからだし、これもその一つ。
でも、ただ面白いからと言っただけじゃ向こう的に答えになっ
てないんじゃない？

じゃあどう言えば良いのかなと思うのよ。
いや、別にそこまで深く考える必要なんて無いんだけど。

もうしばらく動けなさそうだし、ちょっと暇潰しにユーモアのある返答でも考えようかなあって。

「そうだね。私、やらなきゃいけない事があるから・・・かな・・・」

「やらなきゃいけない事？ それって・・・」

主に痛者とか痛者とか痛者とか？

ゴミブリみたいにやって来るゴミ掃除だね。

「ごめん、言えないんだ。これは・・・私が成し遂げなくちゃいけないの。」

「それで・・・それで人を殺してるの？」

「そう・・・でも仕方ない事なんだよ・・・」

だってアイツら世界無茶苦茶にすんだもん。

私の楽しみ奪うとかマジぶっ殺す。

先程までの雰囲気はどこえやら。

悲愴感をたっぷりと漂わせ、意味ありげに俯く。

この際、表情を悲しげに歪ませるのがポイント。

出来れば嘔泣きなんてすると効果的。

「仕方ないって、そんなのおかしいよ！」

「おかしくないよ。目的の為に障害を排除する。世界では当たり前前の事だよ。」

表でも裏でもね。

人が死ぬなんて、目に見えないだけで珍しい事でもなんでもない。

こうしてお喋りしている間にも確実にどっかで死んでるし。

むしろ人が死ぬのがおかしいって言う思考がおかしいと思うのは私だけ？

物がいつか壊れるのと同じく自然の摂理だよ。

殺されるのもまた、生物の弱肉強食のルールだよ。

あの駄神共が作ったルールなの、文句ならそっちに言ってください。私は知りません。

「そんなの言い訳だよ！ 人を殺していい理由になんかならない！」

「別に許可なんていらぬ。私は・・・目的の為なら手段は選ばぬ。」

「満流・・・本気なんだね・・・」

「そう・・・もう・・・止まらない。」

まあ止まりなくなったら迷わず止まるけど。

万が一にでもそんな事無いけどね。

言葉に嘘は無い筈なのに、雰囲気のせいでシリアスになってるし。

じっさいそんな大層な目的無いんですけど。

これっていつバラせばいいの？

なんかタイミング逃しちゃったんですけど。

なんかもう後戻り出来ないくらいマジな空気なんですけど。

主年漫画のノリこれだよ、王道バトル物のワンシーンだよ。

あれですか、さっちゃんが逆転勝ちして私が改心して和解するって
いうフラグ？

ぶち折っていいっすか？

「なら私は、貴方を止める！」

「……おお……。」

立った、クラァ……ゲフンツゲフンツ。

さっちゃんが立った！

血塗れの体を無理矢理起こし、根性で立ち上がる。

その目には強い光が灯り、さっきまでとは別人のようだ。

ちょ……これ……ガチなんですけど。

完全に向こうが勝つパターンなんですけど。

むしろ私が勝っちゃいけないような気さえしてきた。

これが主人公サイドの力が……。

震える手を掲げ、彼女が力をためているのを、私は見て

「いる訳がない。」

「グハッ！」

がら空きの胴に蹴りを入れ、後方に吹っ飛ぶさっちゃん。

またしても机の山に突っ込み、崩落する。

ふう、危なかった。

あのまま待っていたらベッタベタな悪役で終わる所だった。

力ためるのを待つ悪役とか、時代遅れもいいところだよ。
世界は常に変わり続けてるんだから、もっと柔軟に生きないと。

これからは空気を読まない鬼畜の時代。
相手の都合に合わせるなんて以ての外。

「と言う訳で、さっさとバッドエンドを迎えよ。」

「くう……うっ!!」

「お？」

血で机を弾き飛ばして起き上がる。

しかし、宙を漂う血も、今やとても弱々しく見える。

さっきの一撃はかなり無理をしたみたいだ。

もう視界だってぼやけてるんじゃない？

ちょっとだけ焦点が合ってないし。

「止めるって言うけどさ。 どうやって？ このバトルはどっちかが死なないと終わらないよ？ もしかして殺してでも止めるとか言う偽善じみたオチ？」

「そんな事、絶対にしない。 生きたまま倒して、無理矢理にでも連れて帰る!!」

答えになっとな〜い。

「だからその方法……はあっ、もういいや。 何言っても無駄な気がする。」

「私だって同じ気持ちだよ。 だからとにかく、帰ったら思いつき

り引っぱたいて説教するから覚悟しててよね。」

一見死亡フラグながら、場合によっては生存フラグとも取れる。正規だからって訳じゃないだろうけど、ホント優しいねえ。

まさに主人公の仲間にピッタリじゃん、少なくとも私より。今までの痛者共がよりチンカスだと感じる善人っぷりだよ。

そうだねえ、確かにこんな事じゃなきゃ生きてて欲しいと思ったかも。

もう無理だけどね。

さすがの私も死者蘇生なんて出来ないし、後は駄神に任せるしかない。

とかそんな事を考えている内に、向こうが準備完了したみたい。

やっべえ、これじゃあ旧世代の悪者に成り下がっちゃうじゃないか。さっきの攻撃の応用なのか、両手の先にそれぞれ巨大な大剣が浮いている。

それ程切れ味はなさそうで、あくまで相手を生きたまま制圧する為の形状。

「行くよ、満流！！ 絶対に、止める！！！」

これって乗らなきゃ駄目なんだよね？

「やれるものならやってみなさい、沙知！！！」

同時に、踏み出す。

後先を考えない大振り、全身全霊をかけた一撃。

流石に避けられそうもないので、こちらも思いつき振りかぶる。少しくらいは真面目にやってあげようかなと思って、鎌の表面に薄く炎を灯す。

向こうは特典なんて特殊能力使ってるんだし、こっちただの鎌だし。本当に僅かながら強化して、相手を向かい打つ。

「やああっ!!」

「はああっ!!」

激突する衝撃。

余派によって机が吹き飛び、ガレキが激しく宙を舞う。

爆発に等しい轟音が鳴り響き、校舎が揺れる。煙が視界を覆い、向こうの様子が分からない。

とりあえず、潰されはしなかった。

手元の鎌はボロボロ。

さっきのデツカイ槌を防御した時のも加えて、今の衝突。さらには炎を纏わせた負荷で、もう使い物にならない。

ツナ君のグローブと違い、死ぬ気の炎に対応してないからだ。全体がヒビ割れ、というか崩壊し始めた。

手元に残った棒切れを放り投げ、煙が晴れるのを待つ。その奥に見えた人影に向かって、私は歩きだした。

「く……ああ……」

煙の舞う部屋の隅で、千坂は倒れていた。
体は既に指一本動かさず、苦しさに呻くだけ。

元々限界だったのを無理に動かし、あまつさえ強力な一撃を使った
反動だ。

（満流は……どうなったのかな……？）

唯一動く目を必死に動かし、姿を探す。
もし向こうも倒れていたら、今の姿勢では見つけれない。

つまり、見つからなければ成功とも言える。
どの道、立っていられたら詰みだ。

そして、そんな千坂の希望を否定する足音が聞こえた。

「う・・・そ・・・。」

煙の中から浮かんでくる人影。

それは確認するまでもなく、一人しかいない。

「どうやら、無理だったみたいだね。」

無感動な表情で歩いてくる満流。

言葉にもどこか感情が無く、思考が読み取れない。

壊れてしまったのか、手に鎌が無い。

全く効かなかった訳ではないようだった。

服が所々破け、出血している。

特に利き腕である右腕の損傷は大きめで、肩の部分の服がまるまる吹き飛んでいた。

こんな時でさえ目を引くような綺麗な肌から、一筋の血が流れている。

勝負だと言うのに、何故か罪悪感を感じる。

（ああ・・・傷つけちゃった。）

ボヤけ始めた視界と思考の中、場違いな感想を抱く。

そもそも自分で攻撃したと言うのに。

心の中で可笑しくなりつつ、目はじっと相手の目を見据えている。

(やっぱり・・・綺麗・・・)

もはや雀の涙程度にしか生き残っていない電灯。

その僅かな光でさえ、ライトグレーの瞳は美しい輝きを保っていた。

「もう、さすがに終わりだね・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

声が、出せない。

出そうと思えば出せそうなのに、その力が入らない。

同時に、強い睡魔が押し寄せて来た。

「刃物が無くなっちゃったから首を狩るのは出来ないけど、まあ楽に殺してあげるから。」

そう言って、懐から出したのは一丁の拳銃。

「今さつき持つてる事思い出したんだけどね。これなら痛み無いよ。」

素手で殺らないのは、彼女もそれなりにダメージを負っているからなのか。

それは、本人にしか分からない。

「最後に、何か言う事・・・ある？」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・っ・・・・・・・・。」

必死に、絞り出す。

これが、最後だと思った故に。

自分の、きつとこれが全部を込めて言える言葉と信じて。

「……ご……めん、ね……。」

「……。」

反応は、ない。

目を閉じ、数秒経ってまた開けた。

そこにはいつも通りの、快活な笑顔があった。

「今度こそ、バクイバイ？」

響く発砲音。

乾いた音と、肉が弾ける音が同時に鳴る。

弾丸は正確に眉間を貫き、大量の血が飛び散る。

混じりけのない、漆黒の血が……。

そして、ゆっくりと歩み寄る満流。

首元にかかったリングを取り、自分の物と繋げた。

その途端に、チエルベツロが姿を表す。

千坂の傍でしゃがみ、首筋に手を当てる。

死亡確認のようだ。

「宵戦の勝者が決定しました。勝者は、夜月満流です。」

淡々と、放送からチエルベツ口の声が響く。

その瞬間、観覧席ではツナが崩れ落ちて床にヘタリ込んだ。

他の者は顔を俯け、一様に歯を食いしばっていた。

そして、ヴァリアーはそれを満足気に眺めていた。

「ししっ、さっすが姫。 余裕だな？」

「むしろ相手に付き合えずきだけどね。」

満流と合流するヴァリアー。。

ツナ達は千坂の元へと行き、ツナは涙を流していた。

「千坂・・・さん。 何で・・・なん・・・でえ・・・。」

「十代目・・・。」

「ツナ・・・。」

「くそお!!！」

「・・・。」

山本と獄寺は目を伏せ、了平は拳を壁に叩きつけた。

バジルはかける言葉が見つからず、ただ千坂の目を閉じさせた。

「それでは、明晩の対決を発表します。 明日の勝負は

霧の守護者の勝負です。」

もはや千坂の事など置き去りに、話は進んでいく。

そんな中、ツナが満流のほうへと視線を向ける。

「みーちゃん・・・なんで・・・。」

「・・・。」

「なんで・・・千坂さんを・・・。」

満流もツナへと視線を向ける。
変わらず、いつもの笑顔で。

「うくん、そりゃあルールだからとしか言えないかなあ？」

「そん・・な。」

「満流、テメエー!!」

あんまりの答えに、獄寺が掴みかかろうとする。
しかし、山本がそれを制する。

「夜月、本気で言ってたんだな？」

「武君は、私が嘘をついてると思うの？」

「つ・・。」

質問を質問で返され、顔を歪めて呻く。

山本も、内心では問い詰めたい気持ちを抑えているのだろう。

「それじゃあね。私もそろそろ眠いからさあ。」

「なっ！ 待てー!!」

「だが断る？」

静止の言葉も虚しく、一息に校舎の上に飛ぶ。

背中を向けて去っていくヴァリアーを、ただ見送る事しか出来ない。

「みちやーん・・どうして・・なんで・・。」

何度も何度も繰り返す、泣きながら座り込むツナ。
誰もが俯き、リボンも今回は沈黙を貫く。

対照的に、ヴァリアーの空気は陽気な物だった。

「アイツらの顔マジ最高だったし」

「中々の見せ物だったね。」

「モドキ共には似合いだ。」

レヴィすら会話に混じり、XANXUSもそれを咎めない。
それ程に上機嫌だった。

それ故に、気付かない。

彼等の後ろ、モスカの上で

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ。。。」

当の本人が、素っ頓狂な声を上げた事に。

第五十二話（後書き）

と言うわけで、終幕した宵戦。

いかがだったでしょうか？

なんかもう、やり遂げた気分ですwwwwww

これもリング戦で終わりでいいんじゃない？（笑）

未来編の構想は一応出来てるんですが、どうしましょう？

と言う訳で、できたら意見ください。

ではまた次回（＾　|　＾）ノ

第五十三話

並盛のとある場所にある廃病院。

その二階で、ツナ達は集まっていた。

宵戦から夜が明け、今日は霧の対戦。

未だ霧の守護者が誰なのかは分からず、いつもならリボーンに聞く所だ。

しかし、今はその事は頭がない。

既に終わった獄寺や山本はともかく、ツナは今頃修行を始めている時間。

それでも、雲雀を除いた全員が集まっている。
バジルやディーノ、部下のロマーリオもいる。

皆で一つのベッドを囲み、ロマーリオがその上に横たえられた人物を見る。

「即死だな。痛みは無かっただろうよ。」

「そうか、悪いなロマーリオ。」

「いって事よボス。」

千坂の頭に包帯を巻き直しながら答える。

いつまでも血を垂れ流しておく訳にはいかないから。

止血を施し、道具を片付ける。

その間、誰も口を開かなかった。

やがて、干坂の顔に白い布がかぶせられる。
毛布をかけ、全体が殆ど見えなくなった。

「さ、死体をあまりジロジロ見るもんじゃねえぞ。あっちに座んな。」

「そうだな、もう・・休ませてやろう。」

ディーノが促し、ツナ達は無言で従う。

カーテンが閉められ、ベッドとの間に隔たりが出来る。

それぞれの前にお茶が置かれ、またもディーノが口を開く。

「干坂の両親には、事故って事にしておいた方が良かったろう。だが偽装までに時間がかかる、あと数日はこのままだな。」

「そうか。」

リボーンが相づちをうつ。

ツナが答えられないと知っているから。

それから、無言の時間が続く。

ディーノもリボーンも、敢えて何かを言ったりしない。

さすがに今回は、そう簡単に解決する問題ではないから。

仲間の裏切りと、仲間の死。

中学生には酷^くすぎる出来事が二つも、しかも同時に起きた。
精神的なダメージは相当だろう。

特に、ツナだ。

幼馴染み殺人者だったなんて、ショックだったどころじゃ済まな

い。

目の前で現場を見れば、なおさら。
絶望や驚愕の感情は抜け落ち、今や抜け殻状態になっている。

これでは、とても修行なんて出来る訳がない。
そうでなくとも、特殊弾には死のリスクがあるのだから。

沈黙が続く中、今度はリボーンが口を開く。

「今日はもう解散した方がいいな、全員昨日から一睡もしてねえだ
ろ。」

「そうだな。霧戦もあるし、今のうちに仮眠を取った方がいい。」
ディーノが便乗し、催促する。

ツナは反応しなかったが、他の者は顔を上げた。

「そうだな・・・それでは十代目、お先に失礼させて貰います・・・」
「じゃあなツナ。また夜にな・・・」

無理に笑顔を作りながら出ていく二人。
了平もそれに続いて行った。

閉じられる扉。

再び沈黙で包まれる室内。

「沢田殿、拙者達も休みましょう。体に毒です。」
「.....」

バジルが声をかけても、答えない。

ただ黙って床を見つめ、ピクリとも動かない。

どうしたものかと、誰もが頭を悩ます。

その時、携帯の着信音が響いた。

リボーンがディーノを見るが、首を横に振る。

ロマーリオも、バジルも同様だった。

すると残りは、ツナの携帯しかない。

だが、勿論ツナは反応しない。

手に取るどころか、視線を向けたりもしなかった。

仕方なく、リボーンが手に取る。

音は鳴り続け、つまりは電話だからだ。

ツナのポケットから携帯を取り出し、開いて見る。

「っ！！」

「？ どうしたリボーン？」

相手を見たりボーンが、驚いたように目を見開いた。
あまりに珍しい反応に、他の者が首を傾げる。

しかしリボーンは答えず、黙ってツナに差し出した。

「ツナ・・・満流からだ。」

「っ！？」

リボーンの言葉に、初めてツナが顔を上げた。

凄まじい勢いで電話を受け取り、必死の形相で画面をみる。

そこには、たしかに「みーちゃん」と表示されていた。
携帯を持っていなかったツナが、買ってから一番最初に登録したアドレス。

その記憶も、今や遠い昔の様に感じた。
震える指で通話ボタンを押し、耳に当てる。

「も……もしも……？」

おっそくくいつてえ！ 女の子からの電話は三秒以内に出なさい
って前に言ったじゃくん！ あれ？ 言ってなかったっけ？ まあ
いいや。にしても一分は長くない！？

「っ……あ……。」

一瞬、言葉に詰まってしまった。

耳に届く声が、余りにもいつも通り過ぎて。

まるで昨日の事が悪い夢だったんじゃないかと、そう思わされる。
しかし、現実是不変ならない。

一度、千坂の眠るベッドの方を見る。

そして深呼吸をして、閉じた目を開ける。

「ごめん……それで、何……かな……？」

何ってそりゃあ、久しぶりに学校来たのに恭弥君以外いないから
さあ。何かあったのかなあって思ってた？ 風邪でも引いた？

「なに……って……。」

何を言っているのか、理解が遅れる。

まるで干坂を殺したのを忘れてもしかのような調子だ。

いや、覚えていて尚、この態度なのは明白。

それが殺し屋なのだと、この数日で実感したばかりだ。

「そっちは・・・何で学校に・・・。」

いやほら、もう正体バラしたじゃん？ ならもう学校休む意味ないし、京子ちゃんも元氣そうで良かったよホント。

「・・・・・・・・みーちゃん。」

んー？ なにい〜？

どこまでも、いつも通り。

しかし、もう決定的に違う何か。

体中を巡るドロリとした嫌な感触。

何もかもが不明瞭。

だから、それを解消する為に、ツナは言う。

「今から学校行くから、屋上で話せないかな・・・？」

いいよ〜？ 私も久しぶりにツナ君とお喋りしたいもんね〜？

ケラケラと、楽しげに笑う満流の声。

溢れ出る何かを必死に抑え込み、言葉を絞り出す。

「じゃあ行くから、待ってて・・・。」

うん。いつまでも待ってるよ〜〜？

そうして、切れる通話。

無機質な電子音だけが、繰り返し聞こえる。

電話を閉じ、ツナは立ち上がる。

「行くのか、ツナ？」

「リボン……。うん、行くよ。」

「危険です！ もし何かの罠だったりしたらどうされるのですか！？」

バジルが抗議する。

彼からすれば、満流は仲間を裏切った危険人物でしかない。

家光から話を色々聞いてはいたが、その時に抱いていた印象や好感は吹き飛んでいた。

今となつては、ただの敵と言う認識になっている。

「バジルの言う事ももっともだが、どうするツナ？ 決めるのはお前だ。」

「行きます。」

デイーノの問いに、ツナは一瞬の迷いも見せなかった。それに、全員が驚く。

先程まで廃人一歩手前のような人物は何処へ行ったのか。強い光、とまではいれないが、何かしらの決心を伺わせる目だ。

「……わかった。なら思う存分、夜月と話して来い。」

「デイーノ殿！？」

「ありがとうございます、デイーノさん。」

「弟分が男に成長するのに、邪魔する奴なんざいねえよ！」

二カツと笑い、親指をグッと突き出す。
ツナは笑い、次いでリボーンを見る。

「リボーン、今回は・・・」

「二人だけで話してえんだろ？ 心配すんな、元からそのつもりだぞ。」

「うん、ありがとう。」

理解を示してくれる家庭教師に、心から礼を言う。
急いで病院を出て、まずは家に向かう。

昨日から服がそのままな為、まずは制服に着替えなければならないから。

一刻も早く並中に行きたいが、風紀委員に捕まる訳にも行かない。

息を切らし、心臓が破裂しそうになる。

それでも、止まらない。

今のツナには、肉体の疲労など意識の外だった。
今感じる痛みよりも、苦しさよりも。

何よりもまず、会いたいと思う。

死んでしまいそうな程に、胸が苦しい。

死んでしまいそうなくらい、体が重い。

だからこそ

「死ぬ気で……会いに行く!!!!」

「と言う訳で、キリの良い所で休憩を貰いたいのですよ。」

「ふうん……。」

「いや、ふうんじゃなくて。」

懐かしきチヨモランマ山脈の向こう側から聞こえてくる、素っ気ない返事。

会話の間も手を休める事なく書類を片付け、山を削り取っていく。

これまた久しぶりに会った草壁さんが入れてくれた紅茶はやっぱり美味しい。

むしろ腕が上がったんじゃないだろうか。

さっきツナ君に電話してからもう二十分は経つ。

もうそろそろ来る頃だと思っし、解放して貰いたい。

だってかれこれ四時間は居るし。

久々に来たと言っのに、皆と挨拶してさあ一限目だって所であえなく御用となった。

まさか風紀委員長が直々にやって来るとは思わなかった。クラスが停止し、とても授業をやれる空気ではなかった。

仕方なく付いてきたら、これ。

まあ、貯まってるんだろっなあとは思ってたけどね。

予想を遥かに超えていたよ。

応接室の半分が書類で埋まっている。

もうこれ下手な自営業の店長より忙しいよきつと。

「あ、もうこんな時間！　じゃあグッドラック！」

「待ちなよ。」

「うお！？」

トンファアの片割れが飛んできた。

仰け反って躲す。

思つくそ頭狙つてたし。

「危ないじゃない。」

「逃げようとするからだよ。逃がさないけどね。」

「それって、お前を二度と離さないのな・・・」

「死ぬ。」

「うっわあ!!」

もう一方のトンファーと同時にティーカップも飛んできた。

ご丁寧にカップと皿が別々の軌道で飛来してくる。

それらをしゃがんで避け、ちゃんとカップと皿は割れないように手で受け止めた。

「まったく、物を粗末に扱つとバチが当たるよ?」

「知らないよそんな事。」

「紅茶を入れてくれる草壁さんに謝りなさい。」

「え、そこで私ですか?」

急に話題を振られて困惑する草壁さん。

そう、いたのです。

さつきから恭弥君の隣で直立不動で立っています。

「どうしても行かせないつもり?」

「当たり前だよ。」

「ふっふんそう。じゃあ私にも考えがあるよお?」

「へえ、やってみなよ。」

挑発的な笑みを浮かべる恭弥君。

ふっふっふ、今にその澄ました顔をいつも以上の不機嫌顔にしてやるぜ！

「校内放送でえ、私と恭弥君のヒ・ミ・ツ、バラしちゃっていいのお？」

「秘密？ 一体なんの……。」

「ニヤニヤ。」

怪訝そうな顔から一転、恐ろしく顔を歪ませる恭弥君。

どうやら思い出したようだ。

草壁さんは、勿論知らないので恭弥君の反応を見て驚いている。

一体何がと疑問に思っている事だろう。

「今更それを使う？」

「今更だからこそ、あえてカミングアウトしてみました？」

物凄い勢いでムツスーとした表情に変わる。

ヤベツ、超楽しい。

だが、このままではいけない。

既に二十五分が経過した。

もう来ていてもおかしくない。

早々に屋上に行かないと。

「言いふらされなくなかったら私を今解放しなさい、どうせ話しが終わったら戻ってくるんだしさあ。」

「……………」

「お〜い。」

「・・・・・・はあ・・・・。」

とてつもなく、長い貯めの溜め息だった。

「もしそのまま帰ったら咬み殺すからね。」

「合点承知？」

ピシッと敬礼し、応接室を出る。

急いで階段を駆け上がり、屋上へと続く扉を開く。

途端に風で髪がなびき、白く塗装された地面が反射する光に目を閉じる。

ゆっくりと目を開き、屋上を見渡す。

どうやらまだ来てないみたいで、ギリギリセーフらしい。

「まああんな事言っただし、ツナ君より遅れる訳には行かないもんね。」

歩いて、扉から最も距離のある方のフェンスまで辿り着く。

と言っても、さほど広くないから精々二・三十メートルだけど。

フェンスの金網に手をかけ、校庭を見下ろす。

体育の授業の真っ最中であり、男子は長距離走をやらされていた。

五時間目と言えば、昼食を食べた直後だ。

眠そうに欠伸をしながら走る者。

食べ過ぎたのか、少し気持ち悪そうな者。

根っからのスポ根で、余裕綽々ゆゆうせきせきと走る者。

様々な生徒が、平穩な日常を送っている。

自分らの一日の大半を占める場所で、殺し合いが行われているとも知らず。

「知らぬが仏って奴？ 昔の人も良いこと言うよねえ。 そう思わない？」

思わず笑みを浮かべながら、ゆっくりと振り返る。

膝に手をつき、今にも倒れそうなくらいに息を荒らげる幼馴染み。

こちらの言葉に返答する余裕もないのか、するつもりが無いのか。間違いなく前者だね。

無理しちゃって。

そんなに急いで来てくれたんだ。

「はあ・・・はあっ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・ふうっ。」

最後に強く息を吐き、顔を上げるツナ君。

その顔は、一言では言い表せられないうねりが見えた。

怒ってるような、泣いてるような。

嬉しがっているような、悲しんでいるような。

心配してるような、哀れんでるような。

「みーちゃん・・・。」

「・・・。」

いつもとは違う、真剣な雰囲気。
だけど、なんでだろう。

むしろ、今のツナ君は……。

初めて会った時よりも、ずっと小さく見えた。

第五十三話（後書き）

次回、ツナと満流の対話です。

宵戦終わってどうしようかなーと思ってた時、ふと思いついたネタでした。

書いてみたら段々テンション上がって来たので、次回は結構見どころになると思います！！

確約は出来ませんがねwww

あと、少数ですが未来編のご意見いただきました。

ありがとうございますm（）（）m

他にも意見がある方はじゃんじゃん言ってください。

沢山言って貰えればそれだけやる気も上がると思うんでwww

それでは、また次回（^ー^）／

第五十四話（前書き）

今日は結構な難産でしたWWW

ではござい！

第五十四話

晴れ渡る青空の下、二人は向き合う。

風がゆっくりと間を吹き抜け、太陽の光が暖かく降り注ぐ。

グラウンドの喧騒も、どこか遠くに感じる。

世界がここだけ切り取られたような、そんな錯覚を起こす。

それ程までに、二人の意識は互いだけに向いていた。

息もするし瞬きもする、しかし視線だけは決して離さない。

相手を逃がさないように。

自分が逃げないように。

そして不意に、風が止まった。

「みーちゃん。」

「ツナ君。」

声は同時。

それでも止まる事無く、話は続く。

「凄い汗だくだねえ。」

「全力で、走って来たから。」

「ゆっくり来ても良かったのに、待ってるって言ったじゃん。」

クスリと笑う満流。

ツナの表情は変わらない。

「会いたかったから。」

「……………」

「心臓が爆発しちゃうそうだったし、今でも倒れちゃうそうだけど……………」

「……………」

目を細め、頬を指でかく。

全身に滝のように汗を掻いているツナ。

その姿を見れば、どれだけ必死に走って来たのかが伺える。心の奥で、小さな嬉しさを感じながらも、表には出さない。

「それでえ、そんなにまでなって会いに来てくれたツナ君の話って何かな？」

「……………」

余りに直球な言葉。

しかし、満流は驚かない。

そもそもツナに、遠まわしな駆け引きなんて出来ないのだから。どちらかと言えば、こんなにも躊躇なく切り出せた事に関心する。

いつもなら、何度も詰まりながら最後にやっと言えるかどうか。こんな所でも成長していると思えば、喜ばば良いのか。

しかし、満流が先程感じた違和感はそのままで……………」

「何で、殺したの？」

「昨日言ったでしょ？ ルールだからって、どっちかが死ななきや終わらないんだからさあ。」

あくまで、いつもの調子で答える。

普通ならここで逆上してもおかしくないが、ツナに反応は無い。

「そう……じゃあさ。」

「うん？」

「千坂さんを殺した時……どう思ったの？」

「……。」

沈黙が、場を支配する。

似ているようで、絶対的に本質の異なる質問。

それは、的確に本心を問う為のもの。

目を見開き、ポカンとした表情の満流。

まさか、目の前の人物からこんな返しを貰うとは思ってなかった。

答えに……詰まる。

正直、何と答えれば良いか……よく分からないから……。

「楽しかった？ 嬉しかった？ それとも……つまらなかった？

悲しかった？」

どれとも言える。

どれとも言えない。

親しい者を失った損失と、殺した興奮。

それが同時にやって来て、むしろプラスマイナスゼロ。

これが一番しっくり来た。

でも、どこか違う気がして。

そもそも、何かが決定的に間違っている。
嬉しいは分かる、楽しいも分かる。

つまらないもよく分かる。

でも、悲しいは分からない、知らない。

大切なものなど失った事が無いし、そんなへマもしていない。
親しければ大切かと言われれば勿論否だ。

故に、満流は結論する。

いつもと変わりはないと。

「そうだねえ。 さつちゃんは今迄の獲物の中でも結構強い部類だ
つたしい、中々楽しかったかな？」

「っ……そう、なんだ……」

歯を噛み締め、俯くツナ。

拳を握りしめて、今にも血が滲みそうだ。

それを見て、目を細める満流。

しかし何も言わず、ただ時間が流れる。

どれほどそうしていたか、不意に満流が空を見上げる。

「ねえツナ君。」

「……」

「ツナ君は……どう思った？」

ツナが反応せずとも、言葉を止めない。
独り言のように呟く。

「私が、人殺しだって知って。」
「。。。。。」

下を見るツナと、上を見る満流。
どちらも、表情に感情が見られない。

ツナは空虚で、満流は無感動。
似て非なる空洞を持つ表情で、再び沈黙する。

今や二人の世界に、音は無い。
いつの間にやら終わっていた五限目の終わりのチャイムも、休み時
間の生徒達の喧騒も。

何もかも、二人の耳には届かない。
ただ、二人の間を時折吹き抜ける風だけが、二人と世界を繋ぐ。

「驚いた？ 軽蔑した？ 絶望した？ 恨んだ？ 怒った？ 妬ん
だ？ 憤った？ 哀れんだ？ 。。。。それとも。。。。悲しんだ？」

最後だけ、消え入るような声で呟く。
声が震えている訳でも、不安そうな訳でもない。

ただひたすらに、小さい声だった。
それでも、ツナの耳にはハッキリと聞こえていて。

ようやく、ツナが顔を上げた。

「……久しぶりに再会した時、みーちゃんに引っ張られて来たのも……ここだったよね。」
「……そうだね、そう言えば……。」

疑問を抱くでもなく、満流は屋上を見渡す。

かつて獄寺によって半壊させられた屋上も、今ではすっかり元通りだ。

昼休みには雲雀がよく昼寝に使い、一般生徒なんて寄り付きもしない。

だからこそ、雲雀が居ない時は貸し切り状態だと喜んでいた時期があった。

「獄寺君も、すっかりみーちゃんと仲良くなって……まあ山本はあっさりだったけど。」

「私もあれだけ一瞬で仲良くなれたのはビックリだったけどね。」

「リボンがファミリーに入れるって言った時、みーちゃんなら絶対に入るって思った。」

「実際に速攻だったね。」

「体育祭の時は……ホントにゴメン……。」

「いや、あれはもう……うん。」

いつしか、二人は隣り合ってグラウンドを見下ろしていた。フェンスに寄りかかり、思い出を一つ一つ辿っていく。

「正月の時、ランボがかなり懐いててビックリした。」

「まあ、たまにチュッパチャプスあげてるし。」

「雪合戦は、もう訳わかんない終わり方だったし。」

「結果としてツナ君が恭弥君にボコられただけだったね。」

「花見じゃ、シャマルの変貌に獄寺君とかがすごいい戸惑ってた。」

「あれは私も困ってる。」

小さく笑う、お互いに。

満流にとっては、退屈しない愉快な思い出。

ツナにとってはロクでもない、だけど笑って語れる思い出。

「黒曜ランドで、皆で戦って、傷ついて。」

「私的にはかなり楽しい戦いだっただけだね。」

「そっか・・・。」

途切れる会話。

目を伏せ、何かを踏み出そうとする。

しかし、踏ん切りがつかない。

そんな空気を感じる。

そんなツナを、満流は急かす事無く待つ。

必ず、踏み出せると思うから。

やがて、強く息を吸って顔を上げる。

グラウンドから、満流へと視線を移す。

「俺、みーちゃんが友達になってくれて、本当に嬉しかった。」

「・・・。」

「一緒に居てとても楽しかったし、クラスの皆とも話せるようになって、みーちゃんが海外に行っちゃった後はそんなに仲良くなかったけど、それでも偶に遊んだりする事は出来て・・・。」

矢継ぎ早しに語る。

口を挟む暇などなく、元からそのつもりも満流にはない。

「リポーンが家に来て、また一気に騒がしくなって。獄寺君や、全然話さなかった山本とも友達になって。京子ちゃんや了平さんとも、また話して。みーちゃんが戻って来てくれた時は、凄く・・・嬉しかった。」

握った拳と、肩が震え出す。

声が掠れ、ツナの視界がボヤけ始めた。

「前みたいに・・・一緒に・・楽しい毎日が過ごせるんだって・・ずっとワクワクして・・。騒がしくて・・痛い目にも沢山・・あったけど・・。傍でみーちゃんが笑ってたから・・。それでもっ・・良いやつて思ってた・・。」

途切れ途切れに、紡がれる言葉。

ついには嗚咽が混じり始め、それでも話すのを止めない。

押さえ込んでいたものが溢れ出す。

グチャグチャに混ざった感情が、言葉となって吐き出される。

本人にも、もう止められないし、止める気もない。

今ここでぶつけないければ、間違いなく壊れるだろうから。

「骸と戦った時、みーちゃん言葉が聞こえて・・。みーちゃんが傷だらけなのを見て、凄く怖かった・・。それでも・・。頑張ってたって言って・・。くれたから、もう少しだけ・・。頑張ろうって・・。踏ん張って。」

満流は、何も言わない。
先程とは立場が逆になっている。

ただまっすぐにツナを見つめ、無表情に立っているだけ。

「ヴァリアーに連れ去られた時は・・・不安で仕方なかった・・・でも、皆が・・・一緒にみーちゃんを取り戻そうって・・・言っただけ・・・くれたんだ。獄寺君も・・・山本も・・・お兄さんも・・・リボンも・・・千坂さんだって・・・」

溢れ出た感情が、雫となってこぼれ落ちる。
頬を伝い、太陽の光を反射して輝く。

それでも、満流の表情に変化は無い。

まだ、ツナが全てを吐き出していないと感じているから。

ただ黙って、続きを促す。

「みーちゃんが・・・人殺しだって知って・・・訳がわかんなくなっただけ・・・頭の中が・・・真っ白になって・・・グチャグチャになって・・・真っ暗になって・・・空っぽになって・・・」

でも、と。

また俯きつつあった顔を上げ、満流の目を見据える。

涙で溢れて汚れながらも、そこには確かな笑顔があつて・・・

「なによりも・・・みーちゃんが無事で・・・よかった・・・」

「っ……っ」

初めて、大きな感情の揺らぎを見せる。
驚愕と形容するに相応しい反応を見せ、満流は固まっていた。

あまりに、予想外の反応。

悲しいと、言われると思っていた。

どうして、とか。

止めて欲しい、とか。

罪を償おう、とか。

そんな風に言っただけで来ると思っていた。

人を殺して欲しくないとか、もうこの世界から抜けてだとか。
そんな風に、手を差し伸べて来ると思っていた。

そうやって、無意識に……

自分の存在を……否定して来ると思ってた……

人殺しは、自分にとって日常そのもの。

生活であり趣味であり、欲望であり人生だ。

正しいとか悪いとか、そんな次元の話ではなく。
この世界に生まれてから、最も自分を自分として実感出来ること。

それを否定するのは、満流自身を否定すること。
もはや絶対に相容れないと宣言する事だ。

しかし、出てきたのは安堵の言葉。

勿論、ツナにとって殺しは良くない物である事に変わりはないだろう。

人殺しを推奨するなんて、彼には一生出来ない事の一つだろうし、
満流自身そう思ってる。

どちらかと言えば、ツナがそうなら逆に変と言うか、嫌だ。

たとえどれだけ環境や表面的な価値観が変わっても、根本的には彼
は彼のままであって欲しいと思う。

矛盾かも知れないが、そう願うのだから仕方ない。

だから、ツナに否定されても文句は言えないと、思っていた。
だけど、結果は予想の斜め上を行っていて。

「なにか非道い事されてるんじゃないかって思ってたから、頭が真っ白に
なってるも・・・心のどっかで・・・ホッとしてた。」

どこか、少しだけスッキリした顔になったツナ。
言いたかった事を一つ、言えたからだろう。

だから次は、何よりも・・・聞きたかった事。

「千坂さんをみーちゃんが殺して・・・ずっとヴァリアーの仲

全部一度に吐き出し、もう限界だった。
泣き声を抑えられず、その場で膝をつくツナ。

一秒、二秒と・・・。

時間が経てば経つほど、ツナの声は大きくなる。

ツナの心の中で、疑念が確信へと変わっていく。
やっぱり、全部嘘だったと。

今でも鮮明に、欠ける事なく思い出せる。

獄寺に絡まれた時の困った顔。

山本と喋っていた時の快活な顔。

了平を煽っていた時の挑発的な顔。

京子と話していた時の無邪気な顔。

リボーンの企画に参加した時の楽しそうな顔。

雲雀にこき使われた時の疲れた顔。

千坂をからかっていた時のあくどい顔。

そして、あの日声をかけてくれた時の・・・優しい笑顔。

まるで走馬灯のように、全てが頭の中を埋め尽くす。

もう、良いんじゃないか。

このまま、意識を手放してしまえばどれ程楽だろうか。
ずっと、この思い出に浸れたら、どれだけ幸せだろうか。

その想いに応えるように、体が重くなってくる。
思考がどんよりとした感覚で覆われ、意識が沈んでいく。

抵抗する力など残っていないし、する必要もない。
身を任せようと、体を横たえようとした。

「……………はあ……………」

しかし、迎えたのは固くて寒い感触ではなく。
むしろ逆の、柔らかくて暖かい温もりだった。

「……………え……………?」

感じた感触に、思わず声が出た。
鼻をくすぐる香りに、勝手に意識が浮上する。

上半身を包む暖かさに、とてつもない安らぎを覚えた。

「質問しといて答えを聞く前に気絶とか、勘弁してよね。」
「あ……………あれ……………」

顔を上げようとしても、上手く力が入らない。
それでも、誰がなんて考える必要もなく。

「少しは遅しくなったかなあ?とか思ったけど、やっぱりツナ君は
ツナ君だね。」

可笑しそうに笑う振動が、体を通して伝わる。
満流に抱きしめられ、頭と背中に手を回して抑えられている。

そして、ツナの顔は、何やら非常に柔らかい感触に包まれていて、それが何かを理解するのに、今のツナには数秒の時間を要した。

「えっ……あ………ちよっ……こ……れ……。」

「ん？ どうよ、平均より少しくらいは大きいつもりだよ？」

「う……ああ……。」

涙でグシャグシャになった顔を、今度は茹でダコ状態にするツナ。鼻水やら何やらで、もう筆舌し難い程に酷い顔だ。

振り解く力も、押し退ける力も残っていない。

「本当に……泣き虫なんだから……。」

「……うん……。」

より一層、腕に力が入る。

羞恥は急に消え、ただ己を包む温もりに安らぐツナ。

「ツナ君が十代目候補って知ったのは、会って少し経ってから。

あの頃はツナ君が十代目とか天地が引つ繰り返っても無いって思ってたし、なにより偵察なんて面倒な事、私がすると思う？」

「………思わない。 みーちゃんなら……正面からドア蹴っ飛ばして……乗り込んで来そう……。」

「アハハッ、そうそう。 よく分かってるじゃない。」

いつしかツナも、満流の背に手を回していた。

まるで縋り付くように、離さないように。

「隼人君に武君。 了平さんに恭弥君。 皆が守護者だなんて思わ

なかったし、楽しくもない事で笑顔振りまける程、私は我慢強くないよ……。」

「そう……だよね……。」

「うん、そう。」

また、ツナの目から涙が溢れる。

しかし、先程までとは意味は全く違っていて。

「だから……心配しなくてもいいよ。今までの思い出は全部本当だし、ツナ君は私の……大事な友達だから……。」

「うん……うん……。」

強く、強く抱きしめる。

どちらからともなく、二人同時に。

そして、どれだけそうしていたか。

不意に、ツナの意識が再び落ち始める。

「あ……。」

今度は、抗いたくても抗えない。

感じる温もりが心地よくて、聞いた言葉が嬉しくて。

心の底から安心しきった自分の体が、今度は休息を求めてきた。

「ツナ君、眠いの？」

「あ、うん……安心したから……かな……。」

「そっか……。」

ツナを抱えたまま腰を降ろし、仰向けにする。

頭を自分の膝の上に乗せ、ゆっくりと頭を撫でる。

「いいよ。 ゆっくりお休み・・・。」

「・・・うん・・・ありが・・・とう・・・。」

頭の前後に感じる気持ちいい感触を感じながら。
ツナは、そっと目を閉じた・・・。

第五十四話（後書き）

と、言うわけで。

一話まるまるシリアスシーンでした!!!

いや、めっちゃ苦勞しました。

書いても書いても文字数が埋まらず。

不意に文字数を見て半分も行ってなかった時は死にたくなりました
www

シリアスがこんなに難しいとは・・・。

上手く表現出来たでしょうか？

何かアドバイスなどあればお願いします。

感想もくれると嬉しいです!!

それでは、また次回（＾ | ｾ）ノ

クリスマス記念番外編 ファーストキスは幼馴染み！……………リア充爆死

メリークリスマスー！ー！、（*、）ノ

タイトル通り、クリスマスの番外編です。

結構前から考えてました。

そして、こんかいはなんと……

久しぶりにイラストを書いてみましたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

もちろん満流もいます。

あ、見たくないと言う方は予めイラスト機能をオフにしたから見て
くださいね。

それではどうぞー！ー！

クリスマス記念番外編 ファーストキスは幼馴染み！……………リア充爆死

クリスマス。

誕生日であり、祝日であり、そして聖夜。

大切な家族と

かけがえのない友人と

唯一無二の愛しき人と

それぞれが寒空の下を共に歩き。

または暖かい部屋の中でコタツを囲い。

聖夜を祝いながら、次の年に想いを馳せる。

あるいは、そんなロマンチックな現実を満喫するリア充共を、世の詫びしい男女達が怨嗟の念を込めて恨み明かす日。

そんな、まあ要は人それぞれの日常を送る、ちよつと特別な夜。これは、ある家庭で送られた、そんな一夜での記録である。

「で、出来ました・・・ど、どうですか？」

「まあー可愛いー！ー！ー！」

室内に、黄色い声が響く。

出しているのは奈々一人だけだが、音量は桁違いだ。

目の前の少女に抱きつき、頬ずりをしている。

「な、奈々さん・・・苦しい・・・」

「あ、ごめんねえ。体が勝手に・・・」

少女・・・満流の訴えにより解かれる抱擁。

しかしそれでも、奈々の目は興奮気味に輝き、何処からかカメラを取り出してシャッターを切る。

光が室内で明滅し、満流が思わず目を閉じる。

「お、出来たのか？ って・・・ほお〜こりゃあたまげたなあ。

「
「でしようアナタ。私の目に狂いは無かったわ!!」
「そうだなあ。こいつあますます将来が楽しみだ。」
「あ……ありがとうございます。」

頬を赤らめ、照れながら会釈する。
その様子に、ますます奈々が悶える。

もはや空中にハートマークが無数に散らばっているように見える。
そんな中、家光の後ろ。

居間の扉から、ツナが入って来る。

「もういいの？」
「いいらしいぞツナ。お前も見とけ、こりゃ眼福だぞ。」
「え、なに………」

ツナの言葉は、途中から消滅していた。
視界に、あるものを捉えた事によって。

「み……ちゃん……？」
「あ……えと……うん。そうだよ？」

何とか声を絞り出す両名。

さすがにジッと見られるのが恥ずかしいのか、満流の顔の赤みは増していく。

そこには、小つちなサンタがいた。
それも、いわゆるミニスカサンタである。

赤い服に、赤い帽子。

暖かそうな手袋と、真新しい黒の靴を履いている。

これをサンタのコスプレと言わずしてどうするのか。
そんな服装だった。

いつも後ろで纏められた髪が、今はストレートに下ろされている。
前髪にはヘアピンが無く、代わりに星型の装飾が付いていた。

部屋の照明やツリーの光に照らされ、まるで全体が光輝いているよ
うな錯覚を起こす。

数秒の沈黙。

ツナの顔が、爆発した。

物理的に不可能な現象ではあるが、そうとしか言えない。
まるで煙でも吹きそうな程に、一瞬で茹でダコの如く真っ赤になっ
たのだ。

それこそ、ボンッ！　と言う擬音が最適なくらいに。

「あ・・・あう・・・あ・・・ああ。」

「ええつと・・・ツナ君？」

「ひゃい!？」

啞然として呻いていた所を、満流の声で覚醒する。

あまりにも間抜けな声を出してしまい、顔の熱さが増す。

しかし、満流はそれを笑わない。

いや、笑えないと言った方が正しい。

ツナの醜態よりも、自分の現状に対する羞恥の方が勝っているのだ。モジモジと体を動かし、俯き気味な角度からツナを見る。

そう、すなわち・・・上目遣いで。

「あの・・・どう・・・かな？」

「~~~~~っ!!!??」

> i 3 7 6 9 1 — 4 4 4 9 <

ツナ的大脑とハートに痛恨のダメージ。

視覚情報と、それによって誘発される感情の奔流に処理が間に合わない。

しかし、聞かれたからには黙っている訳にはいかない。なんとか半壊状態の脳を総動員し、感想を伝える。

「に・・・似合ってる・・・よ。」

「そ、そっか・・・。」

えへへと、はにかむ満流。

それが、トドメだった。

思考が大破し、固まるツナ。

運動神経に伝達される信号が途絶え、体が停止する。

いくなれば石像。

その様子に気付く事無く、上機嫌な満流。

「・・・いいわね。」
「ああ、いいな・・・。」

そんな二人を、聖母の如く慈愛に満ちた目で見守る二人。
奈々と家光。

遠い昔を懐かしむような目でもあり、想いを馳せているのだろう。
若かりし頃の青春に。

さて、一体沢田家で今何が行われているかと言えば。
ずばりクリスマスパーティーである。

四人だけのささやかな物ではあるが、彼らにとっては関係ない。
なにせ、思い出作りでもあるのだから。

明日、満流は海外へ行く。

表向きには親戚の都合、裏では転生者狩りの出張で。

今朝早くにそれをツナに話し、一日かけて他の者にも別れを告げた。
そうして戻って来て、即座にこれだった。

元タイプの時の飾りもそのままであったし、一時の別れなのだ。
なれば盛大に送り出そうと言う事になり、今に至る。

そして、満流が今着ているのは、奈々が秘密裏に用意していたもの。
実は最初から着せるつもりだったらしく、ギリギリで間に合っ
て良かったと言っていた。

そんな訳で、さっそく男はいったん退出。
こうして着替えてお披露目になった次第だ。

「さあ、満流ちゃんに見惚れるのはそのくらいにして、今日はパーっとやりましょうか！」

「そうだなあ。なんならツナ、今日の内にやれる事やっという方が いいぞお？」

「や・・・やれる・・・事・・・？」

なんの事か分からず、聞き返すツナ。

その言葉を聞いて、ニヤリと笑う家光。

激しく嫌な予感を感じたツナだが、時既に遅し。

「そりゃあお前、また会おうねって言う誓いのキスだろ。」

「なっ！きっ！？」

再び固まる。

幸い、満流は奈々の手伝いで食器を運んでいるので聞こえなかった。

口をパクパクと動かし、オーバヒート寸前である。

「なっ、ななななに言ってるの父さん!!？」

「いやあだつて次いつ会えるか分かんねえんだぞ？ 他の男に取られないように忘れられない思い出の一つや二つ、作っておいた方が 良いんじゃないか？」

「で、ででででも・・・そそそんな・・・キキキ・・・キス・・・なんて・・・」

満流の方を見るツナ。

奈々と会話しながら、テキパキと動く。

満流がそれとなく提案した事もあるのだが、ツナが泣き出した。

何故か奈々にまで叱られる羽目になり、それ以来口にしていない。それ程までに、満流は沢田家にとって家族同然の存在として扱われていた。

そして、時刻は八時になるうかと言った頃。始まってからはや二時間が経過していた。

騒いでいたせいもあってか、ツナがウトウトし始めていた時、それは起きた。

「えっへへっ！ ツーナくっくん？」

「え、うわあ！ みーちゃん!？」

「はっい、そうでっすう？」

突如、満流が背中から覆い被さって来た。

突然の行動に、ツナの戸惑いは一気にマックスになる。

いくら仲が良いとは言え、普段から同年代よりも大人な満流である。こんなに無邪気に引っ付いて来る事などあった試しがない。

「ええ・・・どっ・・・どうしたの？」

「んっ？ どーしたってえ・・・何があ？」

「な、なんでいきなり・・・こんな・・・。」

「ぶっ、それはあ・・・私がツナ君に引っ付いちゃあいけないってことおっ?!」

「ええ!?! いや、そんな事は・・・!」

「嘘っけえっ!!! じゃーなんれそんなこる言っのおっ!!!?」

もはや支離滅裂、呂律がまわっていない。
何がなんだか分からなくなるツナ。

しかし、ふと気付く。
満流から漂う香り。

いつもの優しく甘い香りとは別に、嗅ぎ慣れた臭いが混じっている
事に。

さらに言えば、今の満流のような状態を頻繁に見ている事に。

「お父さん!？」

「お〜なんだあ、ツナ? 随分とお楽しみみたいじゃないかあ。」

とぼけた口調で話す家光。

酒によって顔は赤く、その表情はイラつく程にニヤついている。

問い詰めるまでも無く自白している様なものだった。

「みーちゃんにお酒飲ませたでしょ!？」

「何を言ってるんだあ、ちょっと大人の世界を味あわせてやっただけだぞあ?」

「言い訳になってないよ!！」

叫ぶツナだが、背中に抱きつく満流によって身動きが出来ない。

「ツナくんだったらオジサンとばあつか話して〜! そんなら私とお話したくないのお〜!？」

「ち、違うよ! みーちゃん落ち着いて、お酒に酔ってるんだよ!」

「わたひがあ? 酔うう? キヤハハハッ、なに言ってるんのお・
わたひはこう見えてもお酒には強いんらよあ?」

全く説得力が皆無だった。
頼ずりをしながら、より強く抱きつく満流。

ツナのHPは既にレッドゾーンである。

「お〜お〜ツナ、ラブラブだなあおい。そのまま一気にキスまで
持つてけえ〜！」

「ちよっ！ お父さん！！ 今言わなくても！！！」

「あら、ツナは満流ちゃんとキスするの？」

「お母さんまで!?!」

成り行きを見守っていた奈々まで参加してくる。

しかし、やはりというかツナを助ける素振りは見せない。

それどころか、先程からカメラで二人のイチャつきシーンを激写していた。

「あのツナがこんなにも成長するなんて、母さん嬉しいわあ。こ
れも全部満流ちゃんのおかげね！」

「お母〜さ〜ん!!」

援軍など存在しない現実には、ツナは叫ばずにはいられなかった。

「ん〜〜? ツナ君はわたしとキスすりゅの〜〜?」

「うええ!?! き、聞いてたの!?!」

頼ずりするのに集中していた筈だが、聞いてしまったようだ。
恥ずかしさに、ツナの顔が赤くなる。

「そうだツナ、そのままやれ!!」
「ツナ、ファイトよ!!」

酒瓶を掲げながら煽る父。

カメラを構えながら親指を突き出す母。

思わず泣きたくなったツナを、誰が責められようか。

「キキ、キス・・・なんて・・・」

「うん、ツナ君はキスつてしたことない？」

「そ、そりゃあ・・・ない・・・けど・・・」

「そっか、それじゃあ私がツナ君の初めて貰っちゃおうっつとお？」

「は?・・・ンムグウツ!？」

「んう・・・チュウ。」

「「おおお~~~~!!!!!!」」

沸き上がる歓声。

口に触れる柔らかい感触。

それは、一瞬でツナの思考を埋め尽くした。

目の前に見える、満流の顔。

視界がそれでいっぱいになり、かつてないほど身近から甘い香が漂う。

時が止まったように感じる。

自分の心臓が、狂ったように跳ね上がる。

感じた事のない柔らかさ、その中にある確かな弾力。

酒を飲んでいたせいか、しっとりと濡れていた。

脳が現状を理解した途端、ツナの意識はシャットダウンした。

「……………きゆう……………」

「あれえ？ ツナ君おねむさんなのお〜〜？ じゃあ私もねる〜〜？」

倒れたツナの横に、寄り添うように眠る。

そんな二人を見て、優しく微笑む家光と奈々だった。

翌日、ツナが満流の見送りに顔を出すのに、実に三時間を要したと
な。

クリスマス記念番外編 ファーストキスは幼馴染み！……………リア充爆死

さーいかがだったでしょうか！？

作者なりにそこそこ書けたと自負しております。

髪が長かりし頃の奈々さんは、記憶を頼りに精一杯再現しました。

ツナは……結構難しい……。

ちょっと変かもですね、わかっています。

なので、ガラスハートを打ち砕くコメントはご遠慮くださいWWW

感想待っています!!

それでは (^ ^)
| | ^ ^) /

第五十五話

ゆらゆらと・・・世界が揺れる。

暗くて・・・何も見えない世界が揺れる。

不思議と・・・恐怖は感じない。

確かに感じる・・・温もりがあるから。

それはとても細くて・・・でも柔らかい。

この世で何より・・・心地よい温もり。

ずっと感じていたいと・・・そう思える。

不意に、世界が止まって・・・。

温もりが離れていく・・・。

行かないでと・・・暗闇に手を伸ばす。

その手は握られ、頭を撫でられた気がした・・・。

それだけで・・・心が安らぐ。

温もりは、離れていってしまったけれど・・・。

今度はもう・・・怖くはなかった。

「う……んう……」

「起きろバカツナ。」

「ぎゃふ!?!」

腹に感じた激痛に、俺の意識は強制的に覚醒した。
腹を抑え、痛みに呻く。

数秒間だけ悶絶した後、犯人がいるであろう方向に目を向ける。

「リ……リボン……」

「つたく、いつまで寝てやがんだ。ただでさえ時間ロスしちまっ
てんだぞ。」

「え……あれ? ここ……」

周りを見れば、元の廃病院だった。
ベッドの上で寝ていたらしい。

「何で俺・・・ここに？」

「満流が運んで来たんだぞ。」

「みーちゃんが？」

「風紀委員の仕事があるって言ってな、お前をおぶって持ってきたんだ。」

「・・・そつか。」

安心した。

さっきの事が、夢だったらどうしようかと思ったけど。

ちゃんと、覚えてる。

彼女の言葉も、温もりも。

優しい笑顔も。

それに・・・その・・・抱きしめられた時の・・・感触も・・・

850

「何赤くなってるんだ気色悪いな。」

「だあつ!？ あ、いや・・・これは別に・・・!！」

「おいおい、少しは男らしくなって行ったと思ったら。こりゃあ完全に元通りだな。」

「デイ、デイーノさん!？」

いつの間にか、隣に座っている。

その顔はニヤニヤとしていて、途端に嫌な予感が全身を駆け巡る。

そう思った直後、デイーノさんの腕が肩に回された。

顔を突き合わされ、逃がさないと意思表示されているように感じた。

「で、何があつたんだあ？ そんなに元氣一杯になるようなラブシ

「ーンでもあつたか？」

「ら、ラブって・・・！ そそそ、そんな事ありませんよ！！」

「・・・お前・・・わっかかりやすいなあ・・・。」

クククと腹を抱え、静かに笑う。

何故か途轍もなく恥ずかしくなり、穴があつたら入りたい気分だ。

そんな中、ふとりポーンと目が合う。

笑っているかと思えば、その目はまだ真剣さを帯びていて。

「ツナ、もう・・・平気だな？」

「・・・うん。 やれるよ。」

「そうか。」

ただそれだけ。

それでも、リポーンはそれで終わりとはかりに身を翻す。

「なら修行に行くぞ。 そんなに時間はねえが、やらねえよりはマ

シだ。」

「わかった。」

迷いなく頷き、ベッドから降りる。

リポーンを肩に乗せ、ディーノさんに挨拶してから出ていった。

訪れる沈黙。

ツナが出ていった扉を、笑顔で見据えているディーノ。

しばらくして、不意に後ろを向く。

「お前らのボスはもう大丈夫そうだぜ？ すっかり元気百倍みてえだな。」

一人だけの筈の室内で呟く。

すると、部屋の隅に置いてあったロッカー。

それがギイツと音を立てて開いていく。

その中には、獄寺、山本、了平の三人が詰まっていた。

それぞれが表情を明るくし、ゆっくりと出てくる。

ツナが満流に会いに行った後、リボーンが呼び出したのだ。

当然、二人きりにするのは危険と言う意見もあった。

しかし、最終的にツナの帰りを待つと言う結論になった。

当然、ツナを運んできた満流とも遭遇した。

だが、ツナを運んだ満流はさっさと帰ってしまい、こうしてツナの目覚めを待っていた。

ようやく呻きだして起きるかと思われた矢先。

リボーンが突然に三人をロッカーに押し込んだのだった。

「十代目・・・よかった。」

「だな、オレ達もいつまでもウジウジしてらんねえや。」

「うむ、まずは極限に勝つのみだ!!」

満流の事は、まだどうすればいいか分からない。
だが、ツナの様子を見て、とりあえず置いておく事にした。

まずは勝つこと。

話を聞くのは、その後でいくらでも出来る。

活力を取り戻し、三人も部屋を後にするのだった。

「や・・・つと・・・終わったあ・・・。」

「お疲れ様です。」

机に突っ伏して溜め息を吐く。

すかさず紅茶を置いてくれる草壁さん。

ああ、ありがたい。

身を起こして、一口飲む。

暖かな熱が染み渡り、思わず吐息が零れる。

ツナ君を皆の所に届けてから、もう五時間は経った。

その間、約束通り風紀委員業務をこなし、今やっと終了した。恭弥君は途中で出ていき、まだ帰って来てない。

今日は霧戦、クロームちゃんが戦う日だ。

もしかしたら、骸が何かしら手出しするかも知れない。

恭弥君と鉢合わせとかしなければいいけど。

町が大騒ぎになるよ、あの二人が争ったら。

修行の成果か、恭弥君も格段に強くなってるし。

骸は骸で、戦うにも限度がある状態だし。

立場的に止めるの難しいし。

さっきベルから電話あったしね。

相手の守護者のパシリやってるって言ったら思いっきり吹き出した音が聞こえた。

その後マーモンが怒ってる声が聞こえたから、何かを吹きこぼしたんだろう。

まあ詳しく説明したら落ち着いたけどね。

やっぱり姫はやる事がパネエし

とか言われた。

まあ打倒な反応だろうね。

時刻はそろそろ七時を迎える頃。

バトルまでには時間が少しあるし、だけど何かをするには時間が足りない微妙な時間だ。

「それじゃあお先に失礼します。」

「はい、お気を付けて。」

礼儀正しくお辞儀する草壁さん。
毎度思うけど、何でリーゼント？

いや、今更だとは思うけど。
ぶっちゃけキャラと違くない？

だって中身メツチャ良い人じゃん、なんでそんな頭してんの。
あれか、風紀委員のルール？

委員長以外はリーゼント義務化とかそんなんですか。
あれ、じゃあ私はどうなんだろう。

女だから免除とか？
うんうん唸りながら廊下を歩く。

今だサッカー部やら野球部が練習している声が聞こえ、校内は明かりが所々についている。

若干薄暗い所もあり、もう少しすれば最近馴染みの風景になるだろう。

「うん、さてどうしようっ。」

あ、そう言えば壊れた鎌はどうしようかね？

ルッスはまだベッドの中だし、そもそも私の戦いは終わっちゃったし。

リング戦が終わってからにすればいいかな。

それとも一応言っとくか。

「行こうか。」

やることないし。

お見舞いがてら顔見に行こう。

どうせ背中挟られたとは思えないくらいにピンピンしてるだろうねえ。

それがヴァリアークオリティ。

まあ起き上がる事も出来ないだろうけど。

そんな訳で、私はルッスの所へと足を運ぶのだった。

「壊れちゃいました？」

「ました？ じゃないわよまったく。これ全然手入れとかしてなかったでしょう？」

「まる一年押入れの中に突っ込んでたね。」

「壊れて当たり前よ！！ よく見りゃ所々錆びてるじゃない！」

「あ、ホントだ。」

ルッスにあてがわれた部屋に、鎌の残骸を持って来た。

案の定ピンピンしてるルッスに渡し、お叱りを受けている。

いやあだつて鎌を使う戦いなんて滅多に無いからさあ。

常備なんて勿論出来ないし、自然と使う機会少なくなるんだよね。

ましてやこつちに帰って来てからは尚更。

だから整備とかその他諸々すっかり怠ってました。

確かにあちこち錆びてるし、刃が磨り減ってる。

こんな状態であんな攻撃受け止めればそりゃあ粉々にもなるね。

「イタリアのアジトに連絡して作らせとくわ、ついでに今の満流の体格に合わせておくから使いやすくなる筈よ。」

「おお〜そりゃありがたい。」

私が六歳の時に作った物だもんね。

当時は身の丈くらいだったのに、今は身長の方が高い。

小回りは効くけど、少々扱いづらいところがあった。
それに結局普通の鎌よりは大きいから持ち歩けないしね。

新調してもらえるのは嬉しい。

「サイズを修正して作るだけだからすぐに出来るわよ？ 明後日には届くんじゃない？」
「はやつ。」

さすがヴァリアークオリティ。
部下の人達も尋常じゃない。

世の職人さん達が大泣きしちゃうよ。

「おっと、もうこんなに経ったんだ。じゃあそろそろ行くね。」

「今日は確かマーモンの番だったかしら？」

「そうそう。」

「相手の子も可哀想にねえ。正気でいられればいいけど。」

どうだろうねえ。

意外と今回は分らない。

クロームちゃんの実力知らないし、骸が何かするかも知れないし。
マーモンと骸はどっちが強いのかねえ？

術士としての年季は圧倒的にマーモンだろうし、今は赤ん坊だけど。
でも骸の力も正確には知らないんだよね。

結局一度も戦った事無いし。

ルッスの部屋から出て、並中へと向かう。

仮面も付けず、フードも被らない。
もう意味ないし。

冷たい夜風を感じながら、勝負の行方に思いを馳せた。

「さあて、どうなるかな？」

並中の体育館。

そこが今日の霧戦のステージだった。

当然他の生徒の姿はなく、代わりにツナ達とヴァリアーの姿があった。

何故かツナが気を失った状態で運ばれ、今も床に寝そべっている。

さすがのヴァリアーも最初は訝しんだが、すぐに興味を失った。
XANXUSとモスカだけは初めから無反応だったが。

やがて、ツナが目を覚ます。

「十代目！ お加減は？」

「あ、皆……。」

「やっと起きたか。」

「バジルがここまでおぶってくれたんだぞ。」

「あ……ありがとう。」

「いえ、これくらい。」

口々に言葉を投げかけ、落ち着いた雰囲気は完全に消えていた。
今朝までのどんよりとした空気は完全に消えていた。

「十代目、霧の奴……まだ姿を表しません。」

「え、そんな！？」

「本当に存在しているのか？ そいつは。」

了平が、誰もが思っているであろう疑問を口にする。

正体どころか、その影すら匂わせない霧の守護者に、誰もが不信を抱いている。

「敵はもう来てるってのに……。」

マーモンを見て、思考に耽るツナ。

ふと、その後ろのヴァリアー勢の中。

モスカの上に乗っている満流と目が合う。

ニコリと微笑んで、小さく手を振ってきた。

その事に嬉しさを感じ、微かに頷いて返す。

その時、不意に気を失う前の記憶が少しづつ蘇る。

(そうだあの時、霧の守護者の事聞こうとして、ジュース買いに行つて……。)

そこで靄がかかっている記憶。

頭を捻って思い出そうとした時、突如ツナの体に悪寒が走った。

「こちらの霧の守護者のお出ましたぞ。」

その言葉に、ツナ達は一斉にリボンの視線の先を見る。

そこには、かつて黒曜ランドで戦った犬と千種の姿があった。

「ああっ、そうだった!!」

「あ、あれ？ あいつらつて……。 」

「バ、バカな!! なぜこんな時に!？」

驚き、即座にボムを構えて迎え撃とうとする獄寺。

「落ち着けお前ら、こいつらは霧の守護者を連れて来んだ。」

「何言つてんすかりボンさん!? だってこいつらは! っ!

ま……。まさか。霧の守護者とは……。 」

「……。こいつらが連れて来るって事は……。 」

「う、嘘だ……。霧の守護者て……。ろ……。六道骸!？」

驚きの事実、驚愕を隠せないツナ達。

かつて命を危険にさらす原因となった者が、再び現れたと思ったか

ら。

しかし、それはすぐに予想外の展開へと変わる。

「クフ、クフフフフ……否。」

響く、女の声。

それは、もちろん骸の声などではなく。

「我が名はクローム。クローム、髑髏。」

「え……六道骸じゃ……ない!？」

さらなる驚愕。

予想の斜め上に行く展開に、ツナ達について行けない。

「騙されなくてください、そいつは骸です!! 骸が憑依してやがるんです! 目的の為なら手段を選ばない、アイツはそう言う男です!!!」

獄寺が警戒心剥き出しで叫ぶ。

クロームを睨みつけ、ツナを庇うように前に出る。

「信じてもらえないのね。」

「つたりめーだ! 十代目、あの武器を見てください。それに、怪しい目を眼帯で隠してる!!!」

「……骸じゃ……ないよ。」

「いっ!？」

ツナの呟きに、素っ頓狂な声を上げる獄寺。

「っそ・・・そうなんすか・・・？」
「あ、いや・・・なんとなく・・・だけど・・・。」
「・・・庇ってくれるんだ。」

するといつの間にかクロームがツナの近くまで来ていた。

「ありがとう、ボス。」

そして、ツナの頬にされた口づけ。

一瞬、空気が固まる。

「ええー！ー！？」

「なあ！？」

「げっ！」

「わああ？」

叫ぶツナ。

驚愕する獄寺。

顔をしかめる犬。

そして、目を輝かせる満流。

モスカの上で身を乗り出し、その手にはいつの間にもやらデジカメがあった。

いったいいつ撮ったのか、その画面にはクロームのキスシーンがバツチリと収められていた。

保存ボタンを押して、思いっきり親指を突き出す。

満流に気付いたクロームが、ポカンとした表情で見ている。

了平が仲間にするか否かを問う。
獄寺が反対し、犬が突っかかる。

一触即発の空気に待ったをかけたのは、他でもないクロームだった。

「ボス、私・霧の守護者として失格かな？」

「え？」

突然話しを振られ、キョトンとするツナ。

「私は霧の守護者として戦いたいけど、ボスがどうしても駄目って言うなら従う。」

「え、ちよっ……そんな急に言われても……大事な事だし……」

「

「だが、霧の守護者として戦えるのはクロームしかいねえぞ。」

「なっ、リポーンさんまで何言ってるんすか！」

獄寺の言葉を横で聞きながら、ツナは思案する。
リポーンの言うとおり、他に代えなんて居ない。

それに、目の前の少女も、父が選んだなら理由があるだろうと。

「じゃあ……お願いするよ。」

「いいんですか十代目!？」

「うん……うまく言えないけど。彼女じゃなきゃいけないの
かって。」

「……ほっ……ありがとう。」

安心した顔で呟き、ステージ中央に向かうクローム。
了平が円陣を組もうとするが、にべもなく拒絶した。

「今回のフィールドは、体育館全て。館内の物は何を使っても構いません。尚、このフィールドには特殊装置の類は用意しておりませんので、あしからず。」

「え、何もないの？」

「霧の守護者の特性には余計なもんはいらねえんだ。」

無いものを在るとし、在るものを無いとする事で敵を惑わし。ファミリーの実態を掴ませないまやかしの幻影。

それが、霧の守護者の使命故に。

「それでは霧の対戦、マーモンVSクローム髑髏開始。」

バトル

第五十五話（後書き）

霧戦開始！

ぱっぱと大空戦まで一直線だ！！

感想待ってます。

それでは（＾
|
＾）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1273x/>

家庭教師ヒットマンリボーン - 宵の口 -

2011年12月26日00時46分発行